

2022年度  
第28回FDフォーラム  
報告集

挑  
×  
選

多様な学びの支援に求められる挑戦と選択

# 目次

## シンポジウム

これからの大学でどのように学ぶのか～主体性を生み出す学びの多様性～	1
趣旨説明	3
講演 1	4
講演 2	10
講演 3	19
発表資料	27

## 第1分科会

あなたの大学の学習環境を教えてください！	49
総括文	51
発表資料	53

## 第2分科会

産学連携・地域連携を通じた大学教育を考える	69
総括文	71
発表資料	73

## 第3分科会

学びの場のダイバーシティとインクルージョンの実現	91
総括文	93
発表資料	94

## 第4分科会

25年度新入生は何をどう学んで来るのか（来ないのか）	
—新指導要領を手がかりに大学基礎教育を考える—	97
総括文	99
発表資料	100

## 第5分科会

グローバルに活躍出来る人材の教育に大学はどのように貢献するか	
—混沌とした世界で主体性を発揮できる人材の育成に向けて—	119
総括文	121
発表資料	123

<b>第6分科会</b>	
<b>大学教育と福祉課題～大学での支援のあり方を考える～</b> .....	131
総括文 .....	133
発表資料 .....	135
<b>第7分科会</b>	
<b>ポストコロナで遠隔授業をどのように活用できるか</b> .....	143
総括文 .....	145
発表資料 .....	149
<b>第8分科会</b>	
<b>その能力、どうしたら社会で活かせる？</b>	
<b>—発達障害のある理工系学生の能力を専門職就労につなげるために必要な支援と課題—</b> .....	167
総括文 .....	169
発表資料 .....	170
<b>第9分科会</b>	
<b>学生が過ごしたコロナ禍の大学生活</b> .....	181
総括文 .....	183
発表資料 .....	187
<b>第10分科会</b>	
<b>社会と融合する大学教育のかたちを考える</b> .....	201
総括文 .....	203
発表資料 .....	205
<b>第11分科会</b>	
<b>学外の実践活動を生かした大学教育</b> .....	219
総括文 .....	221
発表資料 .....	222
<b>ポスター発表題目一覧</b> .....	232
<b>第28回FDフォーラム企画検討委員会</b> .....	233

## シンポジウム

これからの大学でどのように学ぶのか  
～主体性を生み出す学びの多様性～

## 報告者

西田 貴明 京都産業大学 生命科学部 准教授

國本 千裕 千葉大学 アカデミック・リンク・センター 副センター長／  
准教授

永田 和宏 JT生命誌研究館 館長、歌人、京都大学 名誉教授、  
京都産業大学 名誉教授

## コーディネーター

白鳥 秀卓 京都産業大学 生命科学部 教授／  
教育支援研究開発センター 副センター長



## 〈シンポジウム〉

### これからの大学でどのように学ぶのか ～主体性を生み出す学びの多様性～

#### 趣旨説明：

**白鳥** 本日はありがとうございます。それでは、本シンポジウムの趣旨を説明したいと思います。

第28回FDフォーラムは先週の土曜日にポスターセッションが始まり、このシンポジウムが最後の発表の場になります。このあとのクロージングセッションにもご参加いただきたいと思いますのですが、その前の本シンポジウムもぜひ楽しんでいただければと思います。

本シンポジウムは「これからの大学でどのように学ぶのか、主体性を生み出す学びの多様性」というテーマで企画しました。

大学には様々な学生がおり、それぞれが主体的に様々なことを学びます。いろんな学部があり、それぞれの学生によって、置かれた立場が違います。大学での学び方は、教える側が主体となる教授パラダイムから、今は学習者が主体となる学習パラダイムへと変換してきています。これは何年も前からのごことで周知のことだと思います。

そのなかで、コロナ禍がありました。コロナ禍前から学習者が主体となってきていたと思いますが、コロナ禍のなかで大変だったところもあると思います。こうしたなかで我々教職員は、工夫しながら、産学連携や地域連携、学外の活動を通して、実践してきたと思います。当然、オンラインの学びも充実しました。

一方で、これもコロナ禍以前から、様々な学生の主体的な学びを支援する必要性が大きくなってきました。

大学には当然いろんな学生がいます。障がいがある学生や、経済的に大変な学生もいると思います。今回のFDフォーラムでも、ヤングケアラーというキーワードが私の参加した他の分科会に出ていました。様々な学生の主体的な学びを支援する、その支援の仕方も多様になってきています。

こうした状況で本シンポジウムでは、何か特別

なトピックを取り上げるというよりは、今回のFDフォーラムのまとめとして、広く、と言っても三人の先生にご講演いただくので何でもとはいきませんが、一つは、地域連携あるいは産学連携を通して主体的に学んでいる例、もう一つは主体的に学ぶための支援の取組み例をあげて、これからの大学で学生がどのように学んでいけばいいのかについてご講演いただき、また皆さんからご質問いただいて、議論し、盛り上げていきたいと思っています。

講演は、初めに京都産業大学准教授の西田先生に、地域連携、産学連携ということで、地域企業の連携による主体的な学びと実践、社会科学の課題の把握から課題解決策の提案と実現をテーマにご講演いただきます。

二人目は千葉大学の國本先生に緩やかに繋ぐ、多様な学びの支援ということで、ラーニングコモンズなど、学修支援についてご講演いただきます。

最後に三人目のご講演として、JT生命誌研究館の館長の永田先生にご講演いただきます。永田先生は、様々な活躍をされていて、また後でご紹介したいと思いますが、本シンポジウムでは「学習から学問」や「大学における教育」から、我々教職員がどうやって学生の主体的な学び支援していけばいいのかについてご講演いただきます。

**白鳥** それでは西田先生のご講演に移っていききたいと思います。まず、西田先生のご紹介をさせていただきます。西田貴明先生は京都産業大学の生命科学部で准教授をされています。私の自己紹介が遅れましたが、今回FDフォーラムの企画検討委員会の委員長でシンポジウムを担当しています。私も所属は京都産業大学の生命科学部で、この度、西田先生に講演をお願いしました。

ご経歴は、京都大学の大学院理学研究科の方を修了され、その後三菱UFJリサーチ & コンサルティング株式会社の方で研究員をされていました。2019年から京都産業大学の生命科学部の産業生命

科学科の准教授として着任され、ご活躍されています。

主な活動は、自然環境の機能評価、自然環境を活用した政策に関する研究を行いつつ、自然の多様な機能を生かしたインフラ整備グリーンインフラの推進に向けた産学官連携によるプロジェクトに数多く携われ、大学でも環境政策とともにPBLインターンシップ関連科目をご担当されて、産学協働のもとで生命科学を生かすキャリア形成の授業を担当されています。

西田先生、よろしくお願ひいたします。

---

---

## 第1講演：西田 貴明

---

---

**西田** (スライド1)ご紹介、ありがとうございます。西田貴明と申します。どうぞよろしくお願ひします。一番初めて私も大変緊張しているのですが、こういった教育に関する事で講演をさせていただくのは初めてなので、貴重な機会をいただいたことに感謝申し上げます。

今日お話ししたいと思っているのは、私が主体的な学びを実現するために大学の中でずっとやってきたことです。ちょうど今年4年目になるのですが、社会連携やインターンシップ・PBLの授業を通じて、どういう主体的な学びができるかということを試行錯誤しているというのが正直なところなのですが、これまでやってきたことを紹介させて貰い、皆さんと議論できればと思っています。

(スライド2) お話ししたい内容は、こういう流れでご紹介したいと思います。少し自己紹介させてもらった後、実践内容として、今所属している産業生命科学科でやってきたこと、それから、着任してから4年経って、昨日も研究室の産業生命科学科を卒業する学生たちと今日の発表を準備していたのですが、これまでを踏まえながら、どうやったらもっと主体的にできるかということを考えてきたので、それについてお話ししたいと思います。

(スライド3) まず大学の紹介です。多くの方がご存じだと思いますが、京都産業大学は京都市の北側にある大学で、山の中にあります。一つの場

所に全ての学部が揃っています。(スライド4) 50年以上の歴史あり、文系から理系、いろんな学部があります。理系の中でも、情報や生命科学など様々な学部があります。

(スライド5) 大学の一番の特色としては、非常に多くの学部が一拠点で、同じ場所で勉強しているというところだと思います。少し古いですが、大学全体でいくと、1万5000人ぐらいの学生さんがいろんな学部で学んでいます。生命科学部はその中ではまだ小さい方ではあるのですが、いろんな学部から刺激を受けながら学べるというところが非常に大きなポイントかと思っています。

(スライド6) そういったことが大学の特色としてありますが、我々の中ではやはり京都産業大学は、「結ぶ」ということが一つキーワードになっています。人と人を結ぶ、知識と実践を結ぶ、まさに今日のテーマにあるところかと思っています。いろんな人がいるからこそ、どうつなげるかということを考えながら、授業、研究、教育をやっています。

(スライド7) 私がどういうことをやってきたか、自己紹介をしていきたいと思っています。私自身は、ちょっと変わったキャリアとよく言われます。先ほどもご紹介いただきましたが、大学では、生命科学部の他の先生と同じように、生物学、生態学、微生物を扱った研究室に所属していました。ただ、大学院の後半の頃にこれはどんな役に立つのだろうと疑問を覚えてしまい、いろんな社会を見てみたいと思って、金融系のシンクタンク、民間企業に入りました。

会社に入り、本当にいろんなことを勉強させてもらったのですが、基本的には環境政策、ここにゾウが映っていますが、いろんな国や地域へ行っ、生物多様性をどうやって守っていくのか、気候変動にどうやって対応するのかといった政策研究をやってきました。それを10年ぐらいやりましたが、なかなか政策の立案だけでは実際の課題解決に至らないなと思い、今度は大学へ戻って、政策研究と産学連携の取組に参加させてもらいました。今は、生態学や生命科学を用いて、環境政策を実践するための研究をここにいる学生と一緒にやっています。

(スライド8, 9) 早速、今から、実践してきた内容について紹介をしていきたいと思います。私が所属している生命科学部は2019年にできました。元々永田先生がおられて、理系の生命科学の先端研究を中心に行っていた研究者が多かったのですが、新しい組織ができました。

先端生命科学科と産業生命科学科という二つの学科ができて、先端生命科学科では実験科目を中心に、さらに生命の真理を追究していく学科になっていて、もう一つ、生命科学はいろいろ進化してきているわけですが、その進歩をどう社会に活かしていくのかといったところに焦点を当てて、社会・産業との連携を主なミッションとして掲げた産業生命科学科を作りました。こちらの方に私は参加させてもらっています。

(スライド10) 学科の中でどういう構成になっているかということ、医療や食農、環境、それぞれの分野の中で、新しく出てきた生命科学の知識技術を使って、どうやって社会の課題を解いていこうかということ、社会科学とも連携しながらやっ

ていこうという学科になっています。(スライド11) そういう学科ということもあって、産学協働教育は非常に力を入れて学科の先生方と一緒に取り組んできました。生命科学を武器に社会で活躍できる人材の育成を目指して、専門性の高い学びとともに、1年から4年まで、社会で必要とされる力も段階的に身に付けていくことをやっています。

本日話題にするPBLやインターンシップ等の科目、他の大学でもかなりやられていると思うのですが、本学でも、力を入れて4年間やってきました。

この産学協働教育をどのように構築してきたのかについて、今日紹介させてもらおうと思っています。(スライド12) 生命科学部で行うPBLやインターンシップのような産学協働教育は、私たちの学科でいくと、やはり専門教育としっかり結びつけなければいけないと考えて、専門教育とのつながりを意識してきました。

私の他にも社会学系の教員もいて、生命科学が実際にどういう現場で生かされるのかというのを、環境経済学、食農文化政策、創薬ビジネス等、い

ろんなところで扱っています。こういった普通の専門科目の中でも、全部の授業としてやっているわけではないのですが、実際に社会で活動している企業の方や、行政の方、社会課題の現場にいらっしゃる方に来ていただいて、話題提供していただくというのを一番初めに置きました。

(スライド13) 学生にいきなり社会課題や課題解決について現場に行ってもらっても、あまり面白さや重要さが理解できないということがありました。一つ例をあげると、私が担当しているこの食農文化政策の授業の中では、実際に省庁、自治体の方や企業の方から、日本中いろんな現場に関わる担当者の方に来ていただいて、地域のケーススタディを通じて課題解決のプロジェクトを学んでもらうというのを一番初めにやりました。これはやってよかったと思っています。普段だとわからない防災や環境、医療の課題解決に関わっている人々が、実際にどんなことを考えて、どう動いているのかがこの授業で体感できたと思っています。

それとこの授業は聞いているだけではもったいないと思ったので、ちょっと2年生の学生には大変だったと思うのですが、全員に自分の地域の課題解決を提案するレポートを1万字で書いてもらいました。自分の目標がある中で、どういうふうに講演の話聞いてまとめていくのかということを進めていきました。

(スライド14) こういった社会課題、実際の現場に即した授業は、学生に反応をきくと、関心はかなり高いというのを私も聞いて驚きました。これは学生のアンケートですが、非常に関心を持てたのが大半です。授業全体を通じて地域課題の解決に非常に関心を持ってくれたことは、大きな意味があったと思っています。

私が座学だけで講義すると、とても持てたが4分の1もいかないのですが、やはり外からきちんと現場の本当の問題意識を持った人が、紹介してくれるとうまく伝わるのだというのを実感しました。

(スライド15) さらに、ここからはこういう前提を行った上で、PBLインターンシップを本学科

では展開していきました。PBLは、課題解決学習で、実際に社会の課題を感じ取って、それを自分たちで解いていくことで、いろんな力を養ってもらおうというものです。

(スライド16) 本学科では、割と早くからやっているのですが、2回生の秋から3回生にかけて、こういう課題解決型の授業を用意して行っています。ただ、いきなり現場に参加してもなかなか難しいところがありますので、2回生のPBL1の段階では、課題解決をしていくプロセスを理解し、チームでどう協働していくのか、企画を立てるとするのはどんなことなのか、プレゼンについて、きちんと検討しました。その上で、3回生のPBL2で、現場で実際に課題解決を考えるということをやってきました。

(スライド17) まさにそういう意味で、PBL2では必要がある知識を身に付けるだけではなくて、問題を示したものを、自分が何を考えてどんなことを学ぶべきかを理解して、実践して、身に付けていくというプロセスを目指してやってきました。

(スライド18) 生命科学としては、やはり学外の中で本当に社会に連携したようなプロジェクトを立てようというのを目標に動いてきています。

(スライド19) 具体的な中身は、先ほど申し上げたように、PBL1では、課題解決に必要なツールの話をしています。そもそもコミュニケーションをどうやってやるのか、アイデア出しをどうやってやるのか、合意形成をどういうふうにみんなでやっていくのを、仕事を進める上で、プロジェクトを進めていく上で、何が必要なのかということを知ってもらいます。これも我々社会人からすると当たり前になっているようなことも、やはりきちんとやることによって、学生の安心感が確保されるとともに、非常に動きが良くなったなと思います。

(スライド20) 例えば理系の学生なので、あまりコミュニケーションをとるのが好きではない人もいますので、初めはどういうふうに会話をしたらいいのか、ストロークをしたらいいのか、どういう働きかけをしたらいいのか、実際にクラスの中で、ワークショップをやりながら、体感していっ

てもらい、どういうコミュニケーションが標準なのかということを知ってもらいます。

(スライド21) また、みんなで意見を出すときのKJ法がありますが、箋に書いた意見をまとめて、全体としてどういうことが理解できるのかとか、新しいアイデアを出していく方法です。こういったこともやり方をきちんと学んでもらおうということをPBL1では進めています。

(スライド22) そういったことを踏まえてPBL2では今、森が写っていますが、本当に実際の生命科学に関わる現場、生態系の現場に行って、何が課題なのかということを経験してもらって、課題解決のクイズ大会を実践としてやってもらいました。(スライド23) これは本当に小グループで5人から10人以内ぐらいのグループに分けて、様々な課題を自治体や行政、地域の団体からもらって、それを実践するというのをやりました。

(スライド24) このPBL2ですが、私が初めに想像していたより遥かに多くの活動が展開されたと思っています。3年生の例で、平城宮跡でやったイベントです。これは奈良公園がコロナであまり活性化してないので、それをどう活性化するのかを考えてもらったイベントです。

奈良で衣装を着て、カフェを作ったり、バンドをやったり、動画を作った学生がいて、またドラマを作って配信するというようなこともありました。こういう活動は今ホームページでも発信していますが、結構新聞やテレビにも取り上げられて学生の満足度も非常に高かったですし、実際に一つ社会の中でつながっていったことが実感できたのではないかと思います。

(スライド25) そういうこともあって、PBL2はやってみて、多くの学生が満足と書いていますね。興味が上がったという流れが出てきました。あと学生のコメントも入れていますが、実際のプロジェクトを動かすことがどんなに大変なのか、なかなか難しかったと書いてあります。

最後に紹介したものはすぐに上手くいったように見えますが、PBL1の方ではなかなか企画が立てられなかったということも経験しています。自分が次どういうふうなアクションをしたらいいのか

かを考える機会をPBL2の中で展開できたのではないかと思います。

(スライド26) 本当に想像以上に意欲的に取り組んでくれたのですが、その取り組みによって、学生にとってどんな力がついたのかということも学生自身の中で自己評価をしてもらいました。

(スライド26) これは経済産業省が社会人基礎力として設定している三つの力とその中に要素ということなのですが、授業の前後で、この12の要素の到達状況について、授業の前と後で自己評価をしてもらうことで、PBLの活動はどんな役割があったのかをちょっと調べてみました。

(スライド27) これは本学の三瓶先生がまとめてくれた報告なのですが、このデータを見ると結構考え抜く力、チームで働く力というのが、実際にこの事前から事後に比べて大きく上がっているところがいくつもあるとわかりました。特に計画力、スケジュールが決まって、どんなことをやらなければいけないのかを丁寧に考えて、それをみんなですべていくチーム力が大きく身に付きました。

(スライド28) 加えてもう一つ面白かったのはこの実はPBLは1と2両方あるのですが、PBL1を受けてなくてPBL2だけ受けている人が結構います。PBL1をとらないでPBL2を受けている人と比べるとPBL1とPBL2両方受けている方が大きな成長力があるという傾向も見えてとれました。やはりいきなり現場に参加するのではなくて、いろんな形でつながっていくことが大事だということが、学生アンケートを丹念に見ていくと見えてくると思っています。

(スライド29) PBLでは社会とのつながりで実際に発信していくこともやります。並行して、社会の現場の中で、どういうふうに生命科学が使われて、どういうことが後求められるのかを考えてもらうためのインターンシップも設けました。

これも、多くの学生が参加したのですが、生命科学部ということで、関係するような会社を頑張って探しました。医療メーカーや環境・建設コンサルティング、農業関係、いろんなところを探しました。

(スライド30) せっかく大学の授業でやるということで、ただ行くだけじゃなくて、行く前と後にきっちりフォローをしようということで、自分が何をしなきゃいけないかということを整理しました。

このあたりは本学のキャリア支援センターにもかなりお世話になっているところです。そもそもただインターンシップに行っても、どんなところかわからないので、自分でどういうことを目標に掲げていく何を身に付けて行くかをしっかり整理した上でインターンシップへ行く。その結果自分たちがどういうふうに変ったのかを、学生の中で、ワークショップをしながら共有し、お互いを高めていく試みを行いました。

(スライド29～33) 具体的なイメージとしては、事前学習の中で自己分析をきっちりやってもらって、目標を設定してもらうとか、事前のマナー講習をきちっと受けてもらって自信を持って臨んでもらうとか、そういうことをした上で実際の現場に入っていました。

(スライド34) 本当にいろんな現場があるので、環境コンサルだったり、衛生関係だったり、室内だけじゃなくてフィールドの中で取り組んでもらうものもありました。(スライド35, 36) あとは医療機器メーカーで実際に開発業務に関わらせていただいたり、農業の現場に行ったりとか、そういった様々な現場で、本当にそれまで学んできた生命科学に関わる知識がどういうふうに使えるのか、関わるのかということを感じ取ってもらえたと思います。

(スライド37, 38) これはビールを作っているところです。こうした活動もやらせてもらって、会社の中でどんなことができるかという提案だったり、報告をする機会ももらったりしています。(スライド39) そういう活動なのですが、結果からすると学生は極めて高い満足度で帰ってきてくれたと思います。

(スライド40) また目的意識をはっきり持っていったのが良かったと思います。事前授業でも関心を持ってもらいましたし、請負企業の実習ではコロナで行けなかった人も何人かいたのですが、

行けた学生の多くは高い満足度を得て帰ってきてくれました。

(スライド41) これも学生からのアンケートからですが、自己発見や働くことのイメージが少し具体化されたということが、3年生の夏にかなり進んだことは非常に良かったと思っていますし、思った以上に多くの理解が繋がったと考えています。

(スライド42) 一方で、産学協働教育の授業では、課題もあるということが、進めてくるといろいろわかってきました。まず、やはり学生のニーズは非常に多様で、割と派遣先はいろんな会社をお願いし、受け入れてもらったのですが、それでもやはり、なかなかうまく確保できないこともありました。

(スライド43) インターンシップの派遣先は、関西中心の企業100社以上をお願いするなかで、我々のコンセプトに合うところに詳細を説明し、受け入れを依頼していくということで、いろんな分野の業界の方をお願いしていたのですが、それでもやはり偏りはあって、実際に派遣したところと受け入れ先で用意したところが必ずしも合っていないこともあり、その辺は苦労したところでした。

(スライド44) ただ、こういう産学協働の取り組みを結構取り組んだのですが、大変多くの方からご支援いただいて、学生もある程度の実感が得られたと思っています。

(スライド45) 時間がないので一部を飛ばしますが、こうしたことができた結果、産学の主体的な学びはようになったのかということ、もう少し考えてみたいと思います。

(スライド46) こういった産学協働の科目を受けると全般的にやはり成長実感は高いし、社会的な改革への意識も段階的に高まるということが、やっていて私も感じているところです。

(スライド47) 実はそういう学生を私の研究室では3年生の秋から4年生まで持っているわけですが、私の研究室に来る学生はほぼ全員、PBLやインターンシップを受けて来てくれました。

学生のその後を見ていると、本当に主体的な学びがその後の活動にうまく生かされるのだなと実

感をしているところです。うちの研究室は、3年の秋に配属されるとまず配属された全員でグループ研究をやってもらいます。半年かけて取り組み、またPBLとして政策提言をして、それから個別の研究をして、今度は対外的な研究を地域に入ってもらい実践するという、結構大変な目標を掲げて進めてきました。

(スライド48) 結論から言うと、いずれもそういったPBLをやってきた学生は、ほとんど自主的にいろんなことをどんどん作り上げていって、驚かされた1年でした。

4年生と3年生がいるのですが、今の4年生は、自分たちのグループ研究の方で、インターンシップ先の企業とうまく連携しながら、自分たちで普及啓発のツールのゲームを開発して、それを展示会に出して、受賞したり、いろんなところで提案したりしていました。

あと3年生の方も、私は専門ではないのですが、GISをとという技術をインターンシップ先の企業から学んで、それを実際にやっていました。

(スライド49) 卒業研究もそれとは別に、それぞれが実際に現場に入って、問題を設定するところから成果になるまでを個別に、それぞれのチームを率いるような形で動かしてきたのは、主体的な学びが一つ実現している姿ではないかなと思います、自分の学生ながらすごいなと思って見ていました。

(スライド51) この1週間ぐらい、学生と一緒に、君たちは何でこんなことができたのかという話をしたのですが、主体的な行動を促していくような仕組みが大事だということが整理出来ました。

(スライド52) 一つは、私は初めてこういうことやったのですが、一番大事なのは連携先をどうするか、連携のプロジェクトをどう作っていくかだと考えています。私だけでは対応ができないので、大学の他の学部の先生やうちの大学にはたまたまそのキャリア教育に非常に蓄積があったので、その蓄積をうまく活用させていただいたのが大きかったと思っています。なかなか個人の研究室や教員だけではこうした体制の整備は、難しいので、周りに本当に感謝しているところです。

(スライド53) もう一つが学生のニーズで、こ

これは本当にやる気を持って自主的にやってもらうには、学生自体が自分の関心があるテーマや、関心のある場所、問題を理解して、こちらがそれに合うテーマや場所を提供することが大事で、それには学生のニーズを把握することが大事だと痛感しました。

私は全部の授業で、毎回、学生にアンケートをして、どういう点がわからなかったかを常に聞いています。それに合わせたような形で、PBLの課題を設定したり、行き先を提案することをしていかなないと、なかなか盛り上がっていきませんでした。一方で、学生からは、みんながいたから良かった、みんながいたから頑張れたというような意見がよく聞かれるのですが、本当にそうだなと思います。それをどういうふうにチームビルディングするのはなかなか難しいのですが、丁寧なコミュニケーションをしながらやっていく必要が今後もあると思います。

(スライド54) 三つ目は、ちょっと駆け足で恐縮ですが、PBL産学協働教育のプロジェクトで主体的に動いていくことは1回の授業ではなかなか収まらないです。こういう流れが1年次始まって、PBL1から、PBL2、インターンシップまでの関連する取り組みをおこない、卒業研究で深めていく、というPBL的な活動の繰り返し、意味があったのではないかと思います。それらが大学での専門教育の学びがうまくつながっていくと、学びが加速していくということが、肌感としてすごく感じられたと思っています。初めに、つながり作るのは結構大変なのですが、教員間で情報共有や連携を密にするということが経験的にとても大事だと思いました。

(スライド54, 55) そろそろ終わろうと思います。産学協働教育の構築に向けて他にもいろいろありますが、私自身では、どう連携していくのか、コミュニケーションをどうやっていくのか、それから4年間の学びの中でどうつなげていくのか大事だと思います。連続的にどうやっていくのか、なかなか大変だと思いますが、引き続きやっていきたいと思っています。

(スライド56) 最後に、我々の目指す産学協働

教育は、これまでの4年間でおこなった取り組みをまだまだ発展できていると思っています。主体的な学びを最終的にどうしたいかという、やはり社会の中できちんと学生が動いて、世の中も変わっていくことが、必要なのではないかと思います。

そういう意味では4年間やってきて、せっかいろいろなところで核が出てきたので、引き続き、連携強化していきたいと思っています。

卒業生もこういう分野に就職するのであれば、引き続き何らかの関係もあるので、長期的にお互いに成長していけるような動きを作っていきたいと思っています。

それから二つ目は、こういった社会変革の一つの方法として、アントレプレナーシップのような社会起業家を養成すること、本学でも来年から取り組んでいきます。実際に主体的に学んで、社会を良くしていくことにつなげていくには、起業家を育成していくという出口もあると思っています、こういう流れもうまく作っていけたらと考えています。

それから最後三つ目ですが、産学協働で学生に外で活躍してもらうことを3年間やってきたので、ありがたい申し出をたくさんいただくようになりました。いろんな企業から、共同研究しようとか、学生の提案が非常に良かったので一緒に何かやりましょう、という話をたくさんもらえるようになりました。

こういう機会を捉えて、これからも産学協働で、キャンパスもそうだし、いろんなところを起点にしながら、取り組みを進めていくことが、またそこを見せていくことが、主体的な学びをより高めていく方向につながるかなと思っています。まだまだ至らない点いっぱいありますが、頑張っていこうと思っています。

(スライド57) 少し時間をオーバーしましたが、これで終わりにしたいと思います。どうも、ありがとうございました。

**白鳥** 2番目の講演は國本千裕先生です。

ご紹介させていただきます。國本先生は慶應義塾大学文学研究科を修了され、その後千葉大学で特任助教、そのあと、駿河台大学の専任講師、そして現在の千葉大学アカデミック・リンク・センターで准教授および副センター長をされています。

専門は図書館情報学で、大学図書館を中心とした学習環境のデザインと評価、大学生の学習行動・学習研究を支援する専門人材の実践知について研究活動を行っておられます。

ラーニングコモンズに関する図書の編集に携わっておられ、実は私も千葉大学のアカデミック・リンク・センターが素晴らしいということを知り、ラーニングコモンズの他の専門の先生からお聞きして、今回ご講演をお願いしました。

國本先生どうぞよろしくお願いいたします。

---

## 第2講演：國本 千裕

---

**國本** 丁寧に紹介いただき、ありがとうございます。千葉大学アカデミック・リンク・センターの准教授の國本と申します。よろしくお願いいたします。

(スライド1) 私にいただいたテーマは、ラーニングコモンズについてで、学習支援も含めていただきたいということでした。我々は、ラーニングコモンズは、単純に空間だけではなくて、学習リソースと、それから人による支援も含めたものが、ラーニングコモンズであるという定義づけをしています。

(タイトルにある)「ゆるやかにつなぐ」とはどのような意味か、という話は、後ほどご説明します。

(スライド2) 自己紹介は先ほどご説明いただきましたので、省略したいと思います。(私が)何をしてきたのかというと、元々、学生の学習行動の研究をしていたわけではなく、情報をどう探すのかという研究をしていて、その後、アカデミック・リンク・センターで学習環境や学習行動を調査する人が必要だということで、移ってきました。(経歴上の) ポイントは、私自身は国立大学も私立大

学も渡り歩いてきたという点です。「学習支援に携わる職員が何に困っているか」を把握した上で、教員と職員を繋ぐ人材として、期待されている面もあったかなと(千葉大学に)戻ってきたときに感じています。

今は、千葉大学の人文公共学府にある教育・学修支援コースの准教授と、後ほどご説明しますが、教育学習支援を行う人材の育成をする履修証明プログラムの講師も担当しています。

(スライド3) 私の所属の「アカデミック・リンク」は、見学に来られる方からこれは何ですか?と聞かれることがあります。意味が3つほどあります。1つ目はコンセプトとしての「アカデミック・リンク」です。本学では、本学全体の「教育・学習支援のためのコンセプト」を掲げています。まさに今日のテーマの「主体的に学ぶ」能力と知識活用能力を持つ学生を育てたい、というものです。ポイントは「生涯学び続ける」という点で、大学を卒業した後のことも考えて広く長く(知識活用能力を持つ学生を育てる)ということを考えているのが特徴です。

もう一つが、組織の名称としての「アカデミック・リンク」です。千葉大学における、教育学習支援機能の強化・拡充を行う組織のことを、アカデミック・リンク・センターと呼びます。興味深いのは、当組織は、事務部門が全部千葉大学附属図書館である点です。実質、附属図書館とセンターの教員が連携して、教育・学習支援を行っているのが、本学の学習支援組織(アカデミック・リンク・センター)の特徴です。

もう一つ、千葉大学では学習環境にも「アカデミック・リンク」という名称がついています。コアになっている物理環境が2つあり、1つは、西千葉の千葉大学附属図書館本館です。千葉大学の場合は西千葉側が本キャンパスという扱いで、全学部が揃っていますが、その附属図書館の本館の名称が「アカデミック・リンク」です。あと、千葉大学附属図書館松戸分館、園芸学部キャンパスにも図書館があるのですが、その分館に「アカデミック・リンク松戸」という名前が付いていて、(アカデミック・リンクは)物理的な場所の名前にも

なっています。

(スライド4) また、先ほど主体性の話が出ましたが、我々のコンセプト、すなわち、これから説明する学習環境とサービス環境において、我々がとても重視している点が、徹底した「学生中心主義と主体性の尊重」です。

学生が選ぶリソースにしても、空間にしても、自分で選ぶ、自分でそれが適切かどうかを決める、もっと言えば、自分でさらによりよい何かに育っていくことを促進する、ということ、徹底して考えて全てのものを作っています。

そのために、学生の行動をとにかく「観る」、学生の声を「聴く」ということを重視していて、サービスの設計段階・運営中・運営後にまで、ユーザ調査を必ず実施しています。それと、どれだけコンセプトをしっかり練って、観察して、作ったとしても、やはり学生の行動は予測不能ですから、学生が最終的に選択したものには理由があるはず。その選択を可能な限り尊重しています。

です。一部空間が、コンセプトと異なる使われ方をしたり、コロナなどが典型で「想定外のことも起きたりするのですが、そこは「どこを守って、どこを柔軟に変えるか?」ということ、ゆるやかに設定してバランスを取る、ということをしています。

(スライド5) もう一つ、これは教育学の方からすると受け入れ難いかもしれないのですが、我々は、学びに境界はないと常に考えています。大学のキャンパス内・外、全部含めて、大学生にとっての学びを支援すべきだと考えています。

カリキュラム上の学びは(往々にして)「修」という言葉を使っていますが、いわゆる、中教審答申(質的転換答申)で「学修」と定められた大学での学び以外にも、いわゆる「学習」—(スライドのこの定義は)日本国語大辞典から取ってきていますが—生涯にわたる学び、学生はよく趣味の勉強という言葉インタビューで使うのですが、学校以外のこの(スライド上の)定義で言うと、2・3に当たるような教育心理学的な意味での「学び」というものも支援すべきだという立場に立っています。

あと、研究支援の対象については、教育制度と教育組織の都合で、支援の狭間に落ちてしまいやすい大学院生。たとえば学部から大学院に進学しようとする、理系の場合は、学部3・4年生で、既に進学を考え始めます。文系の場合は(修了した)後の方が大事で、課程を修めてポストドクターになっても、まだ学び続けたいと稼ぐことができない状態になることが多いです。大学としては、こうした狭間に落ちて支援から漏れてしまう人たちも、全部支援すべきではないかと考えています。

(スライド6) これは無根拠に主張しているわけではなく、2011年から2014年に物理環境を整えた段階で、我々はいくつもの調査をしていてその結果からの判断です。今回の本題ではありませんので、調査の一覧はリンク先をご覧ください(スライド7)。スライド6に示した9つのプロジェクト調査や、10年間継続している定点観測調査、これらは本学の高等教育センターとも連携しているのですが、これらの調査とか、あと図書館で行った調査は、国内外の論文や学会発表でほぼ数年おきに必ず発表しています。オープン・ソースになるべくしていますので、後ほどご覧になっていただければと思います。こういうものを見た結果、学生は本当にいろんな学びを連続して行っているということがわかりました。

(スライド8) そういう結果を踏まえて、アカデミック・リンク・センターが「対象範囲をどうやって支援していくか?」ですが、軸に置いているのは空間です。空間としてのラーニングコモンズ、そこに配置する学習資源、それから職員・教員・学生が人的サポートを行っています。サポートの話は、この3つ(空間・コンテンツ・人的サポート)を軸にすすめています。

支援の開始当初は、学部学生の学習支援を中心に開始しました。学部学生の学習支援は(最近ほどの大学でも)普通にされていると思いますが、やっているうちに「院生も結構困っている」とか「支援の狭間に落ちている人たちがいる」ということがわかりました。なので、次の段階で、この(スライド上の)四角の枠を少し拡大して、院生まで含めた支援をしよう、となりました。

部門もそれに合わせてできているのですが、この「リサーチ commons」と書いてある部門は、どちらかというと「リアル・バーチャル環境の両方において学習・研究支援を行おう」としている部門です。それから、「人による支援の高度化」も、大学院と学部生、両方を対象に進めようというふうに（対象範囲を）拡大しました。あとこれは、一コロナの前から企画していたので我々は運が良かったとも言えるのですが—いろいろなものがデジタル化していくであろう今後に備えて、教材などの学習支援リソースは、極力すべて電子化していきました。このように「電子的な支援も拡充していこう」ということを、2017年時点でコンセプトとして立て直しました。

元々、組織自体は教職協働体制をとっていますので、教員が数名います。当センターの長が、全学の学習支援担当の副学長も兼ねていて、さらに図書館長も兼ねています。その下で、人的サポートや環境整備を担当している副センター長・准教授（國本）が一人います。さらにシステムや情報系を担当している副センター長・准教授がもう一人います。それから、助教1名と、欠員になっていますが講師が1名います。そういう人たちと、あと学内で適宜協力していただく先生が12名、という形で教員組織はできています。

実際に（日々の）実働や運用をやってくださっているのは、私達と一緒に働いている事務部門組織、全部附属図書館の人たちですが、部長・課長・係長含めた「常勤職員」が25名います。この方たちと一緒に仕事をしています。

後ほど出てきますが、ただ、教育・学習支援を（アカデミック・リンク・センター／附属図書館という）単体でやらずに、たくさんの学内組織、高等教育センターはもちろんのこと、スマート・ラーニング・センターや、学生支援センター、学生部の各課と綿密に連携して行っています。どのように連携しているかは、後ほど説明します。

（スライド9）最初に（本講演の企画段階で）一番今回興味を持っていただいたと思われるのが学習空間だと思いますので、ここから具体的にご説明したいと思います。

2011年に建物全体ができてからの5年間は、環境の整備にかなり労力を割いていました。千葉大学附属図書館本館の「アカデミック・リンク」は、来られた方がびっくりされることが多いのですが、4階建て4棟構成の、非常に大きな空間を持っています。

それから「アカデミック・リンク松戸」については、松戸の附属図書館（分館）がちょっと建物が古くなっていましたので、実験棟等や事務棟（教育のための諸施設）と併せて予算をとり、学部・研究科と連携して建物を建て直すということをしました。2017年からは、亥鼻（医学部のキャンパス）における学習支援が手薄になっていたことや、院生支援をする場合、院生たちは研究室や自宅にいますので、オンラインの支援を重視せざるを得ない、ということで、コロナに先んじて「院生対象のオンライン学習・研究支援」も始めています。

（スライド10）このように、オンラインも含めた学習環境整備を我々は行ってきました。なお、スライド内の略称に ALC という言葉が出てきますが、これはアカデミック・リンク・センターの略です。

（スライド11）学習環境を整備するにあたっては、まず予算を取って、建物を建てるわけですが、我々は「無意味に建物を建てるのはよくない」ということで、最初に必ず設計コンセプトを整理しています。ここでは、中原先生と美馬先生の定義を挙げさせていただいたのですが、学習環境というのはそもそも“学習活動を構成するリソースの総体”であるという立場を我々はとっており、①学習空間、②オンラインも含めたコンテンツ（学習資源）、③学習者とそれを支援する人の3つでそれらは構成されているととらえています。

それから学習環境をデザインするときには「どのような空間を用意すると、どのような活動が生じるのか、そこで学生がどのような共同体を作って、どうなりたいのか？」を考えることを大事にしています。それで我々が最終的に出したコンセプトが「自分で考えて、必要に応じて、必要なリソースを選び、互いに学び教え合うような空間を作ろう」というものでした。

(スライド12) これに基づいて先ほどのこのいろいろな部門が連携して動いたということになるのですが、(スライド13) 建物としては、先ほど言ったとおり4棟構成です。

これは上から見た図なのですが、L・I・N・Kの4棟あります。

この左側が、いわゆる普通の図書館(L棟)です。書架があって、その真ん中の閲覧席で勉強する、いわゆる大学図書館らしい空間で、ここは静かに勉強する空間として作っています。

もう一つ、書庫の雑誌を取めている場所があるのですが(K棟)、ここは間を取って、半静寂空間にしています。

N棟、ここが(アカデミック・リンクの)コアになるのですが、当時、質的転換投資を受けて、アクティブラーニングが非常に重視されていたので、そのための空間として1階から4階まで全て「発話が可能な図書館」というのを建てました。これは新築です。

さらに、デジタルコンテンツを作ったり、アクティブラーニング用の教室を整備した、研究開発等を行うアカデミック・リンク・センターの本拠はここ(I棟)です。I棟は、全フロアにWi-Fiと、可能な限りのコンセントを付けるということをしています。

(スライド14) これに対して、L棟とかK棟は「静かな空間」です。図書を活用して、当然「一人で集中して学びたい」という学生もいますので、ここ(L棟・K棟)は「従来型の図書館」として建てました。(スライドの)一番右側にあるコレですが、実は、うちは音を出せる空間の方が多いので、本当に静かになりたい場合は、静かにしたい人のための、専用ゾーンというのをガラスの中に設けています。本当に静かにしたい人は、こちら(ガラスの中)に自分が移っていく、という形をとっています。これは「完全静寂空間」という言い方をしていますが、そういうものを作っています。

(スライド15) もう一つ、今度はリソースを活用して学ぶ人たち向けに、図書とPCを併用して「グループで学べる空間」しかも、千葉大学アカデミック・リンク・センターは、電子リソースの提供に

も力を入れているので、そういうものをきちんと併用して学べる空間を別に作りました。ここは、談笑している学生がいますが、グループの活動もできるようにしています。

それから、窓際には幅150センチの机に、一人1個ずつ専用電源と電灯もついている「個人学習席」というのを作りました。これは、当センター長、こだわりの150センチ幅ですが、普通の図書館の閲覧席では、机の幅って大体120センチぐらいしかないのですね。ですが(学生が)パソコンを置いて、本を置いて、さらに荷物も置くと、これからの大学生には、120センチではとても足りない。ということで、レポート締め切り間際になると、こういう(写真のような)学生が現れるのですが、この状態になると、(机については)奥行きはともかく、横幅が必要だということで、そういうのも学生の行動を調査した結果として、「これが最適であろう」という学習環境を準備して作っています。

個人で勉強したり、集団で勉強したり、静かに勉強したり、というのができるようになっているということです。

(スライド16) これは、学生の選択性を高めている最たるものなのですが、N棟の2階に、可動式のホワイトボード、可動式の机と椅子、全てが動かせるようになっています。さらに、机も、丸型・クローバー型・四角形と、いろいろ準備して、仕切りも一切ない空間を設けています。空間の使い方も、学生に決めてもらおうと。よく、大学によっては「ユニット」を作って、想定した空間を埋め込んでいるケースもあるのですが、本学のアカデミック・リンクの場合は、あまりこうした空間設計はやっていません。学生には「空間の使い方を自分で決めてください」「学びの内容に応じて、ホワイトボードも自分で選択してください、自由に動かしてください」と言っています。

また空間の利用ルールと、禁止事項を最低限にしています。「飲食はこっちの空間でしてね」と、あと「音声ルール」はあるのですが、基本、それ以外のルールや禁止事項はあまり明示されていませんし、(空間に)掲示もされていません。自主的に、それらを「自分たちで考えて」コントロール

してね、というやり方を導入しています。

(スライド17) 空間を利用するとき、「ルールがないと無法地帯になるのでは?」と思われると思うのですが、「互いが勉強する姿を見る・見られる」ことで、仕切りがあったとしても全てガラスにして、抑止と学習促進(両方)の装置にしています。

「どういう学生共同体を育てたいのか?」ということとつながっているのですが、「お互いにお互いを見て、お互いに刺激を受けて、やる気を出して学ぶ」とか、「自分たちで、自立的にこういう行動を止めよう!」とか、そういうことを自分たちでできる学生になってほしいと考えて、空間を設計しています。そのために「特にルールは書いていないけれど、やっていることは全て丸見えになる」という空間設計をしました。

(その結果)良かった効果としては、インタビューで「千葉大生がこんなに勉強するとは知らなかった」と言った学生が、たくさん出たことです。自分だけじゃないというのがわかると、しきりに「そういう人たちが」集まってくる空間に変貌していき、というのは、12年ほど見ていて感じているところです。

(スライド18) 同じようなもので、学習についても、ただ勉強して内在化するだけでなく、外在化してほしいということで「発信するための場」も作っています。N棟の1階に、掘り込み型のステージのようなものを作っているのですが、ここで発表するときには(写真の)ガラス戸を開けることができるので、外から市民の方も時々混ざって(発表を)聞いていることがあります。互いに刺激を受けるような空間というのを、学部も超えて、学内だけでなく学外に向けて「開く」、ということもしています。

(スライド19) 今までのものは、学習支援のための空間なのですが、今日の聴衆には、先生方も多いと聞いています。教育支援にも我々は力を入れていましたので、紹介します。この写真の空間は、元々は当時あまり一般的ではなかったアクティブラーニング型教室を作り、先生方に使っていただくとしていたのですが、今は、どちらかというと、

(メディア授業のための)コンテンツ作成がしやすい教室として展開しています。

ここは上(天井)に、天吊りカメラや、プロジェクターが付いている空間です。アクティブラーニング型の授業をする場合、教員も動くので、教員の姿自体が、録画像から消えてしまうことが結構あるのですが。この教室で学生を指導するときには、この天井のカメラを操作して、教員を「追尾」できるようになっています。人が動くときの追尾も、クローズアップも、2階の操作室からできる教室を持っています。

録画したものは2階のコンテンツ制作室というところに自動で吸い上げられるようになっていて、そこで編集等をして、教材として提供することができますようにもなっています。オンライン会議も増えてきたのでそのためのいろいろな装置等も部屋の設備に足しています。

(スライド20) 自由度の高い教室が、学内に少ない国立大学は多いので、実験的な授業をした先生方とか、(この写真では)授業の様子をカメラで先生自身が取られているのですが、こうした必要な機材をご自身がお持ちでない場合には、センターで貸し出すこともしています。実験的な授業の実施を促すとか、教育コンテンツの作成支援をする、というようなことも積極的に行っています。

先ほど示した通り学習コンテンツも生み出していないといけないので、それも支援することを我々は重視しています。

(スライド21) こうした環境は「急にできたわけではない」ことも補足しておきたいと思います。我々は3年に一度、教員・職員・学生スタッフが全員参加で、理念と方針の再確認をしています。これ(写真)はかなり昔のもので、去年実は新しいワークをやったのですが、スライドがないので、古いもので失礼します。

組織の理念や方針は、センター長が毎回説明をして、非常勤職員までを含めて全員がそれを聞き「こうだった」というのを踏まえた上で、先ほどの大量の調査とデータを全員でチェックします。今の空間に、どんな問題があるか、サービスはどう

変えたらいいのかを、ほぼ1日ばかりで全員で検討を行います。「課題の洗い出し」と「多様な視点」と(スライドに)書いてありますが、学習支援において当事者である、学生も来てくれるので(皆で検討した結果を)そこでまとめて、「こうしたらいいのではないか?」という今後に向けた提案のプレゼンをします。

2017年のときは、提案を集約した結果、改善点が130項目ぐらい出てきたので、それを改善プランに落とし、2年かかりましたが、段階的にそれを改善しては埋め込んでいく、というのを繰り返ししました。その結果が、先ほどのような空間に結実したと思っていただければと思います。(3年おきなので)すでもう3回やっています。

(スライド22) こういうことをして、空間を作った、というのが先ほどの褒めていただいた空間を作ってきたプロセスです。10年かかっていますが、ただ空間を作るだけでは駄目で。我々としては、そこに学習支援やサービスを埋め込んでいくことを心がけています。

(スライド23) 人による支援では、Learning Support、Technology Support などたくさんのピア・サポーターを抱えています。主なものを説明すると、まず、学習支援のための Academic Link Learning Support、我々は ALSA-LS と呼んでいますが、院生の分野別学習相談者です。こちらはピアサポートです。

他に、この「領域別学習相談」という、先ほどの松戸分館にもピアサポートを置いています。松戸は単独の学部キャンパスなので、学部の先生方と連携して、学部の「専門領域」に合わせた学習支援が最適であると結論づけました。西千葉には、全学対象の、数・物・理・文系の各トピックで相談に応じるサポーターがいて、もう一つ(松戸)には、学部特化型のサポーターを置いています。

物理空間とオンラインの両方でサポートをしていて、今(この写真で)座っている院生は、来場した人の学習相談にも応じますし、パソコンにきた質問にも答えています。セミナー類も、院生が自分の学習経験を生かしたセミナーをしています。元はこういう場所(写真)でやっていたのですが、

今は、この場所から(セミナーの)配信もできるようになりました。ハイブリッド配信をしています。

(スライド24) あと、これはコロナで特に重要になってきた Technology Team、元々は、パソコンとかソフトウェアの使い方の相談に乗っていましたが、今はプログラミングの統計ソフトの使い方等にも対応します。あとメディア授業が始まってからは、そのためのツールがうまく使えないという相談にも対応しています。スマート・ラーニング・センターと我々は協働していて、メディア授業用のツールがうまく使えません、履修登録できません、というような学生からの相談にはこちらが乗っています。また、学生に貸し出している機材がたくさんあります。先生方にも貸し出しているカメラ等もあります。その整備も彼らがしています。

(スライド25) それから、先ほどの授業収録の話で、高度なコンテンツ制作となるとなかなか(学生サポーターでは)難しいので、これは、技術職員を専門に雇っていて、デジタルコンテンツの作成支援をしています。

(コンテンツ作成支援に関しては)元々は、出張授業収録等もやっていたのですが、今はちょっとやり方を変えました。「どういう支援が今後ベストか?」ということを考えたとき、先生方は今や自分で授業を Zoom で撮られています。なので「高度なコンテンツを作成・配信できる」ニーズよりも「もっといい収録、もっといい編集」それから「オンラインで配信するときのアドバイス」等を求められることが多くなりました。そうすると、セミナーの配信アドバイスなどは、当センターの教職員は結構慣れていきますので、どちらかというところ「コンサルテーション」の方に、今、かじを切りつつあります。

(スライド26) あと、大学院生の支援の話ですが、これに関しては、実は院生が支援の狭間に落ちる最大の理由は、「研究室で先生方が独自の支援をなさっているだろう」と思い込むことにあります。もちろん、先生方が「院生に身につけてほしい能力」はあるのですが、それとは別に、院生個人が「自

分にはこの力が足りない！」というふうに思うことも多分ぼろぼろあって。それ（大学院生の学習ニーズ）を掴んで、「自分で選び取る」というものがあった方がいいのではないかと思います。それが（大学院生向けの）研究・学習支援の補助の形になりました。つまり、先生方の指導を尊重しつつも、そうした支援ができるべきではないかという発想のもとに、いろいろプログラムを提供しています。本学では大学院生に「身につけてほしい三つの能力」の3軸を、大学院共通教育において示しています。我々は、それにも沿った院生むけの支援プログラムを組んでいくことを開始しました。

（スライド27）種類がたくさんあって、典型的なもので「15 minutes session」という大学院生向けの実習型セミナーがあります。15分1セッションで組まれています。大学院生が欲しい「研究に役立つスキル」や「リテラシー」の中には、図書館員が持っている文献検索のスキルですとか、教員が持っている「プレゼンテーションのスキル」など、いろいろあるので、その実践知を学生に共有するという形のセミナーです。

あと、本学は「全員留学」が大学のミッションなのですが、ただ、そのときに問題になってきたのが、実は「英語で喋ったり、質問したりするのが苦手」な院生や学生がとても多いことです。そこで全ての講義・質疑を、やさしい英語でやる英語論文セミナーを実施しています。初めは受身で受けてもいいので、英語で聞いて、とにかく、英語で質問しましょう！と。学会の練習にもなるかなと思い、始めました。

この実践知を分け与えるセミナー（15 minutes Session）は「実習重視」ですので、あくまでも対面で、今も継続的に実施しています。この後者（はじめての英語論文）のセミナーの方は、オンラインでもいいのではないかとということで、今は完全オンライン配信に変えています。そうすると、医学部の先生とか、医局の先生が、意外に受けに来られたりします。支援対象の範囲が広がったのでこちらの方は、完全オンライン化がいいのかなということで、怪我の功名といいますか、コロナでやり方を切り替えた結果そうなったのですが、業

者委託のサービスかつオンライン配信でやっています。

（スライド28）あと、最近利用が盛んになっているのが「Academic English Consultation」という支援です。協力してもらっているのは、先ほどの外部委託の会社で、講師は英文校閲のエキスパートです。学生や教員、職員が作成した、英語の成果物に対して相談にのります。先生方は使っている「英文校閲サービス」がいろいろあると思いますが、そうした英文校閲サービスは、大体、出した論文に手が入って（修正後の）結果だけが返ってくるものです。しかし、学習ということを考えたときには、院生は「何が悪くてどう直せばよかったのか」という修正プロセスの方が知りたいはずですよ。

そこで、①質問も説明も全部英語で行い、②実際に書いた原稿をもとに、③先ほどのネイティブスピーカーの方たちと一緒にそれを直していく、という支援を、物理空間とオンラインの両方でやっています。今はオンライン方式に切り替わっています。予算は教育企画課からいただいて、サービスの設計と運営は、附属図書館とアカデミック・リンク・センターがやるという方法にしています。

さらに、文献探索の支援も研究には必要だと思いますので、そこは大学図書館の強みを生かして、図書館のレファレンスサービスで、大学院生が文献を探すサポートができるようにしています。こちらの「調べもの相談」もオンラインでやっています。

ということで、これが、今までの（千葉大学アカデミック・リンク・センター／附属図書館）の学習支援の全体像です。駆け足でしたが、全てのサービスが見られるリンク集を（配布資料として）お渡ししていますので、興味のある方は個別に見ていただければと思います。

（スライド29）私の担当部門ではないのですが、アカデミック・リンク・センターには、ほかにデジタルスカラシップという部門がありまして、こちらでは、大学の研究者や、学生の新しい研究成果、本やレポートが出されると、それを積極的に「千葉大学の本棚：cu-Books」というところに出して、

成果を積極的に公表する、というこのシステムを作りました。

それから「千葉大学学術リソースコレクション：c-arc」というのがありますが、図書館が主となって電子化してきたリソース、例えば、工学部が持っている卒業制作の作品リストですとか、あと、古書を教育・研究・学習用のリソースとして、ただ電子化するだけではなくて使いやすくなる機能(IIIF)をつけて、広く利用を促すサイトも作っています。

毎週1回、火曜日に必ず、千葉大学全学の教員のうち、誰かひとりが研究活動について話すという講座(1210あかりんアワー)も我々はやっていて、通算544回になります。これは学内配信限定ですがほぼすべての回の内容を録画していて後で見られます。そのほか、必要なリソースはどんどん電子化して出していくということもしています。

(スライド30,31)先ほどからオンライン学習支援の話をしてきたのですが、実はコロナ禍でかなりオンライン学習支援に力を入れなくてはいけなくなって、電子空間における、学習環境の整備にも力を入れています。特にメディア授業支援です。コロナで急にメディア授業が増えた大学が多いと思うのですが、そうすると、学生が「遠隔で授業を受けつつ、課程外の学習をする」のは段々難しくなっているのではないかと、それ(課程外の学習)をオンライン上でどうやれば支援できるかを、我々は真剣に考えました。

まず、授業支援はスマート・ラーニング・センターと連携しました。先生方が御覧になるFDポータル上で、「我々はこの支援をしています」というのを、我々自身が書いて知らせる努力をしないと、先生方にも学生にも支援は届きませんので、そうするとFD部門との連携は必須です。このように、学習支援サービスやコンテンツについては(教員や学生に届けるための)連携体制を構築した上で、実際に届けるための学習支援ポータル(EYeL)を作っています。

(スライド32,33)スライド左側の青いサイトは、学部生用の「学習支援ポータル」で、右側は「研究支援ポータル」、つまり院生向けのものです。コ

ロナ禍であろうが我々のミッションを見失ってはいけないということで、授業学習以外の学習も、このポータル上で、コロナ禍でキャンパスが閉じていようがまいが、学習支援をできるようにしようということを考えました。

(このポータルは)部局内外の区別なく、学習支援に使えるものは全部集約しようというコンセプトで作っています。あと「走りながら作り変える」ということもコンセプトにしたので、構築しながら修正する、という作業を繰り返し行いました。

(スライド34)結果、実は「2週間で作れ！」と言われたので、コロナ禍真只中の2020年3月30日から4月13日の間でポータルを作っています。オンライン学習支援の開始に備えて、我々が支援できることの整理が済んでいたのが幸いしました。それがないと2週間で作れと言われても多分できなかったと思うのですが、元々(コロナ禍前)整理がついていたのはすごく大きかったです。

皆さんに実践知として共有したいのですが、学習の支援は「提示から始まる」、ということを結構忘れてらっしゃる方が多く、特に職員に多いのです。学生は、何に困っているかを言語化できず、ニーズは潜在化していることがとても多いので、「こちらが先に(支援を)提示してあげなければならない」という前提があります。

その提示できるラインナップを揃えた後で、何をどうやるかを考える必要があるのですが、まずは「学生に必要な支援」あるいは、大学で学ぶために「あるべき支援」の整理が必要です。現状の枠組みで「できることは全てやる」そして、必要だけどできないものも、整理中には出てきますので、それは「枠組みを超えて頑張るって作る」ということが必要になってきます。

それをどうやってやったのか、ともいつも聞かれるのですが、体制としては3名で、実はタスクフォース方式で作っています。あらかじめ録画していたコンテンツ、電子化しておいたガイド等を「これは要る、要らない」を考えました。「レポートの書き方はいるよね」とか、あと「現状セミナーの動画は録画してあったからこれ提供できるよね」とかいうのをやって、まず必要な支援を揃えるわ

けです。その後、必要だけどできないこと、「これにも困るかもしれないけどリソースがないね」というものについては、他部署とか学外のリソースも、オープンになっているものは使わせていただいています。これら（実際に作ったポータルやコンテンツ）は配布資料でまとめてリンク先をお渡ししているのものでそれでご覧になっていただければと思います。

（スライド35）このポータルを作るときにも、やはり他のいろいろな部署と連携をしています。タブが3つにわかれているのですが、①メディア授業時に授業課題を出すのに必要な支援、それから、②ネット等を自分で探して自主学習するときに必要な支援、③大学の課程外で勉強したい（そのときに必要な）いろんなリソース、みたいなものを3つのタブに分けて、実は埋め込んでいます。

学生向けのポータルサイトは、作成するとき、テキスト（読みもの）を作るのは学生スタッフの院生の力を借りましたし、コンテンツの提供先はいろいろ協力してもらって一緒に組んで作りましたし、附属図書館/アカデミック・リンク・センター以外の教員も連携しています。学生スタッフには、園芸学研究科とかいろんな学部から推薦いただいた方も入っています。

それから、こういういろいろなものを調べるときに、医療系のものとかは我々単独では作れないので、医学の専門家がいらっしゃるようなところ（総合安全衛生管理機構）と協力したりして作ることを心がけています。

（スライド36）同時並行として、学生がどう学んでいるかも一コロナ禍真最中なのですが、インタビューでいろいろ調査をさせてもらいました。学部生は基本的にあまり学習環境に変化がないのですが、大学院生は意外に（電子化した）学習環境を既に自宅に持っていることがわかりました。

（スライド37）そこで、院生向けには「何を支援しなくてはいけないか？」を試しに聞いたところ、基本的にはこもりがちになってしまい、学術サロンが消失していることの方が問題で「何か研究室のミーティングとかをオンライン化する支援が欲しいです」との答えや（スライド38）、学部

生は「周りの様子が見えないので、他の学生がどう思っているのを知りたい」多分このフォーラムの分科会でも出ていたと思うのですが、そういうのをどうしたらいいのかなという話が出ていました。我々としてもこれは整理をしていきました。

（スライド39）最後、コミュニケーションにおいて重要な点をいくつか説明したいと思います。実は、オンラインで学習支援をするとなると、結構、「学生が必要な情報を見出しにする」のに時間をかける必要があります。（学習支援はまず）提示が先なので、「学生に通じる言葉」でそれを書かないといけないのですね。我々は、ついサービス提供者の視点で「回答期限」と書いてしまっていますが、学生から見ると「回答」は回答する側の言葉なので、つまり、学生は（回答を）待っている側なので、「待ち時間」という言葉が大事で、こういう言葉の切り替えを行わないといけないというのがわかってきました。

（スライド40）コミュニケーションの様式が変わってしまっていますので、物理の空間だと、目の前にいることを前提に、結構いい加減に作ったサービスでも、（目の前にいる学生に直接）聞きながら変えることができるのですが、オンラインの場合は、あらゆるケースを聞いて、事前に想定しておいて、状況と相手に合うように言語化と文章化をしなければいけなくなります。なので、言葉の選択が重要になることがわかりました。この辺は、ちょっと切り替えが必要かなというふうに思っています。

（スライド41）あと、他の学習支援と同じなのですが「どのような学習支援が必要で、可能か？」は考える必要があります。学びの枠組みの中の、どの部分を支援するのか、我々（千葉大学アカデミック・リンク・センター/附属図書館）はそれを広くとっていますけど、「教育支援」に特化してもいいですし、「授業支援」に特化してもいいはずですよ。

ただ、オンライン学習支援の場合、結構「制限」が出るという意見もあります。だからこそ、他大学のリソースでも節操なく集約したり利用すると「今、無いもの」を加えることもできたりしますの

で、ここをうまく使っていくことが必要かなというふうに思います。

(スライド42)最後に、学びを支援する上でのコツということで、12年間のTipsをあえて5つにまとめるなら、というものを作ってみました。ひとつは戦略性とコンセプトの明確化が必要です。全学の教育ミッションというのをまず理解した上でコンセプトを打ち出すというのがとても大事です。独りよがりにならないように「大学が何をしたいと思っているか」を確認しておく必要があると思います。

それから、チームリーダーが育つ環境もとても重要です。学生、職員、教員それぞれに成長するのは結構大変だと思うのですが「試行でいいからやってみよう！」という雰囲気を作るのはとても大事です。

あとは、それが学生に合っているかどうかの「行動（を観る）、声を聞く仕組み」とか能力スキルを習得するための何かプログラムのようなもの（研修や履修証明プログラム）は絶対に必要で、教員と職員どちらにもこれは必要だと思います。

最後に「協力を厭わない、軽やかに越境する」と書かせていただきました。「学内連携はどうやってやるのか？」よくFDで聞かれるのですね。連携の本質は「困りごとと、面倒ごとのギブアンドテイク」なので、先に相手の困っていることを、他部局のものでも「引き受けてあげる」というのが先で、それが結果的に連携になる、と思っています。

そのときに「担当が違いますから」とか、「所掌が違いますから」というようなことは言わないで、学生のためにそれを超えて引き受ける覚悟があるか、ということが非常に重要なというふうに思います。

最終的には、躊躇しないとか、走りながら考えるとか、柔軟に変化するみたいな、ゆるやかさとか、寛容さみたいなものも必要になってくるのかな、というのが私の最後のまとめです。

時間オーバーしましたが以上となります。

**白鳥** 3番目のご講演に移りたいと思います。3番目は永田和宏先生に講演をしていただきます。永田先生は、現在JT生命誌研究館の館長をされています。他にも皆さんご存知かと思いますが、歌人としてご活躍されています。あと京都大学の名誉教授、京都産業大学の名誉教授です。京都産業大学では短い時間でしたが、一緒に働かせていただいて、それで今回ぜひ永田先生にご講演いただきたいとお願ひし、本日を迎えることになりました。

永田先生は、京都大学の理学部を卒業され、アメリカの国立がん研究所の客員准教授を経て、京都大学で教授をされていました。その後京都産業大学で教授、学部長さらには研究所の所長を歴任され、2020年4月から現職のJT生命誌研究館の館長をされています。

紫綬褒章、ハンスノイラート賞、瑞宝中綬章など様々な章を受賞されています。歌人としても現在朝日歌壇や宮中歌会始めの選者としても活躍されているところです。私も毎週日曜日には朝日新聞でご活躍を拝見しております。

生命科学の方では、今、日本医療研究開発機構の「プロテオスタシス」で研究統括をされており、大変お忙しい中、本日も講演をしていただけることになりました。

永田先生、よろしくお願ひいたします。

---

### 第3講演：永田 和宏

---

**永田** お二人の先生方のお話を聞いていて、現場でとても具体的な実践をされていて、そういう実践的なお話をされた後に話をするのは場違いな雰囲気がありますが、私が今日お話させていただくのは、現在の大学の現状とは必ずしも合っていないかもしれません。ある種ドン・キホーテ的に、大学の教育はこういうふうになってほしいという思いを持っています。教師の側から学生に求めたいこともありますし、あるいは大学の教師はこういうふうであってほしいという思いもありますので、そういうところを中心にお話をさせていただ

こうと思っています。

(スライド1)今日は「学習から学問へ」というタイトルでお話をさせていただきます。まず大学の教育を考えるうえで、初等中等教育から考えてみたいと思っています。

(スライド2)初等中等教育で生徒たちにとって何が一番大事かという、自分はよく出来るかどうかだろうと思いますが、よく出来るかどうかとは、結局いかに問いに正しく答えられるかということに尽きる。つまり先生に質問をされたら答えられるか、あるいは試験に出たら正解を答えられるか、正解出来ることがよく出来ることの基準になっていて、ただこれには大きな前提があり、問われたことには正解があるということが一つの前提になっています。そして正解は必ず一つで、しかも一つしかない。これが高校までの問われることの本質になっている。答えがないという問題はないのだ、問われたら答えがあるのだということを前提に学びをしてきた。

先生方もそうだと思いますが、入試でいい問題作るのはとても大事なことなのですが、入試問題を作るときに一番気を使うのは、答えが二つないか、ひょっとしたらこれ答えがないのではないかと、それぐらい答えがあるということが大事な前提になっている。

もう一つ、初等中等教育で大事なものは先生が教えることは常に正しい、先生は正しいことを教える、それをきちんと学ぶというのが大事で、あるいは教科書に書いてあることをきちんと学ぶ。教科書に書いてあることを先生が代弁してわかりやすく教える、それを自分のものにする。それが基本的に初等中等教育でなされている教育であろうと思います。もちろん今はアクティブラーニングその他が高校や中学校で取り入れられてはいますが、基本はそういうふうと考えていいだろうと思います。

これはある意味学習をしているのだと。先ほど國本先生のお話もありましたが、学んで修めるという学修、それから、学んだことを習うという学習、いずれも「がくしゅう」と読みますが、初等中等教育では、基本的に生徒たちは学習をするのだと。

これは文科省が言っていることでもありますが、私もそのように思っています。

(スライド3)問題は大学の教育で、まず一番に考えるのは、大学は高校の連続でいいのかということです。今高大連携が強く叫ばれていて、高校と大学をシームレスにつなぐ、あるいは高校で学んだことの復習を大学の初めにするということも行っていて、高大連携を強く意識した大学教育がなされている。私は実は大反対で、高校と大学ははっきり分けた方がいいと、事あるごとに言ってきました。

私は昭和41年(1966年)に京大に入ったのですが、京大には湯川秀樹先生がおられたので、ぜひ湯川さんの下で物理がやりたいと京大を選んだのです。京都大学の入学式の総長の式辞はすごかった。このときの総長は奥田東先生でした。

式辞の冒頭に「諸君、おめでとうございます」は多分あったのだろうと思いますが、そのすぐ後に、「京都大学は諸君に何も教えません」と総長の口から出ました。これもう本当に度肝を抜かれたというか、あっけにとられました。せっかく苦勞して京大に入ったのに京大は何も教えてくれないのかとびっくりしました。ただ、びっくりはしたのですが、その時正直鳥肌が立つような、ある種の感激を私は覚えました。これまでの高校の教育と大学の教育は全然違うのだと、全然違うところに自分が入ってきたのだというゾクゾクした感じ、つまりこれからは、これまでの黙って教えてもらう場所から自分から何か学びに行かないと何も手に入らない、そういう場所に自分が来たのだという、そういう感激でした。これは非常に大きくて、これが未だに私の中に大学観として強く残っています。

これまでの如何に正しく答えられるということから、如何に問いを持てるか、つまり、それが本当なのか、何故なんだろうということを大学で学生に見つけてもらうことが一番大事なことではないかと私は思っています。

これを私は「学習から学問へ」と呼んでいます。これまで学んで修めてきたものから大学では学問をしてほしい。学問とは何かと言えば、読んで字

のごとく学んで問い直すということ以外にない。つまり自分で問いを持つということが非常に大事だということです。

先ほど白鳥先生から私が現在 JT 生命誌研究館に勤めていることを紹介していただきましたが、JT 生命誌研究館では科学をコンサートで音楽を聴くように楽しんでほしいということで「科学のコンサートホール」というキャッチフレーズがついていました。初代の館長が岡田節人先生、発生生物学の大家ですが、実は岡田先生は私のドクターの主査だったので、不思議な縁で私が三代目の館長になります。

私が来てから、「科学のコンサートホール」というキャッチフレーズの他に、生命誌研究館というのは問いを発する場なのだというもう一つのキャッチフレーズをつけました。研究館に来ている展示を見て、一般の人たちが科学はおもしろいよと思ってもらうことの他に、その中で一つでもいいからなにか何で？という問いを見つけて帰ってほしいというのがその意図です。大学もやはりそういう問いを見つければいいと思いたいと私は思っています。

有名な孔子の言葉に、「学びて思はざれば即ち罔し、思ひて学ばざれば即ち殆し」があります。学ぶことは大事だけど学ぶだけでは駄目で、自分で思わなければ、問い直さなければ駄目だと言っている。「思ひて学ばざれば即ち殆し」。しかし、思うだけでは駄目で、そのためには学ぶこともなければ危ういとも言っている。これがやはり学問の本質だろうと私は思っています。

(スライド4) それでは大学における教育・研究で、どういうことが大事なのか。先ほど申しましたように、大学ではまず学生に答えが一つある問題というのは社会にはないのだということを知ってほしい、気づいてほしいと思っています。どこをみても誰かが答えを知っているというのは社会に出ればないわけで、これまでは先生に聞いたら何でも答えてくれると思っていたことが、先生に聞いても、それから、社会に出て上司に聞いてもわからない問題の方が多いのだということを、しっかり理解してほしいというふうに私は思っています。

私は細胞生物学をずっと教えていました。細胞生物学には本当によい教科書がいっぱいありますが、私は教科書を使いませんでした。教科書に書いてある問題や事は学生に自分で見てもらった方がいい。例えば“Molecular Biology of the Cell”は厚さ10センチほどある。どんな教師がやったらこの教科書にかなうわけがないですね。教科書に書いてあることは教科書で勉強してほしい。だけど、講義に出てきてほしいということをやってきました。

なぜかという、教科書にはあらゆることを書いてあるが、教科書に唯一書いてないことがある。「まだわかっていないこと」は書いてない。わかっていることは全部書いてあるのですが、まだわかっていないことは教科書にも書いてない。大学では何がまだわかっていないのかということをお教えるのが大学の教師の最も大事なことだと思っています。

サイエンス、特に細胞生物学は本当に発展して、いろんなことわかってきているのですが、教科書の一行と一行の間にはこんなこともわかっていないのだということがいっぱいある。こんなことさえもわかっていないのだということを学生に知ってもらうことで、サイエンスをやることの喜び、面白さというのを実感してほしい。大学ではわかっていないことを教えたい。学生にわかっていないことを教えるには、ここまでわかっているということを知ってもらわないと、わかっていないことの面白さがわからないので、わかっていることも教えるけど我慢して聞いてねという形で私は講義をしてきました。

そのためには大学の教師は、ここはFDフォーラムで、いい先生はどういうことかということも大きな関心になっていると思いますが、私は大学の教師は、ある意味で言うと、いい研究者でなければ駄目だと。つまり、世界の最前線でここまではわかっているのだっていうことを日々自分でサーベイして知っていなければ、ここからはわからないのだということが、先生もわからない。そうすると授業で一番学生に知ってほしいまだわかっていないということがうまく教えられない。

それではちょっとまずいだらうというふうに思っています。今日はある種の理想の教師像を語っているのですが、私がそうであるというわけではありません。そのつもりでお聞きいただけたらと思います。

もう一つは知識や学問につながるためには驚きと感動が必要で、学生たちが驚いてくれること、あるいは感動してくれることはとても大事だろうということで、ここも授業ではかなり気を使って講義をした覚えがあります。

例えば、君たちの体の中に細胞はいくつあるのかという問いを出すと、知らない。大部分は知らないですが、なかには60兆ありますと答える。60兆ってすごい数ですが、単なる数で、その次にどうという質問するかというと、細胞を1列に並べたらどれぐらいの長さになるか。そんなこと誰も問われたことがないので、ぼかんとしていますが、簡単な話して、直径10ミクロンの細胞60兆なら60万km。でも60万kmと言ってもこれまだ数ですね。驚きはしない。すごい数だなと思いますが、それがどれぐらいの長さかという、地球15周ですね、地球は4万kmですから、君の体のなかの細胞を一直線に並べたら地球15周できるのだよという話をすると、おおという声。つまり、驚いてもらう、それに感動してもらうということがとても大事になると私は思っています。

もう一つ大事なことは、教えられたことは、果たして正しいのかと疑ってみる、こういう態度を身につけてもらうこともとても大事で、私はいつも私は間違っていることも言うからなと言っているのですが、なかなか学生は信じてくれません。

(スライド5) これ実際に2013年に出た論文なのですが、イタリア等の学者が集まって、私達の体の細胞は実は60兆ではなくて37兆個だという論文が出ました。これはとても私自身にとっては大きな驚きで、感激しました。

なぜ感激したかということ、私達は細胞の数を60兆とは教えてきましたが、何で60兆とわかるのだということを開き直すことを自ら怠っていたという経緯があります。誰が考えても数えられるわけがないですね。細胞1個の重さはわかります。我々

60kgですから、60キロ割る1ピコグラムで、大体60兆くらいになる。体積計算からもそのくらい数が出てきます。我々の体の体積は風呂に水を張ってドボンと入ったら水が溢れた量で測れる。細胞1個の体積は3分の4  $\pi r^3$  (4  $\pi r^3/3$ ) でわかるので、我々の体積を細胞1個の体積で割ったら、やはり60兆くらいになる。誰も調べようがないのでだいたい60兆だろうと言っていたのですが、それが段々と定着して我々の体は60兆の細胞からなるという言葉、文章が実際に教科書にも出てくる。それを誰も疑わなくなる。つまり根拠不明の定説が次第に常識になっていって、常識を誰も疑わなくなる。世の中にこういうような根拠不明の常識がいっぱいあるのだということはこの論文は我々にも教えてくれたと思っています。

もう一つこの論文の素晴らしいところは、60兆が37兆になって一体誰が得をするのか。何の役に立つのだ。60兆が37兆になってうちの会社1億儲かりましたなんて会社は絶対ないので、結局何の役にも立たない情報ですね。この数字、情報は何の役にも立たない。

プリンストン高等研究所の初代所長のフレクスナーの有名な言葉があります。「科学の歴史を通して、人類にとって有益だと判明する真に重大な発見のほとんどは有用性を追う人々ではなく、単に自ら好奇心を満たそうとした人々によってなされた」とフレクスナーは言っています。我々ももし本当の数というのがどこかにあるのならそれを知りたいという根源的な欲求がある。これが大事だ。論文はそこなのですね。60兆が37兆になって、何か役に立てようと思った仕事ではなくて、本当に60兆あるのか。本当は違うのではないか。もしそうなら、なんとか調べたいということで調べたのだろう。今日はその経緯は省略します。

つまり我々がサイエンスをやる、研究・学問をやるのは結局ここにあるのではないかと私は思っています。それが役に立つか立たないかではなくて、もしそこに自分たちの知らない何か本当のものがあるのなら、あるいは本当の数があるのなら、それを知りたいと思う。人間にはそういう欲求はどこかにある。これが、我々が〈知〉というもの

に賭ける一番大きな根拠になっているのではないかと私は思っています。

(スライド6)〈知〉ということが非常に大事だというふうには私は思っていますが、一体それでは知るとはどういうことだろうかという問いをもう一つ立ててみたいと思います。一つ今の大学で一番私がちょっと歯がゆく思っているのは、私も長く教員生活をしてきましたが、学生たちに知ってほしい、これだけ勉強してほしいと思うことを与えすぎている気がします。

私は根源的に〈知〉というものは無条件に与えられるべきものなのだろうかと考えています。大学は学生から授業料を取っている。額の多寡は別にして、授業料として教師が学生に教えるのは、これは当然のことである。つまり教育は授業料の金の対価として、商品として当然与えなければならないし、よりよい教育をより学生が理解しやすい形で与えなければならない。もちろん真実なのですが、ただその前に学生が知りたいと思ってくれることが大事だろう。そこをうまく引き出さないうで知識を教えても意味がないだろうと私は思っています。

もう一度孔子の言葉を引くと、こういう言葉があります。「憤せずんば啓せず、悱せずんば発せず、一隅を挙ぐるに、三隅を以つて反らざれば、則ち復たせざるなり」

憤するというのは何かわかりそうでわからなくて、モヤモヤして身悶えをしているという状態です。それぐらいでなければ啓せず、教えてやらない。悱(ひ)するとは、わかっているのだけどうまく言葉にして先生にそれを伝えられなくて身悶えしている状態。そういう状態でなければ、言葉を発してやらない。つまり孔子は相手がわかりたい、知りたいと思って身悶えしたり、何とか表現したいと思って身悶えしているような状態でなければ、言葉も発してやらないし、教えてもやらないと。

実はご存知の方多いと思いますが、「啓発」という言葉はここから来ているのですよね。啓せず、発せず、啓発。孔子は本当に相手が知りたいと思っ

いつの間にか啓発とは相手に一方的に啓蒙する、相手に教えてやる、相手が望むと望まざると、無知な奴に教えてやるのが啓発だという形に置き換えられてしまう。これどこでどう変わったのか私も全くわからないのですが、少なくとも孔子は全く逆のことを言っている。これが大事なことだと私は思っています。

次はもっとすごくて、「一隅を挙ぐるに、三隅を以つて反らざれば、則ち復たせざるなり」。四隅があつて、一つの角のことを喋って教えたら、「先生あと三つの角はこういうことですよ」と相手と言うようなでなかったらもう二度とそんな奴に教えてやるものか。すごい教育論ですね。私もそんなこと一回言ってみたいのですが、なかなか言えない。つまり孔子が言ったのは、相手が知りたいと望んでいる、その相手にだけ教えてやればいいのだと言っている。なかなかこれは今の大学でこんなこと言っても通じないのですが、やはり、でも、教育の根源にはそこがあるだろう、そこを忘れてはいけないのではないかと私は今でもそのように思っています。

もう一つは問いを問いとして抱えている時間が大事なのだということを学生たちによく言っていました。今の学生は本当にすぐ何かわからないことがあると、スマホを取り出してウィキペディアで答えを探す。わかったような気になる。それは問いではないですね。何か、誰に聞いてもわからないような問い、誰かに聞いてみたけど、誰に言っても、当然先生も答えられないしわからないような問い、これを大学に在る間に一つでも見つけられたら大学に来た甲斐があるよということを学生には言います。

つまり自分が学生の四年間その問いと向き合えるようなそういう問いの一つを見つける。この方が百の知識を得るより私は大事なことではないかと考えています。これには安易に答えを求めないということも大事ですし、逆に安易に答えを与えないということもとても大事だと思っています。先ほど孔子の例がそうです。

(スライド6) もう一つは知るといふことはどういふことか。知るといふことを単に情報を得るだ

け、知識を得るだけというふうに捉えていると知るといふことの喜びはないと思っています。私が思う知ることとは、それまでそのことを知らなかった自分を知ることなのだ。ここがすごく大事なのだ。つまりあることを知ってよかったと思うその時は、それまではそのことを知らなかった自分がいたのだと、それを知る。これがとても大事なことではないか、知る喜びはそこだというふうに思っています。

赤ちゃんというのはもう自己絶対化ですから、自分が世界。だけど段々と成長していくと自分が知らないこといっぱいあって、それを知っている人がいる。ある時にそれを教えてくれて、そんなことがあるのかと知る。そのことで自己相対化ができて、自分をうまく社会の中で位置づけできる。それまで知らなかった、そのことを知らなかった自分がいるということ、その都度知っていくということが知る喜びそのものなのではないかと私は思います。

それが知というものへのリスペクト、敬意ですね、「知へのリスペクト」はそこからしか生まれたいのではないかと。つまり黙っていれば情報が向こうから勝手にやってくるものには「知へのリスペクト」は生まれたい、知りたいたいと思っていて、苦労した果てによろやくそのことを知った。自分はこんなこと知らなかったけどこれは知ってよかったと思うところに「知へのリスペクト」が生まれてくる。それがとても大事なことではないかと私は思っています。

(スライド7) ちょっともう時間がないので急ぎますが、いい教育とは何かということ、私はあまり喋る資格がないのですが、長く教師をやってきて、講義や授業のテクニックの問題以前に、教師自身に学生を引き寄せる魅力があるかというのがとても大事なことではないか。先ほど申しましたが、私にそれが出来ているというわけではありませんが、これがとても大事ではないかと思っています。

もう今の人は知らないですけど、岡潔さん、有名な数学者ですね。奇行でも有名で、例えば朝、大学に行くか行かないかを近くにあるお地蔵さん

に石をなげて当たったら今日は大学へ行く、当たらなかったら家に帰って寝てしまったという、そんなエピソードも残っています。私は岡先生に直接習わなかったですが、岡さんのお弟子さんに習って、岡さんが授業にやってきて黒板に数式を書いて、そこではたと止まって授業が終わるまでずっと一度も学生の方を振り返らないで考えていた、そんな場面があったと直接聞きました。

不思議な人で教師としてはほとんど失格ですが、ただ岡潔の講義を聞いた二人の物理学者がいて、一人は湯川秀樹、もう一人が朝永振一郎で、二人ともノーベル賞を取られています。

湯川さんはこんなことを思い出に書いています。「岡氏の身なりは、しかし大学の先生らしくなかった。背広の腰に汚い手ぬぐいをぶら下げているところはまるで三校の応援団員みたいだった。入学早々出された演習問題はまた恐ろしく難しかった。学生の知識の程度など全く無視したような問題であった。それからちょっと飽きて、そういう難しい問題にぶつかっていくことがまた私に一種のスリルは味わわせてくれることにもなった」と書いていますし、朝永振一郎さんはもう一人の数学の先生二人を挙げて、この両先生の魅力は、自ら情熱を研究に捧げているという点にある。その情熱が学生に伝わってくるのである。時々のご自身の研究についての話も聞く。若い先生というものは学生にわからせるというよりも、ご自身の興味に溺れることもあるものだが、これがまた生意気な学生にはたまらぬ魅力なのであると書いておられて、湯川・朝永両氏とも岡さんの講義を聞いて数学が好きになって、物理が好きになったということを書いておられます。時間がないので森毅さんの話はやめますが、森一刀齋先生に私は直接習いました。これまた変な先生でした。ただすごく魅力があった。

(スライド8) 時間がないのですが、いい教師とはどういうものなのかを少し考えてみたいと思っています。これまた私がそうであるというわけでは全くありませんが、一つ大事なことはですね、自分に本当に面白いものがあるかどうかということ、教師自身が自分に問い直してみること

がとても大事だろうと思います。

先ほどの岡さんの魅力で、朝永・湯川両氏が惹かれたのは、岡さんが一生懸命考えている現場そのものを学生に見せていた、この人はこんなことに今興味を持っているのだということを学生が岡さんの背中から感じていた。教師がどれぐらい魅力的か、教師自身が面白いと思うものを持っているかどうかがとても大事になってくると思っています。それはつまらないことでもいいと思いますし、そういう自分が今本当に面白いと思っていることを学生の前で喋っているかどうか。つまり、学生が研究者・学者というのはこういうことに興味持っているのか、そんなつまらないことに興味持っているのか、あるいは逆に、こんなことは知らなかったけど、こんな面白いことがあるのかということ、教師の生の声で学生に伝えることがすごく大事なことだと思います。

もう一つは、これは自分の研究室でもずいぶん学生に言ってきたことです。自分の仕事と同じように人の仕事を面白がれるかどうか、これはすごく大事だと思っています。研究室でプレゼンをやらしても、自分の発表は一生懸命やるけれど、人の発表に興味を示さない学生がいると私はよく怒鳴っていました。京大時代は机を蹴って「出て行け」と言って怒鳴ったこともあります。人のやっていることを自分ならこうできる、今こういうふうにしたら面白いのではないかというふうに、人の仕事を自分の仕事として面白がれるかどうか、研究者になれるかどうかを分ける一番大きな境目で、私の研究室では質問が出ないと怒り心頭に達していました。

面白いと思ったら質問が出ないわけがない。自分ならこうしたい、それにはこういう条件はどうですかというようなことを聞かざるを得なくなってくる。つまり、相手の仕事を自分の仕事として面白がれるか、それがとても大事なことだろうと思っています。

それにも関係しますが、専門以外のことにどれだけ興味を持っているか。これもとても大事なことであろうと思います。私は海外にもとても優秀な友人たちを何人も持っていますが、実感として、

私が出会った優れた学者は例外なくみんな面白かったと思っています。サイエンティストと会ってサイエンスの話ができなかったから論外だけれど、サイエンスの話しかできなかつたら、これまたこんな面白くないことはないと思っています。

本当に優秀なサイエンティストは何を喋らしても面白いし、日本のことも我々日本人よりもよく知っていることもあるし、何にでも興味を持って話に乗ってくれる。それが非常に心強い友人関係になっていて、サイエンティストになってよかったなと思うことがある。これは大学の教師として心しておきたいことで、いろんな話題、話題が広いだけではなくて、それに興味を持てるかどうかがとても大事なことだと思っています。

それからもう一つは、自分の物差しを離れて対人関係が確立できるかどうか、これはもちろん教師だけではなくて、社会一般に誰と付き合うときもそうなのですが、特に我々教師を長くやっていると評価、評価軸というものがある、人と接するときにどうしてもその人の評価というものを意識に置いてしまうことが多い。非常にまずいことだというふうに思っています。サイエンティスト同士であっても、この人どういう仕事しているのか、どの程度の仕事をしているのかとしたりすることもありますが、学生に接するときはやはりそういうことがある。

自分の物差し、これは何によるかという、単に自分だけの物差しであって普遍的な物差しはない。今日はそんな話はしませんでしたけど、試験というのは一次写像を観察するだけのもので、一面的評価でその人が全部わかるわけではない。私は大学では試験は不要だと言ってきた人間で、あまり言うともまずいのですが。ただ、いつも評価というものを先に立てて人と接するところからは、いい対人関係ができてこない、教師の問題から離れて、一般的にそうだと思います。

私は長く教師をやってきて、決していい教師であったということではありませんが、まず人間が面白いということが教師にとっても大事ではないかというふうに今も思っています。

私は湯川秀樹先生に憧れて京都大学に入って、

湯川先生の最後の講義に何とか間に合って一年間湯川さんの講義を受けることができました。その内容は全部忘れましたが、自分が懂れて京大に入った先生の授業を、しかも湯川先生は退官の直前の年で、その年に聞いたのは、それ以降の何十年かの研究者としての自分をどこかでかすかな自信として支えてくれたような気がする。つまり懂れる先生にどこかで会ったことを誇れるような、そういう出会いが大学の教師と学生の間であってほしい。これは自らが出来なかったことで、そうあっ

てほしいという思いからなのですが、そんなことを思っています。

(スライド9) ちょっと取りとめのない話でしたが、『知の体力』にこういうことを書きましたし、私のとても良き友人である大隅さんとの共著『未来の科学者たちへ』は、若者たちにできればサイエンス・アカデミア分野で研究を続けてほしいという願いを込めて書いた本です。機会があればお読みいただければと思います。どうもありがとうございました。

スライド1

## 第28回FDフォーラム シンポジウム

これからの大学でどのように学ぶのか  
～主体性を生み出す学びの多様性～

2/25 (土) 14:00～16:30

スライド2

### ＜本シンポジウムの趣旨＞

大学にはさまざまな学生がいて、それぞれが主体的にさまざまなことを学ぶ。大学での学び方は、教える側が主体となる教授パラダイムから学習者が主体となる学習パラダイムへと変換しつつある。コロナ禍でも産学連携や地域連携など学外の活動を通して、学生の主体的な学びを実践している例も多い。また、さまざまな学生の主体的な学びへの支援も多様になってきている。

本シンポジウムでは、地域連携を通して学生が主体的に学んでいる例や学生が主体的に学ぶための支援の取り組み例を挙げて、これからの大学で学生がどのように学んでいけばよいのか、そして、学ぶための多様な支援について議論したい。

スライド3

講演1. 京都産業大学 准教授 西田 貴明 氏  
地域・企業の連携による主体的な学びと実践  
—社会課題の把握から課題解決策の提案と実現—

講演2. 千葉大学 准教授 國本 千裕 氏  
ゆるやかにつなぐ  
～多様な「まなび」の支援～

講演3. JT生命誌研究館 館長 永田 和宏 氏  
学習から学問へ  
大学における教育とは

総合討論、まとめ

スライド1

第28回FDフォーラム  
2023年2月25日(土) 14:00~16:30  
これからの大学でどのように学ぶのか“主体性を生み出す学びの多様性”



京都産業大学  
KYOTO SANGYO UNIVERSITY

地域・企業の連携による主体的な学びと実践  
—社会課題の把握から課題解決策の提案と実現—

生命科学部 産業生命科学科  
准教授 西田貴明



スライド2

発表内容

**地域・企業の連携による主体的な学びと実践—社会課題の把握から課題解決策の提案と実現—**

I. 本学の紹介、自己紹介

II. 実践内容

1. 産業生命科学科の取組
2. 生命科学PBL
3. 生命科学インターンシップ

III. 主体的な学びを促す試み

1. 地域・企業との連携体制の整備
2. 教員・学生間のコミュニケーション機会の構築
3. 段階的な学びのプロセスの設計



スライド3



自己紹介・本学の紹介



スライド4

京都産業大学の概要 1

沿革(学部)

- 1965年 経済学部・理学部で開学
- 1967年 経営学部・法学部・外国語学部を増設
- 1999年 工学部を増設
- 2000年 文化学部を増設
- 2007年 経済学部にはソーシャル・マネジメント学科、会計ファイナンス学科を増設
- 2008年 コンピュータ理工学部、外国語学部国際関係学科を増設
- 2009年 法学部に法政経済学科を増設
- 2010年 総合生命科学部を増設
- 2014年 外国語学部を英語、ヨーロッパ言語、アジア言語、国際関係の4学科に再編
- 2015年 文化学部を芸術文化学科新設
- 2016年 理学部に宇宙物理・気象学科増設
- 2017年 現代社会学部を増設
- 2018年 情報理工学部新設
- 2019年 国際関係学部、生命科学部新設
- 経営学部をマネジメントの1学科に再編



建学の精神  
将来の社会を担って立つ人材の育成。全世界の人々から尊敬され、全人類の平和と幸福のために奮起する精神をもった人財を育成。「産業」を、創設者荒木俊嗣は「むすびわざ」と名づけ、大学の教育を、社会の恵みに結びつけるものとして位置づけた。「むすびわざ」とは、モノ、コト、そしてヒトを新しい発想で結びつけ、新規の価値を社会に産み出すこと(イノベーション)を意味する。

特色  
1年次から4年次まで、文系理系問わず学部・大学院全てが京都市北区上賀茂に集結している「一拠点総合大学」。学部学科の「交差が学び」の可能性を広げ、社会と「共創」するキャンパスで根幹的な力を養っている。



スライド5

京都産業大学の概要 2

学部構成(学生数) (2019年5月1日現在)  
学部全体 13,591名 大学院全体 185名

経済学部 FACULTY OF ECONOMICS	2,498	経営学部 FACULTY OF BUSINESS ADMINISTRATION	2,599	法学部 FACULTY OF LAW	2,499
現代社会学部 FACULTY OF SOCIOLOGY	1,170	国際関係学部 FACULTY OF INTERNATIONAL RELATIONS	187	外国語学部 FACULTY OF FOREIGN STUDIES	1,935
文化学部 FACULTY OF CULTURAL STUDIES	1,134	理学部 FACULTY OF SCIENCE	507	コンピュータ理工学部 FACULTY OF COMPUTER SCIENCE AND ENGINEERING	315
総合生命科学部 FACULTY OF LIFE SCIENCES	331	生命科学部 FACULTY OF LIFE SCIENCES	130	情報理工部 FACULTY OF INFORMATION SCIENCE AND ENGINEERING	286

教員 専任教員439名 非常勤講師他342名 計781名  
事務職員 専任事務職員202名 特定220名 計422名



スライド6

むすぶ人

「人」と「人」をむすぶ  
「知識」と「実践」をむすぶ  
「京都」と「日本・世界の諸地域」をむすぶ




スライド7

自己紹介（西田貴明：にしだ たかあき）  
 大学院：生態学→金融系シンクタンク：政策調査→大学：政策研究・産学連携

専門 生命科学、生態学に基づいた環境政策学



生物学、生態学      政策調査・支援      政策研究・産学連携




スライド8



実践内容

専門科目  
 生命科学PBL1、2  
 生命科学インターンシップ



スライド9

京都産業大学 生命科学部（2019年～）

- 先端生命科学科 -  
生命科学 x 実験科学

生命科学の探究  
研究・実験を重視

- 産業生命科学科 -  
生命科学 x 社会科学

生命科学の活用  
社会・産業と連携

生命科学の基礎知識と技術



スライド10

産業生命科学科の特徴

生命科学を社会に活用し、未来の社会を創造

「医療と健康」  
コース

再生医療と生命倫理  
高齢化と健康問題  
遺伝子診断

「食と農」  
コース

食糧問題と経済格差  
食の安全  
遺伝子組換え食品

「環境と社会」  
コース

里山の保全と利用  
生物多様性の保護  
環境経済  
自然環境政策

「生命科学」と「社会科学」を融合  
日本で初めての挑戦



スライド11

産業生命科学科の産学協働教育

社会で必要とされる力を段階的に身につける

生命科学を武器に社会で活躍できる人材を育成

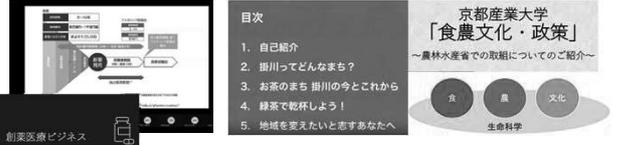


スライド12

産業生命科学科の専門教育（主に2回生）

<専門科目>

創業医療ビジネス、農学概論、地域環境論、環境経済学、日常生活と生命科学、バイオイノベーション、食農文化政策…



社会課題の現場からの最新の話題提供



## スライド13

産業生命科学科の専門教育（2回生）

<専門科目>

食農文化政策

- 日本国内の様々な地域をケーススタディとして、行政、企業の実務家から話題提供。
- 食農文化の現状や課題、自然環境や食文化を活用した地域活性化、食農文化の保全、伝承などの取り組みを紹介。
- ケーススタディを通して、地域課題解決のプロジェクトを学ぶ。
- 自身の地域課題の解決策を提案する、レポート（1万字）を作成。

社会課題解決に関わる人材イメージの共有



## スライド14

受講生の反応と課題（食農文化政策）

食農文化政策に対する関心

2. この授業の内容は全体を通じて興味持てましたか (0 点数)

3. 本授業全体を通じて、地域の社会課題の解決に向けた取り組みへの関心はどのようになりましたか?

回答	割合
とても興味持てました	21%
少し興味持てました	78%
あまり興味持てませんでした	0%
興味ありません	1%

回答	割合
とても高まりました	70%
少し高まりました	29%
高まりませんでした	0%
低くなりました	0%
変わりませんでした	1%

様々な講演者の方の講義はとても身になる話ばかりでも楽しかったです。レポートは重めでしたが1万字という長い文書を書く良い経験になったと感じました。様々な立場の方のお話を聞いて、さらにそれを地元の地域課題に落とし込んでいくのがとても楽しかった。たくさんの方の話を聞くことが出来たので、学びが多く、とても意味のある講義だったのではないかと思います。

授業の内容、地域課題解決に対する関心が高まった



## スライド15

産業生命科学科の産学協働教育

情報を処理し、社会に発信する能力を養う

生命科学リテラシー  
サイエンスコミュニケーション

情報処理能力  
プレゼンテーション能力  
表現力・発信力

課題を発見し、協働して解決する力を養う

生命科学PBL1・2(課題解決型学習)

コミュニケーション能力  
課題発見力  
実行力

生命科学を武器に社会で活躍する力を養う

生命科学インターンシップ

実社会での  
実体験による成長



## スライド16

生命科学PBL1、2（2回生秋、3回生春）

生命科学PBL (Project Based Learning : 課題解決型学習)  
企業や地域団体、地方公共団体などが抱えている課題の解決策を学生自らの力で立案し、実行する授業科目

○生命科学PBL1 (2回生秋)  
さまざまな演習を通じて、チームで協働する力や、企画を立案する力、プレゼンテーション力を養う。

○生命科学PBL2 (3回生春)  
地域の現場にある実際の課題の解決策を立案して実行する。チームで協働しながら社会のリアルな課題にあたることで、調整力や実践力を養う。



## スライド17

PBLとはなにか

- 科目内容に基づいた学習 (Subject-Based Learning: SBL)  
知る必要があること → 学習する → 身に付ける
- 問題に基づいた学習 (Project-Based Learning: PBL)  
問題が示される → 知る必要があることを考える → 学習する → 実践する → 身に付ける



## スライド18

生命科学PBLの目的

- 課題解決に必要なスキル、コミュニケーション力を強化する
- 多様な主体の協力を得て、社会課題に対する解決策を提案する
- 生命科学を活かした社会課題解決のアプローチを習得する

コミュニケーション   プロジェクト設計   マネジメント

学外機関と連携したプロジェクトを立ち上げる



スライド19

### PBL 1の授業の構成（2回生秋）

第1回：授業の進め方、課題解決プロジェクトとは、プラスのストローク、自己紹介  
 第2回：実践例の紹介（計画）、アクティブ・リスニング  
 第3回：アクティブ・リスニング  
 第4回：実践例の紹介（商品開発）、アサーション  
 第5回：実践例の紹介（イベント企画）  
 第6回：合意形成、チームワーク（月で生き残る）  
 第7回：課題解決のアイデア出し、KJ法、発想法  
 第8回：プロジェクトの検討、プロジェクトの流れ  
 第9回：企画書のまとめ方、議事録の作り方  
 第10回：プロジェクト計画の検討  
 第11回：中間発表会（チームの企画内容の発表）  
 第12回：中間発表の振り返り、レポートの書き方  
 第13回：プロジェクト計画の検討、企画書の草稿の提出  
 第14回：プロジェクト計画報告の準備、報告書のまとめ方  
 第15回：最終報告会、振り返りレポート




スライド20

### コミュニケーションの実践（プラスのストローク）

プラスのストローク「温かい言葉や態度で相手に働きかけること」

- 4人（一班だけ5人）1組になり、1回目の話し手、聞き手、観察者（2人）を決める
  - 「観察者」は話し手と聞き手のやり取りをよく観察する人のこと
- お互い、表情等がよく見えるよう調整
- 聞き手は、以下の「聞き手の態度」で聞く

話し手が話す時間	聞き手の態度
2分	「アイコンタクト」「（笑顔の）うなずき」「あいづち」 + 「開いた質問」を交えながら聞く 「プラスのストローク」を加えて聴く




スライド21

### 地域課題の認識とアイデア出し KJ法

<KJ法>  
 「無秩序に見える定性的データをグループにまとめ、グループ間の関係を図解化、文章化することにより、問題の本質を追求したり新しい発想を得たりする（川喜田、1996）」方法




スライド22

### PBL 2の授業の構成（3回生春）

第1回：ガイダンス、PBL1の振り返り  
 第2回：活動テーマの紹介、  
 第3回：学外活動を行う上での留意点  
 第4回：グループ活動  
 第5回：連携先との顔合わせ  
 第6回：グループ活動  
 第7回：グループ活動  
 第8回：グループ活動  
 第9回：中間発表会  
 第10回：中間発表の振り返り  
 第11回：グループ活動  
 第12回：グループ活動  
 第13回：グループ活動  
 第14回：最終報告会  
 第15回：授業の振り返り




スライド23

### グループ活動による地域課題の解決

宝が池の生態系管理において必要な取り組みを考えよ【京都市都市緑化協会】  
 小学校のビオトープ活用計画を立案せよ【上賀茂小学校・上賀茂おやじの会】



平城宮跡チーム：コロナ禍における公園の活性化・利用促進について考えよ【国営飛鳥歴史公園ほか】




スライド24

### 生命科学PBL 成果の例（国営飛鳥歴史公園ほか）

地域連携イベント「天平衣装カフェ」の開催

オリジナルドラマ「麻保呂波（まほろば）」を制作




スライド25

### 受講生の反応と課題 (PBL2)

pBLの活動に対する振り返りと関心

1. 全体を通して、PBLの授業の目的(コミュニケーションスキル、社会課題解決スキル、主体的な学び)は達成できたか(0点満点)  
 2. 全体を通して、PBLの授業の内容は興味持てましたか(0点満点)

項目	達成できた	達成できなかった
コミュニケーションスキル	4	13
社会課題解決スキル	8	2
主体的な学び	2	6

実際にプロジェクトを動かすということがどれほど考えることが多いか、どれほど大変かということがよくわかった。事前準備が想像以上に多くて大変だったのがありますが、一番難しさを感じたのは、意見を擦り合わせて一つの案にしていこう過程の難しさでした。グループの喧嘩とコミュニケーションを取りながら問題解決に向かっていくスタイルがとても自分の成長に繋がったと思います。プロジェクト動かすためのアイデア出しの方法などを知れたのは今後役に立ちそうでした。何をやるにも準備をすることが大事だということも学びました。思っていた以上に授業外の時間を作るのが大変で、自分の未熟さを知るいい機会になりました。

多くの学生がグループ活動に意欲的に取り組んだ

スライド26

### PBL受講学生の社会人基礎力についての自己評価

社会人基礎力の3つの力と12の要素

3つの力	12の要素	自己評価
前に踏み出す力	主体性	物事に進んで取り組む
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む
	実行力	目的を設定し確実に行動する
考え抜く力	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する
	創造力	新しい価値を生み出す
チームで働く力	発信力	自分の意見を分かりやすく伝える
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聞く
	柔軟性	意見の違いや相手の立場を理解する
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する
	規律性	社会のルールや人との約束を守る
	ストレス管理能力	ストレスの発生源に適切に対応する

アンケートによる学生の社会人基礎力の自己評価

スライド27

### PBLにより養われた力 (自己評価)

生命科学PBL2受講前後における得点変化

3つの力	12の要素	全体の傾向	
		事前評価	事後評価
前に踏み出す力	主体性	3.26 ± 1.05	3.51 ± 1.03
	働きかけ力	3.07 ± 1.18	3.33 ± 1.06
	実行力	3.40 ± 0.96	3.58 ± 0.85
考え抜く力	課題発見力	3.70 ± 0.77	3.95 ± 0.82
	計画力	3.00 ± 0.85	3.40 ± 0.85
	創造力	3.28 ± 0.85	3.53 ± 0.91
チームで働く力	発信力	3.23 ± 1.02	3.65 ± 0.84
	傾聴力	3.91 ± 1.00	4.26 ± 0.82
	柔軟性	3.79 ± 1.01	4.12 ± 0.82
	状況把握力	3.84 ± 0.92	3.98 ± 0.77
	規律性	3.51 ± 1.14	3.91 ± 0.78
	ストレス管理能力	3.19 ± 1.24	3.67 ± 1.02

\*\*\*, \*\*, \* Wilcoxonの符号付順位検定により、それぞれ1%、5%、10%水準で有意差ありを示す

三瓶ほか(印刷中) 生命科学分野における課題解決型PBL授業の導入と地域との協働による学び、高等教育フォーラム

スライド28

### PBLにより養われた力 (自己評価)

生命科学PBL1の受講有無による受講前後の得点の比較

3つの力	12の要素	受講あり		受講なし	
		事前評価	事後評価	事前評価	事後評価
前に踏み出す力	主体性	3.22 ± 1.04	3.48 ± 0.85	3.30 ± 1.08	3.55 ± 1.23
	働きかけ力	2.96 ± 1.15	3.26 ± 1.01	3.20 ± 1.24	3.40 ± 1.14
	実行力	3.26 ± 0.92	3.48 ± 0.90	3.55 ± 1.00	3.70 ± 0.80
考え抜く力	課題発見力	3.78 ± 0.80	4.00 ± 0.85	3.60 ± 0.75	3.90 ± 0.79
	計画力	3.17 ± 0.83	3.61 ± 0.66	2.80 ± 0.83	3.15 ± 0.99
	創造力	3.52 ± 0.73	3.52 ± 0.90	3.00 ± 0.92	3.55 ± 0.95
チームで働く力	発信力	3.04 ± 1.02	3.61 ± 0.78	3.45 ± 1.00	3.70 ± 0.92
	傾聴力	3.78 ± 1.04	4.04 ± 0.93	4.05 ± 0.95	4.50 ± 0.61
	柔軟性	3.91 ± 1.00	4.04 ± 0.88	3.65 ± 1.04	4.20 ± 0.77
	状況把握力	3.96 ± 0.64	4.00 ± 0.74	3.70 ± 1.17	3.95 ± 0.83
	規律性	3.65 ± 0.94	3.91 ± 0.79	3.35 ± 1.35	3.90 ± 0.79
	ストレス管理能力	3.30 ± 1.22	3.70 ± 1.06	3.05 ± 1.28	3.65 ± 0.99

\*\*\*, \*\*, \* Wilcoxonの符号付順位検定により、それぞれ1%、5%、10%水準で有意差ありを示す

三瓶ほか(印刷中) 生命科学分野における課題解決型PBL授業の導入と地域との協働による学び、高等教育フォーラム

スライド29

### 生命科学インターンシップ (3回生通年)

協力企業や団体において、1~2週間程度の就業体験を行う  
(3年の夏休みにインターンシップに参加)

事前学習 → インターンシップ → 事後学習

医療機器メーカー、建設・環境コンサルティング、地方自治体、調査研究機関、農業生産法人等

スライド30

### 生命科学インターンシップ

目的

- これまでの自分自身の経験、特徴を整理する
- 生命科学に関わるしごとのイメージを具体化する
- 将来のキャリアをつくるための道筋を立てる

概要

- 事前授業 (プレ・インターンシップ)  
ビジネスマナー講義、グループでのディスカッションと発表、人権研修、情報倫理講義、レポート作成など
- 就業体験 (インターンシップ)  
実習先企業等で夏期休業期間中に5日間程度の就業体験
- 事後授業 (アフター・インターンシップ)  
グループで就業体験の報告とディスカッション、全体報告会での発表など

インターンシップの7ステップ

- 目的: 何のために参加するのか
- 目標: どんな自分になりたいか
- 実行計画: どのように実行するか
- 活動報告: 何を学んだか
- 評価: 何を学んだか
- 成長: どう変わったか
- 今後に向けて: どう活かすか

スライド31

キャリア形成に向けたワークショップ（事前授業）



ワークショップにおける自己分析と目標の設定

IN/OUTシート

項目	内容	備考
自己分析	自己分析の結果を記入する	
目標設定	自己分析の結果に基づき、目標を設定する	
振り返り	ワークショップの振り返りを記入する	

IN/OUTシート

項目	内容	備考
自己分析	自己分析の結果を記入する	
目標設定	自己分析の結果に基づき、目標を設定する	
振り返り	ワークショップの振り返りを記入する	



スライド32

ビジネスマナーの講習（事前授業）



ビジネスマナー講座による基本的な所作の確認



スライド33

インターンシップ派遣先の活動状況



環境コンサルタント会社における土壌、水質の調査



スライド34

インターンシップ派遣先の活動状況



衛生調査会社における環境分析



環境コンサルタント会社  
におけるフィールドワーク



スライド35

インターンシップ派遣先の活動状況



医療機器メーカーにおける開発業務への参加



スライド36

インターンシップ派遣先の活動状況



農業生産法人における農作業



## スライド37

インターンシップ派遣先の活動状況

まちづくりの関連企業における地ビールの製造とイベントの実施

京都産業大学

## スライド38

インターンシップ派遣先の活動状況

環境コンサルタント会社における活動報告

京都産業大学

## スライド39

受講生の反応と課題（インターンシップ）

生命科学インターンシップに対する満足度

学内の事前・事後授業

とても低い	0人, 0%
少し低い	1人, 4%
少し高い	7人, 32%
とても高い	12人, 55%
どちらとも言えない	2人, 9%

受入れ企業での実習

とても低い	0人, 0%
少し低い	0人, 0%
少し高い	3人, 36%
とても高い	9人, 64%
どちらとも言えない	0人, 0%

インターンシップ授業の実習における満足度が高い

川上・西田（印刷中）生命科学部におけるインターンシッププログラムの構築と実践、高等教育フォーラム

京都産業大学

## スライド40

受講生の反応（インターンシップ全体）

生命科学インターンシップにおいて得られた成果

自分自身に対する新しい発見があった	55%
働くことのイメージが具体化された	50%
個人発表のスキルが上がった	47%
業界や業種の理解が進んだ	42%
就職活動の進め方が理解できた	39%
希望する就職先がより明確になった	37%
グループディスカッションのスキルが上がった	35%
就職活動の情報共有をできるつながりができた	32%
社会人とのつながりができた	32%
特に目立った成果はない	0%

自分自身の発見や、働くことのイメージの具体化

複数回答（回答者22人）

川上・西田（印刷中）生命科学部におけるインターンシッププログラムの構築と実践、高等教育フォーラム

京都産業大学

## スライド41

受講生の反応と課題（インターンシップ）

生命科学インターンシップの授業に関する課題

事前授業の時間が短い	9%
事後授業の時間が短い	23%
インターンシップ受け入れ先の数が少ない	23%
インターンシップ受け入れ先で問題があった	0%
就職活動に役に立たない	0%
上記以外の課題がある	23%
特に課題はない	45%

概ね問題ないが、派遣先マッチングは難しい

川上・西田（印刷中）生命科学部におけるインターンシッププログラムの構築と実践、高等教育フォーラム

京都産業大学

## スライド42

インターンシップ受入先の確保と派遣

<対象>

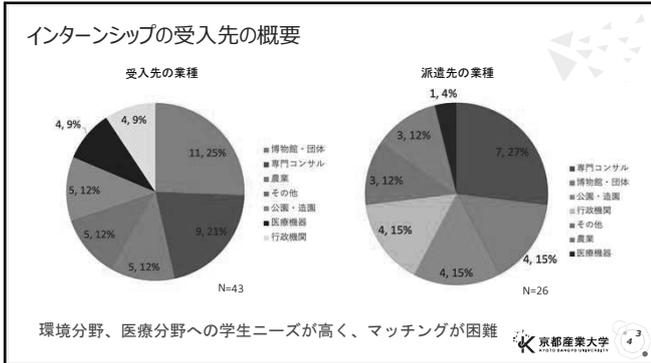
（関西中心の）環境・食農・医療等の生命科学に関わる企業・団体

<受入先の依頼から派遣の流れ>

1. インターンシップの授業方針の検討と依頼内容の整理
2. 生命科学部の所属教員の連携企業・団体への依頼
  - ① 所属教員の共同研究者、卒業生への協力依頼（100社以上）
  - ② インターンシップ担当教員からの依頼、詳細説明（26社、43名）
  - ③ 学部事務室からの連携手続き、受入先の整理
3. 受講学生による受入先とのインターン実施日程等の調整

京都産業大学

スライド43



スライド44

### 産学協働教育の振り返り

- 学内のキャリア科目を参考にして、生命科学部の「産学協働教育（PBL、インターンシップ科目）」を構築することができた。
- 「産学協働教育」については参加学生の関心が高く、積極的な活動が展開され、参加学生の成長実感も概ね高い。
- 多様な学生ニーズに踏まえつつ、科目の趣旨に適合する実践活動、就業体験を提供いただける受入先を確保することが求められる。
- 「産学協働教育」の科目は、他の科目に比べて学生の負担が大きいため、意欲のある学生に限られる。

スライド45



スライド46

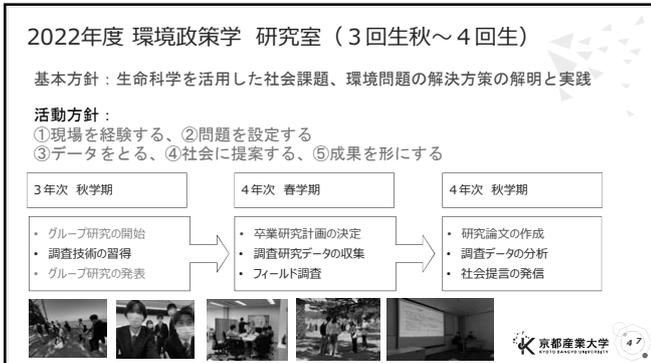
### 産学協働の教育の反応

- 実践現場を踏まえた専門科目
- 生命科学PBL1・2(課題解決型学習)
- 生命科学インターンシップ

✓ 受講者は、全般的に学びに対する意欲が高い  
 ✓ 産学協働の科目を通じた成長実感が得られやすい  
 ✓ 段階的に社会の課題解決への意識が高まる

産学協働の学びは、その後どのように活かされたか？

スライド47



スライド48



スライド49

### 2022年度の卒業研究

<卒業研究のテーマ>

- ・ クリーンインフラ商業施設「にぎわいの森」における緑地・自然空間が利用者にも及ぼす影響
- ・ 友ヶ島における漂着ごみに対する来島者の意識と負担感
- ・ ため池の維持管理に向けた普及啓発を行うべき対象の特徴の明示-大阪府岸和田市内のため池における経済価値評価研究-
- ・ 里山資源を活用した「商品」の魅力とは〜Instagramにおける情報発信の現状把握と、利用者の魅力の感じ方〜
- ・ 三重県いなべ市における自然環境と移住の関係性

①現場を経験する → フィールド調査、滞在型の研究  
 ②問題を設定する → 自らの問題設定  
 ③データをとる → 現場でのアンケート・ヒアリング  
 ④社会に提案する → 行政への提案、展示会への出展  
 ⑤成果を形にする → 卒業論文の執筆 ゲームの作成

やりたいことを社会で実現する力




スライド50

スライド非公開

スライド51

### 産学協働教育の構築に向けて

主体的な学びを促す試み

1. 地域・企業との連携体制の整備
2. 教員・学生間のコミュニケーション機会の構築
3. 段階的な学びのプロセスの設計



スライド52

### 1. 地域・企業との連携体制の整備

学部「研究・教育」と、大学の「キャリア支援」と「就職支援」  
 学生と実社会とのベストマッチングを目指す

学部の専門教育研究活動 × キャリア形成支援プログラム × 進路・就職支援プログラム

研究 × 教育 × サポート

生命科学部 × キャリア教育センター × 進路・就職支援センター

学部の研究活動、専門教育の中でのつながりから、学生にニーズにあったインターン・PBLの受入先を開拓し、授業と連携。

企業と大学との連携により、インターンシップやPBLなどの産学協働の教育科目を実施し、キャリア教育のノウハウを蓄積。

主に学生の就職活動を支援。納得のいく進路実現に向けて、学生一人ひとりに合ったアドバイスや情報提供。

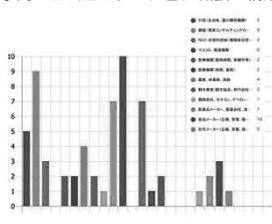
キャリア教育センターの支援、研究における企業等のつながり



スライド53

### 2. 教員、学生間のコミュニケーション機会の構築

具体的な学生ニーズの把握と学内のコミュニケーション機会の構築



学生のインターン希望の把握



学生間のチームビルディング



スライド54

### 3. 段階的な学びのプロセスの設計

サンドイッチのように積み重ねる  
 京都産業大学のキャリア形成支援教育

連続的な産学協働教育の展開

社会での実践 × 大学での学び

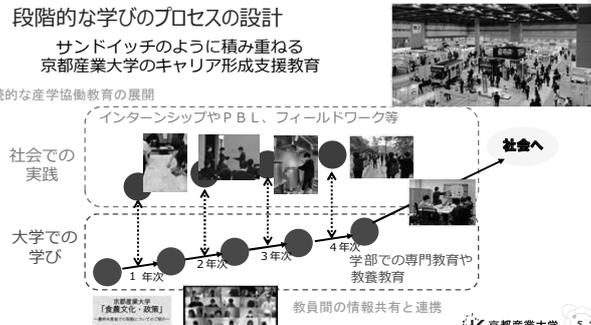
1年次 × 2年次 × 3年次 × 4年次

「食農文化・政策」 × 教員間の情報共有と連携

インターンシップやPBL、フィールドワーク等

学部での専門教育や教養教育

社会へ




スライド55

産学協働教育の構築に向けて

主体的な学びを促す試み

1. 地域・企業との連携体制の整備
  - ・ 大学「キャリア教育支援センター」からの支援
  - ・ 授業をきっかけとしたPBL・インターン科目のつながり
2. 教員・学生間のコミュニケーション機会の構築
  - ・ 学生の関心のあるテーマ・派遣先の提示と選択
  - ・ 対面・オンラインでコミュニケーション機会の提供
3. 段階的な学びのプロセスの設計
  - ・ 学生の「認知、理解、行動」をつなげる授業設計
  - ・ 連続的な産学協働教育の展開



スライド56

今後の展望

主体的な学びを通じた社会実装

1. 長期的なキャリア構築の支援
  - ・ 生命科学を活かした業界との連携の強化
  - ・ 卒業生との継続的なコミュニケーション
- 2.アントレプレナーシップ教育との連携
  - ・ 京都産業大学アントレプレナー育成プログラム
  - ・ 生命科学を活かす社会起業家の養成
3. 産学官連携による共同研究の展開
  - ・ 環境政策研究、グリーンインフラの機能評価
  - ・ 学生視点を活かした普及啓発や地域づくり



アントレプレナー育成プログラム



グリーンインフラ



スライド57



スライド1

ゆるやかにつなぐ  
多様な「まなび」の支援

千葉大学アカデミック・リンク・センター  
副センター長、准教授 國本千裕

スライド2

自己紹介

- 國本千裕
  - -2009：慶應義塾大学大学院（文学研究科 図書館・情報学専攻）  
→ 情報探索・利用行動
  - 2011-：千葉大学 アカデミック・リンク・センター 特任助教  
→ 情報利用定点観測プロジェクト + 学習環境のデザインと評価
  - 2014-：駿河台大学 メディア情報学部 専任講師
  - 2017-：千葉大学 アカデミック・リンク・センター 特任准教授  
→ 学習行動調査 + 学修・学習支援 + 大学院生支援
  - 2022-：千葉大学 アカデミック・リンク・センター 准教授・副センター長  
人文公共学府 教育・学修支援コース 准教授  
ALPS履修証明プログラム（教育・学修支援専門職養成プログラム）講師

スライド3

アカデミック・リンクとは？

教員・職員・学生  
協働で支援

- **コンセプト**
  - 生涯学び続ける基礎的な能力と知識活用能力を持つ「（自ら）考える学生」、深い専門性と俯瞰的思考力を備えた「知のプロフェッショナル」の育成を目標とした教育・学習のためのコンセプト
- **組織（アカデミック・リンク・センター／附属図書館）2011～**
  - 学士課程から大学院課程までを一貫して支える教育基盤構築に向けて、千葉大学における教育・学習支援機能の強化・拡充を担う組織
- **学習環境（物理空間+オンライン空間での資源提供）**
  - アカデミック・リンク（附属図書館西千葉本館 L/I/N/K棟）
  - アカデミック・リンク松戸（附属図書館松戸分館）

スライド4

学生中心・主体性の尊重 を徹底！

- 学生が「自ら選ぶ」「自ら決める」「自ら育つ」を促進
  - 空間・サービス設計において最重視
- 学生の行動を“観る”、学生の声を“聴く”
  - 事前・運営中・事後にかならず調査を実施（定点観測）
- 学生の「選択」を可能な限り尊重
  - コンセプトと異なる／想定外（バランスをとる）

スライド5

まなびに境界はない：学修<学習<研究

大学生にとっての「まなび」

- **学修…学士・修士・博士課程でのまなび**

大学教育の基本は「学修」としてはいる。これは、大学での学びの本質は、講義、演習、実習、実務の段階的習得とともに、結果のための審美的準備、事後の展開などの多様な学びの場を必要とする過程を伴った「習得」により形成されていくことによる。（平成24年8月「専修」2号33頁）
- **学習…生涯にわたるまなび（例：趣味の勉強）**
  1. 学びながら、学びながら勉強すること。
  2. 大学で、学ぶは趣味、学びの楽しみや楽しみ、狭くは、過去の経験をもとに新しい知識や技術を習得すること。
  3. 心算で、経験によって、過去の経験、行動的な経験をもとに新しい知識や技術を習得すること。（日本国語大特典）
- **研究…研究室でのまなび（例：学部後期～修了後）**

執筆を速く進めたい、詳しく調べたい、異見、異論、異見など生れたいとする。研究。（日本国語大特典）

教育制度・教育組織の都合で  
学生のまなびが「支援の狭間」に落ちてはならない！

スライド6

学習環境・行動調査（2011～14）

- 大学内外での「学生のニーズ・行動・効果」
  - 全学対象、学生の学習行動（マクロ）
  - 個人対象、学生の学習行動（ミクロ）
- 学習環境の変化に対する「学生の認識」
  - 新しい学習環境における学習行動の変化
- 学習空間と学習行動の「相互関係」
  - ICにおける「机・席・人の配置」
  - 図書館内の「通行量」
  - 図書館内の「動線」
- 学習リソースと学習行動の「相互関係」
  - 資料の「利用状況」をみる
  - 資料の「館内移動」をみる

全学対象のウェブ質問紙  
（学習状況・情報利用実態調査）

写真日記法+個人インタビュー  
（学生フォトボイス調査）

フォーカス・グループ・インタビュー

「定点カメラ」による観測

「赤外線センサー」による測定

「Beacon」による測定

「RFID」による測定

「ブックトラック」への返却量

スライド7

## 調査の一覧

- 情報利用定額制プロジェクト（～2014年、9つのプロジェクトで質的・量的調査）  
<https://www.sidseshare.net/chihirok/alc-20130327-44944866>  
<https://www.sidseshare.net/chihirok/alc-20141122-44944866>  
 →詳細な調査概要（年次報告書に掲載）はすべてこちらで公開  
[https://alc.chiba-u.jp/entry/org\\_disclosure.html](https://alc.chiba-u.jp/entry/org_disclosure.html)
- 10年継続している「定額制・量的調査」（高等教育センターと連携）
  - 千葉大学学習状況・情報利用関連調査  
<https://alc.chiba-u.jp/entry/survey.html>
- 学習支援・環境整備関連の論文・学会発表（国内・国外）
  - 竹本直樹ほか、本学図書館で導入している学習支援の取り組み、千葉大学アカデミック・リンクの事例報告、大学教育学会第48回大会、立教大学（2012-05-27）
  - Nahy Tani et al., Student behavior in library-based learning commons: the results of focus group interviews at Chiba University, ALIEP 2015 (The 6th Asia-Pacific Conference on Library & Information Education and Practice) Yokohama, Japan (2015-11-16/17)
  - 藤本千賀ほか、大学生は図書館の外で何を「学習」しているか？フロンティア調査の結果より、日本図書館協会年報、文部大学（2016-11-12-13）
  - 菅原伸太郎、図書館に訪れる学生の行動と行動目的に関する調査結果のフィードバック・グループ・インタビューによる探求的調査、大学図書館研究、2016、184巻、p.55-66
  - 加藤浩吉ほか、学業ニーズを把握する目的とした館内ワークショップ・実証学習アカデミック・リンクの取り組み、大学図書館研究、2017、185巻、p.85-90
  - Chiba Kunitomo et al., How Self-improvement Cycle has been Established in Constructing a Library-based Learning Commons: the Case of Collaboration among Staff, Faculty Members and Students in Chiba University's Academic Link Center, ALIEP 2017 (The 8th Asia-Pacific Conference on Library & Information Education and Practice) Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand. (2017-11-13/15)
  - Chiba Kunitomo et al., "Encourage VCIR Researcher": The Development of a Concept and Support Programs for Graduate Students in Chiba University, ALIEP 2018 (Asia-Pacific Conference of Library & Information Education and Practice) Kuala Lumpur, Malaysia (2018-11-14/17, 2018)
  - 菅原伸太郎、オンライン学習環境に関する学生のニーズ調査、大学図書館研究、2022、192巻、p.203-116

スライド8

## コンセプト

「知のプロフェッショナルの育成」  
大学院生支援

「考える学生の創造」  
学部学生支援

場所・資源・人 + 全学の支援をリンク!

### 組織体制

教職 協働

- 教員組織
  - センター長/図書館長 × 1
  - 学修支援担当副学長
  - 副センター長/准教授 × 2
  - 助教 × 2
  - 業務教員 × 1, 2
- 主な連携先
  - 高等教育センター
  - スマートラーニングセンター
  - 学生支援センター etc.
- 事務組織（附属図書館）
  - 部長/副センター長 × 1
  - 常勤職員 × 25
  - 非常勤職員 × 33
- 主な連携先
  - 学生部
  - 教育企画課
  - 学生支援課
  - 留学生課 etc.

スライド9

## 学習空間 → 学習環境

アカデミック・リンク  
附属図書館西千葉（改築+新設）

アカデミック・リンク  
附属図書館松戸分館（新設）

- 2011～ 空間整備：西千葉（全学部） 学部1・2年生、教養課程の学習支援
- 2015～ 空間整備：松戸（園芸学部） 学部3・4年生、専門課程の学習支援
- 2017～ オンライン重視：全キャンパス(研究室) 大学院生の支援

スライド10

## 学習のための環境整備

Academic Link Center  
以下FALC

スライド11

## 学習環境整備のコンセプト

- 学習環境
  - “学習者が利用可能な、ある学習活動を構成するリソースの総体”（中根、1986）
  - 学習空間 + 学習資源（コンテンツ）+ 学習者・支援者（教・職・学生）
- 学習環境デザイン
  - “どのような空間を用意するのか、どのような活動にしていけるのか、それらを通じてどのような共同体を作るかを考えること”（奥野、2013）

自ら考え、必要に応じて選び、互いに学び教えあう！  
（オフライン+オンライン）

スライド12

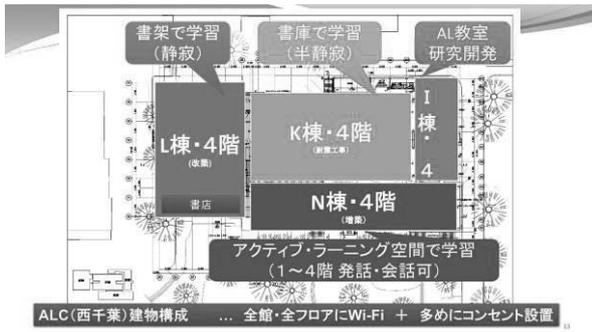
## コンセプト&部門

### 組織体制

教職 協働

- 教員組織
  - センター長/図書館長 × 1
  - 学修支援担当副学長
  - 副センター長/准教授 × 2
  - 助教 × 2
  - 業務教員 × 1, 2
- 主な連携先
  - 高等教育センター
  - スマートラーニングセンター
  - 学生支援センター etc.
- 事務組織（附属図書館）
  - 部長/副センター長 × 1
  - 常勤職員 × 25
  - 非常勤職員 × 33
- 主な連携先
  - 学生部
  - 教育企画課
  - 学生支援課
  - 留学生課 etc.

スライド13



スライド14

### L棟 (静寂)・K棟 (半静寂)

- 図書を活用して、ひとりで、集中して学ぶ

2023/02/25 2022年度後期開校直前フォーラムシンポジウム 14

スライド15

### N棟 3階 (発話可能)

- 図書・PCを併用しグループで学ぶ
- 幅150m+専用電源+LED電灯の個人学習席でひとりでまなぶ

2023/02/25 2022年度後期開校直前フォーラムシンポジウム 15

スライド16

### N棟 2階 (発話可能)

- 可動式ホワイトボード、多彩な形状のテーブル・椅子、仕切りのない空間

- 空間の使い方は学生が決める。
- まなびの内容に応じた資源を選択。
- ルール・禁止事項は最低限とする。

2023/02/25 2022年度後期開校直前フォーラムシンポジウム 16

スライド17

### N棟 4階 (グループ学習)

- 学習する姿を「見る・見られる」ことで刺激をうける

2023/02/25 2022年度後期開校直前フォーラムシンポジウム 17

どういふ学生・共同体を育てたいのか？

スライド18

### N棟 1階

- 学習成果を「発信する」ことで、互いに刺激をうける

2023/02/25 2022年度後期開校直前フォーラムシンポジウム 18

スライド19

### I棟 コンテンツ作成教室 (教育支援・研究開発)



2023/02/28 2022年度後援特別教育フォーラムシンポジウム 19

スライド20

### 自由度の高い教室 (実験的な授業・教育コンテンツの作成支援)



2023/02/28 2022年度後援特別教育フォーラムシンポジウム 20

スライド21

### 環境・サービス改善のためのワークショップ (3年に一度、ALC教・職員・学生スタッフ全員参加!)

結果を共有し、徹底的に議論し、提案(改善案)を作り、実行する

理念と方針 再確認! 調査・データをチェック! 課題の発見 情報共有

2017/年11月

【タスクフォースを結成し、改善実行】

1. 提案を募集、全1300項目 (~2017.12月)
2. 「改善プラン」審査作成 (~2018.1月)
3. 各課で共有し、ブラッシュアップ
4. プランを分類、優先度を付ける
5. 段階的(試行)に改善開始 (~2018.3月~)
6. 見直しが必要があれば追加調査 (~2019.1月~) [関係者全員参加予定]

提案プレゼン (提案共有) 物理・化学法専攻 (多様化促進)

2023/02/28 2022年度後援特別教育フォーラムシンポジウム 21

スライド22

### 学習支援の取り組み

学生、職員、教員、そのほか

…つないで支援する。



2023/02/28 2022年度後援特別教育フォーラムシンポジウム 22

スライド23

### ALSA-LS (院生) Academic Link Learning Support

理学部数学科「数学相談室」 + 学生部「学生相談室」連携

- 分野別(数学・物理・化学・文系)、領域別(園芸学部むけ)学習相談
- 各種セミナー(卒論・卒研・レポート・実験レポ)ハイブリッド配信



物理空間・オンライン(Meet)の両方でサポート  
<https://alc.chiba-u.jp/eiy/2020/04/22/01/akals.html#E2%9F%A5%9C%E2%9F%A5%9C%E2%9F%A5%9C>

2023/02/28 2022年度後援特別教育フォーラムシンポジウム 23

スライド24

### ALSA-TT (学部生・院生) Academic Link Student Assistant Technology Team

- PC・ソフト操作・プログラミング・メディア授業ツール相談・機材整備



物理空間・オンライン(ZOOM)の両方でサポート  
<https://alc.chiba-u.jp/eiy/2020/08/28/01/alkatt.html>

2023/02/28 2022年度後援特別教育フォーラムシンポジウム 24

スライド25

### コンテンツ制作室（技術職員）

- デジタルコンテンツ（教材・学習資料・動画）の作成支援
- ミニスタジオ提供、機材貸出、収録・編集・配信アドバイスを実施



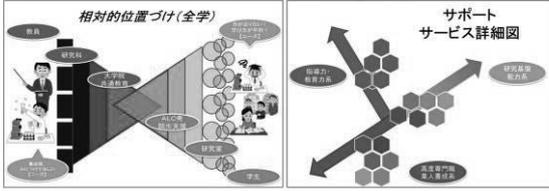
どういった支援がベストか？  
「自分で」より高度なコンテンツを、作成・配信できるようになる！

2020/02/25 2020年度第2回学務部フォーラムシンポジウム 25

スライド26

### 大学院生支援

・大学院生「個人の学習ニーズ」 + 「自ら選びとる」プログラム



相対的位置づけ(全学)

サポートサービス詳細図

2020/02/25 2020年度第2回学務部フォーラムシンポジウム 26

スライド27

- 15MinSession (図書館員・教員)
- はじめての英語論文セミナー (業者委託)



- ・ 大学院生向けの少人数・実習型・短時間セミナー
- ・ 研究に役立つスキル・リテラシー
- ・ 図書館員・教員の持つ「実践知」を学生に共有

- ・ 大学院生向け多人数・講義型・1時間セミナー
- ・ 全ての講義・質疑は「やさしい英語」で実施

前者は対面重視（実習のため）、後者はオンライン（講義のため）に変更  
<https://alc.chiba-u.jp/eyr/categories/first.html>

2020/02/25 2020年度第2回学務部フォーラムシンポジウム 27

スライド28

### Academic English Consultation (英文校閲のエキスパート)

- ・ 民間の英文校閲会社と連携
- ・ 学生・教・職員が作成した「英語の成果物」に関して執筆相談が可能
- ・ 応答は「英語のみ」、原稿を元に相談（双方向のやりとり）

物理空間・オンライン（ZOOM）の両方でサポート  
<https://alc.chiba-u.jp/eyr/2020/06/01/01/aec.html>

教育企画課の予算  
+ サービス設計・運営はALC



レファレンス (図書館員)

2020/02/25 2020年度第2回学務部フォーラムシンポジウム 28

スライド29

### デジタルスカラシップ

- ・ 千葉大学の本棚 (<https://www.ll.chiba-u.jp/cu-books/>)
- ・ 千葉大学の研究者（教職員、学生等）を新着順に紹介
- ・ 学術リソースコレクションC-ARC (<https://alc.chiba-u.jp/c-arc/>)
- ・ 図書館が電子化・ウェブ上で公開・提供するコンテンツを無料公開
- ・ 教育・学習リソースとして広く利用を促す目的
- ・ 1210あかりんアワー配信 (<https://alc.chiba-u.jp/entry/1210akarinn.html#fstream>)
- ・ 授業期間中の毎週火曜日（週1回）の12:10-12:40  
図書館N棟1階プレゼンテーションスペースで開催  
全学の教員・院生が研究活動について話し、関連図書も紹介（通算544回）

2020/02/25 2020年度第2回学務部フォーラムシンポジウム 29

スライド30

### オンライン学習支援

境界を超える。

学内  
学外  
オンライン  
オフライン  
部局内  
部局外



2020/02/25 2020年度第2回学務部フォーラムシンポジウム 30

スライド31

### オンライン学習支援ポータル

Encourage YOUR E-Learning

- メディア授業下における「学生のオンライン自己学習」を支援
  - 学生が遠隔で授業を受ける支援
  - 課程外でも「深く学ぶ」支援

⇒オンライン上でどのような学習支援が必要/可能か?

2023/10/25 2022年度産学連携推進フォーラムシンポジウム

スライド32

2023/10/25 2022年度産学連携推進フォーラムシンポジウム

スライド33

### オンライン学習・研究支援ポータルの設計思想

- ALC/図書館のミッション
  - 生涯学び続ける「基礎的な能力」と「知識活用能力」を持つ、考える学生の育成
- 授業に関わる学習 と 授業外の自主学習、双方を支援
  - 部局・学内外の区別なく支援を集約
  - 構築しながら修正、声を聴いて再修正!

いつ・いかなる状況下でも!

Encourage YOUR E-Learning! (学部生向け) & Encourage YOUR Research (院生向け)  
<https://alc.chiba-u.jp/eyeli/index.html>

2023/10/25 2022年度産学連携推進フォーラムシンポジウム

スライド34

### 2週間であつくれ! (2020.3/30-4/13) 録画しておこう!

電子化しておく?

- オンラインでの学習支援に備えていた
  - できることを整理・準備
  - ⇒ 学習支援は【提示】で始まる (ニーズ潜在)
- 何を「どうやるか」考えた
  - ① 学生に必要な/あるべき 支援を整理
  - ② 現状の枠組みで **できることは全てやる**
  - ③ 必要だができない → **枠組みを超える**
  - タスク・フォース式 (3名で開始)

レポートの書き方? セミナーの動画提供しよう!  
 ●●にも困る? リソースない? 他部署とXX 学外の▲▲

2023/10/25 2022年度産学連携推進フォーラムシンポジウム

スライド35

### 構築体制 (関係部署・人)

連携 国際未来教育基幹スマートオフィス

- ① ネットで相談・レポートを書く
  - オンライン相談 講座&テキスト
  - 学生スタッフ (院生)
  - 教育企画課 (連携して業務委託)
  - 附属図書館 ALC教員
  - 院生スタッフ推薦 広報協力
  - 園芸学研究科
- ② ネットで探す・調べる
  - 附属図書館
  - ALC教員
  - 情報提供・提案・助言等
  - 総合安全衛生管理機構
  - 学内教職員 (SULA支援至等)
- ③ 関心を深める・さらに学ぶ

2023/10/25 2022年度産学連携推進フォーラムシンポジウム

スライド36

### 学生はどう「学んでいる」か? 常に知る

学部生 大学院生

学習環境に変化なし

- ノートPC
- 授業資料 (印刷)
- 図書とルーズリーフ

学習環境整備済み

- 研究はPC
- 論文はタブレット
- 必要な図書は自宅

2023/10/25 2022年度産学連携推進フォーラムシンポジウム

スライド37

### オンライン学習、自宅でのように行っている？

**大学院生**

- ・研究室にデータがあってもリモート接続できる
- ・自宅から学校で往復2時間かかる。自由。(その分を自宅で研究できる)
- ・自宅の資料・辞典を参照できる。自前の本は自宅にあるので、いいところも...

・こもりがちになってしまう。議論しなきゃ。  
・先生や他分野の人にふらっと会う(雑談)が大事

↓

研究室ミーティング・勉強会をオンライン化

July 6, 2020

2020年度 第1回 千葉大学アカデミック・イノベーションセンター

17

スライド38

**学部生**

知識共有に難  
(講義と関連する)  
「ためになる」先生の話、  
他学生の答えも聞きたい  
あの課題どうやってる？

質問しやすい  
(見ず知らずの人に聞くなら)  
対面よりチャットの方がいい  
聞きたいことを文章に起こして  
確実に聞くことができる

質問にハードル  
こんなこと聞いていいのかな  
聞くにしても、できることは  
全部やってから行かなきゃ...

・ フォームだと気が楽  
(メールよりも)  
・ 何をどこまで相談して  
いいのかわからない

スライド39

### 何がどのように可能なか？ 支援詳細を明確に

資料の探し方・入手方法を相談する

相談できることからの例

調べ方・探し方

- ・ 「論文を探すとって、そもそも何をすればいいですか？」
- ・ 「英語の論文はどうやって探せばいいですか？」
- ・ 「専攻のために文献を集めていますが、テーマにあったものが内部により分野別学習相談など、より適切な相談先をご紹介し

テーマに関連した文献の調べ方・探し方

- ・ 「判別難読はどう探せばいいですか？」
- ・ 「国ごとのGDPの推移を調べたいです。何かいい調べ方ありませんか？」
- ・ 「翻訳器利用について調べています。参考になる種類の情報などありませんか？」

学生にとって必要な情報を見出しにする

回答までの待ち時間について

- ・ 相談はメールで随時受付。回答いたします。
- ・ 土・日・祝日に送っていただいた相談については、翌営業日以降の対応となります。
- ・ 相談の内容によっては、調査に時間がかかる場合がありますのでご了承ください。

× 回答期限  
○ 待ち時間

July 6, 2020

2020年度 第1回 千葉大学アカデミック・イノベーションセンター

18

スライド40

### 「コミュニケーション様式」が変わる

- ・ 学習支援@物理的な場
  - ・ 目前にいることを前提に、臨機応変な対応が可能
  - ・ 状況・相手に合わせその場で指示・提示(曖昧・非言語含)
- ・ 学習支援@オンライン
  - ・ あらゆるケースを事前に想定する必要
  - ・ 状況・相手に合うよう、言語化・文章化

例) 文献の探し方

- ・ 自分の目的だと「どの支援が適切なか」が判断できない
- ・ 内容的にどういふものを調べたいときは論文で、  
どういふとき、電子ブックで、古い文献で...分岐が分からない

スライド41

### どのような学習支援が「今」必要/可能か？

- ・ 【何を】オンラインで支援するか？
  - ・ 「学びの枠組み」のどの部分を担うのか？
  - ・ 「するべき支援」はできているか？(「できる支援」だけでは×)
    - ・ 必要なのに役に立たない
- ・ 【誰と】支援するか？
  - ・ 単独では限界あり(まずは日頃助け合っている部署や人)
- ・ 【どのように】支援するか？
  - ・ まずは既にある(準備済)ものをオンラインで(要修正!!)

⇒オンラインだからその枠組みを超える+ないもの加えることも可能!

July 6, 2020

2020年度 第1回 千葉大学アカデミック・イノベーションセンター

11

スライド42

### さいごに ~まなびの支援のコツ?~

- ・ 戦略性&コンセプトを明確にする
  - ・ 全学の教育ミッションを理解したうえで、コンセプトを打ち出す
- ・ チームリーダーが育つ環境(試行・挑戦「やりなはれ」)をつくる
  - ・ 学生・職員・教員それぞれに必要
- ・ 学生の行動・声を聴く「仕組み」&「能力・スキル」の習得
  - ・ 意識するだけではどうにもならない
- ・ 協力を厭わない + 軽やかに越境する
  - ・ 連携の本質=困りごと・面倒ごとのGive&Take(善意の先払い)
  - × 「担当が」「部局が」「所掌が」→ 学生のために越える覚悟はあるか？
- ・ 躊躇しない・走りながら考える・柔軟に変化する(ゆるやかに)

July 6, 2020

2020年度 第2回 総合教育推進フェーズⅡシンポジウム

12

### ALPS履修証明プログラム (教育・学修支援専門職養成プログラム)

• <https://alc.chiba-u.jp/ALPS/>



- オンライン講義 + 学習共同体
- PBLプロジェクト実習あり
- 大学院と連携している
- 【次年度以降】より受講しやすい構成に(予定)

2023/02/28 2022年度実習科目履修証明プログラムオンラインセッション

スライド1

第28回FDフォーラム  
2023.2.25 (On line)

## 学習から学問へ

大学における教育とは

**永田 和宏**

JT生命誌研究館館長  
京都大学名誉教授・京都産業大学名誉教授

スライド2

## 初等中等教育では

- ・ よくできるとは？
- ・ 問いに正しく答えられる
- ・ 正解がある

正解は必ず1つあって、しかも1つしかない  
答のない問題はない

- ・ 先生が教えることは、正しいことである

「学修」 学んで修める  
「学習」 学んで習う

スライド3

## 大学は高校の連続でいいのか

### 高大連携は必要なのか

京都大学入学 1966年(昭和41年)  
第17代総長 奥田東



京都大学は、  
諸君に何も教えません

「如何に、正しく答えられるか」から  
「如何に、問うことができるか」へ (なぜ、本当か?)

学習から学問へ 学問: 学んで、問いなおす

学びて思はざれば即ち罔し、  
思ひて学ばざれば即ち殆し 「為政第二」

スライド4

## 大学における教育・研究

- ・ 答が1つである問題は社会には存在しないことを教える
- ・ 教科書に書いてあることは講義する必要はない
- ・ 「何がまだわかっていないか」を教える
- ・ 知識が学問につながるためには、驚きと感動が必要

スライド5

私たちの身体的全細胞 60兆個 ⇨ 37兆個

An estimation of the number of cells in the human body  
*Ann. Hum. Biol.* 40(6):463-471, 2013  
Eva Bianconi<sup>1</sup>, Allison Piovesan, Federica Facchin, Alina Berardi, Raffaella Casadei, Flavia Frabetti, Lorianza Vitalis, Maria Chiara Pelleri, Simone Tassari, Francesco Piva, Soledad Perez-Amodio, Pierluigi Strippoli, Silvia Casadei

1. 根拠不明の定説を疑え
2. 何の役にも立たない数字・情報

科学の歴史を通して、後に人類にとって有益だと判明する真に重大な発見のほとんどは、有用性を追う人々ではなく、単に自らの好奇心を満たそうとした人々によってなされた。  
エイブラハム・フレクスナー 「役に立たない」科学が役に立つ」

3. もし本当の数があるなら、  
それを知りたいという根源的な欲求

**サイエンス、研究、学問の根拠**

スライド6

## 知ること

- ・ <知>は無条件に与えられるべきものか？

啓発 「子曰く 憤(ふん)せずんば警(けい)せず。  
排(ひ)せずんば発せず。一隅を挙ぐるに 三隅を以って  
反(かへ)らざれば 則ち復たせざるなり」 (述而第七)

- ・ 問いを問いのまま抱え込んでいる時間の大切さ

安易に答えを求めない、与えない

- ・ <知る>ということ

<知る>とは、<知らなかった自分>を知ること

**知へのリスペクト(敬意)**

スライド7

**いい教育とは何か？**  
**これは講義、授業のテクニックの問題か？**  
**教師自身に学生を引き寄せる魅力があるか？**



岡潔 1901(明治34)–1978(昭和53)  
 多変数複素関数論



森毅 1928-2010  
 関数空間の位相的研究

スライド8

**いい教師とは何か？**

自分には本当に面白いと思っていることがあるか？  
 自分の興味に打ち込んでいる人間こそが魅力的

自分の仕事と同じ様に人の仕事を面白がれるか  
 一緒に面白がって楽しむことが相手と自分の双方を育てる

専門以外のものにどれだけ興味を持てるか  
 私が会ったすぐれた科学者は例外なく面白かった

自分の物差しを離れて、対人関係を確立できるか  
 評価という枠を離れて、人に接するむずかしさ

**まず魅力的な人間でありたい！**

スライド9



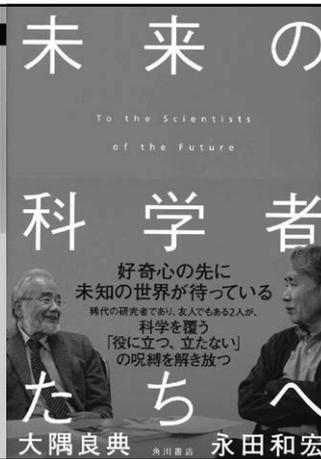
新潮新書  
 Hevity is the soul of wit,  
 and indolence the body and secret founder.

永田和宏  
 NAGATA Kazuhiko

**知の体力**

全ての学びたい人に  
 細胞生物学者・歌人  
 の著者が伝える  
**自分自身の鍛え方**

誰も「知力」は  
 貸してくれない



未来の  
 To the Scientists  
 of the Future

科学者  
 好奇心の先に  
 未知の世界が待っている  
 時代の研究者であり、友人でもある2人が、  
 科学を覆う  
 「役に立つ、立たない」  
 の呪縛を解き放つ

たちへ

大隅良典 永田和宏



## 第1分科会

あなたの大学の学習環境を教えてください！

### 報告者

澤 宏司 同志社大学 学習支援・教育開発センター 准教授

千葉 美保子 甲南大学 全学教育推進機構 全学共通教育センター 准教授

岩崎 千晶 関西大学 教育推進部 教授

### コーディネーター

多田 泰紘 京都橘大学 経営学部 専任講師



## 〈第1分科会〉

# あなたの大学の学習環境を教えてください！

コーディネーター

京都橘大学 経営学部 専任講師 多田 泰紘

### ○本分科会のねらい

近年、大学において正課外での学びや、正課と正課外を結びつける学習の場と機会の提供が進んでいる。一方で、大学教育の潮流は激しさを増している。これまでの18歳人口の減少という風潮に加えて、コロナ渦による乱流が生じ、水先は一層見えにくくなっている。このような状況の変化と多様な学生に対応するうえで、大学教育を支える学習環境の議論はますます重要となっている。

そこで、第1分科会では「大学の学習環境」をテーマとし、3名の先生による事例報告と参加者からの質疑応答を通して、学習環境を設置・運営・改善していく手法や考え方について知見の共有と議論を行った。

ここで言う「学習環境」とは、大学生の学習を促進する要素のひとつであり、多くの場合、大学が提供する資源やコミュニティのことを指す。学習環境は図1に示した物理的な学習環境と社会的な学習環境に類別される(山内, 2020)が、これらは互いに連携し、相互作用を及ぼしながら学生の学びを支えている。

このうち、物理的な学習環境に含まれる「コモンズ」、社会的な学習環境に含まれる「学生スタッフ」と「学習支援」の実際の大学における取り組み事例を、3名の先生にご発表いただいた。

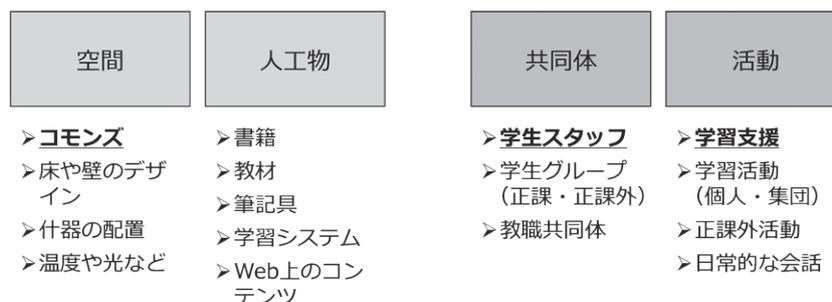


図1. 学習環境の類別  
太字は本分科会での事例共有のテーマを示す。山内(2020)を参考に加筆した。

### ○報告の概要

最初に同志社大学でラーニング・コモンズの運営に携わっておられる澤宏司先生より、「学習空間とその接点」というタイトルでご発表いただいた。同志社大学はラーニング・コモンズの老舗と言える大学で、これまで学習支援に関するさまざまな取り組みをされてきた。今出川キャンパスのコモンズが有名であるが、近年、理系や文理融合型の学部が設置されている京田辺キャンパスにもラーニング・コモンズが誕生している。本発表では、この2つのラーニング・コモンズでの取組についてご発表いただいた。

次に甲南大学の学生スタッフ「ラーニング・アシスタント」制度の運営に携わっておられる千葉美保子先生より、「正課・正課外で学びを支援するラーニング・アシスタントの取り組み」というタイトルでご発表いただいた。甲南大学のラーニング・アシスタントは、授業内での受講生のサポートから、授業外での学習支援まで、広く学びを支える共同体のひとつである。今回はそのラーニング・アシスタントの取り組みについてご講演いただいた。なお、今回は千葉先生だけでなく、現役のラーニング・アシスタントにもご参加いただき、学生からみた学習環境について意見共有がなされた。

最後にご登壇いただいたのは、関西大学の学習支援、特にアカデミックライティング(レポートや卒業論文などの執筆)の学習支援に携わっておられ岩崎千晶先生より、「自律的な書き手を育むためのライティングセンターにおける10年の歩み」というタイトルでご発表いただいた。関西大学のライティングセンター「ライティングラボ」では、学部や学年を問わず、授業外でアカデミックライティングの質問・相談に対応している。この質問・相談に当たるのは教員だけではなく、大学院生やPDの「チューター」が含まれる。本発表ではライティングラボでの学習支援の取り組みに加えて、「チューター」制度の運用についても知見をご共有いただいた。

## ○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

3名の先生による事例報告を受けて、参加者から多くの建設的な質問が寄せられた。ここでは主要な質問とその回答について取り上げる。

Q1. 図書館との連携はどのようになっているか？

A1. 大学により内容や頻度は異なるが、図書館と連携したイベントの開催や、図書館での学生スタッフの活動などがある。

Q2. 障がいを抱えた学生の対応について事例があれば教えてほしい。

A2. 障がい学生をサポートする部局との連携体制の構築や、スタッフの研修テーマに「障がい学生支援」を取り入れている。

Q3. (澤先生への質問) 学習支援 LA が対応できる内容と相談内容のマッチングはどのようにされているか？

A3. LA はシフト制で学習相談に対応しており、LA の所属 (専門分野) シフト表に記載し、公開している。ただ、「一方向的な指導にしない・一緒に考える」という意味では、少し専門分野の外にある相談に対応することも価値があると考ええる。

Q4. (千葉先生および甲南大学 LA への質問) ライティングサポートの内容や実際の対応はどのようになっているか？

A4. 甲南大学 LA のライティングサポートは、特定の授業の課題と結びついている (寄せられる相談は同じ課題のものになる)。ただし相談内容は個人で異なるため、LA は相談学生の疑問や課題を聞き取って対応する。稀に、課題の意図を LA も把握しづらい時があり、そのような場合は担当教員へ質問するよう促している。

Q5. (岩崎先生への質問) ライティング支援を受けた学生のレポート等の評価はどのように変わったか？

A5. 関西大学ライティングラボでは、自立的な書き手の育成に注力しており、目前の評価を上げるための指導や添削はしていない。ただ、自身の授業でライティングラボの支援を受けた学生の事前事後のレポートを見ると、学生のライティング力の向上が実感できる。

### 【参考文献】

山内祐平 (2020) 『学習環境のイノベーション』 東京大学出版会.

スライド1

2023年2月23日 (木・祝) 9:30-11:30  
 大学コンソーシアム京都 第28回FDフォーラム「挑×選」

**第1分科会**  
**あなたの大学の学習環境を教えてください！**

コーディネーター  
**多田 泰紘**  
 tada-y@tachibana-u.ac.jp



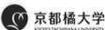
スライド2

**自己紹介**

**多田泰紘 ただ やすひろ**



- **所属**  
 京都橘大学 経営学部  
 教育開発・学習支援室
- **専門**  
 大学教育、学習支援、学習評価
- **教育活動**  
 アカデミックスキル、アカデミックライティング、  
 ラーニングコモンズ運営、ライティング支援、LAの研修



スライド3

**プログラム**

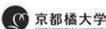
9:32 趣旨説明  
 京都橘大学 経営学部 専任講師 多田 泰紘 氏

9:40 講演1.「学習空間とその接点」  
 同志社大学 学習支援・教育開発センター 准教授 澤 宏司 氏

10:05 講演2.「正課・正課外で学びを支援するラーニング・アシスタントの取り組み」  
 甲南大学 全学教育推進機構 全学共通教育センター  
 准教授 千葉 美保子 氏

10:30 講演3.「自律的な書き手を育てためのライティングセンターにおける10年の歩み」  
 関西大学 教育推進部 教授 岩崎 千晶 氏

10:55 休憩・質問受付  
 11:00 質疑応答・全体討論  
 11:30 分科会終了



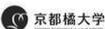
スライド4

**大学の学習環境**

大学生の学習（学修）を促進する要素のひとつであり、多くの場合大学が提供する資源やコミュニティのこと。  
 学習環境は、物理的な学習環境と社会的な学習環境に類別される<sup>1)</sup>。\*それぞれが単独で効果を発揮するわけではない。

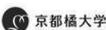
空間	人工物	共同体	活動
> コモンズ > 床や壁のデザイン > 什器の配置 > 温度や光など	> 書籍 > 教材 > 筆記具 > 学習システム > Web上のコンテンツ	> 学生スタッフ > 学生グループ（正課・正課外） > 教職共同体	> 学習支援 > 学習活動（個人・集団） > 正課外活動 > 日常的な会話

<sup>1)</sup>山内祐平 (2020) 『学習環境のイノベーション』



スライド5

事例を共有し、議論を深めます。  
 合い言葉は  
**「あなたの大学の学習環境を教えてください！」**



スライド1

# 学習空間とその接点

澤 宏司  
同志社大学  
学習支援・教育開発センター  
2023/02/23 FDフォーラム

スライド2

## 概要

- ・ 学習空間
  - ・ 人員体制
  - ・ 機能
  - ・ 空間の変容
- ・ その接点
  - ・ 広義の空間

スライド3

## 2つのラーニング・コモンス(LC)



今出川キャンパス  
文系学部が主  
2,550㎡ 2013年～



京田辺キャンパス  
理系学部が主  
626㎡ 2018年～

スライド4

## 人員体制

- ・ 所管部課：学習支援・教育開発センター
- ・ 管理・運営体制：
  - ・ センター所長 専任教員3名 特定業務職員2名 事務室5名
  - ・ 学習支援コーディネーター 受付など
  - ・ ラーニング・アシスタント(LA)
    - ・ 今出川16名
    - ・ 京田辺17名



スライド5

## 機能

- ・ 学習スペース
  - ・ 個人
  - ・ グループ
- ・ イベントスペース
- ・ 学習相談：2,523件  
\*22/04/01-23/02/22 2校地+オンライン
- ・ セミナーやイベント



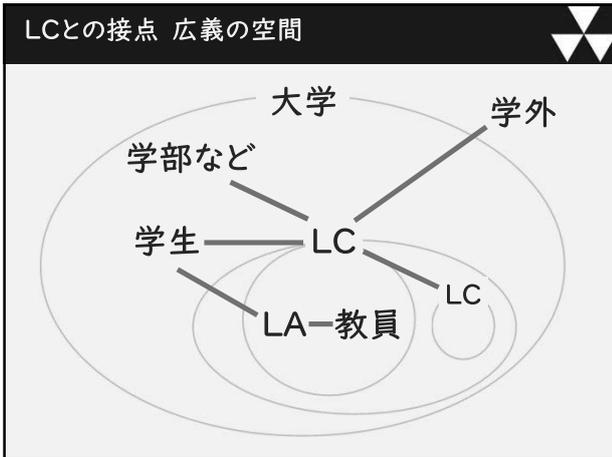

スライド6

## 空間の変容

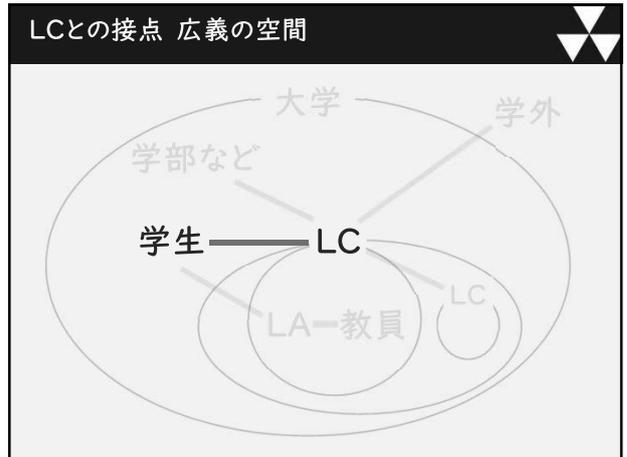
- ・ 学習スペース
  - ・ 個人 ☀️
  - ・ グループ 🌿→🌳→☀️?
  - ・ 「図書館と何が違うの?」
- ・ オンライン化
  - ・ 今出川、京田辺につぐ  
3番目の空間を目指す



スライド7



スライド8



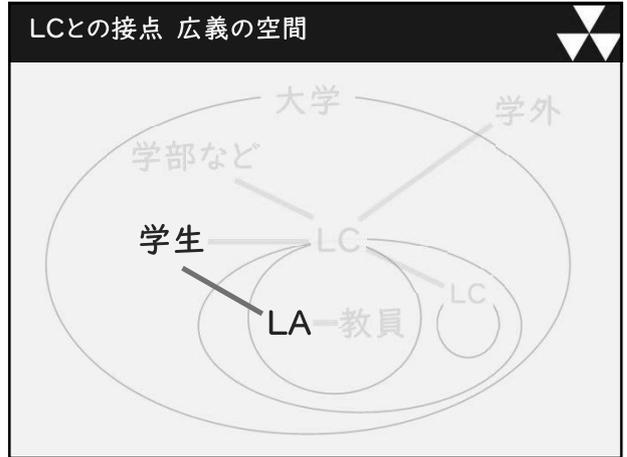
スライド9

学生-LC

- 物理的な導線や距離が重要
  - 出張学習相談「おいでやす」
  - 場所の工夫「ASA Mini」
  - 室外モニタの活用
- 「自習⇄相談」の循環(後述)

Two photographs are included: one showing students at a consultation desk and another showing an outdoor monitor displaying information.

スライド10



スライド11

学生-LA

- イベント
  - コモンズランチ会
  - 日本語ライティングサポート
  - ますびた!
  - アイデアの交流会
- 広報誌  
COMMONS PRESS

Two photographs are included: one showing a student event with a presentation screen and another showing the cover of the 'COMMONS PRESS' magazine.

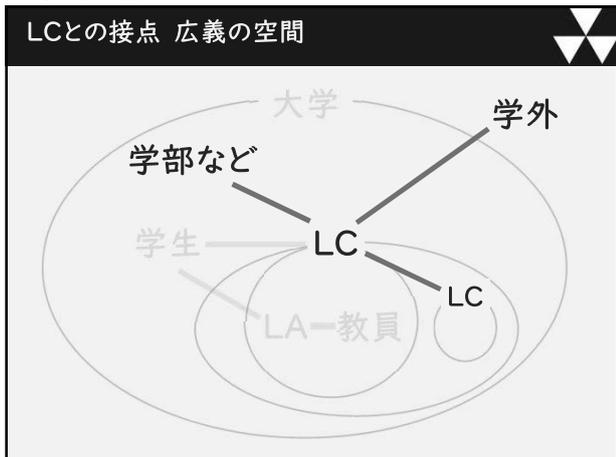
スライド12

学生-LA

- 機器
  - 体温測定システム
  - 指向性スピーカー
  - ラコモみくじ
  - 「実験場だと思って」
- ふせん相談
- ちょっと年長のロールモデル
- 「先生ではない」(後述)

Two photographs are included: one showing a student event with a presentation screen and another showing a consultation board with various notices.

スライド13



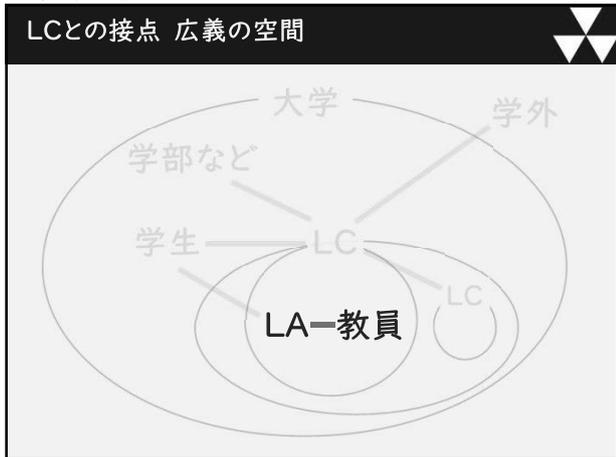
スライド14

LC-LC LC-ほか

- ・ LC-LC
  - ・ おうち De LC ポータル
  - ・ LA-LAの交流
  - ・ 文理内から文理間へ
- ・ LC-ほか
  - ・ 学部など連携
  - ・ 京セラ×同志社

<https://www.doshisha.ac.jp/news/2022/1207/news-detail-9249.html>

スライド15



スライド16

LA-教員

- ・ LAの育成もミッション
- ・ 「先生ではない」
- ・ プレFD

スライド17

LA-教員

- ・ LAの育成もミッション
- ・ 「先生ではない」
- ・ プレFD

アカデミックサポートエリアにおける  
学習相談の多角的比較

スライド18

雑感 お気軽に→澤 (kosawa@mail.doshisha.ac.jp)

- ・ 施設+α キラキラ仕器+α
- ・ とにかくやってみて、執着し過ぎない
- ・ LCの役割は確定していない
  - 機能が変容しうる
- ・ オンライン化も同様
  - ・ 対応→役割の変化
- ・ 講義と自習のあいだ
  - ・ 学内サードプレイス
  - ・ 競合はカフェ、YouTube、...
  - ・ 「自習⇔相談」の循環
- ・ 悲壮感を消す

スライド1

2023年2月23日  
大学コンソーシアム京都FDフォーラム

見つける、きみのなかの無限大。  
KONAN INFINITY

第1分科会「あなたの大学の学習環境を教えてください！」

**講演2「正課・正課外で学びを支援する  
ラーニング・アシスタントの取り組み」**

甲南大学 全学教育推進機構  
全学共通教育センター／教育学習支援センター  
千葉美保子

スライド2

見つける、きみのなかの無限大。  
KONAN INFINITY

**報告の流れ**

**本報告では学習環境のキーワードのうち、「ラーニング・アシスタント」における甲南大学の事例を紹介**

1. 甲南大学の概要紹介
2. ラーニング・アシスタント (LA) 制度の概要
3. 正課におけるLAの取り組み (導入事例)
4. 正課外の学びを支援するLAの試み (LSチームの活動)
5. LAからの視点

2

第1分科会

スライド3

見つける、きみのなかの無限大。  
KONAN INFINITY

**1. 甲南大学の概要紹介**

- ・ 開校 1951年 (甲南学園1919年創立)
- ・ 8学部14学科
- ・ 学部生8,667人 (2022年度)
- ・ 岡本、西宮、ポートアイランドの3キャンパス
- ・ 建学の精神「人格の修養と健康の増進を重んじ、個性を尊重して各人の天賦の特性を伸張させる」

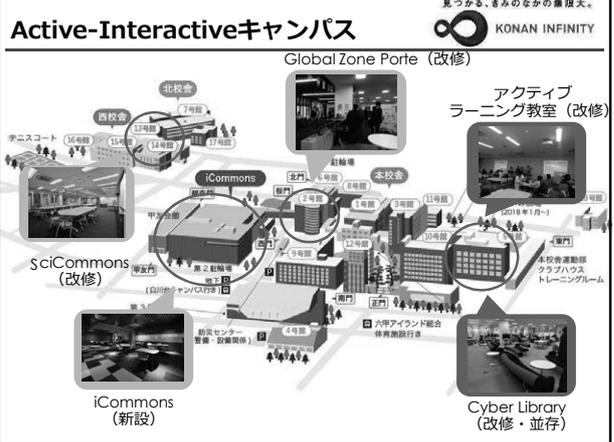
学生が学生同士、教職員、卒業生・地域住民と融合できる「Active-Interactiveキャンパス」を戦略に掲げ、2015年度より段階的に施設・整備を充実



スライド4

見つける、きみのなかの無限大。  
KONAN INFINITY

**Active-Interactiveキャンパス**



Global Zone Porte (改修)  
アクティブラーニング教室 (改修)  
SciCommons (改修)  
iCommons (新設)  
Cyber Library (改修・並存)

スライド5

無限大の可能性を引き出す  
甲南大学の人物教育

人物教育のフレームワーク



全学共通教育 (P-097)  
専門教育 (P-023)  
正課外教育 (P-101)

スライド6

見つける、きみのなかの無限大。  
KONAN INFINITY

**2. ラーニング・アシスタント制度の概要**

- **ラーニング・アシスタント (LA) 制度**
- ・ 2015年度よりアクティブラーニング型授業の活性化を目指して制度を導入
- ・ “Teaching is Learning”をモットーに掲げる
- ・ 毎年のべ100名以上がLAとして活動



6

スライド7

見つける、きみのなかの無限大。 KONAN INFINITY

## 2. ラーニング・アシスタント制度の概要

- **運営主体は教育学習支援センター**
  - ・ 2015年4月発足 (情報教育研究センター(教育系IT部門)より改組)
  - ・ 専任職員 3名(兼任1名)、嘱託1名、派遣社員1名とラーニング commons のカウンター業務3名で業務を遂行(教員は兼任)
  - ・ FD、IR、教育学習支援(LA制度)、ラーニング commons の運営が中心業務



7

スライド8

見つける、きみのなかの無限大。 KONAN INFINITY

## 2. ラーニング・アシスタント制度の概要

- ・ 学期2回の研修、報告書を通じた振り返り
- ・ 課外活動としてのLSチームも組織化
- **導入研修(ファシリテーション研修)**
  - LA希望者に対し、各学期はじめに教育学習支援センターの専任教職員および外部講師によるファシリテーションに関する研修を実施
  - ※2021年度よりLA企画として外部講師とともにLAが研修を企画、実施
- **振り返り研修**
  - 学期途中に実際にLA活動を行ってみたいの振り返りや先輩LAへの相談の機会を設け、学期後半の活動につなげる研修を実施
- **ファシリテーション報告書**
  - 毎授業ごとにファシリテーション報告書の作成を通じて振り返りを促し、次の活動に活かすように支援
- **LSチームでの課外活動**
  - 学びに関するさまざまな班に分かれ活動し、教職員も支援

8

スライド9

見つける、きみのなかの無限大。 KONAN INFINITY

## 2. ラーニング・アシスタント制度の概要

- **授業内外を含めたA～Dの4種類のLA制度**

種別	LAの業務内容	活動
A	授業科目において、グループワーク等のファシリテーション、質疑への対応等	授業内
B	実験・実習科目において、技術や知識面での支援、実験や実習による学習が効果的になるためのアドバイス等	授業内
C	授業で課される課題レポート等について、基本的な文章の書き方や構成についてのアドバイス等	授業外
D	授業担当教員によるオフィスアワーまたは学習支援デスクにおいて、授業内容を基本としつつも大学での学び全般についてのアドバイス等	授業外

※本報告では種別Aと種別Cの事例を紹介

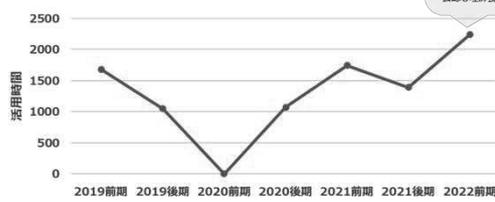
9

スライド10

見つける、きみのなかの無限大。 KONAN INFINITY

## 2. ラーニング・アシスタント制度の概要

- **コロナ禍を除き、LA活用授業は年々増加**



※2022年度活用部門は理工学部、経済学部、知能情報学部、マネジメント創造学部、フロンティアサイエンス学部、全学共通教育センター、公認心理師養成センター

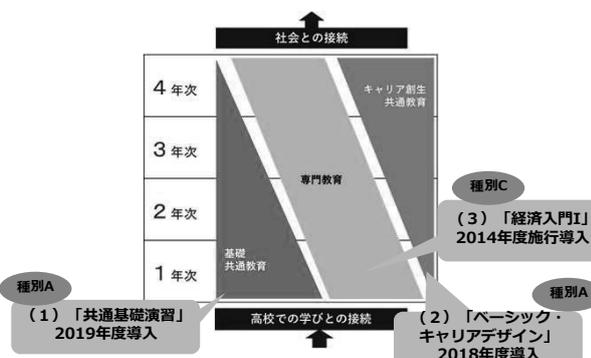
※採択科目の増加にとともに、LAの兼任も拡大

10

スライド11

見つける、きみのなかの無限大。 KONAN INFINITY

## 3. 正課におけるLAの取り組み(事例)



種別A (1) 「共通基礎演習」 2019年度導入

種別C (3) 「経済入門I」 2014年度施行導入

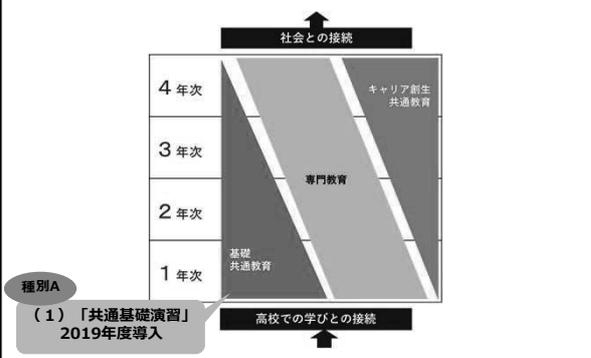
種別A (2) 「ベーシック・キャリアデザイン」 2018年度導入

11

スライド12

見つける、きみのなかの無限大。 KONAN INFINITY

## 3. 正課におけるLAの取り組み(事例)



種別A (1) 「共通基礎演習」 2019年度導入

12

スライド13

見つける、きみのなかの無限大。  
KONAN INFINITY

**事例（1）：「共通基礎演習」**

**科目：**初年次選択必修科目  
**対象：**全学部  
**開講：**1年次前期・後期（2単位）  
**授業形態：**講義＋グループワークのAL型授業  
**開講件数：**前期は月、火、水、金、後期は月、金  
 20名×42クラス開講、約800名が受講  
 計15名の担当教員、全学教育推進機構事務局と連携

**授業内容：**

- ・合同授業によるアカデミックスキル（ノートテイキング、プレゼンテーション、アカデミックライティング）の獲得、自校教育
- ・授業3回分を用いたチームビルディング研修
- ・授業6回分を用いたプロジェクト学習を通じ、学部教育の専門性を協働を通して学習するために必要とされるスキル（チームビルディング・自己探求・コミュニケーション能力・課題発見・問題解決・情報発信力）の習得

13

スライド14

見つける、きみのなかの無限大。  
KONAN INFINITY

**特徴①自己探求プログラム**

**授業3回分を用いたチームビルディング研修を実施**

- ・「自己開示」「他者への理解」「協働の重要性」を認識できるよう設計、プロジェクト学習に繋げる
- ・アイスブレイク・教育ゲーム等を担当教員・ラーニングアシスタントのチームで実施

14

スライド15

見つける、きみのなかの無限大。  
KONAN INFINITY

**特徴②プロジェクト学習**

- －4～5人の学部横断グループでのプロジェクト
- －2～3クラス（40～60名）をチームティーチングで進行
- －大学の部署等との連携による学内プロジェクトがメイン
- －成果発表会において評価表によるピア評価を実施

**テーマ例：**

- 「大学の魅力を高めるための提案」
- 「オープンキャンパスの企画を提案する」
- －グループワーク、調査作成等を経て提案
- －授業外に企画書、プレゼンテーション作成動画の視聴

<b>1週目</b>	<b>2週目</b>	<b>3～5週目</b>	<b>6週目</b>	<b>7週目</b>	<b>8週目</b>
アイスブレイク、授業形態の決定、テーマ検討	テーマ検討、企画内容の検討	企画書を基にスライドの作成、企画に必要な調査の実施	発表リハーサル	成果発表会（学内）、ピア評価、教員講評	成果発表会（公開）、ピア評価、教員講評

15

スライド16

**プロジェクト学習の様子**



<https://www.konan-u.ac.jp/education/celas/> 16

スライド17

**発表会の様子**



<https://ch.konan-u.ac.jp/information/category-3/1598.html>

スライド18

見つける、きみのなかの無限大。  
KONAN INFINITY

**「共通基礎演習」でのLA活動**

**導入背景、目的：**

- －2019年度よりLA制度を本格的に活用開始
- －導入教育における縦と横の繋がりを支援する（受講生同士、受講生と先輩同士の繋がりを支援する）

**具体的なLA活動：**

- －グループワークでのファシリテーション支援
- －プレゼンテーションの際のアドバイス、スライド作成支援、発表へのフィードバック
- －（2020-21年度）Zoom上のブレイクアウトルームを巡回し、グループワークを支援

18

スライド19

見つける、きみのなかの無限大。 KONAN INFINITY

### 3. 正課におけるLAの取り組み（事例）

（2）「ベーシック・キャリアデザイン」2018年度導入

19

スライド20

見つける、きみのなかの無限大。 KONAN INFINITY

### 事例（2）：「ベーシック・キャリアデザイン」

**科目：**初年次キャリア教育科目  
**対象：**6学部（各学部ごとに開講）  
**開講：**1年次前期・後期（2単位）  
**授業形態：**講義+グループワークのAL型授業  
**開講件数：**2022年度は前期・後期計12クラス開講  
 報告者の担当科目は40～120名程度  
**授業内容（抜粋）：**

- 自己分析や価値観に関する講義+ワーク
- グループによるミニプロジェクト（PBL）
- ゲスト講師による講演会&ディスカッション  
 （OB・OG、地域で活躍する社会人によるライフストーリーの共有）
- 課題図書を通じた間接体験

20

スライド21

見つける、きみのなかの無限大。 KONAN INFINITY

### 「ベーシック・キャリアデザイン」でのLA活動

**導入背景、目的：**

- 2018年度よりLA制度を本格的に活用開始
- グループワークでのファシリテーション支援
- ロールモデルとしてのLAの存在

**具体的なLA活動：**

- グループワークでのファシリテーション支援
- プレゼンテーションの際のアドバイス、スライド作成支援、発表へのフィードバック
- （2020-21年度）Zoom上のブレイクアウトルームを巡回し、グループワークを支援
- 「LA企画」として、LA自身が受講生へ向けたグループワークの企画、実施

21

スライド22

見つける、きみのなかの無限大。 KONAN INFINITY

### 3. 正課におけるLAの取り組み（事例）

（3）「経済入門I」2014年度施行導入

22

スライド23

見つける、きみのなかの無限大。 KONAN INFINITY

### 事例（3）：「経済入門I」

**科目：**経済学部必修科目  
**対象：**経済学部  
**開講：**1年次前期（4単位）、約400名  
**授業形態：**講義クラス+演習クラスの2部構成  
 受講生を3クラスに分け、4月下旬、5月末、6月末に授業外でライティング・サポートを実施

**具体的なLA活動：**

- 授業課題(800字~1200字程度のレポート)に対するアドバイス、1人20分
- 授業時間外にサイバーライブラリ、アクティブラーニング教室、テレビ会議システムZoomにて実施

23

スライド24



見つける、きみのなかの無限大。 KONAN INFINITY

### 3. 正課におけるLAの取り組み（事例）

- **LA導入の効果（2021年度）**
- ◆この授業を通じて、知識が深まった、能力が高まったと感じますか？

- ◆総合的に判断して、この授業は満足できるものでしたか？

※記載数値は、選択数を下記の通り点数付けし、平均化したもの  
5. そう思う 4. どちらかといえばそう思う 3. どちらとも思えない 2. あまりうろ覚え 1. そうは思わない

授業改善アンケート対象LA活用科目数: 21科目  
ライティングサポート (WS) 活用科目を除く 25

見つける、きみのなかの無限大。 KONAN INFINITY

### 4. 正課外の学びを支援するLAの試み（LSチームの活動）

- **KONAN サーティフィケート制度**
- 授業では評価しきれない、学生の個性ある挑戦を大学が評価・認定する制度
- 5つのサーティフィケートが展開 ※2023年度新分野創設予定
- 累計エントリー1,927名、挑戦中の在学生1,069名 (2022年2月時点)

(<https://www.konan-u.ac.jp/konancertificate/>) 26

見つける、きみのなかの無限大。 KONAN INFINITY

### 4. 正課外の学びを支援するLAの試み（LSチームの活動）

- **ラーニングサポート（LS）サーティフィケート**
- 学生による学習サポート活動に、率先して挑戦し、また自己の能力向上に継続的に取り組むことで、ラーニングサポーターとして成熟し、成長した学生たちを支援、認定

(<https://www.konan-u.ac.jp/lucks/certificate/>) 27

見つける、きみのなかの無限大。 KONAN INFINITY

### 4. 正課外の学びを支援するLAの試み（LSチームの活動）

- **ラーニングサポート（LS）チーム**
- “学内の学習をサポートする集まり”として結成された団体
- 色々な学生が1つのチームとして繋がり、よりサポートを充実させるためにLA経験者を中心に結成

- ◆主な活動内容
- 企画班**…新入生対象イベントなど、各種企画
- オープンキャンパス班**…キャンパスツアー協力、イベント企画など
- 広報班**…SNS運用、情報発信など
- 研修班**…LA研修企画、運営など
- 交流会班**…交流会企画、運営など

28

見つける、きみのなかの無限大。 KONAN INFINITY

### 5. LAからの視点

**ラーニング・アシスタントから、LA活動・LS活動を通じての学びを報告！**

甲南大学経済学部4年 西海真央（にしうみまお）さん  
…「ベーシック・キャリアデザイン」「経済入門I」でのライティングサポートを中心に活動  
LSチームでは、交流会に所属

甲南大学経済学部4年 柳優里（やなぎゆり）さん  
…「共通基礎演習」、「経済入門I」でのライティングサポートを中心に活動  
LSチームでは、オープンキャンパス、交流会に所属

29

2023.02.23 大学コンソーシアム京都FDフォーラム分科会

- 自己紹介  
甲南大学 経済学部経済学科  
4年生 西海真央（ニシウミマオ）  
活動内容：共通基礎演習  
ベーシック・キャリアデザイン（経済、経営、法）  
経済入門I（ライティング・サポート）  
LSチーム（交流会）
- ベーシック・キャリアデザイン / 経済入門I（ライティング・サポート）  
1人ひとりを大切にすること  
否定せずに、受け入れる姿勢を持つ
- LSチーム（交流会）

スライド31

甲南大学 経済学部4年

柳 優里(やなぎ ゆり)

I. 活動内容

共通基礎演習・BCD

ライティングサポート(経済入門 I・地域連携)

LSチーム(オープンキャンパスツアー・交流会)

II. 共通基礎演習(種別A)

III. LSチーム

スライド32



まとめ

1. 甲南大学の概要紹介
2. ラーニング・アシスタント(LA)制度の概要
3. 正課におけるLAの取り組み(導入事例)
4. 正課外の学びを支援するLAの試み(LSチームの活動)
5. LAからの視点

正課でのラーニング・アシスタント活動とともに、  
正課外のラーニングサポート活動を今後も展開

32

スライド33



ご清聴ありがとうございました。

千葉美保子  
(mchiba@konan-u.ac.jp)



スライド1

**自律的な書き手を育むための  
ライティングセンターにおける10年の歩み**



関西大学 教育推進部  
岩崎千晶  
<http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~ciwasaki/>

© 2023 Chiaki Iwasaki.

スライド2

岩崎千晶 (Chiaki Iwasaki)

- 所属 関西大学 教育推進部 教授  
教育開発支援センター 副センター長  
日本教育工学会 理事  
日本教育メディア学会 理事  
大学教育学会 代議員
- 専門 教育工学, 大学教育学, 学習環境デザイン
- 著書
  - 『大学生の学びを育むオンライン授業のデザイン』(編著) 関西大学出版部 2022年
  - 『教育工学選書Ⅱ 教育工学における大学教育研究』(共著) ミネルワ書房 2020年
  - 『大学のゼミから広がるキャリア: 構成主義に基づく「自分探し」の学習環境デザイン』(共著) 北大路書房 2020年
  - 『主体的・対話的で深い学びの環境とICT』(共著) 東信堂 2018年
  - 『教育の方法と技術: 学びを育てる教室の心理学』(共著) ナカニシヤ出版 2017年
  - 『教育工学選書Ⅱ 大学授業改善とインストラクショナルデザイン』(共著) ミネルワ書房 2017年
  - 『大学生の学びを育む学習環境デザイン』(編著) 関西大学出版部 2014年
  - 『映像メディアのつくり方』(編著) 北大路書房 2008年 等

詳細は <http://www2.itc.kansai-u.ac.jp/~ciwasaki/>





© 2023 Chiaki Iwasaki.

スライド3

教育開発支援センターにおける取り組み

マクロ

- 教育制度、方針の開発支援
- IR

ミドル

- カリキュラム開発支援
- FDセミナー、授業コンサルテーション

ミクロ

- FD教材 (eラーニング・テキスト) 開発
- カリキュラムマネジメント
- 授業アンケート
- 学習支援
  - ライティングセンター
  - 学生スタッフの育成
- 課外学習支援





<https://www.kansai-u.ac.jp/ctl/teacher/tool.html>

© 2023 Chiaki Iwasaki.

スライド4

さまざまな  
学習支援

© 2023 Chiaki Iwasaki.

スライド5

正課、正課外における学習支援

- ティーチングアシスタント
- ラーニングアシスタント・スチューデントアシスタント
- ラーニングコモンズにおける学生スタッフ
- ライティングセンターにおける学生スタッフ

© 2023 Chiaki Iwasaki.

スライド6

ライティングセンター  
の動向

© 2023 Chiaki Iwasaki.

スライド7

日本の高等教育におけるライティングセンター

- 4年制大学を対象に実施した調査（文部科学省）によるとライティングセンターを保有する大学は約一割
- 2014年が59大学（7.5%）
- 2018年が90大学（11.5%）

© 2023 Chiaki Iwasaki. 6

スライド8

小さく生んで  
大きく育てる  
気持ちでスタート

© 2023 Chiaki Iwasaki. 7

スライド9

ライティングラボの誕生

- 2011年 文学部が「卒論ラボ」を開始
- 2012年 教育推進部が全学部に「ライティングラボ」を開始
- 個別相談(学部生, 修士課程の院生)
- 出張講座
- ワンポイント講座
- 予約システムの開発
- 教材作成

© 2023 Chiaki Iwasaki. 8

スライド10

ライティングラボの体制

- 教育開発支援センター長
- 教育開発支援センター副センター長
- 特別任用助教
- アカデミックアドバイザー
- 職員約2~3名
- 教育開発支援センターにデスクがあり日常的に話し合える環境
- チューター(博士課程・PD等 時給1500円) 約20名
- 千里山3か所(図書館・理工系学舎・文系学舎)、高槻・MUSE・堺に各1か所

© 2023 Chiaki Iwasaki. 9

スライド11

自律的な書き手を  
育むための手立て

© 2023 Chiaki Iwasaki. 10

スライド12

ライティングラボの理念

- 添削によって答えを与えるのではなく、**対話による指導をと**おして、**自分で問題を発見し、考え、解決する力を育成**します。
- 学術的な文章作成の訓練をとおして、**社会に出てからも使える「書く力」**を総合的に養い、社会で活躍できる人材の育成に貢献します。
- 学部教育と密接に連携して、専門教育のさまざまな場面でライティングサポートをおこなひ、教育の効果を高めます。

(出典) 関西大学ライティングラボ「ライティングラボとは」(2022/3時点)  
<https://www.kansai-u.ac.jp/cti/lab/about/>

© 2023 Chiaki Iwasaki. 11

スライド13

個別相談で大切にしていること

- 1回40分のセッション（レポート、卒論、プレゼン、留学志望動機等）オンラインも可
- 年間約1300件の利用
- 利用者満足度99%
- 対話によって自律的な書き手を育む

Copyright © Chikaki Iwasaki. 12

スライド14

チュータリングのサイクル

- 導入
  - 挨拶、話しやすい場づくり
  - ヒアリングをもとに課題を焦点化させ、いくつかの項目に分類
- 展開
  - 優先順位を決め、どのように改善していくのかを検討
  - 実施（質問・対話・自分で学べる教材を紹介）
- まとめ
  - 学んだことをふりかえり、自分で何を進めるのかを確認
  - 終わりの挨拶

Copyright © Chikaki Iwasaki All Rights Reserved. 13

スライド15

自律的な書き手を育むため授業と異なるところ

授業	ライティング学習支援
教員が課題を発見する	学生とチューターがレポートの課題を焦点化させる
教員が授業目標を設定する	学生が、あるいは学生とチューターがセッションの目標を設定する
教員が授業内容について解説をする	チューターが学生に質問をして、対話を通して、レポートを改善する
教員が宿題を設定する	学生とチューターで授業外に自分で修正する項目を決める

Copyright © Chikaki Iwasaki. 14

スライド16

ライティングセンターの存在を知り、利用者を増やすために

- 利用者の数が格段に伸びているわけではない
  - 学生はレポートの字数を満たすことで達成感を持つことも多く、レポートの課題を感じる事が難しい場合も...
- 利用者を増やすための工夫
  - 1年生のオリエンテーション
  - ワンポイント講座
  - 出張講座

Copyright © Chikaki Iwasaki. 15

スライド17

個別相談外でも自律的に学ぶために

- Eラーニングの開発（コロナ禍で大活躍）
  - 動画(約8分)・スライド資料(PDF)・確認問題
  - B学部の希望で全学部生がコース登録
- ガイドの開発
- ループリックの開発（レポートやプレゼン）

Copyright © Chikaki Iwasaki. 16

スライド18

ライティングラボからのお知らせ

授業内外で活用できる動画資料を関大LMSで公開中!!

コース名「ライティング力を高めて、いいレポート・卒論を書こう!」  
 (アクセス方法) 関大LMS( <https://kulms.it.kansai-u.ac.jp/> ) → 右下[コースの追加] → 上記コース名の[メンバーになる]をクリックする。

レッスンNo.	テーマ	各テーマの学習目標
1	1 レポートライティングの心構え	<ul style="list-style-type: none"> <li>基本的なレポートの書き方について説明できる</li> <li>レポート執筆のための計画を立てることができる</li> </ul>
1	2 「文章を書く」とはどういうことなのか?	<ul style="list-style-type: none"> <li>書く仕組みについて説明できる</li> <li>レポートを書きたいという欲求が高まる仕組みを説明できる</li> </ul>
	3 様々な種類のレポートと論文構成	<ul style="list-style-type: none"> <li>レポートの種類や特徴を説明できる</li> <li>基本的なレポートの構成を説明できる</li> </ul>
	4 レポートの書き方・性質・他の書きものとの違い	<ul style="list-style-type: none"> <li>レポートと他の書き物との違いを説明できる</li> </ul>
	5 レポートのレイアウト	<ul style="list-style-type: none"> <li>レポートの基本的な体裁について説明できる</li> </ul>
	6 ライティングラボに行ってみよう!	<ul style="list-style-type: none"> <li>ライティングラボで何が出来るかを説明できる</li> </ul>
2	1 レポートに必要な資料を探そう!	<ul style="list-style-type: none"> <li>資料の検索に必要な基本的事項を説明できる</li> </ul>
	2 引用・剽窃	<ul style="list-style-type: none"> <li>引用の役割や種類について説明できる</li> <li>剽窃について理解し、剽窃にならない形で適切な引用ができるようになる</li> </ul>
	3 参考文献の書き方	<ul style="list-style-type: none"> <li>参考文献の書き方について理解し、著作物の種類ごとに参考文献を書き分けられることができる</li> </ul>
2	4 実験レポートの書き方	<ul style="list-style-type: none"> <li>実験ノートを正しく書くことができる</li> <li>フィールドノートを正しく書くことができる</li> </ul>
	5 リーディング意図(読む・要約する)	<ul style="list-style-type: none"> <li>文章を速く理解する方法を説明できる</li> </ul>
	6 リーディングクエッションに読む	<ul style="list-style-type: none"> <li>クエッション・リーダーシップの基本的な考え方や方法を説明できる</li> </ul>
	7 レポートのテーマを設定する	<ul style="list-style-type: none"> <li>テーマ設定の基本的な考え方を説明できる</li> </ul>
8	1 レポートのプランを作成する	<ul style="list-style-type: none"> <li>アウトライン作成の考え方や方法を説明できる</li> </ul>
	9 レポートはパソコン形式で書こう	<ul style="list-style-type: none"> <li>パソコン・ライティングの基本的な考え方を説明できる</li> </ul>
	1 様々な種類のレポートと論文構成 (1-3分間内容)	<ul style="list-style-type: none"> <li>レポートの種類や特徴を説明できる</li> <li>基本的なレポートの構成を説明できる</li> </ul>
2	1 タイムル、見出しの作り方	<ul style="list-style-type: none"> <li>タイムル、見出しの基本的な作り方を説明できる</li> </ul>
	2 自分の文章に照らし、タイトルや見出しを考えることができる	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の文章に照らし、タイトルや見出しを考えることができる</li> </ul>

すべてのレッスンは動画(4-8分)と理解度を確認するクイズ(2-3問)から構成されています。

Copyright © Chikaki Iwasaki. 17

スライド19

ライティング支援を利用した効果や成績との関連

- ループリックを活用して、ライティングラボ利用前後のライティング力の向上を確認しており、能力の向上が指摘されている
- ライティングラボ訪問前後のレポート比較、修正箇所、書き方について学んだことに関するデータはライティングラボの管理者で確認することがある
- レポート自体をよくすることを目標としていないため、成績と関わる評価はしていない
- ライティングラボでの支援内容は成績や合否の結果には一切責任を負わない旨を明示している

Copyright © Chaki Iwasaki All Rights Reserved. 18

スライド20

組織の発展を心がけ  
少しずつ連携を増やす

Copyright © Chaki Iwasaki All Rights Reserved. 19

スライド21

10年が経過して…

- 千里山から全キャンパスでの支援の開始
- 授業連携—初年次教育、卒論  
A学部初年次教育でのラボ活用  
教員向け研修会への参加
- 教授会—利用実績の報告、初年次教育との連携
- スポーツ推薦で入学した学生への学習支援
- 併設校—探究学習、専任教員による講義、公開授業への参加→書く力を持った併設校生徒の入学

Copyright © Chaki Iwasaki All Rights Reserved. 20

スライド22

質の高い  
学習支援の実施には

Copyright © Chaki Iwasaki All Rights Reserved. 21

スライド23

チューターの育成

- 新人研修
  - eラーニングと対面研修、OJT期間
- 研修は年間約6回
  - 前回（9月）はグラフィックレコーディングを活用したチュータリング
  - オンラインチュータリング、多様な学生への対応（学生相談支援センターと連携して実施）、初年次生へのチュータリング等
- Writing Center Journalも参考にしつつ研修プログラムを開発
  - チュータリング方略：直接教授、認知的な変容が起きるような支援、動機付けが向上するような支援

Copyright © Chaki Iwasaki All Rights Reserved. 22

スライド24

チューター用 eラーニング研修

- 第1回 高等教育における学習支援
- 第2回 学習支援における学習者とのやり取り
- 第3回 ICTを活用した学習支援
- 第4回 チュータリングプロセスを考える
- 第5回 リファラルスキル
- 第6回 発達障がい・LGBTQ
- 第7回 タイムマネジメント
- 第8回 プレゼンテーション
- 第9回 理系レポート（実験レポート）
- 第10回 留学生へのチュータリング
- 第11回 日本人学生の留学志望動機書



Copyright © Chaki Iwasaki All Rights Reserved. 23

スライド25

日々のセッションのふりかえり

- チューターによる指導履歴の記入
- 学部別利用状況の作成

© 2023 Chiaki Iwasaki.

24

スライド26

今後実施される大学に向けて

- 学舎の一角で2~3名から開始することはできる
- 大学院生が少ない大学も多いが、近隣の院生が多い大学に協力を得る可能性を考える
- 利用科目を1科目にし、同じテキスト、同じ課題に限定すると、当該科目を履修済みの学部生も対応できる。初年次教育は実施しやすいし、ライティングセンターの認知度も高まる。ただし、体系的な研修の実施や、教職員に相談できる環境の整備も必要になる
- 教職員、学生がライティングセンターで目指すことを理解した上で、学習支援に取り組む

© 2023 Chiaki Iwasaki.

25

スライド27

参考図書

- 関西大学ライティングラボ、津田塾大学ライティングセンター (2019) 大学におけるライティング支援. 東信堂
- 井下千以子編著 (2022) 思考を鍛えるライティング教育:書く・読む・対話する・探究する力を育む. 慶應義塾大学出版会
- 佐渡島紗織、太田裕子 (2013) 文章チュータリングの理念と実践—早稲田大学ライティング・センターでの取り組み. ひつじ書房





## 第2分科会

## 産学連携・地域連携を通じた大学教育を考える

## 報告者

- 高田 兼則 帯広畜産大学 生命・食料科学研究部門 教授  
高澤 伸江 京都先端科学大学 バイオ環境学部 准教授  
山内 剛 亀岡市 環境先進都市推進部 部長  
間崎 涼花 京都府 政策企画部地域政策室 主事  
田村 祥代 京都府 政策企画部地域政策室 協働コーディネーター  
國府 美紀 京都府 政策企画部地域政策室 協働コーディネーター

## コーディネーター

- 船附 秀行 京都先端科学大学 バイオ環境学部 教授



# 産学連携・地域連携を通じた大学教育を考える

コーディネーター

京都先端科学大学 バイオ環境学部 教授 船附 秀行

---

---

### ○本分科会のねらい

産学連携・地域連携は、大学での研究を進める上で不可欠なツールとなっている。一方で、近年、大学においてアウトカム基盤型教育が重視されるようになり、アクティブラーニングが積極的に取り入れられるようになったが、質の向上には、学生エンゲージメント、さらには教員エンゲージメントが重要とされている。その実現には、学生と教員が協働して取り組む産学連携・地域連携活動が格好の場であることから、本分科会では、そうした連携の実例をご報告いただき、実際の成果、さらには実施する上でのポイントや課題を共有することを目的とした。

### ○報告の概要

船附の本分科会の趣旨説明に続き、講演1として、帯広畜産大学教授、高田兼則氏から「帯広畜産大学および研究室における産学連携・地域連携の取り組み」と題した報告があった。帯広畜産大学は、十勝地域唯一の大学として、またその専門分野が地域の基幹産業である農業・食品分野であることから、地域からの期待が大きく、それに応える形で多様な方法で地域連携を実施していることが紹介された。例えば、「学生と地域がつながるまちづくり支援事業」では、在学中から卒業後までを見据えた学生と地域とのつながりの強化を目的とした「関係人口候補化プログラム」が実施され、行政、企業、地域団体等からの講師による「とち学」などの授業で地域の現状や課題、将来展望について学び、さらに、学生の自主的な地域活動を支援する仕組みとして、「ちくだいらんぶプロジェクト」等が用意されている。また、帯広畜産大学は産業界とのつながりも強く、北海道の酒造会社がキャンパス内に酒蔵を建設し、学生も参画して酒造りが行われたり、学生の卒業論文や修士論文の研究結果が地元の製パン店の新規商品開発に活用されたりしている。そうした取り組みでは学生が社会との接点を身近に感じることができ、モチベーションの向上が図られ、効果的なアクティブラーニングが実現されていることが報告された。

講演2では、京都先端科学大学准教授、高澤伸江氏および、亀岡市環境先進都市推進部長、山内剛氏から「学生の地域における活動事例～亀岡市における環境保全活動を通して～」と題して、環境先進都市・亀岡市の環境保全活動を大学と地域との連携で推進している事例の報告があった。まず、高澤氏から、京都先端科学大学の全学共通のリベラルアーツ科目から専門の卒業研究までの科目をうまく活用することによって、1年生から4年生まで視点や活動内容を変えながらシームレスで環境問題に取り組む事例が紹介された。PBL型授業において、1年生では、背景や課題を把握し、2、3年生では、ヒアリングや調査に基づき行政施策への具体的な提言を行い、4年生では科学的な視点から卒業研究に昇華させるのが典型的なパターンとされた。さらに、ボランティア活動を行ったり、環境関連の分析キットを産学連携で開発したりするなどの発展形もみられている。まさに学生エンゲージメントの高い活動になっている一方で、必修科目では、もともと興味を持たない学生にどのように積極的に関わらせる契機を与えるか、などの課題も挙げられた。山内氏からは、亀岡市の様々な環境関連の施策の中で、京都先端科学大学からの提言を積極的に採用し、PETボトル削減に向けたマイボトルの普及のため、企業・小売店と連携し市内に100か所を超える給水スポットを設置した事例が紹介された。さらに、同大学からの提案に基づき、かめおかプラスチックごみゼロ宣言の周知広報のため、若者をターゲットにしたPR動画を作成し、インターネット媒体を利用した広報の展開もしている。さらに、亀岡市では、京都芸術大学との連携の下、市役所地下レストランを改装し、誰でも自由に交流でき、「環境」にも配慮した多機能空間「開かれたアトリエ」をオープンしている。今後は多様な業種の企業も巻き込む形で、産学官連携により多彩な環境施策を推進する計画があり、そこでは学生からの提案が企業を介して社会実装される機会が増えるとともに、進路を考える上でもプラスになることが期待できる旨述べられた。

講演3では、京都府政策企画部地域政策室の間崎涼花氏、田村祥代氏、國府美紀氏から、「地域活動と大学での学び～京都府『学生×地域つながる未来プロジェクト』を通して～」と題して、学生が大学と離れたところで地域活動に参加している事例の報告があった。「学生×地域つながる未来プロジェクト」は、

NPO 法人などの地域活動団体と学生と一緒に地域を活性化するための活動を京都府がコーディネートするもので、学生に地域活動に関心をもってもらうことが目的の一つとされ、立ち上げ当初は、学生が団体の活動場所を訪れて実際に体験した。2年目は、コロナ禍のため、オンラインツールを活用した活動がメインとなった。そのことで本活動の裾野が広がることになり、3年目には、関東の学生も参加することになった。こうした活動において、日頃学生が触れることのない社会の一面を知る機会を与えることになった事例が報告された。4年目（2022年度）は、この活動に関する理解度も上がり、府が仲介する頻度を減らしても、参加学生と地域活動団体がうまく協働して活動している例が多くみられている。そうした活動の中で、学生がコーディネーターとしての役割を担うようになり、当プロジェクト終了後にも地域活動を継続する学生も育ったりしている。また、地域活動をベースにして、大学での卒業研究を行う、あるいは、地域活動を生かした就職を考えるようになるなど、大学での学びや就職に直接結びつく事例も紹介された。一方、地域活動団体も新たな目線からの意見をもらうことができたり、仲間が増えたりすることで活性化が図られていた。こうした地域活動を成功させる上で重要なのは、これに関わる多様な主体がお互いを理解するため対話を欠かさず、さらに、学生側もサービスや労働力を提供する意識ではなく、各主体が同じ方向を向いて協働し、一緒に創ることにあることが強調された。さらに、地域活動が学生の気づきにつながり、自ら調査、考察し、課題解決のアイデアを提案するという、まさにアクティブラーニングになっている事例の報告があった。将来展望として、学生が卒業後も地域との関わりを継続できる仕組みを検討している旨述べられた。

## ○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

全体討議の時間が短く、消化不良の面があったが、登壇者からは、豊かな経験に基づく、示唆に富む発言もあった。まず、帯広畜産大や京都先端科学大での地域連携のためのプログラムの正課科目としての位置づけに関して質問があり、帯広畜産大では、正課科目と課外活動の両方があり、京都先端科学大では、講演で紹介したものはすべて正課科目になっている、との回答があった。京都先端科学大では、近年リベラルアーツが重視され、そうした科目の利用もできることが補足説明された。続いて、山内氏に対して、学生の提案を行政で取り入れるプロセスについて質問があり、システム化された手続きはないが、学生の着想は重要と考えており、引き続き、PBL型授業に参画させてもらう形で積極的な連携を維持したい旨が述べられた。京都府の三氏には、学生の新たなNPO立ち上げへの支援体制について質問が寄せられ、学生向けに特化したものはないが、既存の仕組みを使って支援するようにしている、との説明があった。また、連携がうまく行かない場合の考え方について、山内氏からは、学生の自由な着想は重要で、たとえ実現困難な提案であっても、何かのヒントになることもあるので、できるだけ尊重している旨の発言があり、京都府からは、地域活動団体側の理解不足の場合は、趣旨をしっかりと説明したり、学生との仲介に入る密度を調整したりして、活動に対する理解を深め、関係改善に努めているとの説明があった。最後に、産学連携、地域連携の活動を成功させ、また効果的な学びの場とするには、学生、企業、地域、行政、教員等、すべての構成員がしっかりとコミュニケーションをとり、相互理解をした上で、共通の目標に向かって、協働することが重要であるとの認識が共有された。

スライド1

挑  
×  
選

2022年度第28回FDフォーラム  
第2分科会

産学連携・地域連携を  
通じた大学教育を考える

2023年2月23日9:30-11:30

コーディネーター  
**KUAS** 京都先端科学大学 船附秀行

スライド2

大学の研究面における産学連携・地域連携

大学 ← 技術シーズ → 企業  
← 研究資金 → 地域

メリット

- 研究資金増強
- ニーズ把握
- 知財の活用
- etc.

メリット

- 研究開発費節減
- 知見・情報収集
- ネットワーク拡大
- etc.

スライド3

大学の教育面における産学連携・地域貢献

大学 ← 技術相談  
公開講座 → 企業  
← インターンシップ  
機会の提供 → 地域

メリット

- 文科省方針(2008)への対応
- 教育の場の確保
- etc.

メリット

- 教育機会の拡大
- 人材の確保
- 若者の発想の取入れ
- etc.

スライド4

21世紀の大学教育の質的転換

「何を教えるか (Teaching)」 → 「何を身につけるか (Learning)」  
(中央教育審議会, 2008)

アクティブラーニングの積極的活用

アウトカム基盤型教育 (Outcome-Based Education)  
(Spady, 1994)

重要なのは「教員のエンゲージメント」

学生エンゲージメント重視教育  
(山田, 2018)

教員・学生が協働する  
産学連携・地域連携活動の活用が効果的では？

スライド5

本分科会のねらい

講演1 大学における多様な地域連携例, 企業との連携  
講演2 学生と行政の連携の具体例  
講演3 教員が関わらない学生と地域との連携

- 学生・教員の参画する産学連携・地域連携活動の実例を知る。
- 教員が直接関わらない学生の地域連携活動の実例を知る。
- その成果(教育面, 活動自体)を把握する。
- 運営上の課題を共有する。
- 教育に(も)効果的な産学連携・地域連携の実践方法を考える。

スライド1

帯広畜産大学 2022.2.23

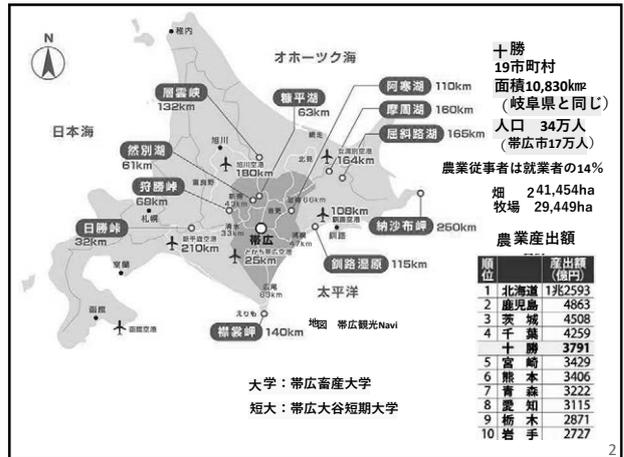
第28回FDフォーラム 第2分科会

帯広畜産大学および研究室における  
産学連携・地域連携の取り組み



生命・食料科学研究部門  
高田兼則

スライド2



スライド3

帯広畜産大学の企業連携の取り組み

国際安全衛生基準適応の実習環境による人材育成を推進

畜産フィールド科学センターでは、世界最高水準の国際安全基準認証(FSSC22000)を取得した乳製品工場の実績に基づき、同施設を活用したHACCP講習など人材育成を推進するとともに、食品加工事業所のHACCP導入支援を行い、平成27年度には3事業所が北海道HACCPの認証を受けました。また、産学連携センターでは、インキュベーションオフィスに入居する食関連企業の数を増加させ、実践的な共同研究を推進するとともに、企業の実務家教員による実践的な講義・実習を行っています。



3

スライド4

帯広畜産大学の地域連携の取り組み

帯広畜産大学は道外出身者が6~7割を占め、十勝への理解や地域との関わりが少ないまま卒業する学生も少なくない。

帯広市や関連機関と連携し、在学中から卒業後までを見据えた学生と地域とのつながりを強化することを目的として「学生と地域がつながるまちづくり支援事業」を実施。



1 学ぶ  
2 知る  
3 活動する  
4 貢献する

卒業後も十勝の応援団としてつながり続けます

学びを実践し、地域の活性に貢献します

4

スライド5

「関係人口候補化プログラム」

学生が十勝について学び、理解を深めることで、地域への興味や関わりを持ち、自主的に十勝とつながるきっかけづくりを目指す

十勝について学ぶ地域連携型授業の実施  
とち学  
十勝の歴史、文化、自然、産業、地方創生などについて、行政、企業、地域団体等から講師を招き、十勝の現状や課題、将来展望について学びます。本授業は市民開放授業として一般の方も受講が可能です。

現場を深く知る課外教育の実施  
とち学旅  
北海道中小企業家同友会とち支部と連携し、主に新入生を対象に、農畜産物の生産から加工まで一連の現場を巡るバスツアーを実施しています。農業・企業経営者の方の取り組みや想いを実際に現場で見聞きすることで、十勝の産業への理解を深めます。

経営者とガチで学ぶ交流会×勉強会  
北海道中小企業家同友会とち支部と連携し、十勝の経営者の方々が行っている勉強会に学生が参加できる機会を提供し、社会人と同じ目線で学び・意見を交わすことで、互いに様々な刺激を受けながら交流を深めます。

5

スライド6

「アクション支援プログラム」

学生が企画・実施するまちづくり活動を支援することで、地域愛の醸成や新たな視点からの地域活性化を図る

地域活性化に向けた自主的活動の支援  
ちくだいらんぶプロジェクト

「学生のチャレンジ」をキーワードに、学生が十勝を元気にするために企画した様々な取組を支援する帯広畜産大学×帯広市のプロジェクトです。

文化・スポーツコース (愛称: みんなのちくだい)  
おびひろ動物園活性化コース (愛称: ずーぶろ)  
地方創生・地域活性化コース (愛称: とちチャレ)

地域産業の活性化支援  
学生と地域企業の共同研究  
学生が教員の指導の下、地域・企業のニーズや課題を踏まえ、地元企業等と共同研究を実施します。

6

スライド7

■地域をどんどん盛り上げる～地域交流

一般財団法人帯広市文化スポーツ振興財団との連携事業。  
畜大生サークルが主体となって文化やスポーツを通じて地域の人たちとの交流を図るイベントを企画実施しています。「熱気球にぶれてみよう！空っぽみよう！」「畜大陸上部の走り方教室」「わくわくカーリング体験」「ダチョウの羽のストラップを作ろう」など、楽しい内容が盛りだくさん。

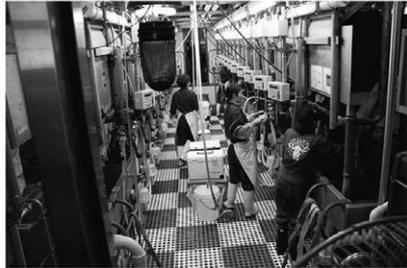


7

スライド8

■大学から生まれたオリジナル商品～サークル活動

畜大で飼育されている乳牛の搾乳は、学生サークル「うしぶ。」が担っています。入部希望者は半年間しっかり訓練を受け、365日、毎日朝5時から搾乳作業をしているのです。こうして搾られた生乳は、「畜大牛乳」や「畜大牛乳アイスクリーム」として商品化され、大学生協や地元スーパーなどで販売されています。幅広いファンも多いのだとか。




8

スライド9

■本学農業サークル「あくりとかち」が  
農林水産大臣賞を受賞

東京六本木ヒルズで行われた農林水産省主催の「食と農業漁業大学生アワード2015」で「あくりとかち」が、地元企業、農家の協力を得て、各大学の農業サークルに参加している道外大学生16名を招いて、初めて取り組んだ「十勝農業合宿ツアー」や10月から12月までの月2回、帯広の飲食店の店舗を借り、自分たちが考案した料理を提供した「サイエンス農（あくり）カフェ」など十勝の農業の魅力を発表し、道内大学では初めての農林水産大臣賞を受賞しました。

「とがち」のボースをとる参加学生とあくりとかちのメンバー

■湯屋商店とのハロウィン向け商品開発(2022年)




出典) 十勝毎日新聞

9

スライド10

馬介在活動室（帯広市との連携事業）

障がい者乗馬体験事業  
適応指導教室ひろびろ 馬の総合体験学習

ホースセラピー

「馬介在活動室が北海道福祉のまちづくり賞を受賞」

馬介在活動室の取り組み「人と馬の絆による教育・研究・社会貢献活動」が、令和2年度北海道福祉のまちづくり賞を受賞しました。  
馬介在活動室は平成26年に設置し、障がい者への乗馬体験事業（社会貢献活動）を中心に、障がい者雇用に関わる教職員及び学生への技術指導（教育活動）、障がい者に適した乗馬の生産に関する研究（研究活動）など、積極的に活動を展開しています。

このたびの受賞は、昔から十勝地域で身近な存在である「馬」と「人」の絆をもとに、教育や研究といった大学の特色を活かしながら、障がいのある方への支援活動を実施していることが総合的に評価されたものです。



▲馬介在活動室の事業に協力する学生達

10

スライド11

■JICAと連携して南米パラグアイ国に学生を派遣～海外展開

2012年度から在学生・卒業生をJICA青年海外協力隊の長期隊員（2年）、短期隊員（2ヵ月）として南米パラグアイ国に派遣する「帯広-JICA協力隊連携事業」をスタート。パラグアイの小規模農家を対象に、家畜の飼育管理、衛生管理、繁殖管理の技術向上のための支援および経営指導を行っています。現地の生活水準の向上および酪農の発展、さらには製菓・農産産分野における国際協力経験を通じたグローバル人材の育成が目的です。




出典) ワークワークとから

11

スライド12

最近の取り組み

「学生の酒造りプロジェクト」 碧雲蔵（上川大雪酒造(株)）

本学学生が碧雲蔵において実際の醸造を現場で学び、自身の研究に生かすことを目的としたもので、同酒蔵の川端慎治総社氏（本学客員教授）と山根桃華社氏補佐（大学院博士後期課程1年）の指導のもと、学生が仕込みから醸造の工程に一切から携わり、酒造りが進められました。



完成した本学オリジナル日本酒「純米吟醸 碧雲」を手にする  
菅原雅之准教授、高山さん、酒井さんと川端総社氏

米麹造り、酒母造り、酛造り、上槽、瓶詰め工程を社氏の指導のもと実施（インターシップ研修の位置付け）

12

スライド13

**研究室での取り組み**

**共同研究による新商品 (2015年) (湯種全粒粉食パン、WA(わ)ドーナツ)を開発**

十勝産小麦を原料としたパンの高品質化を目的として、本学山内宏昭教授と(株)満寿屋商店との共同研究により、4月には本学大学院修士課程1年の松下耕基さんと満寿屋商店の職員により「湯種全粒粉食パン」を商品化し、9月には、松下耕基さんと畜産科学課程4年の寺山采花さん及び満寿屋商店の職員により小麦に大量の水を加え、おかゆのような状態にして炊いたものを製パンに使用する「炊き種製法」により新食感のドーナツを開発し、商品化しました。



湯種全粒粉食パンの記者発表

**“WA”ドーナツ**  
**“WA”ベーグル**

**炊き種製パン法 (特許出願)**  
**「炊き種」 商標登録**




13

スライド14

**修士課程食品科学専攻2年五嶋大介さんが (2020年) 株式会社満寿屋商店との共同研究により商品を開発**

五嶋大介さん(修士課程食品科学専攻2年)は2年前の株式会社満寿屋商店(ますやパン)との共同研究により開発された、特許製法の発酵種「わさび種」と「炊き種」を利用し、生地種にマッシュポテト等を加えた発酵種を開発しました。

テーマは「甘くない食パンを作る」とし、種の糖分はマッシュポテトのみで、通常材料の砂糖は加えていません。また、開発した発酵種を加えることにより、グルテンが通常よりも強くなりもちり感のある食感と口溶けの良さを実現し、新商品「トーストブレッド」をますやパンと共同で発表しました。

「トーストブレッド」は、ますやパン麦首で販売が開始されています。五嶋さんは「実際に店頭で並ぶ商品開発に携わることができ大変楽しく思います。」と喜びを語りました。



五嶋さん、満寿屋商店 開発担当 佐々木さん、総務部 嶋井さん (左から)

14

スライド15

**本年度、学生が取り組んでいる共同研究**

- ・株式会社ニッポン 
- ・DSM株式会社 
- ・農研機構、山本忠信商店 

**包括連携協定**

- ・敷島製パン株式会社 

15

スライド16

**「とち夢パン工房」**




16

スライド1

**学生の地域における活動事例**  
～亀岡市における環境保全活動を通して～

2023年2月23日  
大学コンソーシアム京都FDフォーラム  
京都先端科学大学  
バイオ環境学部 高澤(笠松)伸江  
✉ takasawa.nobue@kuas.ac.jp  
亀岡市 環境先進都市推進部 山内 剛  
✉ kankyo-soumu@city.kameoka.lg.jp

スライド2

**環境先進都市・亀岡**

京都府亀岡市:  
人口 87,228人(@2022.9.1)  
京都駅から快速21分、特急の停車駅  
京阪神の大都市近郊にありながら  
豊かな自然に囲まれる  
京野菜、保津川下り、アユモドキ...

2018年 かもおかプラスチックごみゼロ宣言  
2019年 世界に誇れる環境先進都市かもおか協議会  
2020年 亀岡市プラスチック製レジ袋の提供禁止に関する条例  
2021年 条例施行

第2分科会

スライド3

亀岡市の環境問題に関する施策(海ごみ、資源循環、脱炭素...)

**授業等への取り入れ事例**

**1年** スタートアップゼミ(学内PBL型授業): 身近な問題を掘り下げて、自分事として考える  
(テーマ例)・SDGsを達成するために日本国内で自分たちが何をすればよいか。  
・亀岡市2030年使い捨てプラスチック削減目標達成に向けた、プラスチックごみ削減問題を解決する方策を生み出す。

**2, 3年** 実践プロジェクト・探求プロジェクト(学内PBL型授業)、ボランティア活動:  
**現地調査、社会活動への参画**  
●亀岡を『世界に誇れる環境先進都市』にするため、亀岡市の施策をより深く、推進するような具体的内容の提案や啓発活動を提案する。・大学のごみを減らしたい～大学のごみの現状、マイボトル・マイ水計画～  
●映画『マイクログラスチックストーリー』日本語吹替え原製作ボランティア  
●オーガニクス展のイベント運営/活動成果展示・オーガニクス展運営補助・収録補助  
●自主勉強会イベント参加  
●ボランティアチームでのmymiaチャレンジ(亀岡市)参加・地元NPO主催 環境イベントへの参加・ごみ調査補助・ごみと生態系に関する研究補助

**4年～** 卒業研究: 周りを巻き込む、産学官連携、社会活動への参画  
●保津川支流 河川漂着ごみ・マイクロプラスチックの実態(亀岡市調査に同行)  
●河川におけるマイクロプラスチック・農場由来のマイクロプラスチックの動態  
●微生物とプラスチックごみの関係  
●マイクロプラスチック簡易観察キットによる分析方法の確立

共同研究  
(日本生命財団環境問題研究助成、クワカ・環境科学振興財団助成、日本学術振興会学術知創プログラム、先端大共同研究助成 等)

スライド4

取り入れ事例 実践プロジェクト(2年生春学期:オンライン)KUAS  
＜高澤班テーマ＞

亀岡市では、自然環境の保全と地域経済の活性化に一体的に取り組む『世界に誇れる環境先進都市』の実現をめざし、様々な取り組みを行っている。  
その取り組みの一つに、亀岡市と亀岡市議会が平成30年に「かもおかプラスチックごみゼロ宣言」を行ったことが挙げられる。令和2年3月には、「亀岡市プラスチック製レジ袋の提供禁止に関する条例」が市議会会で可決され、来年1月1日からレジ袋の提供が有償無償を問わず禁止になる。(テーマ①)

一方で、使い捨てプラスチックごみに限らず、「ごみを出さない地域社会」の考え方を基本とした「亀岡市ゼロエミッション計画」も策定されている。この計画では、徹底した廃棄物の発生抑制、再使用の機会を創ることにより人と環境にやさしい資源循環型の地域社会づくりを目指している。(テーマ②)

いずれの取り組みにおいても、実現のためには、消費者・事業者・住民・一時滞在者が取り組みやすい、実行可能な具体的施策と啓発活動が必要である。  
そこで、今回の実践プロジェクトでは、亀岡市市役所の皆様のご協力のもと、亀岡を『世界に誇れる環境先進都市』にするため、亀岡市の施策をより深く、推進するような具体的内容の提案や啓発活動を提案することを目標とする。最終的に、亀岡市環境市民部にご自分たちのアイデアをプレゼンする。

スライド5

取り入れ事例 実践プロジェクト(2年生春学期:オンライン)KUAS  
＜スケジュール＞

- ① 大テーマ決め(デザイン学科3教員が提示するテーマから選択)
- ②③ ガイダンス、日程提示、テーマに関する基礎知識を身につける  
(資料提示: 亀岡市環境基本計画、亀岡市HP等)
- ④ 基礎知識: 動画配信: 一般廃棄物最終処分場の様子
- ⑤ 専門家のお話を聞く(ライブ配信: プラごみゼロ宣言について  
亀岡市環境市民部環境政策課 ご講演)
- ⑥ 専門家のお話を聞く(ライブ配信: 亀岡市ゼロエミッション計画  
亀岡市環境市民部環境クリーン推進課 ご講演)
- ⑦ 自分の意見・提案・根拠をまとめる(ライブ授業・課題)
- ⑧ 個人発表、発表内容に関するコメント(ライブ)
- ⑨ 個人発表をもとにチーム分け。チームごとに課題決定(ライブ)

スライド6

取り入れ事例 実践プロジェクト(2年生春学期:オンライン)KUAS

- ⑩ チーム活動(チームごとにオンライン): 計画立案、調査・考察
- ⑪ 中間発表①(ライブ授業: パワポ発表、ルーブリック評価)
- ⑫ 中間発表に対するフィードバック(ライブ)、修正(チームごと)
- ⑬ 中間発表②、提案書提出
- ⑭ オンライン発表会(亀岡市の皆さんに提案、評価・コメントをもらう)
- ⑮ 学科全体発表会(ポスター)

スライド7

関連する話題を提供いただいた方々

亀岡市ゼロエミッション計画	亀岡市環境市民部環境クリーン推進課
プラスチックゴミゼロ宣言	亀岡市環境市民部環境政策課
京の川から世界をみる～河川漂着ごみの課題と地域連携	保津川遊船企業組合 代表理事
何度も使える天然ラップ～楽しくエコを	aCo wrap(アコラップ)、KIRI CAFE
環境ベンチャー、ごみ分別、エネルギー問題	NPO法人木野環境

授業横断型:  
 スタゼミ — 日本語リテラシー — バイオ環境と社会のつながり

※バイオ環境学部基礎科目(選択)  
 課題提示・調べ学習 まとめる・書く 実情を知る・社会で課題解決に当たっている人から話を聞く

スライド8

PBL型授業中・後の学生の声

- ・レジ袋有料化に反対だったが、河川ごみの実情を知って考えが変わった (スタートアップゼミ:1年秋)
- ・亀岡市のプロジェクトに参加して自分の力がついた(実践プロジェクト:2年春)
- ・工学部と共同でおもしろい分別ごみ箱を作れないか(実践プロジェクト:2年春)
- ・(現場調査にて、小学校1年生の女の子が川ゴミ中のタバコを見て、「大人が川をズズタにしている。このごみが、次の街をまたズズタにすんだよね」と言ったのを聞いて...)タバコやめようかになって、一瞬思っちゃいましたもん...(卒業研究:4年秋)
- ・課題が多すぎる(実践プロジェクト:2年春)
- ・(「ごみの分別」に関する課題に取り組んで)学費払ってるし、大学がごみの処理してくれるのは当然と思ってしまう。そんなに意識高い人あんまりいない(探求プロジェクト:2年秋)

スライド9

学習したことを活かして

世界中の映画館で入場 観客の心を震わす中

プラスチック汚染問題の解決に貢献する学生が立ち上げる!

マイクロプラスチックストーリー

ほくらが作る2050年

日本探検隊 KUIAS亀岡キャンパスでのボランティア 急募!!

2023年8月5日 - 27日 7月15日 - 18日を申込締切予定

スライド10

【マイクロプラスチックストーリー】担当の学生は目の前のペットボトルの山を見て驚きを隠しませんでした。京都亀岡キャンパスでは、1ヶ月に大塚のごみ袋30袋分のペットボトルが回収されているそうです。

スライド11

【マイクロプラスチックストーリー】#KUIAS #MPS team #MPS Ambassador】の未収録が本学で行われています。今日は特別、亀岡市市長がニューヨーク市長になりまして、

【マイクロプラスチックストーリー】#KUIAS #MPS team】実は名前の一文字が一緒な二人、全部自然のものでできた名札に感動してくれました。

スライド12

2050年に1海里にあるプラスチックの建でか 海の量でとこえる人たて

スライド13

卒業研究：  
地域のひととともに活動する、さらに先の研究へのつながり **KUAS**

河川のモニタリング調査を行っています

ページID：0002776  
2022年3月4日更新  
適宜ページを改定

保津川に流れ込む河川ごみのモニタリング調査を実施しています。

保津川に流れ込む河川ごみの実態を把握するため、今後の河川ごみ発生抑制対策を効果的に実施するため、河川モニタリング調査を市内5河川（千々川、大御川、雑水川、年谷川、西川）で実施しています。  
令和2年8月から各河川にダストフェンスを設置し、1か月間の試行後、毎月の調査結果を情報発信していきます。  
使い捨てプラスチックごみゼロのまち実現に向けて、河川ごみの実態を知ることで、自分たちにできることを考えていきましょう。

亀岡市HPより

スライド14

卒業研究・ボランティア：  
地域のひととともに活動する、さらに先の研究へのつながり **KUAS**

卒業研究・ボランティア：河川ごみ調査

【#河川ごみ調査 May 11】  
【#河川ごみ調査 Sep 11】  
調査を開始してちょうど1年  
亀岡市役所や#NPOプロジェクト保津川、#銀行南校の皆さんと一緒に  
行ったごみの総数は12,000個を超えた。  
ごみの量にはつきりした減少傾向は見えないけれど  
ごみを意識する仲間が増えている

#保津川  
#川ごみ  
#河川  
#廃棄物情報発信

k uas\_bio で検索！

スライド15

(卒業研究例) なぜタバコのごみが多いのか？ **KUAS**

→GIS(地理情報システム)を使った漂着ごみの流出要因解析  
⇒流域ごとに流出要因を数値化・分析 (岡崎, 2021)

道路の割合とたばこ総数

道路の長さより込み具合(総延長より密度)  
道路が込んでいる地域でポイ捨てされて、それが保津川に達する

スライド16

(卒業研究例) 雑水川漂着ごみ時系列変化 **KUAS**

(2020年9月~2023年1月) (舟山, 2023)

減少傾向

発泡スチロールの破片  
ポリ袋  
タバコの吸い殻・フィルター

※2020年度は週に一度で採取を行った。

スライド17

卒業研究・ボランティア：  
地域のひととともに活動する、さらに先の研究へのつながり **KUAS**

【#河川漂着ごみ調査 May 11】  
#保津川支流の#川ごみ調査。河川敷に魚卵のようなものを発見！よく見てみると...#板敷肥料！肥料の利用効率向上のため、#肥料をプラスチックの殻で包んだものです。農業用水を通じて河川・海洋に流れることが報告されています。  
#デザイン学科 #サイエンス学科

スライド18

産学連携も **KUAS**

マイクロプラスチック簡易分析キット  
企業との共同開発  
株式会社堀場テクノサービス  
『MPs簡易学習キット ぶらウオッチ』

スライド19

**亀岡市での成果発表、ワークショップ展示**  
 @地元NPO主催イベント（環境フェスティバル、映画上映）

**KUAS**  
 KYOTO UNIVERSITY OF ADVANCED SCIENCE

京都先端科学大学バイオ情報学部 12/25  
 富野 ありを 運営

主催：NPOプロジェクト保津川

【#マイクロナスチックストーリー #KUAS  
 #NPO #team】  
 今日は亀岡市役所にて「みんなで作る 環境フェスティバル」。  
 映画の上映をメインに、様々な企業や行政、大学のワークショップが行われました。先端大からはタラコワの葉の名札作りやがらつオツ子の展示、ポスター発表を行いました！

市販の指さんも実際に研究のため開発した #マイクロナスチックやあらのオツ子。観客内容にも興味深々♪

皆さんの期待に応えるべく日頃の勉強の成果を発表！

イベントに参加していた企業や大学と交流しました。

#環境フェスティバル #SDGs

8/10

スライド20

**学生と市政の関わりによる効果**

**KUAS**  
 KYOTO UNIVERSITY OF ADVANCED SCIENCE

- ・4年間を通じた学びが可能。  
 1年生：取り巻く問題を知る：自分の選択で未来が変わることの理解  
 2年生：身の回りで実践してみる、自分を活かす  
 3年生、4年生：周りを巻き込む、産学官連携する
- ・学生自身のアイデアが市政やイベントで活かされる達成感  
 →学生の自信
- ・自分の大学の街を知るきっかけ → 自分の街を考えるきっかけ  
 →市民意識の醸成（自分の街でも）
- ・市政を通じて人とつながること→社会の仕組みを知る  
 →行政への関心、地域の活動（大人）への関心  
 →行政・大学の街やNPO、連携企業への就職

9/10

スライド21

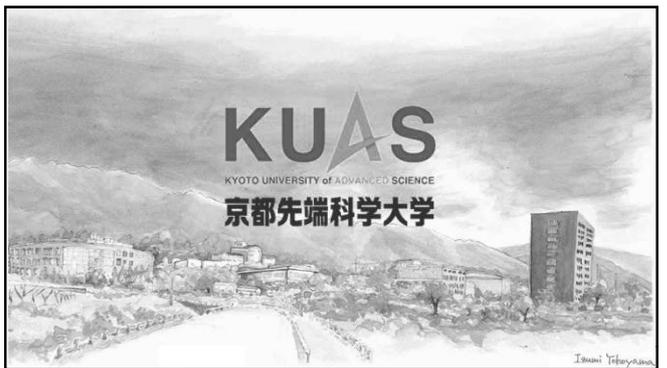
**学生が地域に関わる際の課題**

**KUAS**  
 KYOTO UNIVERSITY OF ADVANCED SCIENCE

- ・外部と関わりたいと思う学生は多いが、興味を持たない学生はいる。学生が自分ごととして関われる・学生を本気にさせる工夫が必要（→そうでなければ、行政への負担が大きい）
- ・興味のない学生も、“授業”なら取り組む。  
 →環境問題意識をもった市民の育成
- ・授業だけだと4か月。興味がある学生でも、大学だけだと4年間。その後も地域に関わっていくような人材の育成。
- ・大学（学生）が意見を言いやすく、試してもらいやすい  
 “ちょうどよい「地域」の規模”がある。
- ・科学的な協力（“理学的な”研究を市政にどう生かすか。）  
 伝えるためにも普段からパイプ作りの必要がある。

2 0/10

スライド22



第2分科会

スライド1

環境政策をベースにした  
地域連携の可能性について

亀岡市環境先進都市推進部長 山内 剛

0 世界に誇れる環境先進都市・亀岡市 1

スライド2

PBL型学習授業「実践プロジェクト」から  
「かめおかプラスチックごみゼロ宣言」に関する提案事例

①PETボトル削減に向けたマイボトルの普及

- 水道直結タイプの浄水機能付きウォーターサーバーの設置
- 市役所、道の駅、駅、スタジアムなど利用者の多い施設への給水スポット設置
- 企業・小売店と連携した新しい生活形態の提案

亀岡の美味しい水プロジェクトの展開

給水スポット  
・公共施設及び市内全小・中、義務教育学校、高等学校 36箇所  
・協力店舗等 65箇所  
【計101箇所】

0 世界に誇れる環境先進都市・亀岡市 2

スライド3

PBL型学習授業「実践プロジェクト」から  
「かめおかプラスチックごみゼロ宣言」に関する提案事例

①かめおかプラスチックごみゼロ宣言の周知広報

- 若者をターゲットにしたPR動画の作成
- ネット媒体を利用した広報
- スーパーマーケットでの呼び込みPR

BRITA Japan様との環境教育から新たなPR動画の制作

市内の高等学校2校による成果報告会で発表、制作された動画は広く発信  
※残念ながら当プロジェクトでは動画作成までには至らなかった。

0 世界に誇れる環境先進都市・亀岡市 3

スライド4

「河川ごみモニタリング調査(卒業研究)」での  
地域連携による付加価値の向上

河川モニタリング調査の活用の可能性拡大～市保有データとの重ね合わせ～

ボイ捨てごみゼロプロジェクトとの連携  
令和4年11月末時点で6,539件のデータを収集

0 世界に誇れる環境先進都市・亀岡市 4

スライド5

亀岡市の地域連携の事例

KIRI CAFÉ 2018年8月～

古民家を京都造形芸術大学の学生と一緒に改修し、かめおか霧の芸術祭の拠点としてオープンした交流スペース。

0 世界に誇れる環境先進都市・亀岡市 5

スライド6

亀岡市の地域連携の発展事例

エコバッグ普及へ ～「環境×芸術」KAMEOKA FLY BAG Project～

巨大エコバッグを解体し、世界に一つのエコバッグを作るワークショップを開催  
200名の市民が参加した。

JR亀岡駅北広場に現れた  
巨大エコバッグ2019年7月

0 世界に誇れる環境先進都市・亀岡市 6

スライド7

### 亀岡市の地域連携の発展事例

エコバッグ普及へ ~HOZUBAG生産拠点を整備(2021.3)~

古民家を改装した拠点施設

作業場の様子

全国から集められたパラグライダー生地

商品化されたHOZU BAG

古民家を改装したHOZUBAG生産拠点を整備。環境への取組が新たな雇用を生んだ。

0 世界に誇れる環境先進都市・亀岡市 7

スライド8

### 亀岡市の地域連携の事例

SDGsモデル事業として「開かれたアトリエ」をオープン(2021.4.14)

- ▶京都芸術大学との連携協定により学生にも参加いただき整備
- ▶市役所地下レストランを改装
- ▶誰でも自由に交流できる、「環境」にも配慮した多機能空間
- ▶様々なワークショップや展示を開催
- ▶9時から17時まで、土日祝も自由に利用可能

0 世界に誇れる環境先進都市・亀岡市 8

スライド9

### 亀岡市の地域連携の今後の可能性~産学官の連携へ~

0 世界に誇れる環境先進都市・亀岡市 9

スライド10

### 亀岡市の地域連携の今後の可能性~産学官の連携へ~

事業者名	締結日	取組内容
ソフトバンク株式会社	R1.10.30	教育分野、環境分野における連携
株式会社ユニクロ亀岡店	R2.3.13	市内中学校における環境教育の実施
BRITA Japan株式会社	R2.6.30	ペットボトル削減に向けた取組の連携
(一社)Social Innovation Japan	R3.4.9	マイボトル普及拡大によるペットボトル削減の取組
ウォータースタンド株式会社	R3.6.3	マイボトル普及拡大によるペットボトル削減の取組
株式会社DESIGN WORKS ANCIENT	R3.6.22	マイボトル普及拡大によるペットボトル削減の取組
日本紙業有限会社	R3.7.27	資源回収拠点の拡充等の取組連携
タイガー魔法瓶株式会社	R3.7.28	ステンレスボトル回収モデル事業の取組
株式会社カネカ	R3.11.25	生分解性の袋の活用方法検討・研究
株式会社カインズ	R3.12.3	連携による環境配慮の取組
株式会社セブン・イレブン・ジャパン	R4.1.24	ペットボトル回収機の設置、リサイクルの取組
日本環境設計株式会社	R4.2.17	ケミカルリサイクル推進の取組
株式会社斗々屋	R4.5.13	ごみを出さない暮らし、社会に向けた取組

0 世界に誇れる環境先進都市・亀岡市 10

スライド1

スライド2

本日お話するテーマ

1. 「学生×地域つながる未来プロジェクト」の概要
2. 多様な主体と協働する上で大切にしてきたこと
3. 地域活動と「大学での学び」を繋げることの重要性

第2分科会

スライド3

学生×地域つながる未来プロジェクトとは…

スライド4

京都府 政策企画部 地域政策室 府民協働係とは…

NPO等地域で活動する団体の支援

- ◆ 特定非営利活動法人(NPO法人)の認証・監督等
- ◆ 地域課題の解決に取り組む非営利団体の支援 (「地域交響プロジェクト」)

スライド5

地域活動団体の現状

- ◆ 地域活動団体の担い手の高齢化・不足等により、自治会等の地縁団体だけで地域の課題を解決することが困難  
 ⇒ 新たな担い手の参画促進や他団体との協働を推進することが必要
- ◆ 財源や人材確保に関するノウハウを持ち合わせ、自立した活動を展開できる団体があまり育っていない。

スライド6

「地域交響プロジェクト」での支援

地域課題の解決に向けた活動が継続して実施できるよう支援するプロジェクト

- ◆ 地域活動に対して、より多くの周辺住民から相互に協力が得られるよう「住民協働」の関係づくりを支援
- ◆ 住民協働による地域活動だけでは解決が困難な地域課題については、先進性や専門性を有する他団体や市町村、京都府等との連携・協働により解決方法の質を高める。

スライド7

**「地域交響プロジェクト」での支援内容**

資金面での支援

- ◆ 地域交響プロジェクト交付金

伴奏支援

- ◆ パートナーシップ・ミーティング（団体相互や行政など多様な主体の関係性を築く場）
- ◆ 専門家派遣事業（専門家や先駆の実践者を団体に派遣してアドバイス）
- ◆ N極アカデミー塾（継続的に地域活動をするための知識習得と実践のための塾）
- ◆ 活動の支え手との関係づくりセミナー（地域活動の支援者となる「支え手」との関係づくりを通じて団体の組織基盤強化を学ぶセミナー）
- ◆ **学生×地域つながる未来プロジェクト**（学生と地域活動団体の協働関係構築のきっかけづくり） など

スライド8

**「学生×地域つながる未来プロジェクト」とは・・・**

地域活動団体 ← 京都府 KYOTO → 大学生

大学生と一緒に取り組みたい！

地域活動やボランティアに興味がある！

京都府が大学生とNPO等の地域活動団体をマッチング

↓

大学生と団体がひとつのチームとなり、一緒に地域活動を行うプロジェクト（令和元年度から実施）

スライド9

**「学生×地域つながる未来プロジェクト」はなぜ実施しているの？**

大学生が多いという京都府の強みを活かし、大学生と地域活動団体がひとつのチームとなり、一緒に地域活動を行う。

↓

- ◆ 地域活動に対する若年層の共感を高めて、地域活動に「**新たな担い手**」を呼び込む。
- ◆ 地域活動団体がボランティア等を受け入れるための体制強化

スライド10

**これまでの参加団体**

※順不同、複数年度にわたり参加している団体あり（延べ19団体）

団体/商店名	団体概要
さんさん山紙	異業連携の事業所
豊田物工業	物の修理・製品加工、イベント開催
NPO法人happiness	子ども食堂、高齢者の居場所づくり
認定NPO法人フォーラムひこばえ	コミュニティセンター、児童館、視覚支援事業所等
NPO法人セオトップネットワーク事務所	登山検定活動
認定NPO法人アソビセンター	ドラッグストア、動物介抱塾、ペットと防災啓発
山川まちづくり協議会/CoCoしらかわ	地域活性化に向けたイベント企画、開催
花菱ワンダーランド実行委員会	ターゲット・ワークショップを含む「花菱ワンダーランド」の開催
森へのパスポート	森林の魅力開発、イベント開催
NPO法人プロジェクト倶楽部	神楽川の清掃イベント、「はづがわチャリティ・ファンラン」の開催
奈良本郷芸術家会	自主企画の映画制作、ラジオでの情報発信
NPO法人丹波漆	丹波漆の発信・PR
森の輝	観光庁の特別活用、竹を使用したイベント開催
京都府地域アセット・創発3次元データ等を活用したまちおこし研究会	地域の資産・人材・創発3次元データ等の情報を活用した地域課題の解決
外国人女性の会/ベルヨン	日本在住の外国人女性の生活サポート
3up5	新大宮商店街の魅力発信、イベント開催
新大宮商店街	-
栗山中央センター商店街	-
鹿屋・むらかみプロジェクト	お土産をDIYして地域のコミュニティを制作

スライド11

**これまでの参加学生**

（延べ31大学、158名）

大学別人数(人)

スライド12

**これまでの参加学生**

学年別人数(人)

スライド13

「学生×地域つながる未来プロジェクト」での活動紹介  
(令和元年度)

- ◆ 27名の大学生と6つの地域活動団体が参加
- ◆ 大学生が団体の活動場所を訪れて、実際に活動を体験することがメイン  
(新型コロナウイルスの影響で、年度末には多くの活動が中止になった。)
- ◆ 団体が所有するSNS・ブログで参加学生が感想等を発信
- ◆ 令和元年度の成果報告ホームページ  
[https://www.pref.kyoto.jp/chiiikokyo/gakusei/r1\\_gakusei\\_houkoku.html](https://www.pref.kyoto.jp/chiiikokyo/gakusei/r1_gakusei_houkoku.html)



スライド14

「学生×地域つながる未来プロジェクト」での活動紹介  
(令和2年度)

コロナ禍で対面での活動が難しい!

- ◆ コロナ禍でも地域課題がなくなったわけではない!むしろ課題が多様化!
- ◆ コロナ禍でオンライン媒体が広く普及
- ◆ コロナ禍で遠出を避けて近場で生活する人が増加

↓

SNSやZoom等オンラインを上手く活用することで、より多くの人に「地域」に目を向けてもらえる機会になるのでは?



スライド15

「学生×地域つながる未来プロジェクト」での活動紹介  
(令和2年度)

キミはwithコロナ時代に何をやる?  
#100万人へ発信実験 START!

- ◆ 23名の大学生と8つの地域活動団体が参加
- ◆ 新型コロナウイルスの影響により、大学生がオンラインで団体にインタビューして、その内容や感想等を大学生が本プロジェクトのSNSに投稿することで情報発信
- ◆ 「#100万人へ発信実験」をテーマに、大学生の投稿を拡散させることで、同世代の若年層に、地域における課題や地域活動について、関心を持ってもらう機会を創出

スライド16

「学生×地域つながる未来プロジェクト」での活動紹介  
(令和2年度)

オンライン化でプロジェクトの幅が広がった!!

- ◆ 投稿の拡散のみに協力するボランティアを「指先ボランティア」と称し、多様な関わり方ができることを明示したことで、年代や居住地など関係なく、多くの人が本プロジェクトに関わることができるようになった。
- ◆ オンラインでの活動が可能となったことにより、令和3年度から遠方の大学生も本プロジェクト参加可能とする契機になった。  
(令和元・2年度は京都府内在住もしくは府内の大学に通う大学生が対象だった。)
- ◆ 令和2年度の成果報告ホームページ  
[https://www.pref.kyoto.jp/chiiikokyo/gakusei/gakusei\\_column.html](https://www.pref.kyoto.jp/chiiikokyo/gakusei/gakusei_column.html)



スライド17

「学生×地域つながる未来プロジェクト」での活動紹介  
(令和3年度)

さあ、地域への扉を開けよう!

- ◆ 38名の大学生と7つの地域活動団体が参加
- ◆ 大学生が団体の活動現場を訪れる対面での活動と、Zoom等を活用したオンライン活動が両方実施できるようにした。  
⇒ 初めて遠方(関東)から大学生が参加  
令和3年度に関東から参加した大学生のインタビューホームページ  
[https://www.pref.kyoto.jp/chiiikokyo/gakusei/r3\\_houkoku.html#arai](https://www.pref.kyoto.jp/chiiikokyo/gakusei/r3_houkoku.html#arai)

スライド18

「学生×地域つながる未来プロジェクト」での活動紹介  
(令和3年度)

- ◆ 令和3年度の成果報告ホームページ  
[https://www.pref.kyoto.jp/chiiikokyo/gakusei/r3\\_houkoku.html](https://www.pref.kyoto.jp/chiiikokyo/gakusei/r3_houkoku.html)



スライド19

「学生×地域つながる未来プロジェクト」での活動紹介  
(商店街編 令和4年1月～12月)

- ◆ 17名の大学生と3つの商店街が参加
  - ・ 3upS (新大宮商店街)
  - ・ 新京極商店街
  - ・ 男山中央センター商店街
- ◆ 対面での活動に加えて、SNSを活用した商店街の広報を行うなど、対面・オンライン両方に対応
- ◆ 参加学生の活動に係る交通費の補助を開始
- ◆ 「学生×地域つながる未来プロジェクト商店街編」のホームページ  
[https://www.pref.kyoto.jp/chiikikokyo/gakusei/r4\\_1.html](https://www.pref.kyoto.jp/chiikikokyo/gakusei/r4_1.html)



スライド20

「学生×地域つながる未来プロジェクト」での活動紹介  
(令和4年度)

一緒に創ろう！  
地域のすてきなコミュニティ！

- ◆ 53名の大学生と11の地域活動団体が活動中
- ◆ 対面での活動がメイン
- ◆ 京都府があまり介入しなくても、団体と大学生の関係性の構築がうまくいっているチームが多数



スライド21

「学生×地域つながる未来プロジェクト」での活動紹介  
(令和4年度)

- ◆ 令和4年度のホームページ  
[https://www.pref.kyoto.jp/chiikikokyo/gakusei/r4\\_1.html](https://www.pref.kyoto.jp/chiikikokyo/gakusei/r4_1.html)



スライド22

参加した大学生の活躍(成果)

1. 本プロジェクト終了後も地域活動団体のもとで活動を継続！
2. 複数年度にわたって本プロジェクトに参加し、参加2年目からはチームのリーダーとして地域活動団体・大学生・京都府の架け橋に！
3. 新たな地域活動団体を設立し、本プロジェクトの受入団体に！
4. 地域での学びを活かして社会に！
5. 本プロジェクトでの経験と大学での学びを繋げて研究・考察！

スライド23

本プロジェクト終了後も地域活動団体のもとで活動を継続！  
(参加した大学生の活躍①)

白川まちづくり協議会 (CoCoしらかわ) チーム

- ◆ 令和2年度に本プロジェクトを通して活動に参加した大学生が、本プロジェクト終了後も団体のメンバーとして活動を継続



スライド24

複数年度にわたって本プロジェクトに参加し、参加2年目からはチームのリーダーとして地域活動団体・大学生・京都府の架け橋に！  
(参加した大学生の活躍②)

京都大学4年生 森下 航平さん

- ◆ 令和2～4年度に「NPO法人丹波漆」チームとして本プロジェクトに参加
- ◆ 森下さんへのインタビューHP
  - > [https://www.pref.kyoto.jp/chiikikokyo/gakusei/r3\\_houkoku.html#morishita](https://www.pref.kyoto.jp/chiikikokyo/gakusei/r3_houkoku.html#morishita)
  - > [https://www.pref.kyoto.jp/chiikikokyo/gakusei/gakusei\\_interview.html](https://www.pref.kyoto.jp/chiikikokyo/gakusei/gakusei_interview.html)



スライド25

複数年度にわたって本プロジェクトに参加し、参加2年目からはチームのリーダーとして地域活動団体・大学生・京都府の架け橋に！  
(参加した大学生の活躍②)

- ◆ 令和3年度(参加2年目)からは、チームのリーダーとして、京都府・地域活動団体と協働し、「NPO法人丹波漆」チームの活動をプロデュース
- ◆ 地域活動団体と大学生の主な連絡役を担う。  
⇒ リーダーの大学生の積極的な働きかけや意欲、大学生目線での多様なアイデア・提案が一つの決め手となり、「NPO法人丹波漆」は本プロジェクトへの継続参加を決定
- ◆ 令和3年度には多くの人が丹波漆について考える契機となるよう、チームで「丹波漆を考えるアイデアブック」(左下の画像)を作成



▶ 「丹波漆を考えるアイデアブック」PDF  
<https://www.pref.kyoto.jp/chiiikokyo/gakusei/documents/ideabook.pdf>

スライド26

大学生が新たな地域活動団体を設立して本プロジェクトの受入団体に！  
(参加した大学生の活躍③)

3upS (サブス)

- ◆ 令和2年度に「森へのパスポート」チームとして本プロジェクトに参加した大学生2名が、活動時に訪れた新大宮商店街に関心を持ち、その魅力発信を行う任意団体を設立
- ◆ 商店街紹介ツアー等のイベント開催やInstagramでの商店街内店舗の紹介等を実施
- ◆ 令和3年度と商店街編では受入団体として、本プロジェクトに参加
- ◆ 商店街編では次期担い手募集を行い、新たに仲間となった学生と一緒に活動中



スライド27

地域での学びを活かして社会に！  
(参加した大学生の活躍④)

同志社大学4年生 野末 涼音さん

- ◆ 令和2年度に「花背ワンダーランド実行委員会」チームとして本プロジェクトに参加
- ◆ 本プロジェクトで得た地域との関わり方や経験を活かして、地元の行政職に就職予定
- ◆ 野末さんへのインタビューHP  
[https://www.pref.kyoto.jp/chiiikokyo/gakusei/gakusei\\_interview2.html](https://www.pref.kyoto.jp/chiiikokyo/gakusei/gakusei_interview2.html)



スライド28

地域での学びを活かして社会に！  
(参加した大学生の活躍④)

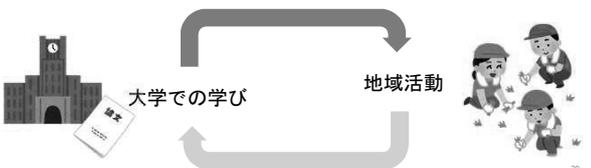
- ◆ 地域の活性化に興味を持ったのは、高校生のときに受けた授業「地域課題について調べて市議会で提案し、市議会議員からフィードバックをもらう」という授業があった。
- ◆ 本プロジェクトでの活動終了後、書籍で「本当に地域住民は地域活性化を望んでいるのか」という問いを見て、実際に地域住民の声を聴くことの大切さを感じた。
- ◆ 大学生が地域活動に参加することで、地域住民や地域活動団体では気づかない「第三者の視点」で地域を俯瞰することができると思った。



スライド29

本プロジェクトでの経験と大学での学びを繋げて論文作成！  
(参加した大学生の活躍⑤)

- ◆ 大学で学んだ知識や技術を活かして地域活動に取り組み、活動を通して感じたことや経験を活かして大学の論文作成や研究を行うという、**大学での学びと地域活動を相互に活かすサイクル**を生み出すことに成功した大学生が複数育っている。



スライド30

参加した地域活動団体からの声

- ◆ 今まで学生の受入について考えたことがなかったが、本プロジェクトへの参加を機に**学生ボランティアの受入体制構築に向けて検討してみよう**と思った。
- ◆ 若い大学生が活動に参加することで、団体のメンバーをはじめ地域住民の方々がとても喜ばれる！**活動が活気づく**！
- ◆ 自身の団体が苦手としている**SNSでの発信**を大学生に担ってもらえて、幅広い層に活動を知ってもらうことができた。
- ◆ **大学生の目線で自身の団体の活動を振り返ることができた。**
- ◆ ボランティアという災害時のお手伝い等、「受入先の指示のもと無償で従事してくれる人」というイメージがあったが、本プロジェクトに参加して、**ボランティアの方も「一緒に協働して地域の課題を解決していく仲間」だという意識が芽生えた。**

スライド31

多様な主体と協働する上で大切にしていること

1. 対話と協働

2. 一緒に創る

31

スライド32

多様な主体と協働する上で大切にしてきたこと①  
「対話と協働」

学生×地域つながる未来プロジェクトは、地域活動団体、大学生、京都府など多様な主体が関わり合うプロジェクト。

まずは様々な人と対話して、自分たちとは異なる立場・年代の主体でも、その考え方などを理解しようと努める！

「対話」を大切に！



32

スライド33

多様な主体と協働する上で大切にしてきたこと①  
「対話と協働」

- ◆ 「協働」とは、共通する目標に向かって複数の人々が力を合わせて協力しながら働くこと。
- ◆ 多様な主体が対等な目線で意見を述べ、尊重し合う。
- ◆ 参加者全員が主体的に意見・活動する！  
誰もが本プロジェクトの「主人公」！

全員が対等な目線で「協働」することを大切に！



33

スライド34

多様な主体と協働する上で大切にしてきたこと①  
「対話と協働」

立場や年代の異なる地域活動団体と大学生が協働することで今までなかった発想が得られて、互いにとってプラスになる！

協働することで相乗効果が生まれる！



34

スライド35

多様な主体と協働する上で大切にしてきたこと②  
「一緒に創る」

- ◆ 京都府だけでプロジェクトを企画せず、大学のボランティアセンター等にヒアリング
- ◆ 本プロジェクトの活動が始まってからも、参加している大学生や地域活動団体の意見・ニーズを聞いて、日々プロジェクトを改良

みんなで創るプロジェクト



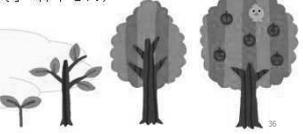
35

スライド36

多様な主体と協働する上で大切にしてきたこと②  
「一緒に創る」

- ◆ 本プロジェクトでの活動を通して生まれた「芽」を大切に
  - 「3upS」設立に当たっても大学生から京都府に相談があった。本プロジェクトには大学生の地域活動団体設立を支援するスキームはなかったが、本プロジェクトの受入団体になってもらうことで、京都府が伴走支援
  - 本プロジェクト内で意欲的に活動する大学生を発見！次年度以降、チームのリーダーをお願いして、より主体的に活動してもらえるようにサポート（京都大学 森下さん）

小さな芽でも大切に見守り育てることで予想もしていなかった物語が生まれる！



36

スライド37

地域活動と「大学での学び」

「大学での学び」と地域活動の共通点は意外と多い！

法学部 心理学部 経営学部

「こういう条例を作ったら、「シャッター商店街」が減るんじゃないかな？」

「人が商店街に来なくなる心理って何だろう？」

「マーケティングの知識を活かして考えてみよう！」

スライド38

地域活動と「大学での学び」

レジ袋有料化が義務付けられたからレジ袋のゴミは減った気がするなあ

「割れ窓理論」から考えると、川を綺麗にしておくゴミを捨てる人が減るんじゃないかな？」

この間の環境学の授業で習った「マイクロプラスチック」ってこうやって発生するのかな？」

スライド39

地域活動と「大学での学び」

大学での学び 地域活動

地域活動と「大学での学び」がうまく循環すると  
思わぬ相乗効果生まれる！

スライド40

地域活動と「大学での学び」 (事例①)

【 京都大学 総合人間学部 4 回生 】の場合

- ◆ 「NPO法人丹波漆」チームに所属
- ◆ 大学の講義で学んだ「根本問題の考え方」の知識を活かして、丹波漆の今後の在り方を考える根本的な問いを含む、「丹波漆を考えるアイデアブック」を作成
- ◆ 地域活動の経験やアイデアブックの作成を通して感じたことを大学の論文にまとめた。

スライド41

地域活動と「大学での学び」 (事例②)

【 同志社大学 政策学部 4 回生 】の場合

- ◆ 「花背ワンダーランド実行委員会」チームに所属
- ◆ 過疎地域における活動での経験などを活かして、大学で研究対象としている「商店街活性化における学生団体の可能性」に関する論文を執筆
- ◆ 地域住民との触れ合い等を通して、「地域活性化」について問うきっかけになった。

スライド42

地域活動と「大学での学び」 (事例③)

【 南山大学 人文学部 4 回生 】の場合

- ◆ 「NPO法人丹波漆」チームに所属
- ◆ 「NPO法人丹波漆」チームで伝統文化の継承活動に実際に携わることで、大学で研究対象としている「これから若者が地域文化とどう携わっていくか」について論文を執筆予定

スライド43

**地域活動と「大学での学び」**

「大学での学び」を活かして様々な視点で  
「地域」を見ることができれば  
これまで見てきた世界とは違う世界が見えるかも！？

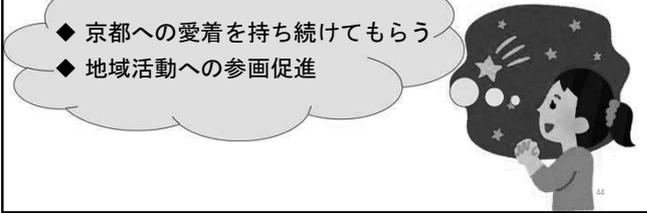


スライド44

大学卒業後も地域とつながり続けてもらえるように…

大学生が卒業後も地域と関わり続けられるような  
仕組みを構築予定

- ◆ 京都への愛着を持ち続けてもらう
- ◆ 地域活動への参画促進



スライド45

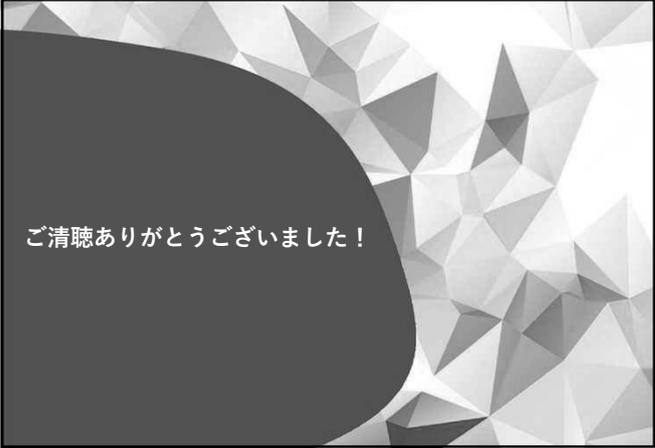
(参考) 関連ホームページ・SNS

- ◆ 「学生×地域つながる未来プロジェクト」メインホームページ  
(メインホームページから各年度のプロジェクトに係るホームページへリンク可)  
<https://www.pref.kyoto.jp/chiikikokyo/gakusei/chiiki.html>
- ◆ 「学生×地域つながる未来プロジェクト」Twitter  
<https://twitter.com/gakuseichiiki>
- ◆ 「学生×地域つながる未来プロジェクト」Instagram  
<https://www.instagram.com/gakuseichiiki/>
- ◆ 「学生×地域つながる未来プロジェクト」Facebook  
<https://www.facebook.com/gakuseichiikikyoto/>
- ◆ 「地域交響プロジェクト」ホームページ  
<https://www.pref.kyoto.jp/chiikikokyo/index.html>



スライド46

ご清聴ありがとうございました！



## 第3分科会

# 学びの場のダイバーシティとインクルージョンの実現

## 報告者

- 星加 良司 東京大学大学院 教育学研究科附属  
バリアフリー教育開発研究センター 教授
- 村田 淳 京都大学 学生総合支援機構 准教授/DRC（障害学生支援部門）  
チーフコーディネーター
- 土橋 恵美子 同志社大学 学生支援センター スチューデントダイバーシティ・  
アクセシビリティ支援室 チーフコーディネーター

## コーディネーター

- 山口 洋典 立命館大学 共通教育推進機構 教授



# 学びの場のダイバーシティとインクルージョンの実現

コーディネーター

立命館大学 共通教育推進機構 教授 山口 洋典

---

---

## ○本分科会のねらい

大学コンソーシアム京都が大学間連携による障害のある学生への支援に取り組んで20年あまりが経過した。この間、2016年4月に障害者差別解消法が施行され、社会的障壁を取り除くための合理的配慮が努力義務とされ、2021年の法改正によって施行日の2024年4月1日からは法的義務となる。

法改正に対する消極的対応ではない形での、多様な人々の学びと成長の環境はいかに実現しうるか。大学入学へのアクセスと学修環境のユニバーサルデザインの両面から迫った。

## ○報告の概要

前半は分科会のコーディネーターにより、同志社大学チューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室（SDA室）の土橋恵美子チーフコーディネーターと、京都大学学生総合支援機構障害学生支援部門の村田淳准教授との鼎談とした。同志社大学は2001年から有償での講義補償に取り組んでおり、2002年度に大学コンソーシアム京都が京都市社会福祉協議会との共同主催で「ノートテイク養成講座」を実施する上で制度設計の一つの型としていた。また、京都大学では代表校として申請した「高等教育アクセシビリティプラットフォーム」が文部科学省の平成29年「社会で活躍する障害学生支援プラットフォーム形成事業」に選定され、支援ノウハウの集約・発信や組織間ネットワークングに取り組んでいる。

土橋コーディネーターからは長年にわたる経験を振り返り、2021年に「障がい学生支援室」がSDA室へと改組される中、障害種別による困りごとへの支援ではなく、ニーズとして顕在化していない部分に関心を向けていることが示された。村田准教授からは、担当者による支援の提供ではなく機関として学習者の権利保障の姿勢で臨むことが、合理的配慮のもとでの支援の標準化への手立てではないかと示された。

鼎談の後には東京大学教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センターの星加良司教授による話題提供が行われた。ただし、今回は話題提供者とコーディネーター全員がキャンパスプラザ京都にて一同に会していたこともあり、鼎談のあいだにもコメントを付していただいた。その際、ご自身が小児がんにより全盲となり、大学での修学を経て障害学という観点から障害の概念を研究してきた背景をもとに、「障害学生に限らず、新しい考え、トレンドが訪れたとき、大変なのは素人ではなく専門集団」と前置きした上で、社会がもたらしている不利益をマイノリティが経験しないようになることがバリアフリーだと指摘した。

## ○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

全体討議では、高等教育へのアクセスの保障と学習環境での権利の保障に加えて、特別支援教育を通じた教育の質保証についても議論が及んだ。最後はD&Iに加え、E（Equity）を加えたDEIの枠組みで、建設的に対話のもとで支援者側が過重な負担せず当事者に過不足なく行き届いた関係構築を図ることが理に合った配慮となることを確認した。

スライド1

第28回FDフォーラム  
分科会「学びの場のダイバーシティとインクルージョンの実現」

合理的配慮の合理性とバリアフリーへのバリア

星加良司  
東京大学大学院教育学研究科  
附属バリアフリー教育開発研究センター

1

スライド2

合理的配慮の「合理性」をめぐって

- rationalではなくreasonableとしての合理性  
=理由付け可能な、理にかなった
- ↓
- ・必要性&適当性&非過重性(東京大学対応要領)
- ・「社会的障壁の除去」「個々のニーズ」「非過重負担」  
(川島聡他『合理的配慮』有斐閣)
- ↓
- ・複数のreasonの調整プロセスとしての建設的対話

2

スライド3

合理的配慮の「合理性」をめぐって

- 前提としての「社会モデル」  
=社会の偏り・歪みに由来するマイノリティの不利益  
→社会の偏り(社会的障壁)の是正
- \*なぜ「合理的配慮=異なる取り扱い」をしなければ差別になるのか？
- ・既存の環境は、健常者の利便性を前提に作られてしまっているために、障害者にとっては使い勝手が悪い(非中立性・非対称性)
- ・「非中立」な環境を放置し、可能な範囲の代替措置すら行わないことは不当(差別的)

3

スライド4

合理的配慮の「合理性」をめぐって

- 「合理性」の副作用1:「個人モデル」の密輸入
- 「入り口」における心身機能への着目
- ・「障害者」  
=「身体障害、知的障害、精神障害(発達障害を含む。)その他の心身の機能の障害がある者であって...」
- ↓
- 機能アセスメントの重視
- ・配慮の「過剰性」の抑止  
→困難が障害(インペアメント)との関連で生じたものなのか否か  
→診断的な知識体系(医学・心理学)
- (星加良司, 2022, 「合理的配慮は「社会モデル」を保証するか」, 飯野由里子他『「社会」を扱う新たなモード』生活書院)

4

スライド5

合理的配慮の「合理性」をめぐって

- 「合理性」の副作用2:「コンプライアンス」の意図せざる効果
- 「最低限」が「上限」にすり替わる
- ・「違法性=差別」の基準と「十分なアクセス保障」の水準とのギャップ
- ・法制化により「違法性=差別」の基準が前景化
- ・機会の確保  
=「障害を理由に修学を断念することがないよう、修学機会を確保すること、また、高い教養と専門的能力を培えるよう、教育の質を維持すること」(文部科学省・対応指針)
- \*「機会の確保」や「質の維持」は充分に機能するか？
- cf.  
・障害学生に対して複数の配慮が提供可能で、そのうち最も容易な配慮で単位取得に支障がないような場合  
(星加良司, 2016, 「合理的配慮と能力評価」, 川島聡他『合理的配慮』有斐閣)

5

スライド6

バリアフリーへの「バリア」をめぐって

- 障害学生支援の神話:「支援」を減らすと「自立」につながる  
→(大学にとっては)より「有効」な支援が可能になる。  
・(障害学生にとっては)社会に出て「通用する」人間になる。  
・用意された「支援」に頼らず、自ら「支援」を獲得する生き方
- ↓
- ・支援調達のスキル獲得によるリスク管理の自己責任化  
→ネオリベラルな「企業化された主体」  
(後藤吉彦・二階堂祐子, 2007, 「大学の障害学生『支援』についての一考察」障害学会第4回大会ポスター報告)
- ↓
- 「隠れたカリキュラム」の問題
- ・「社会」の秩序に適應できる人間の育成  
→「教育の基盤としての支援」ではなく「教育的介入としての支援」  
(星加良司, 2015, 「「分ける」契機としての教育」『支援』vol.5.)

6

スライド7

### バリアフリーへの「バリア」をめぐって

- 「支援」と「プライバシー」のジレンマ
  - ・本人の学習にとって役に立つ支援を提供したいという思い
  - 場の中で「障害」を目立たせてしまう
    - =「障害の顕在化」「障害のスポットライト化」
    - ↓
  - ・その場で自分が何者として振る舞いたいかを、自らコントロールすることが困難になる
    - ↓
  - ・2つの価値の間でトレードオフが生じる  
(西倉実季, 2016, 「合理的配慮をめぐるジレンマ」, 川島聡他『合理的配慮』有斐閣)

スライド8

### バリアフリーへの「バリア」をめぐって

- 「ルール」というハードル
  - \*合理的配慮の3類型=「物理的環境への配慮や人的支援の配慮」「意思疎通の配慮」「ルール・慣行の柔軟な変更」(文部科学省・対応指針)のうち、最も抵抗が大きいのは?
- 「公平性」という呪縛
  - \*それを評価する視点はどこにあるか? 「不公平」という感覚はどこからくるのか?

スライド9

### バリアフリーへの「バリア」をめぐって

〈マジョリティ性の壁〉

- 「マジョリティ-マイノリティ」の非対称な関係性(≪「社会モデル」の基本認識〉)
  - ↓
  - ①歴史的堆積による社会システム上の有利さ
  - ②権力構造に由来する意思決定上の優位性
    - 格差の増幅
  - ③認知的バイアスに基づく特権性の不可視化
  - ④心理的防衛機制
    - 格差の維持・正当化
    - ↓
  - ・重層的に形成された「壁」の強固さと耐久力

スライド10

### 「ダイバーシティ&インクルージョン」の視点

- 支援ニーズの多様性と普遍性  
(研究や教育を行う上で出会う様々な場面)
  - ・研究テーマ選びの際に特定の属性を理由としたテーマに誘導される  
(女性だから、日本人だから、障害者だから〇〇のテーマはどうか、という働き方)
  - ・特定の分野に対する無理解や社会的なバッシングを前提に研究活動を強いられる  
(当事者であることで、客観性がないなどの外部からの言いがかりなど)
  - 〈周囲の態度や風通し〉
    - ・障害やLGBTなどの人がいないことを前提の対応をされたり、個別事情を話す「かわいそうな人」を扱うように小声で対応されたりする
    - ・所属機関と交渉する際の心理負担が重い(Ts+Tg、障害)
  - 〈研究・教育の現場で行う作業〉
    - ・障害者の長性を前提にした野外実習のあり方が必ずしも学術的に必要かどうか分からない事例がある  
(フィールド調査実習など)
  - 〈研究や教育の場における日常の行為〉
    - ・授業や治療の必要性や、体調不良、育児など、諸事情により必要となる時間を理解されない(障害、女性)
- (藤城さや香他, 2019, 「研究環境における多様性のためのアンケート調査報告:障害・ジェンダー・セクシュアリティと若手研究者」)

スライド11

### 「ダイバーシティ&インクルージョン」の視点

- 支援ニーズの交差性:「障害×X」
  - ・「大学における障害支援と性的少数者の支援とが互いを想定せずに行われる傾向の強い現状では、ダブルマイノリティの人々は孤立しやすくなっている」(藤城他 2019)
- 「交差性(intersectionality)」
  - =ひとつの категорияに着目して差別現象を捉えようとするのが、常に大きな見落としを伴っていることに注意を喚起するための視点
  - (Crenshaw, K., 1989, "Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine, Feminist Theory and Antiracist Politics," The University of Chicago Legal Forum Volume: Feminism in the Law: Theory, Practice and Criticism.)

スライド12

### 「ダイバーシティ&インクルージョン」の視点

- ミシガン大学「多様性・平等性・包摂性に関するキャンパス風土調査」より
  - 障害学生は非障害学生と比べて
    - ・大学の風土に満足しておらず、
    - ・価値ある存在として扱われている感覚、所属感覚、成長できているという感覚を持っておらず、
    - ・公平に扱われているという感覚を持っておらず、
    - ・差別されたと感じる経験をしている。



## 第4分科会

### 25年度新生は何をどう学んで来るのか(来ないのか) —新指導要領を手がかりに大学基礎教育を考える—

#### 報告者

合田 哲雄 文化庁 次長

玉置 崇 岐阜聖徳学園大学 教育学部 教授

坂本 尚志 京都薬科大学 基礎科学系 准教授

神代 健彦 京都教育大学 教育学部 准教授

#### コーディネーター

上野 嘉夫 京都薬科大学 基礎科学系 教授

築地 達郎 龍谷大学 社会学部 准教授



---

---

## 〈第4分科会〉

# 25年度新入生は何をどう学んで来るのか（来ないのか） —新指導要領を手がかりに大学基礎教育を考える—

コーディネーター

京都薬科大学 基礎科学系 教授 上野 嘉夫  
龍谷大学 社会学部 准教授 築地 達郎

---

---

### ○本分科会のねらい

2025年度から新指導要領に基に学んできた大学生が誕生する。教科科目内容の変更を知悉した大学関係者は少なくないかもしれないが、その変更の背景や指導要領が目指すゴールを併せて知る者の数はどうだろうか。大学教育の体系化を進める上で、大学入学前の教育体系を知ることは必要不可欠である。本分科会は、その細目ではなく、その制定の背景、理念、目標、施行、他国との比較について報告を受け、それに基づく討論を行った。討論を通じて、参加者各位から「思い」が湧出することが目標であった。

### ○報告の概要

分科会の報告は、新指導要領策定に深く関わられた合田哲雄氏（文化庁）から新指導要領の全体像を提示頂くことで口火を切った。幾度かの技術革新や大きな社会観の変容に比して、教育体制や教育観の変化は小さく、一様性・同質性を求める教育からの脱却は「待ったなし」の状況であることを刺激的に示して頂けた。続いて、玉置崇氏（岐阜聖徳大）から、新指導要領の目標に向けた教育現場における実践について、IT機器を活用とそれがもたらす児童・生徒と教員間の新たな関係性下での授業風景の動画を交えながら報告頂いた。さらに、指導要領の理念への接近を図るべく、坂本尚志氏（京都薬科大）から、新指導要領の「総合的な探究の時間」とフランスの高校における「哲学」教育の比較から見えるものを報告頂いた。そこでは、「私」を排除し「型」を重視した探究を志向するフランスの方式と、「私」の体験としての探究を志向する日本の方式の違いが鮮明となり、フランス式寄りと捉えてよい従来の日本の大学教育が今後志向すべき方向性への問題提起となった。

### ○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

合田氏、玉置氏、坂本氏の3氏の報告を踏まえて、指定討論者である神代健彦氏（京都教育大）から3氏への質問がなされ、3氏がそれに答えるという形で討論を開始した。大別すると、①一様性や同質性の排除、人としての自立を目標に謳いながら、その一方でデジタルスキルや積極性などの新たな評価尺度が発生しようとしていることへの危惧、②坂本氏から提起された「私」の位置づけ、に関するものである。報告者3氏からの、それぞれの立ち位置からの真摯な回答と、回答への追加質問で大いに盛り上がる討論となった。オンライン会場からは、教員養成、採用に関する質問が数件あり、熱の入った回答が得られた。ひとつの方向への議論の収斂は、当初から期待するところではなく、4氏の真摯な討論に時間経過を忘れてしまう充実した分科会となった。「小中高教育を規定する」という類の固定観念に捉われなければ、新学習指導要領は、大学教育を考える上でも格好の拠り所であることが、参加者各自の立ち位置を超えて確認できたのではないだろうか。

本分科会の報告と討論を、合田氏の言う「自立して思考するために必要な『共通性』を、教育に関わる者を含む社会が共有する」方向への風として、参加者各位に感じて頂けたならば大きな喜びである。

スライド1

第28回FDフォーラム第4分科会

25 年度新入生は何をどう学んで来るのか（来ないのか）  
 —新指導要領を手がかりに大学基礎教育を考える—

※本分科会では新学習指導要領とは「平成29・30・31年改訂学習指導要領」を指します

スライド2

分科会概要

今から2年半後の2025 年度、新学習指導要領に沿って学んだ新入生が大学に進学してくる。新指導要領は「生涯にわたって探究を深める未来の創り手」の育成を掲げ、「主体的・対話的で深い学び」を実現するとしている。では、実際に初等中等教育はどのように変化するのだろうか。とくに、教育格差が深刻化・固定化する社会を打破する原動力としての「相互理解の基盤」となるべき基礎教育はおそろそそになっていないだろうか。分科会では、学習指導要領の「理念」と「実装」を俎上に上げ、小中高大を貫く基本的な学びのあり方を考えたい。

第4分科会

スライド3

「俎上に上げ」と書いたが・・・ 批判集会ではない

大学教員は、新学習指導要領の何をどの程度知っているだろうか？それを学内教育に反映するような動きはあるだろうか？

「指導要領って何？」という人は、まさかないとは思いますが・・・何を学ぶ、どう学んでくる、なぜ変わった、はどうだろうか？

↑ 私たちは、「何を」の捉え方は大丈夫か？

因みに  
 「高等学校学習指導要領（平成30年告示）」は全604頁（約120頁は中学校指導要領等）

各教科の解説も分厚い  
 （数学 理数210頁、理科 理数371頁 外国語 英語231頁）

その設計思想や目標を知らなければ、不毛な「近頃の学生は・・・」、  
 『高校は』 『大学は』 何を教える」が絶え間なく起きる

スライド4

The screenshot shows the official website for the 'Revised Learning Guidelines' (平成29-30-31年改訂学習指導要領). The page lists various documents and provides a table of contents for the 'Revised Points' (改訂のポイント), including sections on 'Basic Education' (基礎教育), 'High School Education' (高等学校教育), and 'University Education' (大学教育).

スライド5

「俎上に上げ」と書いたが、「批判」が目的ではない。

「大学はこれをどう取り入れて、どんな卒業生を輩出するのか」を考える機会

『共通の意識や認識を持っている』のに、立ち位置によって表現が異なると、  
 不毛な誤解や対立を生んでいないか？

『同じものを見ているのに、視線の違いから異なると思い込んでいないか？』

議論の深まりのきっかけとなるよう、期待しています

スライド1

**学習指導要領の質的転換の経緯と現状について**  
 ー理解が解決を保障するわけではないが、理解なき対峙は不毛であるー  
 京都FDフォーラム第4分科会  
 2023年2月23日  
 文化庁次長  
 合田哲雄

スライド2

**【経歴】**

1970年生 倉教育ち

1992年 文部省入省（I種・法律区分）  
 福岡県教育庁高校教育課長  
 2000年 文部科学省高等教育大学課課長補佐（国立大学法人化を担当）  
 02年 同 初等中等教育局教育課程企画室長（学習指導要領2008年改訂を担当）  
 05年 同 大臣官房企画官・会計課副長  
 08年 NSF【全米科学財団】フェロー  
 11年 文部科学省高等教育局企画官  
 12年 同 研究振興局学術研究助成課長  
 13年 同 初等中等教育局教育課程課長（学習指導要領2017年改訂を担当）  
 15年 同 内閣官房内閣参事官  
 17年 文部科学省初等中等教育局財務課長  
 18年 同 科学技術・学術総括官  
 20年 同 内閣府（科学技術・イノベーション推進事務局）審議官  
 21年 文化庁次長  
 22年

**【兼職・兼業等】**

- 九州大学、宮城教育大学、関西大学、東京大学、上越教育大学、東北大学の非常勤講師等を経て、現在、兵庫教育大学客員教授、広島大学客員研究員
- 目黒区立東山小学校（3年間）/東山中学校（3年間）でPTA会長を経験

スライド3

**【著作】**

論考 「文部科学省の政策形成過程に関する一考察」（『日本教育行政学会年報35』、2009）  
 「アイデアとしての『Society5.0』と教育政策」（『教育制度学研究27』、2020）  
 単著 『学習指導要領の読み方・活かし方』（教育開発研究所、2019）  
 共著 『学校の未来はここから始まる』（教育開発研究所、2021） 木村泰子先生、工藤勇一先生との対談  
 『メディアリテラシー』（時事通信社、2021）  
 『探究モードへの挑戦』（人言洞、2022）

**【座談会】**

「学校を問い直す」（『教育展望』（2022年4月号）） 安藤忠彦先生、高野一徳先生との対談

**【対談動画】**

藤原和博さん（元杉並区立和田中学校長、元奈良市立一条高校長、『公立校の逆襲』）との対談動画（2022） <https://www.youtube.com/watch?v=BWSXupxSIBs>  
 西山圭太さん（元経済産業省局長、東京大学客員教授、『DXの思考法』）との対談動画（2022） <https://www.rieti.go.jp/jp/events/bbl/22030401.html>

**【対談収録】**

渡辺敦司（教育ジャーナリスト）『学習指導要領「次期改訂」をどうする？ 検証 教育課程改革』（ジグザグ社、2022）  
 中西茂（教育ジャーナリスト、玉川大学教授）『教育改革を問う キーパーソン7人と考える「最新論争点」』（教育開発研究所、2022）

スライド4

**【本日、話したいこと】**

カレッジマネジメント Vol.198 May-Jun.2016  
 未来社会を創造する資質・能力と高大接続システム改革 初等中等教育局教育課程課長

カレッジマネジメント Vol.213 Nov. - Dec. 2018  
 動き始めた高校教育改革を前に、今大学に問われているもの 初等中等教育局財務課長

カレッジマネジメント Vol.232 Apr. - Jun. 2022  
 デジタル時代の初等中等教育と大学経営 子ども達の認知や関心に応じた学びへの転換  
 内閣府科学技術・イノベーション推進事務局審議官

※ 3つの拙文はすべてインターネット上に掲載。

○ 初等中等教育の変容が進むなかで、教科書の知識再生型問題中心の入試、文理分断な学部・学科構成、学生の力を伸ばすためのデザインなきカリキュラムは、大学の規模が大きいから、首都圏・大都市圏にあるから、伝統があるからと言って生き残れるだろうか。文部科学省記者会見室で、大学入学共通テストにおける記述式問題導入は時期尚早と訴えた横浜市の高校生菊田隆一郎さんは、SNSで「裏でいるいる大人が動いているに違いない」、「AO入試のための実績づくりだ」といった批判を受けたが、「覚悟はしていたし、いろんな意見が出ることを望んで行動を起こした」と述べている。その菊田さんは「わが国の大学を選ばず、アメリカの大学に進学した」。

○ 岸田内閣のデジタル臨時行政調査会は、2021年末に閣議決定した「デジタル原則」に基づき、全ての規制や制度を見直すこととしている。デジタル化で大学制度も大きく変容することが見込まれるなか、菊田さんのような自立した若者に選ばれる大学になることが求められている。

第4分科会

スライド5

**高等学校の教科・科目構成について**  
（科目構成等に変更があるものを抜粋）

共通必修  選択必修  
**国語科** 外国語科  
 現代国語 英語表現 英語探究  
 英語基礎 英語総合  
**地理歴史科** 公民科 家庭科 情報科  
 地理総合 日本史探究 世界史探究 倫理 政治・経済 新課程 新課程総合  
 地理総合 歴史総合 公民  
**理数科** 総合的な探究の時間  
 理数探究 総合的な探究の時間  
**数学科** 理科  
 数学Ⅲ 数学C 物理 化学 生物 地学  
 数学Ⅱ 数学B 科学と人間生活 物理基礎 化学基礎 生物基礎 地学基礎  
 数学Ⅰ 数学A

※ 英語力調査の結果やCEFRのレベル、高校生の多様化するニーズへの対応などをも踏まえ検討。

※ 英検・英検準1級から見直しした課題を採択することを通じて、自分の学びや進路を自分で決めたいが、探究する能力を伸ばしたい方を明確化する。

スライド6

○ この改訂は、アイデアや知識といった目に見えないものの価値が産業社会を牽引するなかで、時代の歯車を回しているのは官僚でも大企業でもなく、同調圧力や正解主義を乗り越えて新しい価値を創出している起業家や社会起業家等であり、その新しいアイデアが次世代を切り拓くための認識を踏まえて行われた。

○ 他方で、インターネットの使い方がSNSでのチャットとゲームに偏り、学校カーストの息苦しさのなかチャットで即答しないと仲間外れにされるといった、子ども達を取り巻く強い同調圧力についての危機感も強かった。

○ 異なる考えを持つ他者と対話を重ねることは面倒で、人工知能（AI）や他者が決めたことに基づいたほうが楽だし、フェイクニュースが広がるデジタル社会においては、事実と当たったり論理的に検証したりして情報の真偽を確かめることも求められているが、これも面倒なことに違いない。

○ しかし、自分達で社会の方向性を決めることを放棄し、全てAIや特定のリーダーに丸投げする社会はデストピアそのもの。だからこそ、複雑な課題を丁寧に解きほぐして関係者の「納得解」を得るために、自分の頭で考え、他者と対話する力を育むことが求められている。

スライド7

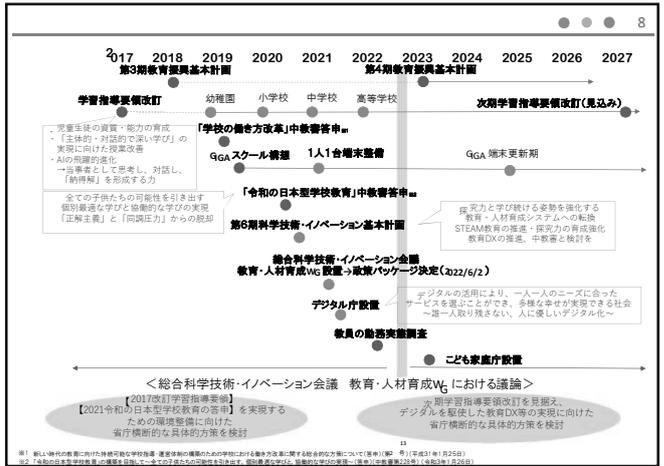
○ 例えば、高校の新教育課程の公民科が育成を目指す「現在の諸課題について、事実を基に概念等を活用して多面的・多角的に考察したり、解決に向けて公正に判断したりする力、合意形成や社会参画を視野に入れたら構築したことを議論する力」は次代に必要な力そのもので、新科目「公民」は大きな役割を果たす。

○ また、日本史・世界史の枠組みを取り払って近現代の歴史を学ぶ新科目「歴史総合」において、大正デモクラシーから戦争への道、終戦から戦後の復興、高度経済成長という流れを「大衆化」という文脈で捉えることは、世界を席捲するポピュリズムに向かい合ううえで不可欠な学びだ。

○ withコロナの厳しい状況下において、わが国においては「命」が「経済」かといった二項対立の議論になりがちだが、多くの社会課題の解決にはトレードオフの発想が必要であることは論を俟たず、数々の二次関数は社会課題の解決に当たってトレードオフの曲線のなかのどこで最適解を見いだすかという見方・考え方を働かせるために学んでいる。

○ 物理基礎において物質によって電気抵抗の抵抗率が異なっていることを理解したり、化学基礎で物質の構成粒子について学んだり、生物基礎で遺伝子や免疫について知ったりすることは、事実を科学的に把握し論理的に検証して、素朴概念に訴えるフェイクニュースのウソを見極めるうえで極めて重要である。

スライド8



スライド9

【ネーションステーツ・トランスフォーメーション】 明治5年(1872年)～ 藩藩縦割り体制(藩校、寺子屋) → 近代国民国家(学校)

OSとしての国語、母語で科学ができる国 ← 大槻文彦(文部省)『言海』

学制反対一揆 ← 村唯一の近代建築物とホワイトカラー(学校と教師)

最新のメディア(教科書、ノート、筆記用具)

「社会のどういふ風潮の、どういふ輩の子でも、ある一定の資格をとるために必要な記憶力と根気さえあれば、博士にも、官吏にも、軍人にも、教師にもなり得た。この時代の明るさは、こういう素朴主義から来ている。」

「坂の上の雲」の成功体験と慣性

- 社会的流動性確保の手段としての教育
  - 試験時間内に問題を読み、理解し、正解を書く能力偏重
- 教科研究の水準の高さ(師範・女子師範、高師・女高師、斎藤喜博、大村はま、...)
  - 学校や教科縦割りの自前主義と教育界の閉鎖性
- 体系的なカリキュラムと機会均等を支えるための教育制度
  - 学年に縛られ、クラス縦割りの逃げ場のない割り当て空間

※工業化社会では計画的な動勤性と文書主義が必須。子供たちはこの「慣性」に合わせる必要。

しかし、

- ☑ 同調圧力と正解主義(SNSと学校カースト、破壊的イノベーションを許容しない社会)
- ☑ 民主政の機能不全(フィルターバブル、フェイク、サウンドブルーフ・プルーラリズム...)
- ☑ 記憶力と根気の限界(エシカル・ハッカーと「善原で白兔を見つけることができる力」)

スライド10

でも、

- 「一人ひとりの子どもたちの特性や関心に応じた教育を通じて子どもたちの力を引き出し、**たいてい**—そんな教師の内発的な思いが100年前の「大正自由教育」や75年前の戦後新教育、そして現在各地域で行われている教科教育研究などより豊かな教育を実現しようという教師の取組みに展開。
- しかし、これらの意欲的取組みは、
  - ・ 昭和恐慌と戦争への道や高度経済成長といった時代潮流(みんなと同じことができることが大事！)
  - ・ 時代潮流を背景とした学習組や子ども組(子どもは強いなければ勉強しない！)
  - ・ 150年間確立した**学びのスタイルの慣性**と読むこと・書くこと偏重
  - ・ 技術的制約(紙の教科書、ノートに鉛筆、チョーク&トーク)

を前に頓挫したり、大きなうねりにはならなかった。

スライド11

○ 今、Society5.0やデジタル化を背景にした社会の構造的な変化は、「みんなと同じことができることが大事」から「他者との差異や違いに意味や価値がある」へという大きな変革をもたらしている、日本社会自体が岐路(エピソードで終わるのか、世界に存在感ある成熟社会になるのか)。

- ・ 液晶テレビ、半導体、携帯電話、J-pop、...
- ・ 成田悠輔『22世紀の民主主義 選挙はアルゴリズムになり、政治家はネコになる』(SB新書)

○ 話すこと・聞くこと、書くこと、読むことのそれぞれでも、文字情報や音、映像など扱う情報についても子供により得意・不得意。

準備に余念のない子、興味や関心が拡散して所狭しと走り回る子、特定分野に高い集中力を示す子...

○ この違いを抑え込んでみんなと同じことができるようになるのではなく、**特性や関心の違いを前提にその力を引き出しつつ、互いに自立した者同士の対話や協働によって成立する民主政の基盤を形成すること—公教育の意味**

○ 学習指導要領2017年改訂、GIGAスクール構想(2019年-)、中教審令和の学校教育答申(2020年)、デジタル庁設置(2021年)、CSTI政策パッケージ(2022年)、こども家庭庁設置(2023年)という矢継ぎ早な動きは「一人ひとりの子どもたちの特性や関心に応じた教育を通じて子どもたちの力を引き出したい」という教育界が求めてきたことの実現を志向。

スライド12

興村高明他編著『コミュニティ・オブ・クリエイティビティ』(日本文芸出版)

岡部眞貴(和光大学) 心理学での「ひらめきやすい人」

- ・ 初めから偏見を持たない
- ・ 柔軟に考えを改めることができる
- ・ 自分の誤りを適切に見直せる

父親が一人息子を連れてドライブに出かけた。ところがその途中で父親がハンドル操作を誤り、電柱に衝突する大きな交通事故を起こしてしまった。父親は即死、助手席の息子は意識不明の重体となり、すぐに救急車で病院に運ばれた。外科医が手術室に入り手術台に寝かせられた子どもを見るなり、「この子は私の息子だ」と言って驚いた。

野口寛典他編著『差別のない社会をつくるインクルーシブ教育』(学事出版)

野口寛典(インクルーシブ教育研究者)

社会はめまぐるしく変化をしており、その変化によって新たなニーズが生まれつつあるため、つねに変化に合わせて教育システムをアップデートしていかなければなりません。「達成」「実現」しないと「インクルーシブ教育」ではないのか?というのではなく、理想に向けて歩むプロセスそのものが「インクルーシブ教育」なのです。

障害以外のマイノリティ属性の子どもの教育を受ける権利を保障するためには、特別支援教育や障害児教育の枠組みのみではなく、通常の教育の枠組み自体をインクルーシブにしていけるための議論が欠かせません。



スライド19

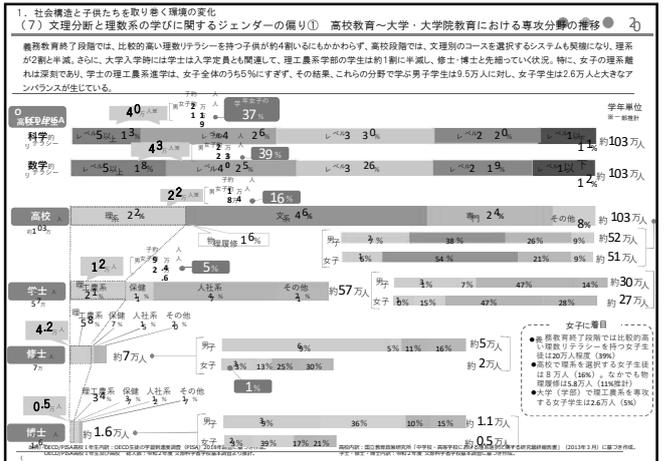
「骨太方針2022」（2022.6.7閣議決定）において明記された子どもたちの学びの転換

多様な子供たちの特性や少子化など地域の実情等を踏まえ、誰一人取り残さず、可能性を最大限に引き出す学びを通じ、個人と社会全体のWell-beingの向上を目指す。このため、コロナ禍を契機に進化した教育DXにおけるリアルとデジタルの最適な組合せの観点も踏まえつつ、あるべき姿を適切な方向性で次期教育振興基本計画において示す。人との触れ合いも大事にしながら、1人1台端末環境を前提として、自分のペースで試行錯誤できる「個別最適な学び」と「協働的な学び」の具体化を早急に実現する。その際、教育DXと連動した教育のハード・ソフト・人材の一体的改革を、家庭環境、学習環境の格差防止や個人情報保護、教師の勤務実態や働き方改革の進捗状況、教師不足解消に留意しながら、総合的に推進する。発達段階も踏まえつつ、同一の年齢・内容・教材等の前提に過度にとらわれず、全ての学校段階において、探究・STEAM・起業家教育等の基盤強化を図る。35人学級等についての小学校における全ての学校段階において、探究・STEAM・起業家教育等の基盤強化を図る。35人学級等についての小学校における全ての学校段階において、探究・STEAM・起業家教育等の基盤強化を図る。35人学級等についての小学校における全ての学校段階において、探究・STEAM・起業家教育等の基盤強化を図る。35人学級等についての小学校における全ての学校段階において、探究・STEAM・起業家教育等の基盤強化を図る。

学びの基盤的な環境整備を進める。非認知能力の育成に向け、幼児期及び幼保小接続期の教育・保育の質的向上、豊かな感性や創造性を育む文化芸術、スポーツ、自然等の体験や読書活動を推進する。ICTも効果的に活用し、不登校特例校の全段階対応等の設置や振興の充実の促進、S・C・S・Wの配置の促進等を通じた重大な取り組み、自殺や不登校への対応、特異な才能への対応や特別支援教育の充実、国内同等の学びの環境整備及びその特色をいかした教育の推進等の外教育施設の機能強化を図るとともに、公民館等の社会教育施設の活用促進により、地域の人材育成力の強化を図る。

未来を支える人材を育む大学等の機能強化を図る。このため、デジタル・グリーンなど成長分野への大学等の再編促進と産学官連携強化等に向け、複数年度にわたり予見可能性をもって再編に取り組める支援の検討や、私学助成のメリハリ付けの活用を始め、必要な仕組みの構築等を進めていく。その際、現在35%にとどまっている自然科学（理系）分野の学問を専攻する学生の割合についてOECD諸国で最も高い水準である5割程度を目指すなど具体的な目標を設定し、今後5〜10年程度の期間に集中的に意欲ある大学の主体性をいかに取組を推進する。また、あらゆる分野の知見を総合的に活用し社会課題への的確な対応を図る（総合知の創出・活用を目指し、専門性を大事にしつつも、文理横断的な大学入学選抜や学びへの転換を進め、文系・理系の壁を越えた人材育成を加速する。

スライド20



スライド21

1. 社会構造と子供たちを取り巻く環境の変化  
(5) より人々の身近になる科学・数学の世界

世界の研究や技術開発の目的の転足が、一人ひとりの多様な幸せ(well-being)に移りつつある中、開発された技術や研究の成果は、人間に近づく、より身近なものになってきている。また、コンピュータの急速な進歩により科学的手法が新たな広がり、サイエンス由来のイノベーションが人々の生活を一変させる社会構造になっている。科学・数学に関する基礎的な力は、一部の専門家のみでなく、市民的素養として、社会構造や社会課題解決の仕組みを理解し、活用していくために必要なものとなってきている。

身近になるサイエンスの世界（一般新聞記事のここ最近のタイトル例）

- 「遠隔医療へ量子暗号強化」経済安保、増込145億円 令和3年11月22日(産経新聞)
- 「新型コロナウイルス99.9%投薬の光触媒」 令和3年2月27日(朝日新聞)
- 「電池リチウム超え競う」車の未来はマグネシウムか 令和3年11月13日(日本経済新聞)
- 「デジタル通貨」企業決済 令和3年11月25日(日本経済新聞)

科学的手法の飛躍的な進展

これまで	演繹	帰納
フィジカル空間 人間・頭脳	理論科学 理論・管理から予測 仮説を立て理論を導く	実験科学 データを整理・検索 実験や観測によって仮説を実証
サイバー空間 コンピュータ	計算科学 モデルに基づきシミュレーション	データ科学 ビッグデータ解析・AIによる推論

スライド22

令和4年度第二次補正予算（2022年12月2日成立）

- 意欲ある大学・高専が理数分野等への学部転換といった改革に躊躇なく踏み切れるよう、複数年度にわたる継続的・機動的な財政支援を行うため、基金を創設し、初期投資や当面の運営経費等を支援する【3,000億円の基金創設】
- 地域の申請・特色ある研究大学に対し、研究活動の国際展開や社会実装等に必要環境整備を継続的に支援する枠組みを設けることで、我が国全体の研究力の発展を牽引する研究大学群を形成する【2,000億円の基金創設】

二つの基金は、学部の理数系分野への転換は無理、大学では知的成長よりもサークルや体育会の活動の方が大事、知識再生型の入試は変わらない、女性は文系といった固定観念やバイアスを打破するもの。

教師や管理職の先生方には、子どもたちの理数分野への小さな関心や興味をぜひ大きく育てていただきたい。特に、理数分野に対して関心を持った女性の児童・生徒に対しては、こわら政府も皆さんのことをしっかりバックアップするから、自らの関心を太くに伸ばして、関心と励ましていただきたい。

同時に、不確実な時代だからこそ人文的思考が重要であることは言うまでもなく、歴史教科書の脚注に議論を越えた文系の学びの意義を子どもたちと共有することも不可欠。

→ 時代の歯車は大きく回り始めている。さらに…

スライド23

アジャイルガバナンスという耳慣れない言葉は、「機動的で柔軟なガバナンス」、すなわち「一律かつ硬直的な事前規制ではなく」、「データを活用して政策の点検と見直しをスピーディに繰り返す、機動的な政策形成」を意味。

教育で言えば、デジタルを活用して子どもたちの特性や関心に応じた学びを状況に応じ柔軟に展開するために、学校や教育行政のあり方を継続的に改善する仕組みを確立すること。文部科学省・県教委・市教委・校長会・学校というサプライサイドに立った縦のピラミッド構造ではなく、教師や子どもを含む多様なアクターがSNSなどを活用して縦横無尽に対話・協働し、情報や思考を共有しながらそれぞれで納得解と最適値を求めてぜんぶ動くデマンドサイドに立った構造が前提。

他方、旧制の諸学校令を統合して昭和22年に制定された学校教育法は、小学校や中学校といった組織について定めた『学校組織法』（今村武俊・別府哲『学校教育法解説（初等中等教育編）』（第一法規、昭和43年）。

150年前、我が国には存在していなかった近代学校制度を全国に敷くためには、教育を提供する学校という組織の設置を中心に教育法令を定めたことは当然。しかし、アジャイルガバナンスの観点を踏まえると、初等中等教育についても組織よりも教育プログラムに着目し、例えば、小学校では「初等教育プログラム」と捉え、学校や学年を越えた子どもたちの学びの時間的・空間的多様化や学校外の様々なアクターの学びへの参画が促される。

スライド24

2007年 言語力育成協力者会議（梶田敏一座長）  
2008年 学習指導要領改訂  
習得・活用・探究、各教科等における言語活動の充実

2014年 育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価在り方検討会（安彦忠彦座長）  
2017年 学習指導要領改訂  
知識の体系から資質・能力の体系へ、主体的・対話的で深い学び、各教科等の見方・考え方、前文、カリキュラム・マネジメント、社会に開かれた教育課程

2019年 GIGAスクール構想

2022年 内閣府CSTI「政策パッケージ」  
教科の本質等を踏まえた教育内容の重点化、教育課程編成の弾力化  
次期改訂（2022年？）：情報端末一人一台となつて初めて改訂

- 教育体系（「教育プログラム」で再編成）
- 教員免許・教員配置基準（多様な専門家が教員免許を取得し、活躍できる仕組み）
- 校長や教育長の「人材市場」の確立と流動化

などの全体の枠組みの変容なかで教科の本質等を踏まえた教育内容の重点化、教育課程編成の弾力化を行うに当たっては、タキソミー（※）といった初等中等教育から高等教育にわたる学びの土俵が必要。

※ 認知プロセス＝記憶する・理解する・応用する・分析する・評価する・創造する  
× 知識次元＝事象的知識・概念的知識・手続的知識・メタ認知的知識

スライド25

○ 今年の新入生は「書く力」「調べる力」がないと言う前に…

- ・ 彼らや彼女たちが持っている問題意識を、我々大人が引き出してこなかった。
- ・ 授業中おとなしくしている方が楽し、身過ぎ世過ぎのためによいと思わせた責任は、我々にある、のではないか。

○ 今年の新入生は「基礎学力」がないと言う前に…

- ・ その「基礎学力」とは何かを問い直し、自立して思考するために必要な「共通性」を大学教育や初等中等教育の関係者を含む社会で共有する必要がある。

(例えば…)

日本学術会議：各分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準【言語・文学】(2012年)

① 職業生活上の意義  
② 市民生活上の意義

市民として社会の公共的問題に関わる際に必要とされる市民性とは、官による上からの「公共性の独占」を問い直し、社会の構成員の一人一人が自由な主体として、公共性の担い手となること。より具体的には、「i 言論と行動、そしてその自律を尊ぶ精神」を養い、「ii 誰からも支配されず誰をも支配しない、他者との対等な関係」を構築し、「iii 動機における個人的利害からの自由」を身に付けること。

③ 人生にとっての意義  
受け手の想像力を発動させることを通じて、他者への共感を可能に。

スライド26

- ・ さらにその大学のレジリエンスとは何かを明確にして高校や受験生と共有する必要がある、のではないか。

※ ジェレミー・ブレードン、ロジャー・グッドマン  
『日本の私立大学はなぜ生き残るのか』(中公選書)

○ その意味で本日のようなフォーラムは極めて重要。このような対話を重ね、各大学において

- ・ どのような社会を創造したいかを構想し、それを実現するための学部・学科等の教育研究組織、カリキュラム、入試を一体的に検討の上、その結果を広く社会と共有すること、
- ・ すでに始めている初等中等教育の状況を学内で共有し、上記の一体的検討に活かすことが大事ではないか。

○ 理解が解決を保証するわけではないが、理解なき対峙は不毛である。—  
—香川大学・小方直幸教授—

○ 子どもたちが自らのアイデアと発想で次代を切り拓くことができ、創造性と公正・尊厳が両立する民主的な成熟社会に向けて是非アライアンスを。



スライド7

### 学校現場における受け止めと課題

- 学校改革の良い機会ととらえ、例えば「主体的・対話的で深い学び」の具現化に向けて動いている自治体や学校は多い。
- 授業形態も多様になってきている。

- 一方で、コロナ禍の始まりと学習指導要領本格実施と重なり、改革の勢いが止まり、そのままになってしまっている学校が散見される。
- 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の理解、GIGAスクール構想具現化については、学習指導要領との関連について誤解があるようにも感じる。

スライド8

### 主体的・対話的で深い学びの実現

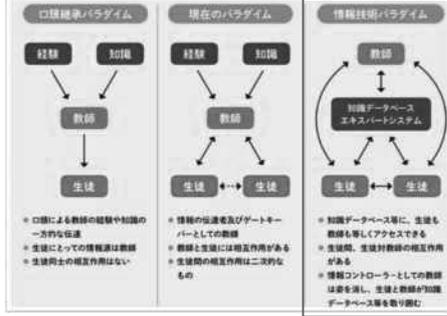
教育方法の刷新とは行政や学者からのトップダウンではなく、教員がお互いの授業を検討しながら学び合い、改善していく「授業研究」のような場を基盤として、教師一人一人を主体とした絶えざる日常的営み。

目の前の子どもの姿を共通の拠り所とし、個々の教師の納得をもって特定の手法や技術が採用されていくこと。そのような日常を通してこそ、授業づくりなり教育方法開発を自律的で創造的に展開できる教師並びに教師集団の力を培う。

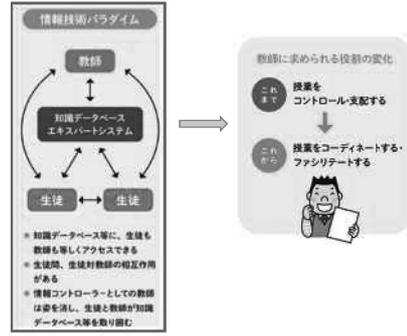
中教審答申

スライド9

学校教育の過去・現在・未来のモデル (Bronson, 1990)



スライド10



スライド11

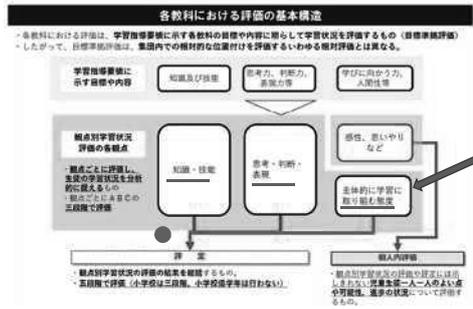
### 学校現場における受け止めと課題

- 学校改革の良い機会ととらえ、例えば「主体的・対話的で深い学び」の具現化に向けて動いている自治体や学校は多い。
- 授業形態も多様になってきている。

- 一方で、コロナ禍の始まりと学習指導要領本格実施と重なり、改革の勢いが止まり、そのままになってしまっている学校が散見される。
- 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の理解、GIGAスクール構想具現化については、学習指導要領との関連について誤解があるようにも感じる。

スライド12

### 評価の基本構造



スライド13

「個別最適化された学び」と「協働的な学び」の一体的な充実 (イメージ)

主体的な学び  
対話的な学び  
協働的な学び  
主体的・対話的で深い学び  
個別最適化された学び  
協働的な学び

13

スライド14

「個別最適化された学び」と「個別最適化学び」の違い

個別最適化された学び=自ら学習を調整  
めあてが明確でないときできない

協働的な学び=多様な他者との協働

14

スライド15

「主体的な学び」

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、**自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」**が実現できているか。

(2016/8/26 中教審教育課程部会 審議のまとめ 第1部p.46)

スライド16

自ら学習を調整の原本

「主体的に学習に取り組む態度」の評価

子どもが「自ら学習の目標を持ち、進め方を見直しながら学習を進め、その過程を評価して新たな学習につなげる」といった、学習に関する自己調整を行いながら、**粘り強く**知識・技能を獲得したり思考・判断・表現しようとしていたりしているかどうか」という、**意識的な側面**を捉えての評価。

粘り強さ、学習の調整

振り返りが大切

スライド17

1 初めての理科授業での振り返り

2か月後のふりかえり (5分間で書いている)

スライド18

振り返りとICT活用

お互いの振り返りシートが読めるといい。

漫画で知るデジタルの学び (前田博裕著)

ある学生の振り返りから

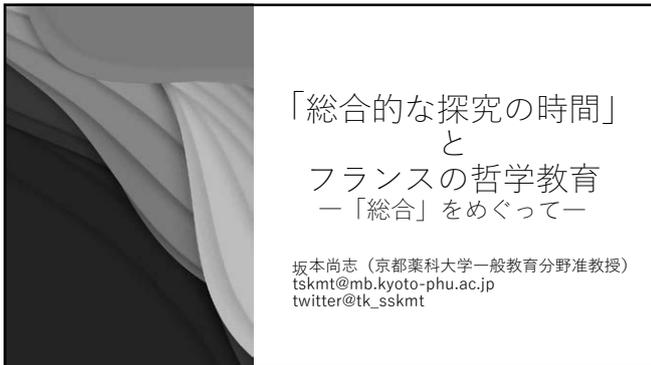
「教育課程論」の講義から、今の学校教育は自分が受けてきたものと全く違ってきていることを実感した。

例えば、児童・生徒のICT活用の方法、授業における振り返りの大切さ（互いに読み合う振り返りの是非なども含めて）など、考えておくべきことが多くあることに気づくことができた。

多様な学びをしてきた学生

まさに小中高大を貫く  
基本的な学びのあり方を  
考える時期

スライド1



「総合的な探究の時間」  
と  
フランスの哲学教育  
—「総合」をめぐる—

坂本尚志 (京都薬科大学一般教育分野准教授)  
tskmt@mb.kyoto-phu.ac.jp  
twitter@tk\_sskmt

スライド2

本日のお話のベース (1)



坂本尚志『バカロレアの哲学—「思考の型」で自ら考え、書く』日本実業出版社、2022年

スライド3

本日のお話のベース (2)

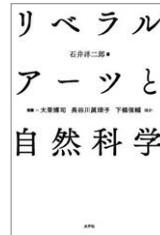


伊藤実歩子編『変動する総合・探究学習 欧米と日本 歴史と現在』大修館書店、近刊

本所恵「序章 今ここにある「総合」を確かめる 1980年代以降の学習指導要領より」  
中西修一朗「第3章 日本の総合教育の歴史 生活に根差したカリキュラムの探求」  
坂本尚志「哲学教育はなぜ総合学習なのか フランスの中等教育における「体系」の再構築」

スライド4

本日のお話のベース (3)



石井洋二郎編『リベラルアーツと自然科学』水声社、2023年

坂本尚志「なぜフランスの理系エリートには一般教養が必要なのか？」

スライド5

報告の目的

- 高等学校における「総合的な探究の時間」について、フランスの哲学教育との比較を通じて考える
- どちらも教科・科目の枠を超える横断的な学習を志向しつつも、その「総合」のスタイルはまったく異なっている
- その違いとはどのようなものか？なぜこのような違いが存在するのか？こうした違いを踏まえて見えてくるものは何か？

スライド6

報告の構成

1. 日本の高校における「総合的な探究の時間」
  1. 学習指導要領における「総合」の位置づけ
  2. 高校における総合的な探究の前身と課題
2. フランスの哲学教育
  1. 目的、方法、評価
  2. 総合学習としての哲学教育
  3. 哲学教育の「失敗」と「一般教養」
3. 日仏「総合」比較

スライド7

「学習」から「探究」へ（本所2023）

学習指導要領における「総合」

- 1989年改訂 小学校低学年への「生活科」導入
- 1998年改訂 「総合的な学習の時間」創設
  - 2002年度より小中学校で全面实施
  - ゆとり教育批判：2003年学習指導要領一部改正（「確かな学力」育成）→2007年改訂：総合的な学習の授業時数減少、ただし章立ての上では各教科と同列とされ、「探究的な学習」であることが目指される
- 2018年改訂（高校） 「総合的な探究の時間」への変更

スライド8

「総合的な探究の時間」

- 総合的な探究の時間の特徴（文部科学省 2017）
  - 探究が高度化し、自律的に行われること
  - 「他教科・科目における探究との違いを踏まえること」

高度化  
 ①探究において目的と解決の方法に矛盾がない（整合性）、②探究において適切に資質・能力を活用している（効果性）、③焦点化し深く掘り下げて探究している（鋭角性）、④幅広い可能性を視野に入れながら探究している（広角性）

自律化  
 ①自分にとって関わりが深い課題になる（自己課題）、②探究の過程を見通しつつ、自分の力で進められる（運用）、③得られた知見を生かして社会に参画しようとする（社会参画）

スライド9

高校における総合的な探究の前史と課題

- 農業、工業、商業等の専門学科における「課題研究」科目（1989年学習指導要領改訂で設定）
- 総合学科（1994年導入）における「産業社会と人間」科目
- スーパー・サイエンス・ハイスクール（SSH）（2002年開始）
- スーパー・グローバル・ハイスクール（SGH）（2014年開始）
- 課題：テーマ設定、指導、評価

**他国の事例はどうか？→フランスの哲学教育**

スライド10

フランスの高校における哲学教育：目的と方法

- 教育目的  
 「他科目で得た知識へ開かれ、それら他科目と結びうる多様な関係へと開かれている哲学教育は、疑問を持ち、真理を探究することへの配慮、分析する能力、思考の自律性を生徒のうちに育てることを目指している。それらなくしては現実の複雑さを知ることはできないであろう」（国民教育省哲学教育プログラム）
- 1週あたりの授業時間
  - 4時間（+選択科目「人文学・文学・哲学」2年生4時間、3年生6時間）
- 授業内容
  - 哲学の教授資格を持った教員が担当し、さまざまな哲学的テーマの扱い方、それに関する哲学者たちの主張を学ぶ
  - 学習成果はディセルタシオン（小論文）やテキスト説明の練習により評価（一年間の継続した練習）

スライド11

哲学教育の内容（1）：3つの視点

- 人間存在と文化
- 道徳と政治
- 知識

次に見る17の観念は、これら3つの視点を考慮しつつ、多元的に考察されねばならない

例) 芸術/技術  
 道徳的考察、認識論的考察だけでなく、人間存在と文化におけるそれらの位置についての考察も必要

スライド12

哲学教育の内容（2）：17の観念

芸術	幸福	意識
義務	国家	無意識
正義	言語	自由
自然	理性	宗教
科学	技術	時間
労働	真理	

スライド13

哲学教育の内容(2) 著者

時代	著者
古代 中世	ソクラテス以前の哲学者たち、プラトン、アリストテレス、荘子、キケロ、ルクレティウス、セネカ、エピクテトス、マルクス・アウレリウス、ナーガールジュナ、セクストス・エンペリコス、プロティノス、アウグスティヌス、アヴィセンナ、アヴェロエス、マイモニデス、トマス・アキナス、オッカムのウィリアム
近代	マキャベリ、モンテーニュ、ベーコン、ホブズ、デカルト、パスカル、ロック、スピノザ、マルブランシュ、ライプニッツ、ヴィーゴ、パークリ、モンテスキュー、ヒューム、ルソー、デイドロ、コンディヤック、スミス、カント、ベンサム
現代	ヘーゲル、ショーペンハウアー、コント、クルノー、フォイエルバッハ、トクヴィル、ミル、キルケゴール、マルクス、エンゲルス、ウィリアム・ジェームズ、ニーチェ、フロイト、デュルケム、ベルクソン、フッサール、ウェーバー、アラン、モース、ラッセル、ギスバース、パシュラール、ハイデガー、ウィトゲンシュタイン、ベンヤミン、ボバ、ジャンカレピッチ、ヨナス、レイモン・アロン、サルトル、アレント、レヴィナス、ボーヴォワール、レヴィ=ストロース、メルロ=ポンティ、ヴェイユ、エルショ、リカール、アンスコム、マードック、ロールズ、シモンソン、フーコー、バトナム

スライド14

哲学教育の内容(3) 手がかり

絶対的/相対的 - 抽象的/具体的 - 現実態/可能態 - 分析/総合  
 - 概念/イメージ/メタファー、偶然的/必然的 - 信じる/認識する - 本質的/偶有的 - 事例/証拠 - 説明する/理解する - 事実上/権利上 - 形相的(形式的)/質料的(物質的) - 類/種/個体 - 仮説/結果/結論 - 観念的/現実的 - 同一/平等/差異 - 不可能/可能 - 直観的/論証的 - 合法的/正当な - 間接的/直接的 - 客観的/主観的/間主観的 - 義務/制約 - 起源/基礎 - (論理的に) 説得する/(感情的に) 納得させる - 原則/原因/目的\* - 公的/私的 - 類似/類比 - 理論/実践 - 超越的/内在的 - 普遍的/一般的/個別的/個体的 - 真正の/蓋然的な/確実な

スライド15

重要なのは「型通りの方法」：問題分析

1. 問題文の用語・概念の分析
2. 問題に対する可能な答えを列挙する
  - ・肯定と否定
  - ・両者を止揚した第三の答え
3. 問題を「問いの集まり」に変換し、問題の含意を明らかにする
  - ・「なぜ」「どのように」「仮に~ならば」「いかなる条件で」などの言葉を用いて、問題を複数の問いに言い換える

スライド16

重要なのは「型通りの方法」：弁証法的構成

- ・導入
  - ・問題分析を踏まえ、言葉や概念を定義し、可能な答えを示し、問題を言い換えて議論の内容を予告する
- ・展開 (2~3つの部分から成る)
  - ・各部分が「肯定」「否定」「両者の総合」(正反合)を扱う
- ・結論
  - ・展開部分での議論を要約して問いに答える

スライド17

正確な引用を「暗記する」こと

- ・哲学的典拠の正確な引用が重要
- ・「アリストテレスが『ニコマコス倫理学』でこう言った」では不十分。「アリストテレスは『ニコマコス倫理学』第10巻第7章においてこう言った」と書かねばならない
- ・ただし、引用が適切な文脈の中でなされ、その含意が説明されていることが不可欠
- ・「暗記科目」としての側面

スライド18

バカロレア哲学試験:哲学教育のゴール

- ・フランスのバカロレア試験(中等教育修了資格兼大学入学資格)の科目
- ・高校最終学年の6月に実施
- ・試験は記述式、試験時間は4時間
- ・ディセルタシオンと呼ばれる小論文2題とテキスト説明とよばれる哲学書の抜粋の説明1題から1問を選択して解答
- ・出題・採点は高校教員によって行われる

## スライド19

## 2022年の問題

1. 芸術の実践は世界を変容するか？
2. 何が正しいかを決めるのは国家なのか？
3. クールノー『われわれの認識の基礎と哲学的批判の諸特徴に関する試論』（1851年）の一節を説明せよ

## スライド20

## 哲学教育とバカロレア哲学試験

- 哲学教育によって学ばれる「思考の型」を活用する能力を評価する試験であり、創造性や文才を問う試験ではない  
→「型」を遵守した上で、どれほど論理的に解答できているかが評価の対象
- 決まった「型」にはめ込む形で自分の考えを表現する訓練  
→「市民」としての必須のスキルの育成

## スライド21

## 哲学はいかに総合するか？

- 芸術は科学よりも必要性が劣るか？（2011年、フランス本土、経済社会系）
- 言語は真理の探究の障害となりえるか？（2001年、インド、経済社会系）

## スライド22

## 芸術は科学よりも必要性が劣るか？

- 「芸術」、「科学」、「必要性」という用語の定義
- 「芸術」、「科学」についての初中等教育で獲得した知識に基づきつつ、両者の関係を「必要性」という概念によって考察することが求められる
- 「芸術は科学よりも必要性が劣る」（賛成意見）、「芸術は科学よりも必要性が劣るわけではない」（反対意見）を踏まえて、可能ならば両者を統合する第三の立場を提示する

## スライド23

## 言語は真理の探究の障害となりえるか？

- 「言語」「真理」「障害」
- 言語：個別言語ではなく、総称としての言語。人工言語も含む
- 真理：現実との一致？命題の論理的整合性？直観？
- 障害：両者の関係性を記述。どのような条件のもとで「障害となりえる」のか？

## スライド24

## 哲学教育は「よき総合学習」か？

- 哲学科目の平均点は20点満点中7点であり、他科目と比べて4点程度低い。また、合格点（10点以上）を取る答案は全体の3割以下（Ferry et Renaut 1999）。
- バカロレア哲学試験受験者は同年齢人口の60%弱（日本の大学進学率とほぼ同等）  
→ここから考えると「哲学ができる生徒」は同年齢人口の18%にも満たない
- 全体の7割以上が合格点に達しない試験を最終的なゴールとする哲学教育…  
→「看板倒れ」なのか？

## スライド25

### 教養の危機と「一般教養」

- 高等教育における「総合的な知」  
エリート養成校グランゼコール（理科系、商業系）の入学試験、上級公務員採用試験
- 「一般教養」科目が課される：「政治、経済、文化等にまたがる歴史的知識や、現代社会における諸問題に関する知識を基礎として、哲学が提起する問いよりも広く、かつ具体的な諸問題について考えること」が必要とされる（坂本 2023）
- ⇒ グランゼコール準備学級（バカロレア後の2年間の課程）では、こうした試験に挑むための「教養」を身につけることが期待されている（膨大なインプットとアウトプットの必要性）：実利があってこそその「教養」

## スライド26

### 日仏「総合」比較

- 日本の総合学習：統合教授（樋口勘次郎）、合科学習（木下竹次）、総合教授、生活綴方など、初等教育での20世紀初頭からの蓄積を背景として発展（中西 2023）
- 私と社会のかかわりにおける「総合」（下からの総合）  
遠山啓：「観」の学習（世界観や人生観の涵養）としての総合学習
- フランスの哲学教育：初中等教育の知識の統合・横断を哲学という伝統的な知の領域を通じて行う（上からの総合）
- 「思考の型」の習得、概念と論理の自己運動、「私」抜きの普遍的言説への志向、階級上昇のための必須のツール

## スライド27

### おわりに

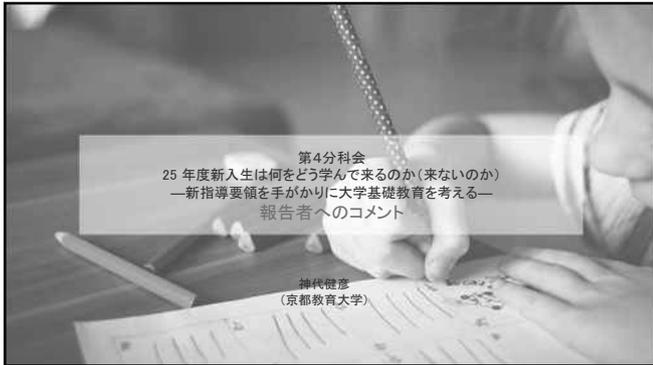
- 日本とフランスの比較：優劣ではなく、「総合」に対する異なる思想の内在的論理を読み解く必要性
- 補助線としての異質な「総合」（「総合的な探究の時間」における課題はフランスの哲学教育にとっては課題ではない）
- 高大接続における課題：「総合的な探究の時間」でどのように学んできた学生を大学は受け入れることになるのか？
- 大学における「探究」は、いかなる意味で「総合的な探究の時間」と地続きであり、いかなる意味で断絶しているのだろうか？

## スライド28

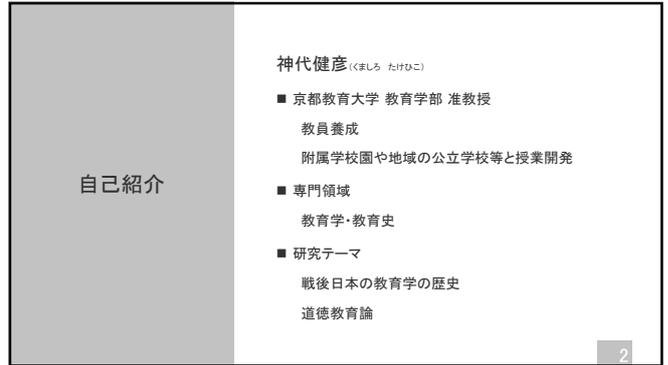
### 参考文献等

- 伊藤実歩子編（2023）『変動する総合・探求学習 欧米と日本 歴史と現在』大修館書店
- 坂本尚志（2022）『バカロレアの哲学－「思考の型」で自ら考え、書く』日本実業出版社
- 石井洋二郎編（2023）『リベラルアーツと自然科学』水声社
- 文部科学省（2017）『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総合的な探究の時間編』
- Ministère de l'éducation nationale (2019) « Programme de philosophie de terminale générale », *Bulletin officiel spécial n° 8 du 25 juillet 2019*.
- 「バカロレアに挑戦してみた！～弁護士が挑むバカロレア試験??」（弁護士三輪記子のYouTubeチャンネル）  
<https://www.youtube.com/watch?v=HIQ5wTmiBTY>

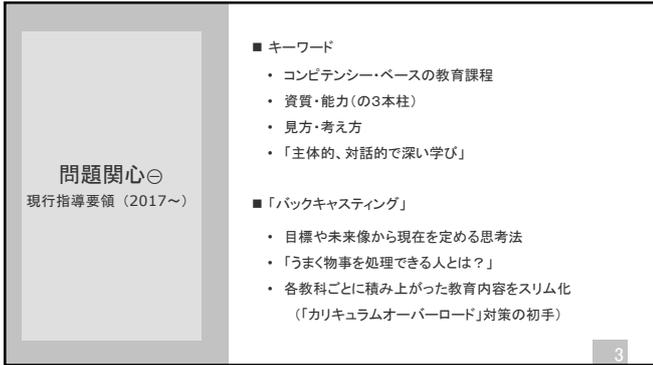
スライド1



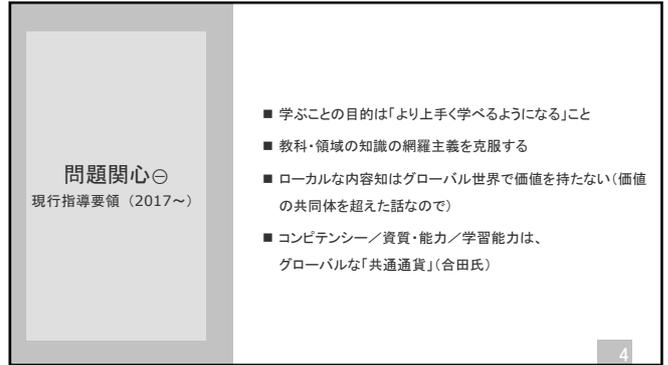
スライド2



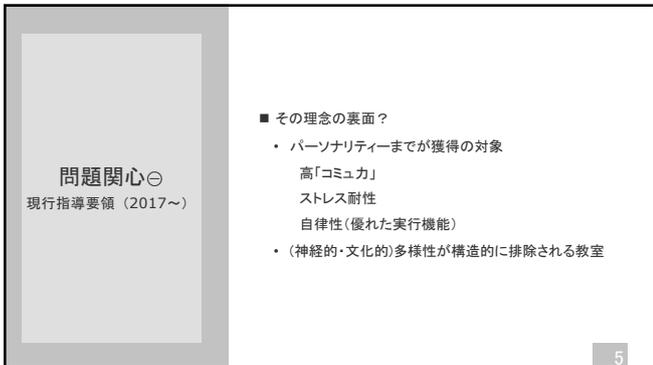
スライド3



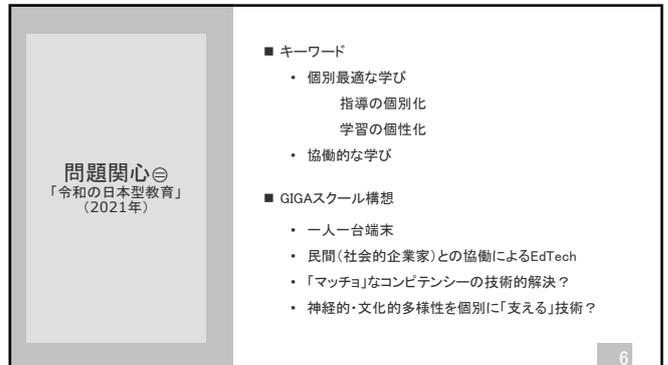
スライド4



スライド5



スライド6



スライド7

問題関心⊕  
公教育システムのなかの  
大学

- 日本型公教育への懸念
  - ・ 過度な社会的期待がかかる学校
  - ・ そもそも人生の最初の20年程度で人間を「完成」するのはムリ
  - ・ 人間は「学びそびれる」「忘れる」「衰える」
  - ・ 資質・能力を幼児期から青年期前期に確実に身につけないと生きていけない社会は苦しい。
  - ・ 内容(文化や科学)ではなく能力(コンピテンシー)という発想は、文化や科学の「ファスト化」「自己啓発化」を帰結するかもしれない。

7

スライド8

問題関心⊕  
公教育システムのなかの  
大学

- 何度でも学び直せる「公教育システム」へ
  - ・ 学校(大学も含む)は、公教育システムの一部
  - ・ 公教育システムの「多重化」「冗長化」
  - ・ カリキュラムオーバーロードは、コンピテンシー化(だけ)ではなく、冗長化／「ジャストインタイム」の生涯学習で対応すべきではないか(それには日本の労働のあり方そのものを変える必要があるが…)
  - ・ 「人間の育ちの最後の砦」としての大学へ

8

スライド9

合田哲雄氏に  
対する質問①

1. 現行学習指導要領は、個々人のパーソナリティにまで言及する理想の人間像や学び像を強く打ち出しているように感じるが、それは意図されたものなのか？(子どもは瞬間的には「有能な学び手」になりうるが、その持続には「支え」が潤沢に必要だが…)
2. 理想の人間像・学び像が強く打ち出されるなかで、多様な発達の特性を持つ子どもたちを念頭に置いたインクルーシブな学びという主張は整合するのか？(EdTechはその差分を埋められるのか？)

9

スライド10

合田哲雄氏に  
対する質問②

3. 初等中等教育の高度化、大学との合理的な接続よりも、学びなおすことが前提の、教育と福祉の冗長なシステムづくりの方が、テクノロジーの進歩との相性という意味でも有望ではないか。その方が、むしろ合田氏のお話と整合的なのでは？(ジェンダーギャップの解消としても)

10

スライド11

玉置崇氏に  
対する質問①

1. 現場の困難が指導要領実施、コロナ禍、GIGAスクールなど複合的な施策への急な対応を迫られたことにあるのは同感。もう一つ言うと、それは教師だけでなく子どももそうで、新しく導入された「濃い」「重い」学習活動がすべての授業に詰め込まれることで、子どもたちは疲れていないか？(知識の詰め込みではなく、活動の詰め込み)
2. 協働学習は重要だが、学習内容よりもグループの友だちとの関係の取り方に心理的な資源(注意など)を取られて苦しんでいる子どもはいないだろうか？(他者との協働のレディネス、心理的資源の多寡)

11

スライド12

玉置崇氏に  
対する質問②

3. こうした「濃い」「重い」「人との調整が大変」な活動に疲れてしまって、むしろ伝統的な講義を望む学生が一定数いることをどう考えればよいだろうか？(≒社会経済的、また発達の特性上の困難を抱えた学生に大学はどうかかわればいいのか？)

12

## スライド13

<p>坂本尚志氏に 対する質問①</p>	<ol style="list-style-type: none"><li>1. 「思考の型」の意味や重要性はとても説得的だが、哲学の領域固有の知識を離れた思考の型が市民生活に活用される(転移する)度合いは高いのか？ (むしろフランス社会が哲学「知識」に敬意を払い、人々がそこから日常生活のコミュニケーション資源を汲みだしている、ということなのでは？)</li><li>2. だとするならば重要なのは、「思考の型」をそれだけ取り出してきて広めることではなく、哲学という知の水源地へのアクセスを(哲学者ではない)市民に可能にすることなのでは？ (フランスの教育がやっているのはそういうことでは？)</li></ol>
--------------------------	---

13

## スライド14

<p>坂本尚志氏に 対する質問②</p>	<ol style="list-style-type: none"><li>3. (あえて規範的な議論をするならば)「私」を中心とする日本型総合探究学習の仕方を習得してくる大学進学者に、大学はフランス型総合で対応した方がよいのか？(現状肯定に近い？) それとも、大学は日本型総合に転換して、小中高大の一貫性を確立した方がよいのか？</li></ol>
--------------------------	---

14



## 第5分科会

グローバルに活躍出来る人材の教育に大学はどのように貢献するか  
—混沌とした世界で主体性を発揮できる人材の育成に向けて—

### 報告者

- 堀 真一郎 学校法人きのくに子どもの村学園 理事長・学園長  
金 正泰 特定非営利活動法人 Glocal NET 代表、  
                        코리아国際学園 前校長、大阪つくば開成高等学校 教員  
福井 清 徳島大学 副学長(テクノオン連携担当)

### コーディネーター

- 川田 隆雄 同志社女子大学 学芸学部 教授



# グローバルに活躍出来る人材の教育に 大学はどのように貢献するか —混沌とした世界で主体性を発揮できる人材の育成に向けて—

コーディネーター

同志社女子大学 学芸学部 教授 川田 隆雄

## ○本分科会のねらい

本日は「グローバルに活躍出来る人材の教育に大学はどのように貢献するか—混沌とした世界で主体性を発揮できる人材の育成に向けて—」という分科会です。

主体性という言葉は頻繁に使われますが、実は難解なことばだと思います。私はコンサルをしながら経営者の話を聞いていると、経営者は社員の主体性を求めますが、本当に主体性を持った人が欲しいというより、経営者にとって都合の良い主体性を求めます

学校でも先生達は生徒に主体的になれといいますが、でもこれも主体性という言葉は都合良く使われる場合が多く、上記の企業経営者の例と同様に主体性といいつつも無条件の従順さも求めていて、矛盾していることが往々にしてあります。

そして、我々の社会も主体性を滅却して、生きることすら暗黙のうちに勧めています。このように、主体性は実は難しい現象ですが主体性の定義は以外と簡単です。「主体性とは自ら考えで動くこと」という定義に反対する人はあまりいないと思います。

近代の教育の本願は主体性の育成にあることは間違いありません。為政者がどう思うが、企業経営者がどう思うが、主体性の育成が教育の主たる目標であることは間違いありません。いろいろな議論があったとしても主体性は人の人生にとっても社会にとっても重要であることは間違いありません。私はプロデューサー（思いつきを実現した人）の研究をしています。私の研究データを見ても主体的な人が新しい商品やサービス、概念を生みだし社会を変え進歩させたいいくことは間違いありません。

また、人それぞれの人生においても、自分の主体性を発揮した人こそ満足し幸せを得ることができるとも思います。そして、昨今の世界の地政学的な大きな変動を見ても、それぞれの国や人々が主体的にその国が行く方向を決める必要があります。主体的な行為がどうしても必要です。そして、我々が経験してきた日本の経済的衰退と、主体性の欠如との間に因果関係があるのではとも思うのです。そのような状況を踏まえて、この分科会では主体性をテーマにした分科会を企画しました。なぜなら、社会において主体性について考えさせ、主体性を育てる、中心的な機関は学校であり、小中高、そして大学だからです。

## ○報告の概要（抜粋）

キム・ジョンテ先生（中学校・高校）

主体性を育てる為には、「常識を疑うこと」が大事。ルールを撤廃することで、子ども達は主体的に考えるようになってくる。そのため学校は極力ルールを少なくしたほうがよい。いつでも柔軟にルールを変更できる環境を作るべき。目的を持つことで、主体性が育ち、主体的に学び行動するようになる。やりたいことが思いっきりできる環境をつくるべきである。そうすることで子ども達はやらなければならないことに自分で気付き始める。夢が明確になれば、自ら考え、苦手な勉強もやらなければならないと思える。直接体験することが重要。多感な時にいろんな体験をする必要がある。国内では時間がかかるので、海外へ連れて行き様々な体験機会を増やすのが有効。

### 堀真一郎先生（小学校、中学校・高校）

子ども達を主体的に育てる重要なポイントは、1. 知的探求、2. 本物の仕事、3. 自発性、4. 多方面の興味を持たせる、ことが重要である。そして教育において最重要ポイントは、子ども達を小さな科学者として育て、創造的に考える態度と能力を培うことである。特に以下の5点は重要である。

1. 問題に気づく
2. 問題を観察する
3. 仮説を立てる
4. 結論を練り上げる
5. 行動して確かめる

### 福井清先生（大学）

世界的な研究機関に留学して研鑽することで、主体性が育っていく。なるべく早い段階で海外に行くことが重要。海外に行くことで、世界にはこんなに多様で広がりがあることを示す必要がある。海外に行くのは、語学のために留学するのではなく、何がしたいか、目的をもって留学することが重要である。逆に海外に行くことで、目標もできることもある。教師にできるのは環境を整える事。大学では、海外に行くためのプログラムを整備する必要がある。

### ○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

- ・ルールがあると子供たちは考えないようになる、ルールがないと子ども達は主体的に考えざるをえなくなる。
- ・どんどんやってみよう、失敗してもいいよという環境を教師や学校が作る事が大事。
- ・海外に出ていくことは重要なことで、新しい価値観に触れるとそこにさまざまな疑問や動機が生まれる。
- ・本物に触れることが大事。シミュレーションで学習するのではなく、本当に何かをする。主体性は、疑問、好きなこと、目標達成の過程に対しては自然に生成される。できれば、高校までには目標を見つけるための時間とチャンス子ども達に提供する必要がある。大学では特に本物に触れ（top of topsに触れる）、本物を作り出したり、本物の活動をする（起業も含め）というのはとても理想的だ。どの過程でも「失敗が許される環境」が重要である。
- ・学生の主体性を育てるには、ピアレビューが有効、学習者同士が観察し合うことで成長していく。

# みずから考える子どもを育てる

## — 体験学習で学校を変える —



(学)きのくに子どもの村学園 堀 真一郎

はじめに……

### 1. 「活動的な仕事」としての幼児のおもちゃづくり (大阪市立大学幼児教室の実際)

ジョン・デューイ (1859–1952) 教育における2つの要件の統合  
1. 子どもの活動性 (興味、自発性)  
2. 基本的社会生活への参加

➡ 「活動的な仕事」  
(active occupations)  
きのくにのプロジェクト

#### 「活動的な仕事」の特質

1. 知的探求……問題に気づき、問題を観察し、仮説を立て、結論を練り上げ、行動によって検証する
2. 本物の仕事……生きるうえでもっとも基礎的な営みを題材とする。
3. 自発性……子ども自身が好奇心に駆られて熱中する
4. 多方面の興味……より広い事象へと興味が発展していく

最重要のねらい=小さな科学者として創造的に考える態度と能力を培う

1. 問題に気づく
2. 問題を観察する
3. 仮説を立てる
4. 結論を練り上げる
5. 行動して確かめる

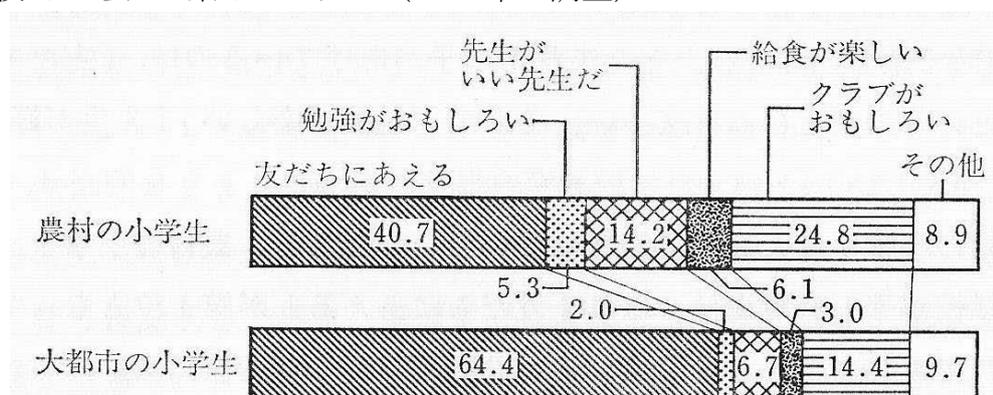
#### 指導上の主な原則

1. 作り方を教えない (材料と見本は用意する)
2. 考えないと出来上がらない (簡単すぎない)
3. 身の回りの材料や不用品を多用する (特別の高価な教材はつかわない)
4. ことばかけに工夫する (肯定的評価と能動的な聞き方) など

## 2. きのくに子どもの村学園の理念と実際

### (1) 「学習がいちばん楽しい」といえる学校をつくりたい

学校でいちばん楽しいのは？（1984年の調査）



### (2) 子どもが決める、子どもが選ぶ

— ニールのサマーヒル・スクールに学ぶ —

「困った子というのは不幸な子である」  
 「私の仕事は教育解除とってよい。」（ニール）

- ◇ 「自分自身の生き方をする自由」
- ◇ 授業に出る出ないの自由
- ◇ 5歳の子の一票も校長の一票も同じ
- ◇ 「プライベート・レッスン」
- ◇ ファーストネームで呼び合う



### (3) 考える楽しさ、工夫する喜びを — 小さな科学者のように考える

— デューイの「活動的な仕事」の理論に学ぶ —

「1オンスの経験は1トンの理論にまさる」

「このたびは子どもが太陽となり、その周囲を教育のさまざまな仕組みが回転することになる。子どもが中心となり、その周りに教育についての仕組みが組織されることになる。」  
 （デューイ）

#### 創造的な思考の5局面（デューイ）

1. 問題の感知 Sense of a Problem
2. 問題の観察 Observation of the Problem
3. 仮説の暗示 Suggestion of the Hypotheses
4. 結論の推敲 Elaboration of a Conclusion
5. 行動による検証 Active Testing

#### ★ ニールとデューイの共通点

二人は、思想と実践の両面で接点はないが、古い価値観や世界観から子どもたちを解放し、「分自身のものの見方」を伸ばそうとする教育理念を共有している。

「我々は、すべての迷信、因習、偽善をかなぐり捨てたとき、その時はじめて教育を受けたといえるのだ。」（ニール）

「教育の目的は、既成の知識の伝達ではなく、未来の価値の創造にある」（デューイ）

#### (4) 子どもの村の教育目標、基本方針、学習形態など

##### (A) 教育目標 — 自由な子ども

感情面でも、知的にも、人間関係でも自由な子どもへの成長の手助けをする。

- ① 感情面の自由……内面、とくに無意識の深層に抑圧や自己否定感がなく、自信と生きる喜びを満喫する子。
- ② 知性の自由……小さな科学者のように考える子ども。旺盛な好奇心を持ち、さまざまな問題の所在に敏感で、仮説を立て、検証しようとする子ども。
- ③ 人間関係の自由…自己意識がしっかりしていて、しかも「共に生きる喜び」を味わい追求する子ども。

##### (B) 基本原則 — 自己決定、個性化、体験学習

- ① 教師中心主義 → 子どもの自己決定と自由選択の重視
- ② 画一主義 → 個性と個人差の尊重、学習の多様化、
- ③ 書物中心主義 → 体験学習（「為すことによって学ぶ」）

##### (C) 基本原則の具体化 - プロジェクト、基礎学習、自由選択、ミーティング、個別学習

3つの基本原則を図のように重ねてできる4つの図形をもとに学習形態を設定。

##### ① プロジェクト

プロジェクトは3原則すべてが適用される最重要の学習形態で、生きる上で不可欠のホンモノの営みに挑戦して興味と知識と広げる。小学校では授業の約半分を占める。最も大事なのは頭をつかうことだ。

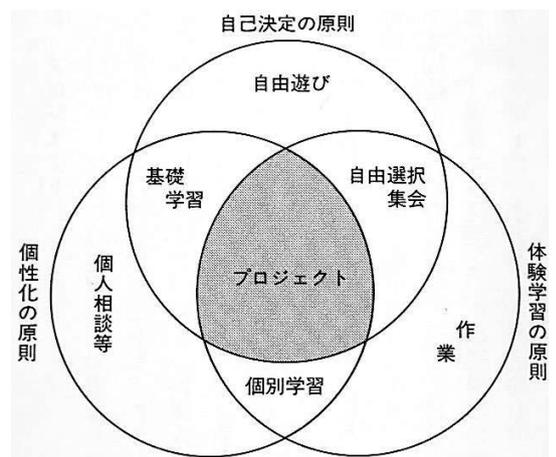
##### <プロジェクトを計画する上での留意点>

1. 発達の各側面を統合する(not 教科の総合)。
2. 知的探求である。
3. ホンモノの課題や仕事に挑戦する。
4. 衣食住や「いのち」からスタート。\*
5. 道具としての知識と技術を活用する。
6. 子どもの知的生産物としての知識と技術

##### ② 基礎学習

自己決定と個性化の原則にしたがい、プロジェクトの推進に必要な(有用)な基礎技術を習得する。授業の約4分の1の時間を配当。小学校では「かず」と「ことば」として週7~8時限。中学校では「教科」と呼ばれて週12時限。

図2 基本原則と学習形態



### ③ 自由選択

主としてグループでおこなう形態で、ミーティング、体育、音楽、図画工作などに関連した活動や学習をおこなう。

### ④ 個別学習、

特に中学校で教師による助言などを得ながら自主的に学習する時間である。

### ⑤ ミーティング

全校集会、クラスミーティング、寮のミーティング、各種委員会などで、様々な問題について話し合う。自由な学校とは話し合いの多い学校である。

### <クラス編成>

教員はペアを組んでプロジェクトの概要について提案する。子どもは担任、活動内容などを見て自分の所属するクラスをきまる。いずれも完全縦割り編成となる。クラス名は「工務店」「ファーム」「おもしろ料理店」「劇団きのくに」「クラフト館」(2018、和歌山の小学校)

### (D) 成果の検証

学校でいちばん楽しいのは……

子どもの村の職員の条件……

学力は大丈夫？

表1・中学校卒業生の進学先での成績  
(中間試験・期末試験での平均成績順位)

年 度	学年平均人数	卒業生平均順位
2009	238	28
2010	214	17
2011	287	33
2012	194	17

学校でいちばん楽しいこと  
(2016年、きのくに子どもの村小学校4~6年生)

友だちに 会える (26.7)	プロジェクト (46.3)	基礎 学習 (11.7)	その他
-----------------------	------------------	--------------------	-----

授業(プロジェクト+基礎学習) = 58%

先生が好き  
食事  
クラブ活動

### 3. よく考える子どもの親子関係

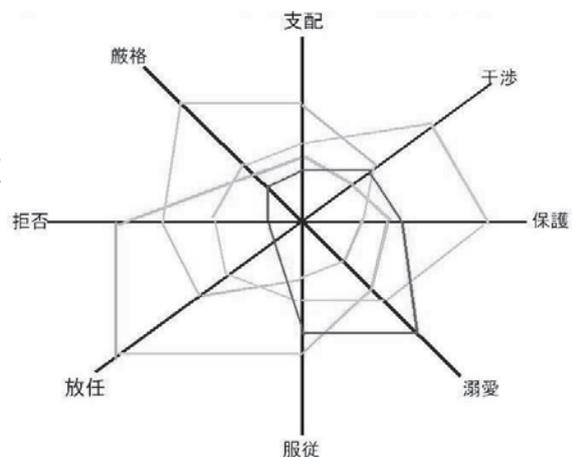
#### (1) 伸びる子と伸びにくい子

#### (2) 創造的に考える子どもが育つ家庭

親子関係テスト

#### ニイルのこたば

「困った子というのは、  
実は不幸な子である。  
彼は内心でたたかっている。  
その結果として外界に向かってたたかう。」



### (3)大人からのことばかけの工夫

キーワードは「受容」、体で抱っこ、ことばでも抱っこ

#### ① 子どもの言動をよい面から認める

例 「まだ半分残ってるよ」→「もう半分は済んだね」

#### ② 能動的なきき方……子どもの言動を評価しないで聞く。

例 「シイタケ食べるのイヤだ」

「好ききらいはいけません。がまんしてたべてみなさい。」

→「そうか、シイタケは食べる気にはなれないか。」

#### ③ 自分で気づく……「注意」から「気づいてもらう」へ

例 「だめ、あぶないじゃないの。気をつけなさい。」

→「おっと、だいじょうぶかな？」

#### ④ 私メッセージ……道徳を持ち出さなくて正直な気持ち伝える

例 「機関銃かってくれなきやいやだ。」

「人殺しをするような子は悪い子です。」

→「人を殺すおもちゃは、お母さんはどうしても好きになれないんだよ。」

## 6. おわりにあたって

### 参考文献

ニール（堀訳）：新訳・ニール選集・全5巻、黎明書房、1998

同（同）：ニールのおバカさん—A. S. ニール自伝、1974（2019）

デューイ（宮原誠一訳）：学校と社会、岩波文庫

デューイ（松野安男訳）：民主主義と教育・上、下、岩波文庫

堀 真一郎：ニールと自由な子どもたち—サマーヒルの理論と実際、1984、黎明書房

同：きのくに子どもの村の教育—体験学習が中心の自学校の二十年、2013、黎明書房（2022、新新装版）

同：体験学習で学校を変える—きのくに子どもの村学園の歩み、2022、黎明書房

同：教育の革新は体験学習から—堀 真一郎教育論文集、2022、黎明書房

2022年度第28回FDフォーラム

第5分科会 2023年2月23日(木・祝) 14:00~17:00

「グローバルに活躍できる人材の教育に大学はどのように貢献するか 一混沌とした世界で主体性を発揮できる人材の育成に向けて」

生徒たちの主体性を育む環境づくり～学校の「常識」を疑え！

2023年1月25日

金 正泰(キン ジョンテ)

特定非営利活動法人GLOCAL NET 代表  
コリア国際学園中等部高等部 前校長  
大阪つくば開成高等学校 教員

金正泰(きんじょんて)と申します。

本フォーラム第5分科会のテーマに沿って、「グローバルに活躍できる」、「主体性を発揮できる」ことの意味と、コリア国際学園、大阪つくば開成高校、NPO法人GLOCAL NETでの教育経験について紹介させていただきます。

1. 目の前の問題に向き合うことで常識の歪みが見えてくる コリア国際学園での教育改革について  
常識が違う人たちとともに暮らすことで、自分の「常識」を疑ってみる。
  - ・ルールがなくなると自分で考えるようになる。
  - ・決定権のある諮問会議。
  - ・いつでも柔軟にルールを変更できる環境。アイドルを目指す生徒のためのK-POP・エンターテインメントコースができた。
  - ・学校でK-POP?
  - ・やりたいことが思いっきりできる環境をつくる。
  - ・「やらなければならないこと」に気づく。
2. 通信制高校が目指す新たな学びの価値観 大阪つくば開成高校での教育経験  
「Catch Your Dream！」この学校はあなたが創る学校です。
  - ・「普通」がない。誰もが普通。
  - ・学校を「どう使うか？」は自分次第。
  - ・異文化を受け入れる心はこういう環境から生まれる。豊富な専門コース、セレクト科目、特別活動
  - ・やりたいことを選んでやる。
  - ・判断と選択の実体験
  - ・高校生も主体的に学びたい。
3. 子どもたちを学校から解放する NPO法人GLOCAL NETの取り組み  
グローバルに活躍できる人材とは？
  - ・世界(宇宙)で起きていることに対する主体的な態度
  - ・世界で起きていることを知る。見る。交わる。
  - ・世界に友だちをつくる。家庭と学校(塾)とそれから...
  - ・家庭と学校(職場)ではない場をつくる。
  - ・新しい出会いが感動できる体験をする。
  - ・同世代ではない人たちとも心を開けるように。
4. まとめ

スライド1

2023年2月23日  
 大学コンソーシアム京都  
 2022年度 第28回FDフォーラム

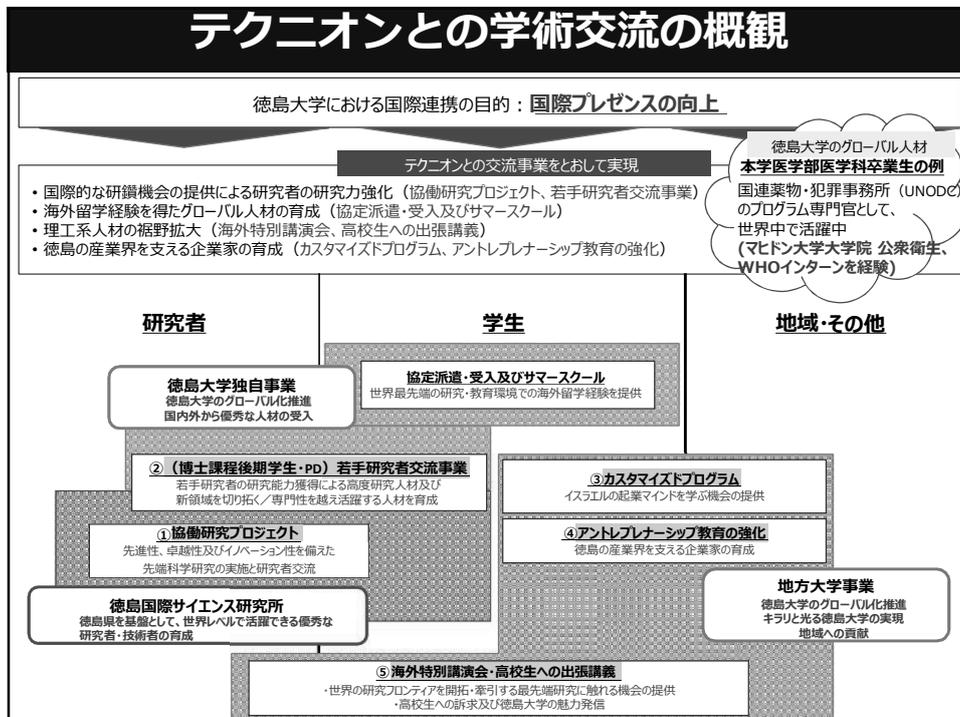
第5分科会: グローバルに活躍出来る人材の教育に大学はどのように貢献するか

## 「世界に学ぶアントレプレナーシップ: 主体性を発揮する イノベーション人材の育成に向けて」

徳島大学副学長(テクニオン連携担当)  
 福井 清



スライド2





## 第6分科会

### 大学教育と福祉課題～大学での支援のあり方を考える～

#### 報告者

伊東 みさき 大谷大学 学生支援部 キャリアセンター チームリーダー /  
障がい学生支援チーム

松山 廉 公益財団法人京都市ユースサービス協会 事務局次長

岡崎 祐司 佛教大学 副学長／社会福祉学部 教授

#### コーディネーター

孔 栄鍾 佛教大学 社会福祉学部 講師

中野 加奈子 大谷大学 社会学部 准教授



## 〈第6分科会〉

# 大学教育と福祉課題 ～大学での支援のあり方を考える～

コーディネーター

佛教大学 社会福祉学部 講師 孔 栄鍾  
大谷大学 社会学部 准教授 中野 加奈子

### ○本分科会のねらい

大学には、さまざまな障害を持ちながら学ぶ学生がいる。大学生活の中で、初めて障害に気づくことになる学生もいる。ヤングケアラーであったり、経済的な問題などを抱えている学生も存在し、大学の中で「福祉課題」が顕在化することがある。こうした学生たちは、授業やゼミで学習に集中できない状況によって自信を失ったり、自己実現の機会を奪われていることも多い。

しかしながら、福祉課題を抱える学生を発見しづらい状況があり、特に発達障害や生活面での課題は潜在化しやすい。さらに、学生が直面する困難に対して、大学はどのように支援したら良いのか戸惑うことも多い。

本分科会では福祉課題を抱える学生の発見や具体的な支援のあり方について、実際に学生をサポートする大学の教職員と子ども・若者支援に関わる外部機関から報告者を招き、大学教育での福祉課題に対するサポートのあり方について共に検討した。

〈日時・場所〉 2023年2月24日（金）09：30～11：30・オンライン開催

### ○報告の概要

まず第1報告として、大谷大学学生支援部キャリアセンター障がい学生支援チームの伊東みさき氏より、困難を抱える学生に対する大学の支援体制と支援事例についてご報告いただき、具体的な実践の中で気づいた学生支援の課題についてお話しいただいた。事例では、在学中だけではなく、卒業後の進路・就職まで継続支援を行っている体制についても紹介していただき、大きな学びとなった。またそれを実現するためには、学内を含めて外部機関と連携しつつ進めていくことが不可欠であるとのことご指摘は、とくに重要だと感じた。

続いて第2報告では、公益財団法人京都市ユースサービス協会事務局次長の松山廉氏より、若者への相談・地域活動・就労支援など学外（地域社会）における様々な支援事業についてお話しいただいた。松山氏からは「コロナ禍の人間関係の変化とそこから見える課題に対して青少年育成の場でできることとは何か」について、具体的な現状のデータと事例を紹介していただき、いまの若者が感じている混乱やそれに対する支援の困難さなどがリアルに伝わった。とくに、外部機関としての大学への期待と要望について、「大学も支援機関もしくはその入り口となり、外部機関を積極的に活用してほしい」とのご発言は印象的であった。

以上の報告内容を踏まえて、最後の第3報告では、佛教大学副学長・社会福祉学部教授の岡崎祐司氏により、現代日本社会において学生が置かれている環境や、その中で生活上の問題が起こるプロセスについてご解説いただいた。さらに、それらに対する政策的課題を含めて、大学での課題と取り組みについてお話しいただいた。とくに、大学における支援システムと教職員の活動の基本として「Education」に加えて「Care, Community, Connection」の重要性を強調しつつ、教職員と学生との関係について「指導的かわりだけでなく、ケア的かわりも可能」とのご指摘からは、これからの大学教育を考えるうえで、大きな示唆を得ることができた。

※ 報告の詳細は、この後の添付資料をご参照いただきたい。

### 〈タイムスケジュール〉

09：30 趣旨説明（中野 加奈子）  
09：35 報告1.

「困難を抱える学生のキャリア支援～卒業後の人生を見据えて～」(伊東 みさき)

- 09：55 報告 2.  
「青少年育成の場で浮かび上がる若者の生活課題と大学への期待」(松山 廉)
- 10：15 報告 3.  
「若者支援政策と学生の学びの保障」(岡崎 祐司)
- 10：35 休憩 (質問・コメントの受け入れ)
- 10：40 ディスカッション (孔 栄鍾)
- 11：10 質疑応答

### ○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

以上の報告をうけて、ディスカッションの時間では登壇者からの補足説明及び、登壇者間での意見交換を行なった。

学生の卒業後の人生を見据え社会の中で相談できる場所を確保していくことが重要であること、早期に外部機関と繋がることで、学生に複数の相談場所ができ、より一層学生生活の充実が図れる、という意見が述べられた。

ディスカッションの後には、Google フォームを通して参加者からいただいた質問やコメントについて回答する時間を設けた。

まず参加者より「障がい学生支援チームの活動に教員はどのように関わっているのか」「大学教育と福祉課題という点で学生支援における大学間格差があるのではないか」などの質問があり、各登壇者それぞれの立場から意見が交わされた。また、「学生のキャンパスライフ (サークル活動、友達作り等) や福祉の支援への取り組みは軽視、後回しされている」「学生の置かれている社会的状況の変化を念頭に、ケア的な関わりを意識しつつ教育に当たらねばならない」などのコメントもいただいた。

今回の分科会を通して、様々な福祉的課題を抱えている学生に対する大学での支援のあり方について改めて考える機会となり、今後の大学教育、教職員と学生との関係づくり、学生への指導・支援、外部機関との連携などについてヒントを得られたのではないかと考える。不安や悩みを抱える学生が安心して学びを続ける場を作っていくうえで、大学教員としての課題が山積していることを実感した貴重な時間であった。

ただし、時間の関係で、登壇者と参加者が議論を深めるというよりは、問題提起にとどまってしまった。多くの参加者との交流が深められるよう、今後工夫が必要かもしれない。

最後に、登壇されたみなさま、参加されたみなさまに感謝申し上げたい。またFDフォーラムの開催にむけてご尽力いただいた事務局のみなさまにも深く感謝したい。

スライド1

OTANI UNIVERSITY

## 困難を抱える学生のキャリア支援 ～卒業後の人生を見据えて～

大谷大学学生支援部キャリアセンター  
障害学生支援チーム  
伊東みさき



**大谷大学**  
Be Real  
寄りそう個性

スライド2

OTANI UNIVERSITY

## 目次

1. 本学の支援体制
2. ケース①～卒業後の学外機関利用
3. ケース②～在学中の学外機関利用

2

スライド3

OTANI UNIVERSITY

## 自己紹介

名 前	伊東みさき
出身地	長野県
出身大学	大谷大学文学部社会学科
職 歴	2001年～ 学生課 (現：学生支援課) 2004年～ 教務課 2017年～ キャリアセンター

3

スライド4

OTANI UNIVERSITY

## 1. 本学の支援体制

- 本学の支援方針
 

入学前からの相談体制を強化し、  
社会人としての自立に向けて  
一人ひとりが必要とする支援を図る



4

スライド5

OTANI UNIVERSITY

## 1. 本学の支援体制

- 本学の支援体制 (事務)
 

2022年10月 障がい学生支援チーム設置

  - 横断型
  - 月1回のMT (情報交換)

入学センター、学生支援課、教務課、  
キャリアセンター、図書・博物館課、  
教育研究支援課、総務課



5

スライド6

OTANI UNIVERSITY

## 1. 本学の支援体制

- 大谷大学の配慮制度について
 

障がいや疾病で大学生活や修学に不安や困難のある学生が、少しでも安心して楽しく大学生活が送れるよう、支援の方法について一緒に考えています。

特に修学上、合理的配慮が必要として学生が求めてきた場合には、ニーズに沿って必要な支援を協議し提供しています。そのことを大谷大学では「配慮制度」と呼んでいます。

「配慮制度」は、学生本人の要望と「診断書」などの根拠資料を基に、学校医と面談をした上で、配慮内容を決めていきます。

その上で、配慮学生の履修担当教員へ「配慮依頼文書」として、合理的配慮の内容を明文化してお知らせしています。

6

スライド7

OTANI UNIVERSITY

## 2. ケース①～卒業後の学外機関利用

■ Aさん  
 入学時： 卒業後 外国語（英語）教員希望  
 本人・家族の困りごと無し  
 配慮制度利用無し

第3学年9月 実習参加基礎資格不可  
 ↓  
 企業就職へ進路転換



7

スライド8

OTANI UNIVERSITY

## 2. ケース①～卒業後の学外機関利用

履歴書作成（自己分析）各種ガイダンス  
 コミュニケーションセミナー  
 ↓  
 受診 発達障害（ADHD）精神障害（うつ病）  
 ↓  
 <卒業後> 就労移行支援機関  
 ↓  
 <卒業1年半後> 一般企業内定



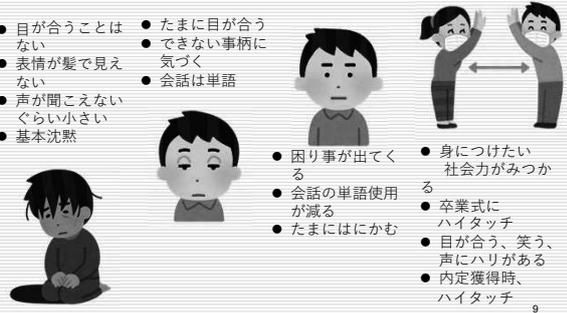
8

スライド9

OTANI UNIVERSITY

## 2. ケース①～卒業後の学外機関利用

- 目が合うことはない
- 表情が髪で見えない
- 声が聞こえないくらい小さい
- 基本沈黙
- たまに目が合う
- できない事柄に気づく
- 会話は単語



- 困り事が出てくる
- 会話の単語使用が減る
- たまにはにかむ
- 身につけたい社会力がみつかる
- 卒業式にハイタッチ
- 目が合う、笑う、声にハリがある
- 内定獲得時、ハイタッチ

9

スライド10

OTANI UNIVERSITY

## 3. ケース②～在学中の学外機関利用

Bさん  
 入学時： 本人・家族の困りごと無し  
 配慮制度利用無し（～卒業まで）

第2学年 発達障害（ASD）手帳取得  
 発達支援センター利用  
 配慮制度利用無し



10

スライド11

OTANI UNIVERSITY

## 3. ケース②～在学中の学外機関利用

第3学年 ※卒業まで全て継続  
 コミュニケーションセミナー  
 はあとふるコーナー・新卒応援HW利用  
 アルバイト

第4学年  
 障害学生対象インターンシップ（4日間）  
 <卒業後> 就労移行支援機関



11

スライド12

OTANI UNIVERSITY

## 4. まとめ

- 学内の支援体制
- 学外機関への相談・利用



12

Be Real  
寄りそう知性



大谷大学

スライド1

「青少年育成の場で浮かび上がる  
若者の生活課題と大学への期待」  
コロナ禍の人間関係の変化とそこから見える課題に対して  
青少年育成の場でできることは何か

公益財団法人 京都市ユースサービス協会  
会事務局次長 松山廉

スライド2

1 京都市ユースサービス協会とは

- 設立 1988年3月
- 目的  
青少年の自主的な活動の振興を図ることにより、  
京都市の青少年の健全な育成に寄与します
- 職員  
60名近くのユースワーカーが働いています

スライド3

2 京都市ユースサービス協会  
ミッション

1. 若者が本来持っている力を発揮する場づくりをする
  - ・情報を自覚的に選び取る力を得る。
  - ・じっくり自他に向かい合える空間、時間の提供。
  - ・自分の関心、能力を自覚できる機会提供。
2. 若者が課題を乗り越えていくための支援をする
  - ・本音でぶつかりあえる機会の提供。
  - ・多様な社会資源を利用するスキルを得る。
  - ・特に必要な若者に対して個別的な支援を行う。
3. 若者の市民参加、地域社会への参加を促す
  - ・力や学んだことを社会的な場で試す機会を提供する。
  - ・競い合う、協力し合う、他世代と触れあう経験の機会。
4. ユースサービスの活動を広く知ってもらう

スライド4

4 具体的な京都YS協会の事業について

<p>子ども若者総合相談窓口 ◆ ワンストップ型の相談窓口</p> <p>青少年活動センター</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 貸館業務</li> <li>◆ やりたいを応援するプログラム</li> <li>◆ 居場所づくり</li> <li>◆ ボランティア活動等の育成</li> <li>◆ 様々な相談</li> <li>◆ 地域活動</li> <li>◆ 様々な体験プログラム</li> </ul> <p>様々な協会独自事業及び研究</p>	<p>中央</p> <p>北</p> <p>東山</p> <p>山科</p> <p>下京</p> <p>南</p> <p>伏見</p>	<p>生活困窮世帯のための学習支援 (中学生学習支援事業) ◆ 生活困窮世帯の主に中学生に対する 学習会</p> <p>社会的養護自立支援 ◆ 社会的養護のもとでの生活経験のある 青少年の社会的孤立を予防する事業</p> <p>若者サポートステーション ◆ 若者の職業的自立を支援 ◆ ニート対策の就労支援</p>
---	---	---

スライド5

5 京都市ユースサービス協会の  
相談業務について

- 大きく分けて二つの枠組み
- 「～について相談したい」から始まる  
→子ども若者総合相談窓口・サポートステーション
- 「ねえ、きて」から始まる相談  
→青少年活動センター

スライド6

6 相談統計について

- 2022年度12月末現在
- センター 青少年792件 1406回  
その他209件 401回
- 子若支援室 390件 739回 (うち大学生72件)
- 2021年度
- センター 青少年907件 1528回
- 子若支援室 528件 900回 (うち大学生78件)

スライド7

**8** 相談の中身

- センターにおいて青少年の相談トップ3は①学校生活全般②進路・就労③余暇の過ごし方
- 窓口において大学生の相談トップ3は①将来・進路②居場所活動③就職

スライド8

**7** コロナに関しての相談件数

- 青少年活動センター
 

2021年度9月まで	75件	95回
2020年度	275件	375回
- こども若者総合相談窓口
 

2022年度11月まで	40件
2021年度	32件

スライド9

**9** コロナ禍での大学生年代の主な困りごと

- 活動の縮小
- リモート授業で、質問しにくく、内容がわからなくなった。
- 実習などができなくなった。
- 関係がぎくしゃくしても、リカバリーしにくい
- 学校生活などが楽しくない
- 外で遊べない
- アルバイトなどで収入の減
- 就活をどうしたらよいか
- コロナ禍での状態は居心地が悪かった。元に戻ってほしい。

→これら多くのものが、緊急事態宣言が明けたことで解消できるものだが、継続してこのような相談は存在している。

スライド10

**11** コロナ禍以降、日々私が感じること

- 人との関係づくりが苦手な人がより課題と感じるようになった。  
→関係づくりの中で、なんとなくできていたことが、意図的、努力、意味づけなどが必要になった。
- 相談に来る人は、相談が苦手な人。ゆえにもっと手軽な状態の時に相談できない。
- コミュニケーションに不安を持つ人が、より不安に。自信をつける場所がない
- 潔癖な人にとって、出会いは遠くなった。
- これらの課題の早期発見が難しい
- コミュニケーションが上手になるのはむつかしいが、場の中で「これでよい」と思えることは大切だが。

スライド11

**12** 私たちが考える対応策について

- やはり、直接会う場は必要
- 無理なく関係づくりができる場
- 様々な出会いの中から、選択肢を広げられる場
- 感動の共有ができる場
- 葛藤を生み出す場。
- コーディネートしてくれる人がいる場

スライド12

**13** 大学への要望

- 大学も支援機関？もしくはその入り口
- どう重症化せずに専門機関へつなぐか。
- とはいえ、大学で抱えずに。ソーシャルワーカーの存在は必要では
- 外部の機関の活用。
- 自然な出会いの場としての青少年活動センター。出会って選択肢を広げる場として活用してほしい。
- 子若窓口はセンター紹介もします。また先生や支援機関も使えます。

スライド1

若者支援政策と  
学生の学びの保障

第28回FDフォーラム第6分科会  
大学教育と福祉課題 岡崎祐司（佛教大学）

スライド2

はじめに

- 以下の報告は、わたしの大学教員としての経験、対応してきた事例、学生からの相談など、事例にもとづいて考察した部分も多くあります。
- しかし、本報告で事例の内容を具体的に示すことはできません。
- 大学内での課題、取り組みの方針は後半で報告し、前半は政策的課題について考えを述べます。

スライド3

現代日本社会における若者>学生（1）  
—日本社会をどうみるか

- 20年以上の新自由主義改革の進行→その継続か、転換か？
- 生き残り競争の激化、縁故資本主義と不平等
- 貧困問題、暴力問題、不平等の深刻化。低賃金、子育て・教育に家計負担が耐えきれなくなっている。
- ひとり一人が自分らしく生きるための基盤、社会的条件、法的規制、政策責任が大きく後退
- 物価高騰、環境問題の深刻化、戦争への不安・“新しい戦前”...

スライド4

現代日本社会における若者>学生（2）  
—大学で学ぶには社会的に条件整備が必要

- 自分らしく生きるための基盤、社会的条件、政策責任が大きく後退
- 学生→<自立への見通しをもって主体的学ぶ>条件が整っているか？
- 委縮、忍従、堪えきれるところまで耐えさせる、見通しを持ちきれない
- 経済的問題：貧困、お金に困っている、いつも節約、学費問題...
- 身近な環境：親子関係、家庭内暴力・虐待、健康問題、性被害、差別、介護問題、孤立...
- 大学のなかでのハラスメント、威圧、理解されないことへのつらさ

スライド5

学生を支える経済的条件的弱体化  
不安定な構造（三角形の底辺の不安定）

学生  
バイト  
家庭の経済力

学生  
奨学金  
学生の労働  
家庭の経済力

スライド6

「学費のためのお金なのに」苦学生が直面した生活保護の壁（NHKホームページ）

- [https://www3.nhk.or.jp/news/html/20221202/k10013908441000.html?utm\\_int=newssearch\\_contents\\_search-items\\_009](https://www3.nhk.or.jp/news/html/20221202/k10013908441000.html?utm_int=newssearch_contents_search-items_009)
- 「2022年10月、熊本地方裁判所が行政の決定を覆す判決を言い渡し、SNS上で大きな反響を呼びました。熊本県が70代の夫婦の生活保護を『ある理由』で打ち切ったことを違法と判断したのです。その理由とは、この夫婦（＝祖父母）と暮らしていた孫娘の収入が増えたこと。当時、孫娘は看護師を目指して看護専門学校で学びながら病院で働き、学費を賄っていました。県は、孫娘が稼いだお金を祖父母の家計に充てれば生活保護は必要ないと考えていたのです。」2022年12月2日
- 2022年10月17日「熊本地方裁判所の判決について、県は17日、内容を不服として控訴しました。」

スライド7

生活上的問題が起こってから、困難な状況に落ち  
陥る速度が速い→個人の心の健康、意欲に与える悪影響

国民最低限の公的保障の欠落  
セイフティネットが機能していない

健康で文化的な最低限度の生活の水準

困窮・生活困難

スライド8

支援対象、福祉課題をかかえる学生...  
一部の学生か？

- ・ 高校生→学生→職業世界にある若者全体の状況
- ・ 社会的に弱い立場、厳しい状況におかれている
- ・ 生活を支える制度的保障がない・自立を支える条件がない
- ・ 生活上の困難・課題→家族責任・自己責任の政策スタンスと制度運営
- ・ 家族主義、家族と個人の「耐性」に任せる日本の社会保障政策の破綻

スライド9

就学の保障という観点からの若者政策

- ・ 高学費問題→学費無償化政策
- ・ アルバイトの労働条件、ブラックバイトをなくす→労働監督行政の強化
- ・ 就学を保障する観点からのアルバイト雇用規制
- ・ 最低賃金の引き上げ
- ・ 「子どもの貧困」？→子どものいる家庭の貧困=大人の貧困問題対策
- ・ 医療費負担軽減・無償化、居住政策

スライド10

若者がかかえる介護問題とは  
人間の「生」の活動を阻んでいるしんどさ

- ・ 若者が介護者・家事担当者として、自分の学習や社会活動、個人生活に必要な時間を相当程度削って（学習、社会活動、個人生活に支障や不自由さを感じ、それが長年にわたる）役割を果たさなければならない
- ・ 家族主義、家族と個人の「耐性」に任せる福祉サービス政策の転換
- ・ 必要充足、現物給付、ケア・介護を必要とする個人の「生活の質」、「健康」に焦点をあてた福祉サービス保障、医療保障
- ・ 介護者とはっきり自覚できないが、不満やしんどさを抱える学生

スライド11

大学における支援システムと教職員の活動の基本

Care

Community 学生 Connection

Education

スライド12

なぜ、care, community, connectionが重要なのか

- (1) 大学教育において、授業+学びのコミュニティづくりは一体である。
- (2) 学生支援は、a)個別支援システム+b)教職員との「つながり」縁+c)コミュニティから形成される。
- (3) 教職員と学生との関係→指導的かわり/ケア的かわり  
※専門的に学生をケアする場ではないが、ケア的かわりは可能
- (4) 安心して学ぶことができる場としての大学の確立

## スライド13

### コミュニティづくり、教職員との「つながり」縁

- ・ゼミ活動、クラブ・サークル
- ・大学諸行事の参画・社会貢献
- ・当事者グループづくりの支援
- ・当事者の声を聞く、共に考える
- ・多様な学生の支援に関する教員の理解と、ともに支援方針をつくっていくこととする姿勢が重要
- ・学生への支援・配慮をすることは、教育や評価の公正さ・厳正さを損ねるものではない

## スライド14

### 個別支援システムと授業配慮

- ・学生個別支援を学内の分業の話にとどめるべきではない。
- ・個別支援は専門職の配置の必要性、個性を把握したうえでの「配慮要請」
- ・授業等の支援学生のコーディネートの役割（支援学生の成長など教育的分析と評価の共有）
- ・教員の創意工夫、技能のアップ、配慮を試みる姿勢
- ・当事者といっしょに授業方法（学習方法）、環境整備、教職員間の共有
- ・教員は教育に責任をもつ集団としての意志統一、責任遂行が求められる。

## スライド15

### ケア的なかかわり

- ・教員としての基本は教育的なかかわり
- ・指導的力を発揮する場面もある。教育には正しい意味で厳しさを伴う。
- ・ケア的なかかわり＝傾聴、寄り添う、待つ、共に歩む、withなど
- ・「発達障がいがある」、「家庭内に困難を抱えている」、「訴えを明確にもっている」など明確にわかるケースは少ない。
- ・一定のなかかわりの時間、話せる空間、観察があって、徐々にわかってくる
- ・大学と外部機関の連携をどうつくるか

## スライド16

### 学習権宣言、ユネスコ、1985年3月29日を読み直す

- ・学習権とは、読み書きの権利であり、問い続け、深く考える権利であり、想像し、創造する権利であり、自分自身の世界を読みとり、歴史をつづる権利であり、あらゆる教育の手だてを得る権利であり、個人的・集団的力量を発達させる権利である。
- ・“学習”こそはキーワードである。学習権なくしては、人間的発達はありません。
- ・学習権はたんなる経済発展の手段ではない。それは基本的権利の一つとしてとらえられなければならない。学習活動はあらゆる教育活動の中心に位置づけられ、人びとを、なりゆきまかせの客体から、自らの歴史をつくる主体にかえていくものである。

## スライド17

### 自らの反省として

- ・財産、経済力、能力など「私的所有」の有無程度に依存する自由、希望や要求の実現の社会的格差。
- ・大学教育、学生の学ぶ権利を社会権的基本権の文脈からとらえ、社会に訴えてきたか？
- ・若者のかかえる困難を共に社会的に解決していくという「大人」＝大学教職員の姿勢が問われているのではないか。
- ・若者支援政策（若者の生活保障・労働権保障）と大学政策の結びつき

## 第7分科会

### ポストコロナで遠隔授業をどのように活用できるか

#### 報告者

Eric HAWKINSON 京都外国語大学 国際貢献学部 教授

池田 佳子 関西大学 国際部 教授

前川 愛 京都外国語大学 非常勤講師

#### コーディネーター

畑田 彩 京都外国語大学 外国語学部 教授



# ポストコロナで遠隔授業をどのように活用できるか

コーディネーター

京都外国語大学 外国語学部 教授 畑田 彩

---

---

## ○本分科会のねらい

新型コロナウイルスの感染拡大による大学休講措置は、新たな教育方法を見出す契機となった。遠隔授業（オンライン授業）はその最たるものであろう。新型コロナウイルス感染症との付き合い方を知り、通常の生活に戻りつつある現在、多くの大学では対面授業が再開している。しかし、「遠隔授業」には利点も多くある。遠く離れた大学との共同学習のしやすさ、チャットでの一対一の対応が可能になったことで学生との距離が近づいた大人数対象の講義、場所を選ばず授業ができる・受けられる利便性などである。せっかく獲得した「遠隔授業」の技術、設備を今後活用しないのはあまりにもったいないのではないか。そこで、本分科会では①他大学との協働授業、②DXを活用した授業運営、③海外からの遠隔授業の3つの事例について話題提供していただき、遠隔授業の地点と問題点を整理したうえで、ポストコロナでの遠隔授業の可能性について考えることを目的とした。

## ○報告の概要

本分科会では、3人の登壇者から話題提供をしていただいた。

池田佳子先生（関西大学国際部）からは、関西大学で展開されているCOIL（Collaborative Online International Learning）についてご紹介いただいた。COIL1.0（2014-2018）でのオンラインでの交流授業、COIL2.0（2020-2022）でのCovid-19感染拡大のためできなくなった留学の代替となる「オンライン留学」への変遷と、これから迎えるCOIL3.0での発展の可能性（対象はより幅広い層の学生に、オンサイトとオンラインの組み合わせ、教育の質の保証への注目、Society 5.0への対応）についてお話いただいた。

続いて、エリック・ハーキンソン先生（京都外国語大学国際貢献学部）からは、イマーシブテクノロジー（没入型技術）を利用したオンライン授業についてご紹介いただいた。福知山公立大学で実施された拡張現実での地域探索の様子や、京都外国語大学で実施された、同じく拡張現実を用いた学生の故郷紹介、アバターを用いた模擬国連などの事例のご紹介があり、イマーシブテクノロジーを用いた授業はオンライン授業であればこそできる授業であるとの主張があった。

最後に、前川愛先生（京都外国語大学非常勤講師）からは、オランダからの遠隔授業と、大学に出向いての対面授業双方を担当されたご経験から、教員側から見た遠隔授業の利点と限界について、話題提供をしていただいた。遠隔授業の利点としては、休講補講を回避できること、教員のワークライフバランスを健全に保てること、災害時や緊急時の代替手段となり得ることを挙げられた。一方限界としては、授業準備に時間がかかること、オンライン上にデータを保存し続けることで、CO<sub>2</sub>の排出が増加してしまうことが挙げられた。世界中のデータセンターが排出するCO<sub>2</sub>は、航空業界全体が排出するCO<sub>2</sub>に匹敵するためである。

## ○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

分科会後半の質疑応答では、以下のような質問があり、それぞれ登壇者からご回答いただいた。

<池田先生>

Q1. COILという教育方法を体験する前と後で学生はどう変わりましたか？

A1. 学生が世界の事情を自分事として捉えることができるグローバル市民の視点を持ち始めたということが、一番の成果であると感じています。世界を自分自身の活躍の場所であると、海外から参加する同世代が考えていることに触発され、自分たちもそう考え始めるというきっかけとなっているようです。

Q2. COIL というシステムを作り上げる上で、一番困難だった点は何ですか？

A2. 遠隔授業の規制緩和の議論などが、コロナ禍期でようやく焦点化されてきていますが、大学機関におけるオンラインで行う授業活動に対する捉え方、Web2.0等のツールを用いることに対する抵抗感といった様々なマインドセットの転換、が一番苦労したところです。

Q3. COIL の利点として「学習に対する質の保証ができる」に興味をもちました。保証できる具体的な事例などがあれば、ご教示ください。

A3. 学習時間のトラッキングが、デジタル活用がされることでやすくなるのが一事例として挙げられます。参加型の活動を教育設計に取り込むことで、個々の学習者の行動(どんな作業においてどういったツールを用いてどんな参加行動を行ったのか)をより網羅し、可視化することが可能になります。また、すべての授業が収録されることで、再度閲覧が可能であり、また講義のフィードバックを後追いで実施することも可能です。COIL だけではなく、教育のDXが進むことで、より教育の質、学習の質を改善する取組の具体的な手法が実施可能になると考えます。

Q4. COIL は留学の代替ではないというお話でしたが、+aの部分について教えていただければ幸いです。たとえば、特定地域・大学以外との交流などもできるのでしょうか。

A4. 渡航して体験する留学と同じ経験をオンラインでさせようというそもそもの考え方が、unlearnすべき点です。+alphaという表現も、少し違和感がございます。COIL が実現できる体験としては、例えば、今政治的な事情により対面で同じ空間で学ぶことはどうしても無理な状況下にある国・地域や、経済的な事情等で渡航することができない、国際教育経験が自分ができると思ったことがないような学生層も、例えば先進国である日本やその他の地域の学生と共に学び、対等な立場で意見を述べ、そしてかけがえのないその国・地域の様子を教えてくれたりすることができます。この学びは、日本人学生が、欧米諸国などの先進国に留学しても、おそらく出会わないであろう機会となります。デジタル格差はまだ存在しますが、パンデミックを経て、国連の活動支援や各国・地域の努力もありインターネット環境の向上は進んでいます。より多くの層が共に学ぶ機会を享受することができるという特徴が、COIL の可能性だと考えています。

<前川先生>

Q5. コロナ禍を経たそれ以後の教育についてです。オンライン授業は、対面授業と同じ物を提供することが目標になっていたのだと思いますが、ほとんどの大学では対面授業に回帰しています。私の授業では、フランスや東京など遠隔地からの講師に担当してもらい、私は教室内で、遠隔地と教室にいる学生との間をつないでいます。これによって、単なる対面授業ではなく、対面授業の中に、オンライン授業の良さを取り入れることができました。前川先生は、もしオンライン授業が対面授業と異なる良さがあるとすれば、どのようなことをされているのか教えて頂けるとありがたいです。講師側のメリットはありますが、むしろ学生側のメリットがあるとありがたいです。

A5. 講義系の授業において、学生による「全員がそれぞれの意見を素直に先生に伝えられることがオンライン授業の最大のメリットだとおもいます。」という意見が端的に示すように、オンライン授業は出席者の匿名性が保ちやすい状況ととらえると、学生側はより積極的に自分の考えや疑問を発言できるという良い面がありました。積極的な意見が出ると、自分とは異なる他者の意見を聞く機会となり、それによってさらに自己の考えも深まる、という好循環が見られました。これはオンライン授業のほうが対面授業より教育効果が高いとポイントと言え、そのメリットは学生によっても認識されていました。

遠隔授業だとその場にはいないので質問がしにくい、と思われがちですが、実際に対面授業とオンライン授業をしてみると、オンライン授業のほうが質問が多く出ました。質問・発言する、というハードルが低くなるようです。

## <全員>

Q6. コロナ禍を経たことで遠隔授業の利点やノウハウが共有されたことは、教育・学習のひとつの発展かと思えます。一方で、学生の状況に合わせたハイブリッド、ハイフレックス授業が見られるようになっていきます。効率化や配慮という意味では歓迎すべきアプローチですが、教員の負担も増えると予想されます。ハイブリッド、ハイフレックス授業について、先生方のご意見をお聞かせください。

### A6.

#### 池田先生

教員の「負担」と考えるのか、時代と共にリスキリング・アップスキリングしなくてはいけない「責任」なのか、それぞれが考えていく必要があるマターだと考えます。とくに高等教育機関に関わる者は、その時代で活躍できる人材層を輩出することがその役目です。この将来の人材層に必要な教育・育成の機会を与えられない者ばかりが在するようでは、日本の教育機関はどんどん世界から、そして産業界から見捨てられていくでしょう。ハイフレックス・ハイブリッド授業は、当たり前前の時代となるのが、これだけの人災を経た私たちに課された宿題だと思えます。これを撤退させるのは、あまりにも犠牲が大きすぎたと私は思います。教育のDXは必ず推進させる。そうでなければ、日本社会は取り残される。国外はすでに何年も前から、コロナ禍前から、推進し、前へ前へと動いています。この危機感をもって、行政レベルでも、そして教育界においても、スキルアップの習慣と文化を醸成していかなければならないと思います。教員層一人ひとりが、「負担」としか考えられない社会にしまわれないように、動かなければならないと、ご意見を聞いて感じました。

#### ハーキンソン先生

Hybrid and high-flex classes involve combining in-person and online learning, giving students more flexibility in how they attend class. While these models offer several advantages to students, they may also present challenges for teachers. One potential challenge is that teachers may need to develop new skills to teach in a hybrid or high-flex environment. For example, they may need to learn how to use new technology tools, adapt lesson plans for online delivery, and manage both in-person and remote students simultaneously. Another challenge is that teachers may need to spend more time preparing for classes, as they will need to create materials and activities for both in-person and online students. Additionally, they may need to devote extra time to managing the logistics of hybrid and high-flex classes, such as scheduling office hours and providing technical support to students. Universities can support teachers by adding more technical staff and support, offering time off to take additional technical training and practice, and giving more flexibility to teachers on how they deliver classes.

#### (DeepL を利用して畑田翻訳)

ハイブリッド授業やハイフレックス授業は、対面とオンラインを組み合わせることで、学生が授業に参加する方法をより柔軟に変更できるようにしています。このようなモデルは、学生にいくつかの利点がある一方で、教師にとっては課題があるかもしれません。潜在的な課題の1つは、教師がハイブリッドやハイフレックスの環境で教えるために新しいスキルを開発する必要があることです。例えば、新しいテクノロジーツールの使い方、オンライン配信用の授業デザインの調整、対面と遠隔の学生を同時にマネジメントする方法などを学ぶ必要があるかもしれません。また、対面とオンラインの両方に対応した教材やワークを作成する必要があるため、授業の準備に多くの時間を割かなければならないという課題もあります。さらに、オフィスアワーのスケジュール管理や学生への技術的なサポートなど、ハイブリッドやハイフレックスの授業の運営に余分な時間を割く必要がある場合もあります。

大学側は、技術スタッフやサポートを増やすことで、教員に追加の技術トレーニングや練習をするための時間を提供することができます。そうすることで、教員は、授業形態をより柔軟に選ぶことができますようになります。

## 前川先生

結局は教員のやりがい搾取的な労働状況を、オンライン授業に関わらず改善することも大事だと思います。また、遠隔授業の技術的なレベルアップについて、教員間の情報共有が大学によってサポートされることで負担が減るのではないのでしょうか。

ハイブリッド、ハイフレックス、オンデマンド授業において、1スライド当たり、教員が長く話すと、学生は頭に入ってこなくてしんどいらしく、適当な配分で「画」が切り替わることも見る側の集中を切らさないためには必要です。そうすると、準備が増えますし、新しい内容にはまた新しい「画」作りとなり、作業が増えると言えばその通りだと思います。遠隔授業で集中を途切れさせない、教育効果を下げないためには、教員の労働量が増えている、ということを雇用者側が認識することも必須となります。

スライド1

2023/2/24 第28回FDフォーラム 第7分科会 9:30-12:00

## ポストコロナで遠隔授業を どのように活用できるか

コーディネーター  
畑田 彩  
(京都外国語大学外国語学部)

スライド2

はじめに

「新型コロナウイルス」の感染拡大

**私たち人類にとって未曾有の危機**

グローバル化によってウイルスは日本にも侵入・拡大

2020年4月16日  
全国に緊急事態宣言が発令  
不要不急の外出を控える「外出自粛」が浸透  
要・急であるはずの大学教育も大きな影響を受ける

スライド3

文部科学省からの通知(その1)

令和2年3月24日  
令和2年度における大学等の授業の開始等について

### 3. 遠隔授業の活用について

(1) 今後、学生の学修機会を確保するとともに、**感染リスクを低減する観点から、いわゆる面接授業に代えて、遠隔授業を行うことが考えられること。**

→ 文科省は遠隔授業を推奨

[https://www.mext.go.jp/content/20200324-mxt\\_kouhou01-000004520\\_4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200324-mxt_kouhou01-000004520_4.pdf)

スライド4

「新型コロナウイルス」に対する大学の対応

### 遠隔授業の導入

	遠隔授業を実施する	検討中	実施予定なし
国立大学	54校 (72.0%)	21校 (28.0%)	0校
公立大学	33校 (45.8%)	39校 (54.2%)	0校
私立大学	360校 (59.9%)	230校 (44.6%)	11校 (0.7%)
全体	478校 (63.9%)	315校 (42.1%)	11校 (1.5%)

→ ほぼすべて(98.5%)の大学が遠隔授業を実施または実施を検討すると回答

[https://www.mext.go.jp/content/20200324-mxt\\_kouhou01-000004520\\_4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200324-mxt_kouhou01-000004520_4.pdf)

スライド5

文部科学省からの通知(その2)

令和2年7月27日  
本年度後期や次年度の各授業科目の実施方法に係る留意点について

### 1. 本年度後期や次年度の各授業科目の実施方法を検討するに当たっての基本的な考え方について

・・・地域の感染状況や、教室の規模、受講者数、教育効果等を総合考慮し・・・(中略)・・・**感染対策を講じた上での面接授業の実施が適切と判断されるものについては面接授業の実施を検討していただき・・・**

→ 文科省は対面授業の再開を求める  
大学は徐々に対面授業に移行

[https://www.mext.go.jp/content/20200727-mxt\\_kouhou01-000004520\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200727-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf)

スライド6

対面授業再開から2年後の授業形態

### 令和4年の大学等における授業実施方針等に関する調査

授業形態	大学数
全面対面で可能	745校
ほとんど対面で可能	348校
7割が対面で可能	52校
5割で対面が可能	16校
3割が対面で可能	1校
ほとんど遠隔で実施	1校
全面遠隔で実施	0校

→ 5割以上を対面に 1,161/1,163(99.8%)  
7割以上を対面に 1,145/1,163(98.5%)

[https://www.mext.go.jp/content/20221129-mxt\\_kouhou01-000004520\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20221129-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf)

スライド7

➤ **ポストコロナへの移行**

**2023年5月8日**

Covid-19が  
インフルエンザと同等の感染症第5類に移行



**大学生生活もコロナ前の生活に戻る？**

スライド8

➤ **すべてを対面授業に戻すべきなのか？**

COVID-19で得た遠隔授業の方法論を  
活用しないのはもったいないのでは？

**遠隔授業・ハイフレックス授業の利点**

- 大講義ではむしろ双方向性が増す
- 天候不良時(暴風雪警報など)の代替手段
- 教員も学生も研究との両立がしやすくなる
- VRの活用などはデジタルでなければ学べない
- 海外の大学との連携授業がしやすくなる
- 障がいを持つ学生への「合理的配慮」の一つになりうる

スライド9

➤ **本分科会の目的とタイムスケジュール(変更あり)**

**遠隔授業の事例を共有し、利点と問題点を整理し、  
ポストコロナでの遠隔授業のあり方を考える**

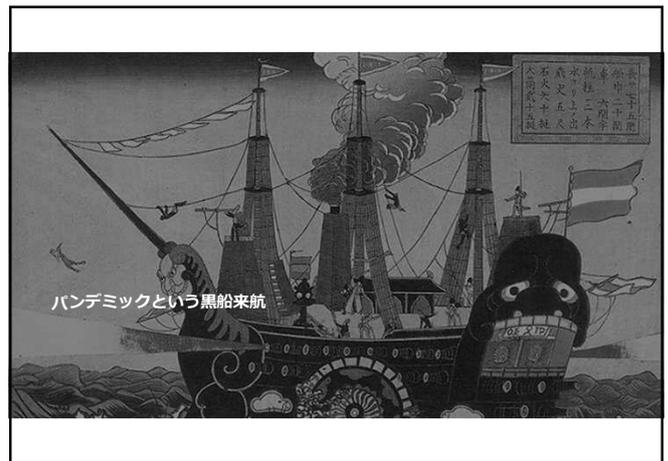
<タイムスケジュール>

9:40-10:10	COIL3.0を共創する一次世代の国際教育のあり方の探求— (関西大学国際部 池田佳子氏)
10:10-10:15	小休憩 (チャットで質問をお寄せください)
10:15-10:45	イマーシブテクノロジー (没入型技術) と ヴァーチャルトラベル (仮想旅行) による文化交流 (京都外国語大学国際貢献学部 エリック・ハーキンソン氏)
10:45-10:50	小休憩 (チャットで質問をお寄せください)
10:50-11:20	遠隔地からの授業の利点や限界—教員側の視点から (京都外国語大学非常勤講師 前川 愛氏)
11:20-11:25	小休憩 (チャットで質問をお寄せください)
11:25-12:00	質疑応答・パネルディスカッション

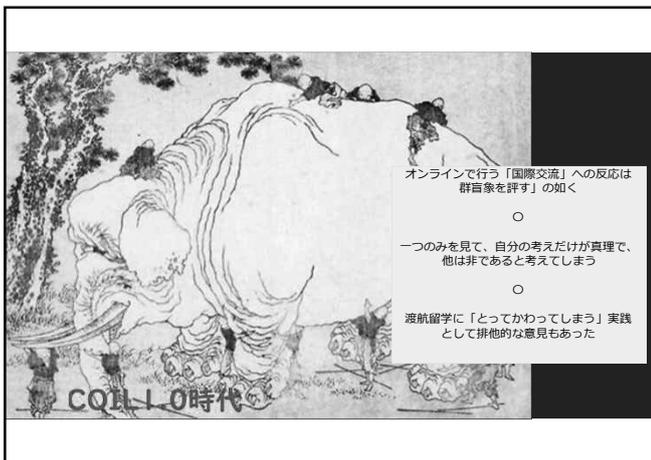
スライド1



スライド2



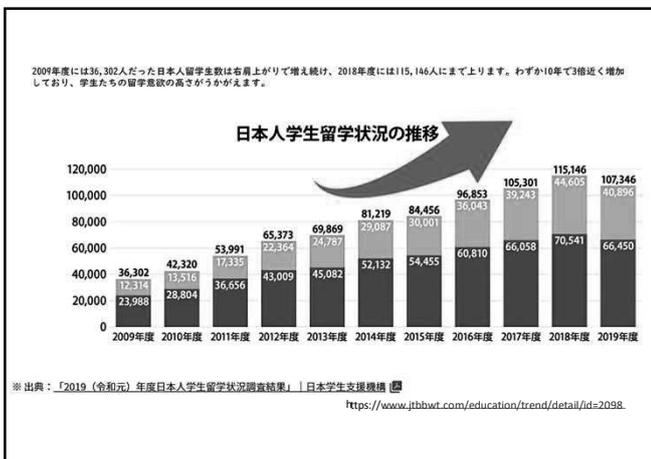
スライド3



スライド4



スライド5



スライド6



スライド7

コロナ時代の「留学」  
 コロナ禍で注目 オンラインで海外とつなぐ教育「COIL」とは

コロナ禍になり、あれよという間にモビリティ（渡航留学活動）が不可能に

すがる思いでオンライン教育へと切り替える中、「留学」の代替品としての位置づけでCOIL/VEを導入

様々なEdTechの台頭も同時にスタートし、テクノロジーを活用する国際交流教育は奨励された

野 別

テーマの固定なし、低コスト、自在に応用

渡航ができなくなり、にわかに脚光

COIL2.0時代

スライド8

JPN-COIL Association Member List

Regular Members

- 1 Chiba University
- 2 The University of Tokyo
- 3 Tokyo University of Foreign Studies
- 4 International Christian University
- 5 Tokyo University of the Arts
- 6 Kagoshima University
- 7 University of the Ryukyus
- 8 Osaka City University
- 9 Sapporo University
- 10 Ochanomizu University
- 11 University of Shizuoka
- 12 Nanzan University

JPN-COIL ASSOCIATION・協議会

MEMBERSHIP BENEFITS

- General Assembly Participation
- Member-Only Events/Program Participation
- Overseas University Matching
- Individual COIL Consultation/ Guest Speaker Request
- Member-Only Discount

JPN-COIL Association

スライド9

国際航空 到着口 North

国際航空到達口 국제선 도착구 North

EPIDEMIC vs. PANDEMIC vs. ENDEMIC

- EPIDEMIC: A disease breaks out within a community or spreads quickly through a small geographical area.
- PANDEMIC: When a disease spreads quickly across several countries, continents or the world.
- ENDEMIC: When a disease is regularly present across an area and has relatively low spread.

国際航空 到着口 North

国際航空到達口 국제선 도착구 North

微信支付 WeChat Pay

スライド10

アフターコロナ  
 ウイズコロナ  
 ビフォーコロナ

WFH  
 Work From Home

WFA  
 Work From Anywhere

WWA  
 Work With Anyone

Choudhury, et al. (2019)  
 Is it time to let employees work from anywhere? (Harvard Business Review)

WFH to WFA (Working From Anywhere) Shift

スライド11

Digital Natives & Z Generations

Connected.

Immediate response, immediate feedback expected.

Must be shown, not just talked about.

ENGAGING

PARTICIPATORY

COMMUNITY-BASED

DE-CENTRALIZED

NO-ONE THING FITS ALL

COIL3.0時代へ

我々が好む時代の学び方・つながり方は違う。何が彼らをモチベアップさせるのかも、ミレニウムやそれ以前とは大きくことなっている。デジタル活用・オンライン教育は、「当然」の世界なのだ。

スライド12

J-MCP (Japan Multilateral COIL/VE Project)

多方向・多国間 COIL/Virtual Exchange型教育 プロジェクト

COIL3.0時代へ

KU DDX DIGITAL TRANSFORMATION

Institute for Innovative Global Education

スライド13

### J-MCPIにおけるCOILの特徴

- Intercultural Intervention | 異文化対応能力の涵養を目指した教育実践の挿入**  
多様な国籍・背景、そして専門を持つ学生が参加するモジュールを通じて、多様な文化に対する力（異文化対応能力）を涵養する機会を多く提供できるプログラムとなっている。この実践型教育を推進するにあたり、J-MCPIの中心業務は自身の異文化経験・人間的・心理的・社会的スキルを涵養するといった活動（シミュレーション）を軸とし、かつ、一方で最新のデジタルツールを用いた国際的な協働活動が特徴である。例えば、2022年度のJ-MCPIでは、IECE Professional Series (2021)および、EAIE Community Exchange 2021に於いて、AIEA Executive Director, Daria Deardorff氏と協働し、この点について積極的な発信を行っている。
- Jointly generated curriculum | 国内外機関の協働が共同構築したカリキュラム**  
J-MCPIの中心業務としてIECE（慶応大学）及び共同パートナー国内外大学が提出した、Main Facilitator, Trainingと受託された課題が、共同で構築されている。現在3つの科目（21st Century Skills, SDGs & Business, Diversity & Inclusion）の共同プログラムが完成し、2022年度8-9月に実施される、COIL623卒業生である講師の共同設計による特徴も、複数国でも継続されている。
- COIL Task design to enhance collaborative & participative learning | 協働・参加型学習を推進するタスク設計**  
単に知識を得るだけでなく、協働を促すためのタスク設計が重要である。COIL623卒業生は、協働を促すためのタスク設計が重要である。COIL623卒業生は、協働を促すためのタスク設計が重要である。COIL623卒業生は、協働を促すためのタスク設計が重要である。



スライド14

### J-MCP Summer 2022 21st Century Skills 科目の授業風景 (2022年夏)



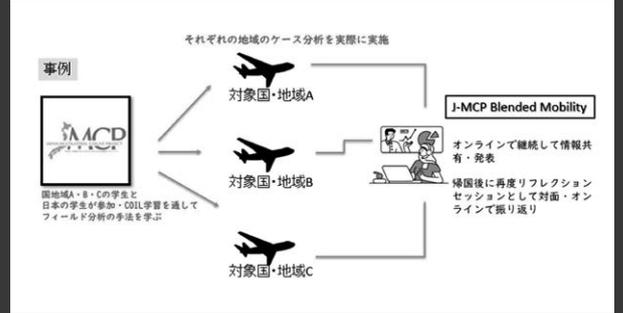
スライド15

### Metadata for each digital badge (IIGC 運営委員会にて監修)

Module-specific badge image	Digital Badgeのイメージ
	
<b>Badge Name</b> Diversity & Inclusion by J-MCPI	
<b>Description</b> Diversification of national and international work environments has precipitated an urgent need to provide cross-cultural communication skills development for learners. Using multimedia content, this course focuses on developing skills that learners need to engage meaningfully and successfully with people from a wide array of backgrounds, targeting learners' understanding of identities and what that means for communicating across cultures. The course combines synchronous activities with multimedia, engaging asynchronous materials. 世界情勢の変遷において、多様な国籍・背景を持つ学生、卒業生の異文化コミュニケーション能力の涵養が求められています。このコースでは、ビデオ、オーディオ、テキスト、画像などを用いた多様なメディアを通じて、多様な文化背景を持つ人々と効果的にコミュニケーションをとることができるようになることを目指しています。学習者のアイデンティティとそれが異文化間のコミュニケーションにおいて何を意味するのかを理解することを目的としています。このコースは、ライブセッションと多様なメディアを組み合わせた多様な学習活動を通じて実施されています。	

スライド16

### J-MCP Blended Mobility



事例

- 対象国・地域A
- 対象国・地域B
- 対象国・地域C

J-MCP Blended Mobility

オンラインで継続して情報共有・発表

帰国後に再度リフレクションセッションとして対面・オンラインで振り返り

スライド17

### 次世代の国際教育をどう考えるか

コロナ禍と同時に、世界も大きく変化している



スライド18

### World Affairs | 世界の事情の変動



スライド19



スライド20



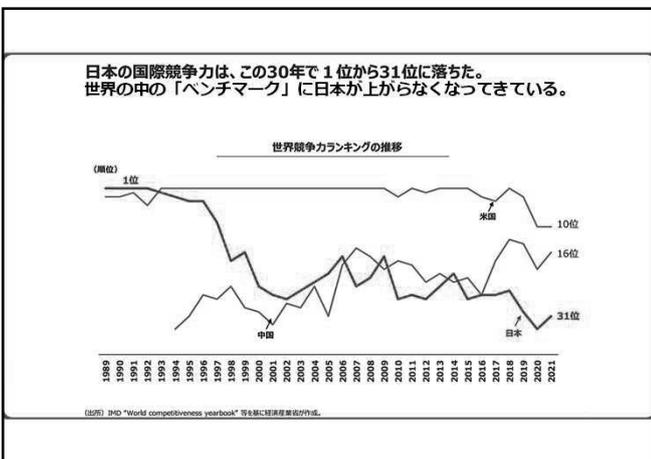
スライド21



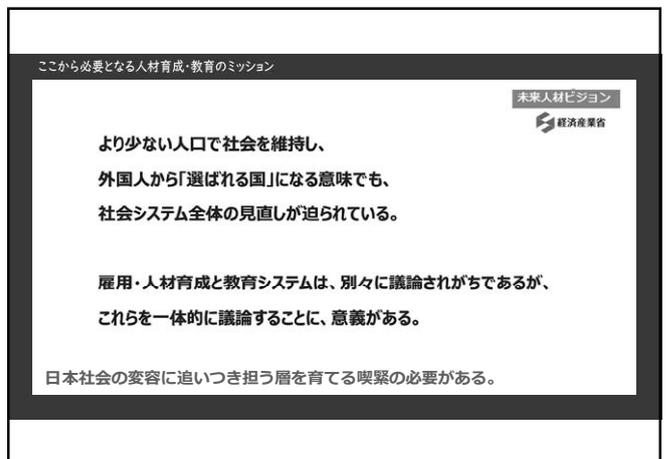
スライド22



スライド23



スライド24



スライド25

これからの時代に必要となる能力やスキルは、「基礎能力」や「高度な専門知識」だけではない。

未来人材ビジョン  
経済産業省

次の社会を形づくる若い世代に対しては、

「常識や前提にとらわれず、ゼロからイチを生み出す能力」  
「夢を手放さず一つのことを掘り下げていく姿勢」  
「グローバルな社会課題を解決する意欲」  
「多様性を受容し他者と協働する能力」

受入れる側は「ゼロからイチ」をまず最初に対応しなくてはならないかもしれない

といった、根源的な意識・行動面に至る能力や姿勢が求められる。

スライド26

56の能力等に対する需要

2015年		2050年	
注意深さ・ミスがないこと	1.14	問題発見力	1.52
責任感・まじめさ	1.13	的確な予測	1.25
信頼感・誠実さ	1.12	革新性*	1.19
基本機能（読み、書き、計算、等）	1.11	的確な決定	1.12
スピード	1.10	情報収集	1.11
柔軟性	1.10	客観視	1.11
社会常識・マナー	1.10	コンピュータスキル	1.09
粘り強さ	1.09	言語スキル：口頭	1.08
基礎スキル*	1.09	科学・技術	1.07
意欲積極性	1.09	柔軟性	1.07
...	...	...	...

※基礎スキル：広く様々なことを、正確に、早くできるスキル  
※革新性：新たなモノ、サービス、方法等を作り出す能力

(注) 各種種で求められるスキル・能力の需要度を表す指数は、56項目の平均が1.0、標準偏差が0.1になるように調整している。  
(出所) 2015年は労働政策研究・研修機構「職放構造に関する研究」、2050年は同研究に加えて、World Economic Forum「The future of jobs report 2020」、Hanan Bakshi et al.、「The future of skills: Employment in 2030」等を基に、経済産業省が能力等の需要の伸びを推計。

スライド27

多様性は、イノベーション創出にとって不可欠である。  
日本社会の姿容において、多様性を理解するマインドセットがより求められている。

未来人材ビジョン  
経済産業省

イノベーションによる売上高が全体に占める割合

経営者の多様性スコアが平均未満の企業: 26%  
経営者の多様性スコアが平均以上の企業: 45%

(注1) 86国（86国、アフリカ、アジア、オセアニア、インド、スイス、オーストラリア）に計り得る企業を対象に調査。  
(注2) 86国で最大のイノベーションの割合（注1）を基準とし、注1の調査結果を比較し、平均を算出。  
(注3) イノベーションとは、過去3年以内に市場投入された新製品・サービスの売上。  
(出所) BCG「New Diverse Leadership Team Boost Innovation」(2018)より作成。

スライド28

しかし日本企業の経営者は、「生え抜き」が多く、同質性が高い。  
これからの姿容を担う層を育てる喫緊の必要がある。

未来人材ビジョン  
経済産業省

CEOの内部昇格・外部招聘の割合

国	内部昇格	外部招聘
米国・カナダ	79%	21%
西欧	76%	24%
日本	97%	3%
その他先進国	77%	23%
中国	85%	14%
ブラジル・ロシア・インド	79%	21%
その他新興国	95%	4%

CEOの他企業での経験

国	他企業での経験なし	他企業での経験あり
米国・カナダ	5%	94%
西欧	14%	86%
日本	82%	18%
その他先進国	29%	71%
中国	34%	66%
ブラジル・ロシア・インド	33%	67%
その他新興国	35%	65%

(注) 86国（米国、カナダ、オーストラリア、フランス、ドイツ、イタリア、日本、韓国、インド、中国、ロシア、ブラジル、インドネシア、インド、南アフリカ、メキシコ、トルコ、タイ、インドネシア、オーストラリア、ニュージーランド、フィリピン、韓国、台湾）を対象に調査。  
(出所) Strategy& Analytics「2018年 CEO昇格調査」を基に経済産業省が作成。

スライド29

国際教育に今一層強く求められているのは、このようなマインド醸成を、まずは学生層に、そして教育界にかかわるすべての層、そして社会全体に対して波及していくことである

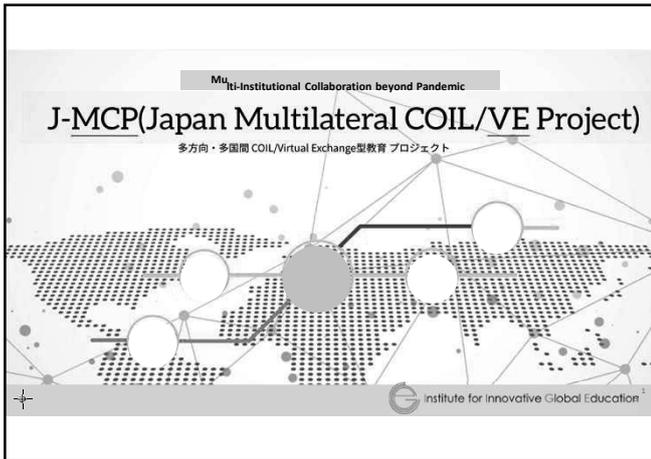
Diversity, Equity, and Inclusion  
Sustainable Development Goals  
Global Citizenship Education  
多様性、公平性、包摂性 持続可能な開発目標  
地球市民としての意識教育

産業界はいち早くこれらの重要性に対して動きをみせている  
教育界の「周回遅れ」は、ポストコロナ備前フェーズでは改善されるべき

スライド30

COIL3.0  
ポスト・コロナ禍期の社会でこの実践をどう生かすべきか  
関西大学の事例

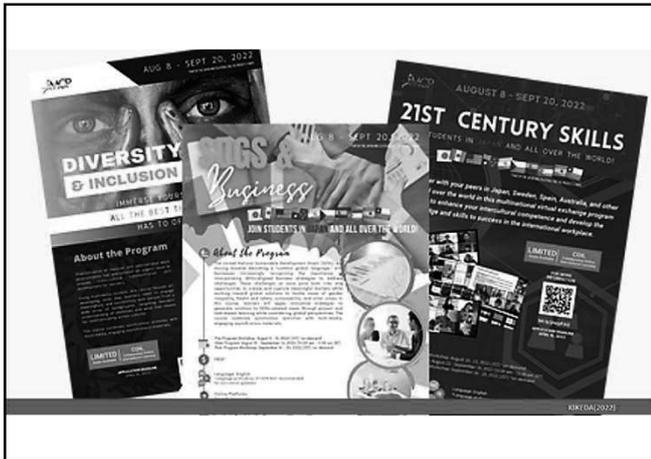
スライド31



スライド32



スライド33



スライド34

COIL 実践のような教育的介入を経て、この図にあるような4つの領域において成長を促すことを主眼におき、COIL 等のプログラムの構築を行っている。

関西大学の場合

### 国際教育プログラムの「効果」(アウトカム)

グローバル人材として必要な資質・特性の涵養

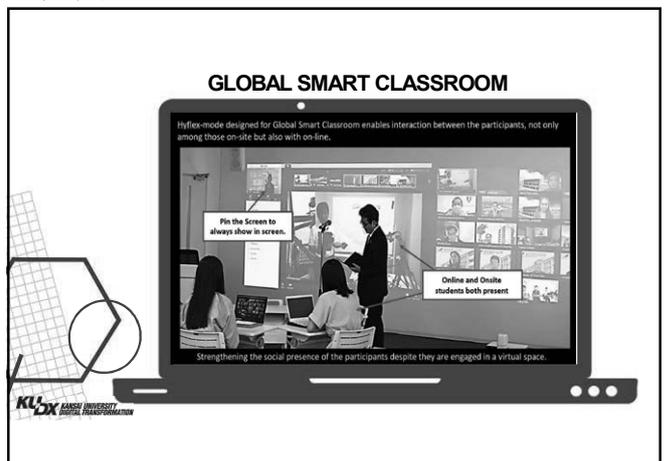
<p><b>SELF-ACCESS</b> 成熟した自己理解</p> <p>WEA時代に対応し柔軟に学習できる柔軟な学び、11の共通に得られる多様な21世紀の学習やスキルを身につけていく積極的・主体的な学び姿勢を育む</p> <p>経験を通して、自己の成長に活用することができるよりフレキシブルな学習姿勢を育む</p> <p><b>TOLERANCE of DISEQUILIBRIUM REFLECTIVE</b></p>	<p><b>DEI-SENSITIVE</b> DEIへの感受性</p> <p>DE (Diversity, Equity, and Inclusion) をしっかりと理解し、思考・行動に反映できる能力</p> <p>Social IS、的選考に必要なSDGsをはじめとする世界の情勢に敏感である</p> <p><b>GLOBAL/ECOLOGICAL RESONANCE SOCIOCULTURAL OPENNESS</b></p>	<p><b>BORDER TRANSCENDING</b> 越境した世界観</p> <p>生まれ育った国や地域が提供する多様な文化 (バリエーション) を認め、多文化・多国籍な世界や文化や世界の理解を深め、自身の可能性を拡大することによって世界をキャリアの舞台として捉える視野と感受性を持つ</p> <p><b>GLOBAL/ECOLOGICAL RESONANCE VERSATILE</b></p>	<p><b>CRITICAL THINKER &amp; TEAM PLAYER</b></p> <p>自己理解、自己観察、自己調整、自己修正の思考ができるクリティカル思考を持つ。多様な状況や課題を解決するために柔軟な思考力と問題解決能力でそれを解決して実践できる</p> <p>異文化や異なる価値観を持つ者同士ではなく異なる文化を持つ、異質な価値観をより深くしなやかな「チーム」で学生チームに協働することができる前向き、意欲を持つ</p>
--	---	---	--

FOUNDATIONAL LIFE-LONG LEARNING SKILLS & STRONG BASE OF KNOWLEDGE

スライド35



スライド36



スライド37



スライド38



スライド39

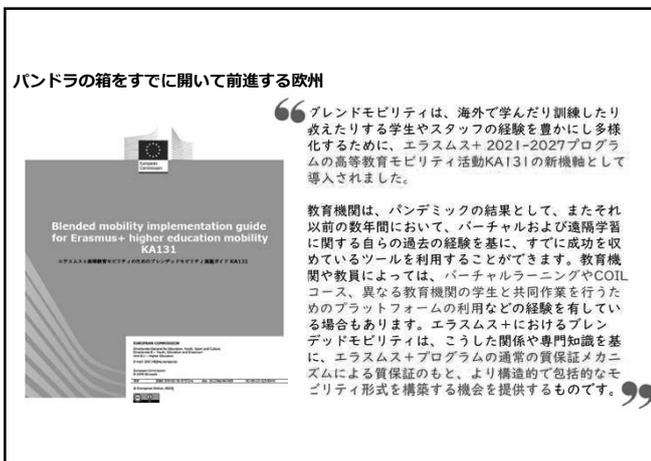


スライド40



第7分科会

スライド41



スライド42



スライド43

SINGAPORE – Instead of being a one-time launch pad, educational institutions can become more like pit stops where workers can periodically return to refuel throughout their working life, said Deputy Prime Minister Heng Swee Keat on Wednesday.

Emphasizing the need for the higher education sector to evolve, he added that universities must respond to developing trends such as continuing education and digitalisation.

One big shift is towards lifelong learning and preparing workers for disruptions in their careers, he said, as emerging technologies such as automation reshape the future of work rapidly.

"Even before the student receives his graduation certificate, the currency of his knowledge and skills is already starting to erode," added Mr Heng, addressing nearly 300 delegates at the inaugural THE Campus Live SE Asia 2022.

The two-day event is organized by Times Higher Education and hosted by the National University of Singapore (NUS).

"To respond to these trends, we will need to continuously develop each individual across different stages of life," he noted.

生涯学習・継続的な学習・格子塔モデルのキャリア形成に資する学びを提供することができるのがオンライン型（国際）教育

シンガポール – 教育機関は三回性の発射台ではなく、お勤者生活を通じて定期的に燃料を補給するピットストップになるべきだと述べました。

また、高等教育セクターの進化の必要性を強調し、大学は継続教育やデジタル化などの発展傾向に対応する必要がありますと述べました。

自動化などの新技術が仕事の将来を急速に変化させる中、生涯学習とキャリアの形成に備えることが大きな転換点である、と両氏は述べました。

「学生が卒業証書を受け取る前ですら、その知識とスキルの通貨はすでに侵蝕され始めています」と、Heng氏は第1回THE Campus Live SE Asia 2022で約300人の代表者に語って述べました。

この2日間のイベントは、Times Higher Educationが主催し、シンガポール国立大学(NUS)が主催しています。「このようなトレンドに対応するためには、人生のさまざまな段階において、一人ひとりを継続的に成長させる必要があります」と強調しました。

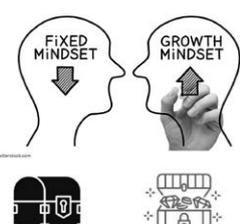
この2日間のイベントは、Times Higher Educationが主催し、シンガポール国立大学(NUS)が主催しています。「このようなトレンドに対応するためには、人生のさまざまな段階において、一人ひとりを継続的に成長させる必要があります」と強調しました。



スライド44



スライド45



FIXED MINDSET 才能は変化しない	GROWTH MINDSET 才能は磨けば伸びる
ひたすら自分是有能だと思われたい	ひたすら学び続けたいと思っている
できればチャレンジしたくない	新しいことにチャレンジしたい
壁にぶつかったらすぐにあきらめる	壁にぶつかっても耐える
努力は忌まわしい	努力は何かを得るために欠かせない
ネガティブな意見は無視する	批判から真摯に学ぶ
他人の成功を脅威に感じる	他人の成功から学びや気づきを得る
結果的に早い段階で成長が止まり、可能性を發揮できない。すべてを決定論的な見方でとらえてしまう	結果的により高い成長を達成できる。すべてを自由な意思で切り開いていける

バンデニングという「契機」が、新しいことにチャレンジする「理由」をもたらした。古いフィックスド・マインドセットでがんじがらめの日本の教育を今なら成長マインドへと脱却できる。逆にいうと、これ以上の機会は来ない。

【出典】 キャロル・S・ドウェック (2016年) 『マインドセット「やればできる!」の研究』 今西康子訳 草思社

スライド46



Thank you! Let's Connect.

<https://www.linkedin.com/in/keiko-ikeda-0423/>



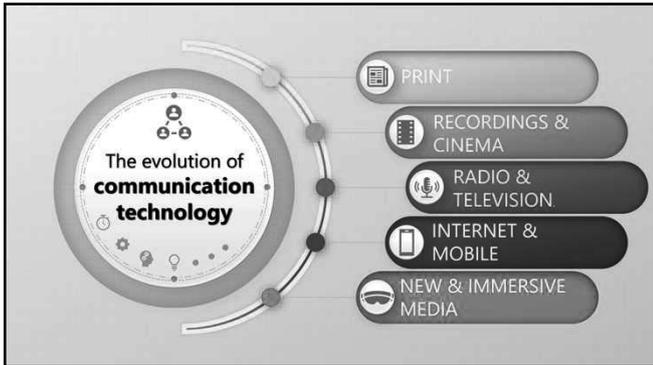
スライド1



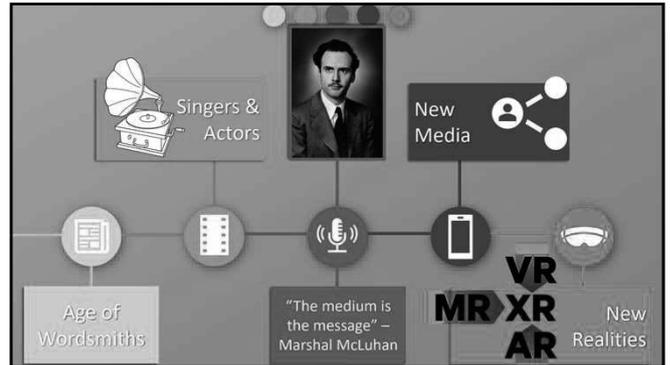
スライド2



スライド3



スライド4



スライド5



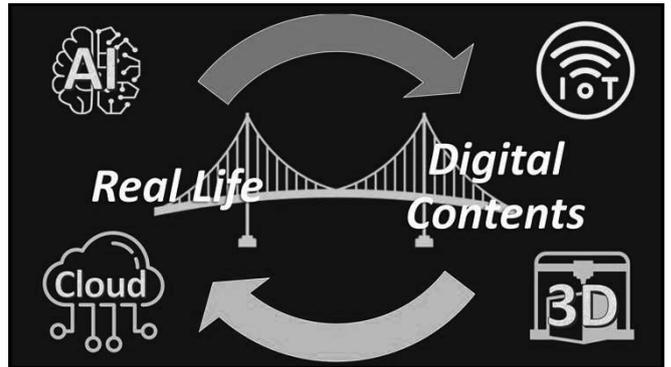
スライド6



スライド7



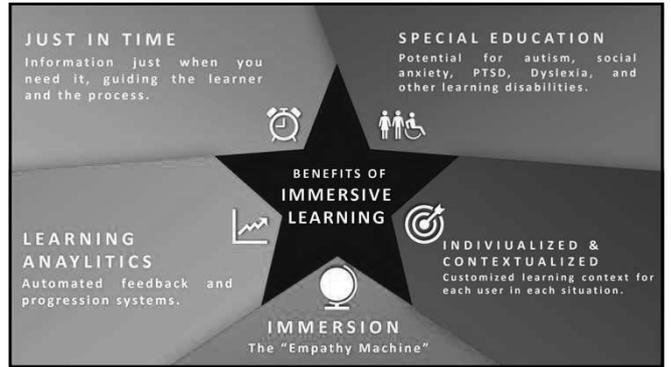
スライド8



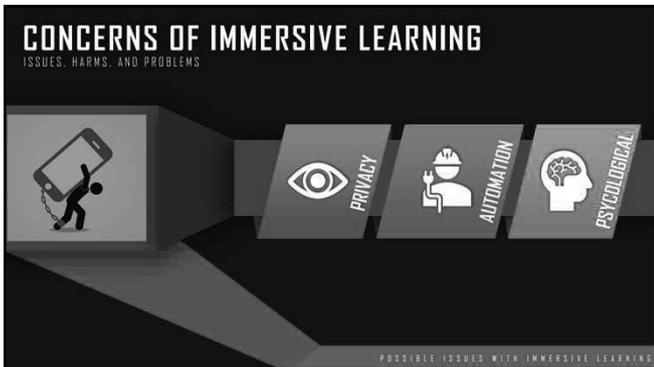
スライド9



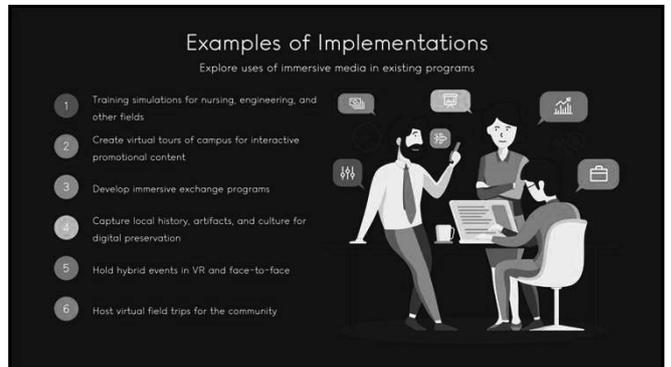
スライド10



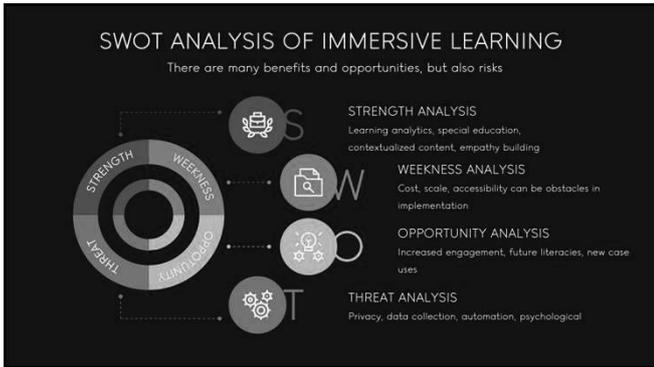
スライド11



スライド12



スライド13



スライド14



スライド15



スライド16



スライド17



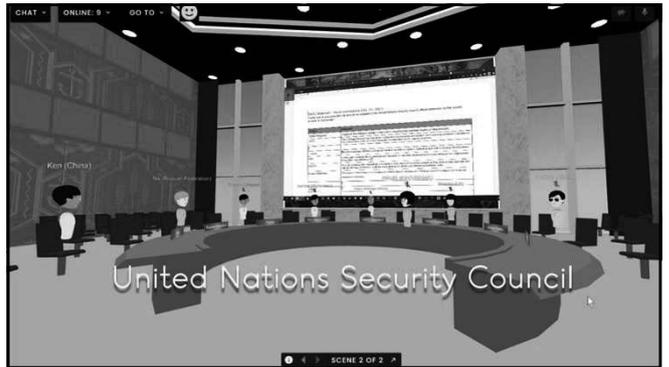
スライド18



スライド19



スライド20



スライド21



スライド22



スライド23



スライド24



スライド25

### Pivot to Distance Delivery

During "Emergency Remote Teaching" 2020-2021

- Expeditions
  - WebVR: easily accessible and shared online, making it a powerful tool for online education.
- In class tours
  - Asynchronous: students can participate from anywhere with an internet connection.
- In class demos
  - Online Database: take one or multiple hours of a place and students that interest you.
- Students in Japan
  - Students all over the world: online delivery allowed for overseas participation in the project.

スライド26



スライド27

### Project Activities

- 10 Sections (1-2 hours per Section)
- 2 Mini-projects (4 weeks)
  - Storytelling and Media Design
  - Immersive Technology
- Hometown Tour (6 weeks)
  - Mapping/Planning
  - Your First Scene
  - Peer Review
  - Adding More Scenes
  - Showcase

スライド28

### Tools for the Course

- Online Learning Website**
  - Course Materials
  - Offline Discussions
  - Project Database
- Discord/Twitch**
  - Chat/Help
- PC or Mac (Internet)**

スライド29

### Student Voices

Common themes from project participants

- #STORIES
- #FRIENDS
- #COOL
- #RAPPORT
- #TRAVEL
- # Hanging out
- # Building rapport
- # Desire to travel
- # Power of storytelling
- # Visually appealing

スライド30

### Blending Realities in the Road Ahead

Mixing Teaching and Learning Methods and Technologies Moving Forward

- NEW LABS**: Need for new physical spaces to facilitate immersive learning.
- DIGITAL TWINS**: Classrooms in digital spaces to teach in the Metaverse.
- COLLABORATION**: Online learning to look more like face-to-face learning.
- NEW SKILLS**: Different skill sets will be needed for this generation.

スライド1

2023/2/24 第28回FDフォーラム 第7分科会  
9:30-12:00

## 遠隔地からの授業の利点や限界 －教員側の視点から

京都外国語大学非常勤講師  
前川 愛

スライド2

## 経験した授業形式

授業タイプ	配信形式	場 所	時 期
オンラインのみ	ライブ	オランダから	2020年度
ハイフレックス (対面とオンライン配信)	ライブ	大学から	2021年度 2022年度
オンデマンドのみ	オンデマンド	京都と オランダから	2021年度 2022年度

授業は講義で、演習、実習は含まない

スライド3

## 1. 遠隔授業の利点

※教育内容や教育効果ではない利点

おもな利点	
休講・補講の回避	
ワークライフバランス	
その他	

適用時	
緊急時	
通常時	
その他	

スライド4

## 遠隔授業の利点【緊急時】

### 休講・補講の回避

自然条件による短期的な出講困難

中・長期的な移動困難

} 物理的移動  
手段の困難

↳

心理的な困難

スライド5

### 物理的移動手段の困難

- ・台風や大雪などの短期的な移動困難
- ・コロナと戦争で、個人の移動は国家権力によって簡単に制限されうることが、現実化した。あるいは、移動需要の減少と、規制によって移動手段も失われたり、極端に不便になったりする

スライド6

### 心理面の困難とは

教員も学生も（とくに留学生で国境を超える場合）、家族と一度離れると、長期にわたって再合流ができなくなる可能性がある場合、通常時にできていた移動の心理的ハードルが非常に高くなる

## スライド7

### 遠隔授業を活用

大学へ（教員も学生ともに）行けないことが発生しても、遠隔授業ができる状態を確保していると、授業を継続できる

→ 教員にとっても学生にとっても、後のしわ寄せが減らせる

緊急時は、代理が授業をすればいいとも考えられるが、授業は準備が必須であり、緊急に代理を引き受けられる人も限られる

## スライド8

### 遠隔授業の利点【通常時】

#### 労働と家庭への影響／「ワンオペ〇〇の軽減」

従来、大学教員がパートナーと違う土地で就職した場合、退職まで単身赴任、別居婚ということがよく見られた

→ その場合、人間の生活のうち、無償労働部分である家庭内のケア労働などのバランスが悪いことが多い。「ワンオペ〇〇」が多発

→ 対面と遠隔授業を組み合わせると労働（授業）ができることによって、家庭内の「ワンオペ〇〇」が軽減できることにつながる

## スライド9

大学での遠隔労働（リモート勤務）は教員のみならず

ワークライフバランスという観点での遠隔労働の利点は、大学で働く教員以外の人たちにも同じことが言える。

そのため、遠隔労働が教員の特権としてだけではなく、職員全体の働き方の柔軟性を高める方向に変化するほうが、スムーズに移行できるのでは？

⇒ 働く人が幸せな大学へ・・・

## スライド10

### 遠隔授業の利点

#### 【その他、長期調査中など】

##### 休講・補講の回避

フィールド調査に季節などの限定がある場合も多く、調査に出ている間も、通信環境さえ確保できれば授業が継続できる

あるいは、前もって設定した日時でオンデマンドにするなど、事前準備で工夫できる

（留意点：調査に集中できないなど弊害がある場合は、遠隔労働が強要されてはならない）

## スライド11

### その他

#### 【遠隔地の講師に授業を依頼する】

遠隔地において、国内外を問わず最初から大学に来られないとわかっている人にも、講師を依頼できる

## スライド12

### 2. 遠隔授業の限界

#### 時差

日本標準時に合わせることで、不健康なライフスタイルになることも

（例：オランダからは日本の朝9時は夜中の1時か2時でライブ授業は難しい）

地球上の場所による

スライド13

### 持続性/CO2排出

オンライン授業のデータの保存期間を設定しておかないと、オンライン上にデータが残り続けることによって、データセンターのCo2排出につながる

スライド14

### 授業準備の工夫

授業を準備する際に必要な文献などを、遠隔地でも同じように用意するため、準備に要する見通しが異なる。直前に用意をしようとしても、研究環境によっては資料が手に入らないことなどもありうる  
しかし、前もって準備を入念にすることで、ほぼ解決できる

スライド15

### 学生がオンデマンド視聴を忘れる

アンケートによると、自分の都合の良い時間に視聴するメリットがあると同時に、対面の授業よりフレキシブルであるために、受講を忘れることがあるそう  
締め切りリマインドを流しても、リマインドを見ることを忘れるらしい  
これに関しては教員側にできることが限られる

スライド16

### その他

遠隔授業≒オンライン授業の経営的なメリットの事例  
オランダでは、コロナ以前から、オンライン授業が経営的な観点から活用されていたと聞く  
授業は、アップロードされた教員による動画（何年も使いまわし）を見ることで、学生は大学に来ないことが想定されていた  
→そもそも学生が全部入る教室もなく履修させていた

スライド17

これらのオランダでの遠隔授業のなりたち

- オンデマンドで視聴することが基本
- わからないことがある学生は、教室へ来る
- ティーチングアシスタントの大学院生が教室には配置されており、その人たちが学生の疑問に答え、指導する
- オンライン授業は学生をたくさんとるための手段だった。とくにEU外の留学生が来ると、儲かるため

→ しかし、最近ではオランダ政府は留学生受け入れをやめる方針（2022年12月の政府決定）  
理由：教員の負担軽減と住宅不足のため

スライド18

以上、具体的な経験からの状況の整理でした

ありがとうございました

## 第8分科会

その能力、どうしたら社会で活かせる？  
—発達障害のある理工系学生の能力を専門職就労につなげる  
ために必要な支援と課題—

### 報告者

藤川 洋子 京都工芸繊維大学 アクセシビリティ・コミュニケーション  
支援センター 特定教授

佐野 友宇子 オムロン京都太陽株式会社 人事総務課 精神保健福祉士

乾 智子 京都新卒応援ハローワーク 就職支援ナビゲーター

### コーディネーター

三好 智子 京都ノートルダム女子大学 現代人間学部 教授



---

---

## 〈第8分科会〉

# その能力、どうしたら社会で活かせる？

—発達障害のある理工系学生の能力を専門職就労につなげるために必要な支援と課題—

コーディネーター

京都ノートルダム女子大学 現代人間学部 教授 三好 智子

---

---

### ○本分科会のねらい

発達障害のある学生は得意・不得意の差が大きく、高い能力を持っている場合でも、コミュニケーションの不得手やこだわりの強さなどの特性から、社会・企業の期待とのマッチングに困難が生じやすい。発達障害のある人の中には、いわゆる理工系分野に高い能力や資質をもっている人がいる。しかし、その能力が実際に社会で活かされるには、現状、様々な課題があると思われる。本分科会では、大学・企業・公的就労支援機関より、取り組みの現状についてご報告いただき、まずはそれぞれの立場での「今、取り組んでいること・課題となっていること」を共有し、今後の議論につなげることを目的とした。

### ○報告の概要

はじめにコーディネーターより、本分科会の趣旨説明を行った。

講演1では、京都工芸繊維大学アクセシビリティ・コミュニケーション支援センター特定 教授の藤川洋子氏が、大学障害学生支援部門における取り組みについて報告を行った。まず、Society5.0に向けた人材育成におけるSTEAM教育（Science, Technology, Engineering, Arts, Mathematics）の重要性と、発達障害特性とSTEAM領域の親和性について述べられたのち、理工系を専攻する発達障害学生の「修学期/就職準備期」から「就職活動期」にわたる具体的な支援について、事例を交えつつ報告がなされた。また、発達障害学生の能力を活かしていく上ではアセスメントが重要であり、チームでの支援が有効であることが述べられた。講演2では「発達障がいのある理工系学生の専門能力を活かすための企業としての取り組み」と題して、オムロン京都太陽株式会社人事総務課の佐野友宇子氏が報告を行った。まず、オムロン京都太陽株式会社の企業理念や会社概要等の説明ののち、理工系学部を卒業した発達障害のある社員への個別の支援と、周囲を含めた「究極のコミュニケーションの仕組みづくり」について報告がなされた。また、学生を支援する大学関係者へのメッセージとして、「一人ひとりをしっかり見る」「自己理解と自己発信の支援」「行動改善（成長）の支援」に加えて、大学と就職先、外部支援機関との連携が重要であることが述べられた。

講演3では「ハローワーク特別支援内容～現場での支援と課題～」と題して、京都新卒応援ハローワークの乾智子氏が報告を行った。まず、ハローワークが大学と連携して発達障害学生の支援を行うようになった経緯について、近年の発達障害学生の増加や就職状況、就労支援機関の利用状況等をもとに説明がなされた。そして、ハローワークによる「特別支援チーム」の体制と支援の実際について、事例を交えつつ報告がなされた。最後に、「学業と就職活動の両立」「就職準備と就職活動のスタートの時期」「インターンシップの対応」「定着支援」等が、現在の課題として述べられた。

### ○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

全体討論では、改めて「発達障害のある理工系学生が、その資質や専門性を社会で活かすには？」というテーマに対し、社会全体の理解を高めていく必要性や、様々な困難を抱える当事者学生へのメッセージ、多様な就職の仕方やキャリア形成に関する提言等が述べられた。質疑応答では、精神障害のある学生の定着支援や職場定着率に関する質問があった。

スライド1

その能力、どうしたら社会で生かせる？  
 —発達障害のある理工系学生の専門職就労とその支援—

京都工芸繊維大学 アクセシビリティ・コミュニケーション支援センター  
 特定教授 藤川 洋子 (臨床心理士)



スライド2

1. Society 5.0 for SDGs



Society 5.0 (スマート社会)

Society1.0(狩猟社会)、2.0(農耕社会)、3.0(工業社会)、4.0(情報社会)に次いで、2016年に採択された(総務省: 科学技術基本計画第5期) 新たな未来社会のキャッチフレーズ

サイバー空間とフィジカル空間を高度に融合させたシステムにより、経済的発展と社会的課題(貧困・差別など)の解決を両立する新たな社会。  
 ⇒ 障害者差別解消法(2016)もその一環

Society 5.0 for SDGs  
 ・スマートシティ ・自動運転システム ・遠隔治療 ・無人店舗 ・VRの活用

スライド3

2. 大学に求められる役割



企業から見たらこうらしい  
 (「提言:新しい時代(Society5.0)に対応した大学教育改革の推進—主体的な学修を通じた多様な人材の育成に向けて—」 2022.1.18 経団連発表)

【欲しい人材】  
 ・イノベーションを起こせる人材  
 ・新たな価値を創造できる人材  
 ・グローバル・リーダーとなりうる人材

【その能力として必要とされるのは】  
 ① リテラシー(数理的推論・データ分析力)  
 ② 論理的思考力・規範的判断力  
 ③ 課題発見・解決能力  
 ④ 未来社会を構想・設計する力  
 ⑤ 高度専門職に必要な知識

しょうね

スライド4



【その資質として必要とされるのは】  
 ①失敗を恐れずに挑戦する姿勢  
 ②自己肯定感  
 ③忍耐力とリーダーシップ  
 ④チームワーク  
 ⑤学び続ける力

うーん

【日本の研究力の低下と企業の対応】  
 ① 若手研究者の経済的困窮(ポスト不足)  
 ② 理工系人材の不足  
 ⇒ ③ 博士人材の企業における採用促進  
 ⇒ ④ ジョブ型インターンシップの試行的実施

スライド5

3. Society5.0に向けての教育とは



STEM教育  
 Science  
 Technology  
 Engineering  
 Mathematics

STEAM教育  
 Science  
 Technology  
 Engineering  
 Art(芸術)Arts(教養)  
 Mathematics

何を楽しいと思えるのか?  
 何が幸せなのか?

Society4.0 情報社会

Society5.0 スマート社会

参考: Society5.0に向けた人材育成に係る大臣懇談会(2018)

スライド6

4. STEAMと発達障害



【発達障害特性が指摘されているSTEAM領域の著名人】  
 ニュートン、アインシュタイン、アラン・チューリング、アンディ・ウォーホル、グレン・ゲールド、スティーブ・ジョブズ、イーロン・マスク、オードリー・タン、ビル・ゲイツ 等

☆ASD(自閉スペクトラム症)特性:対人相互性の障害・こだわり  
 ☆ADHD特性:注意欠如・衝動性/多動性

☆これまでに、障害を理由に本学AC支援センターを訪れ「合理的配慮」(障害者差別解消法)を受けたり、検討した学生のうち、80%が発達障害です

スライド7

5. 抱えている困難を見分ける

かつては**軽い障害**だとして、大学など高等教育機関では配慮を受けることがなかった。

↓

社会適応が困難な人(不登校、休・退学、うつ発症、無職者、中途退職者など)のなかに、高率で、発達障害を有する人が診断されるようになった。

↓

配慮の必要性が理解されるように

↓

聞き取りや心理検査では、「世間に合わせることの難しさ」と「能力の高さ」に驚かされる

(ex: 理解して欲しいことのチェックリスト 個別式知能検査)

スライド8

6. アセスメントの重要性

アスペルガー症候群の大学生一教職員・支援者・親のためのガイドブック  
(ロレーヌ・E・ウォルフら 2017 日本評論社) より 全9領域95問

**理解して欲しいことのチェックリスト**

所属 学籍番号 名前

スライド9

理解して欲しいことのチェックリスト(概念)

<p>1. 学習と記憶(10問)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 新しい宿題に困る</li> <li><input type="checkbox"/> 決断ができない</li> <li><input type="checkbox"/> 興味のあることだけを勉強したい</li> <li>...</li> </ul> <p>2. 注意と整理(10問)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 時々集中できない</li> <li><input type="checkbox"/> ほんの小さなことで気がそれる</li> <li><input type="checkbox"/> 部屋やノートがいつも整理されていない</li> <li>...</li> </ul> <p>3. コミュニケーションスキル(12問)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 社会的な話が苦手だ</li> <li><input type="checkbox"/> 人のいうことを遮るのは難しい</li> <li><input type="checkbox"/> 自分に興味のあることだけを話す</li> <li>...</li> </ul> <p>4. 行動(10問)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 考える前に始めることが多い</li> <li><input type="checkbox"/> 同じことはいつも同じようにしたい</li> <li><input type="checkbox"/> 予想外に物事が変化すると動揺する</li> <li>...</li> </ul> <p>5. 対人関係のスキル(12問)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 学校で学生と話すのは好きではない</li> </ul>	<p><input type="checkbox"/> 友達を作るのは私にとってとても難しい</p> <p><input type="checkbox"/> グループでの課題は難しい</p> <p>...</p> <p>6. 感覚(14問)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 時計周りの音が私の耳には大きすぎる</li> <li><input type="checkbox"/> 他の人に近づきすぎると、びっくりする</li> <li><input type="checkbox"/> 物事は目で見て理解する必要がある</li> <li>...</li> </ul> <p>7. 感情(10問)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 学校にいることに、とても神経を使う</li> <li><input type="checkbox"/> 小さいことに反応し過ぎると人に言われる</li> <li><input type="checkbox"/> よく落ち込む</li> <li>...</li> </ul> <p>8. 健康増進と自己管理(11問)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 時々、あまり食べることができない</li> <li><input type="checkbox"/> 必要な睡眠時間をとっていない</li> <li><input type="checkbox"/> あまり運動しない</li> <li>...</li> </ul> <p>9. 大学での支援リソースの必要性(9問)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> どうしたら配慮を受けられるのかわからない</li> <li><input type="checkbox"/> 指導教員とのミーティングができない</li> <li><input type="checkbox"/> 学費の支払いに問題がある</li> </ul>
--	---

スライド10

7. 修学期から就職活動期への支援の在り方

<p><b>修学期/就職準備期</b></p> <p>アセスメント チェックリスト、アセスメントツール、知能検査を利用したの認知特性の把握</p> <p>「合理的配慮」の策定と提供 策定の段階で、指導教員(課程長・専攻長)、保護者と情報共有</p> <p>支援の実際(心理カウンセリングと並行して) 指導教員の理解、ピア・チューターによる学習サポート、グループワーク、学内アルバイト経験、チューター経験 (必要に応じて、非常勤精神科医との面接・医療機関との連携をおこなう)</p>	<p><b>就職活動期</b></p> <p>教員(研究室)による専門性の明確化 専門分野におけるスキル・強味の抽出</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・キャリア支援室の利用</li> <li>・ハローワークによる特別支援</li> <li>・就労移行支援事業所の利用</li> </ul> <p>障害を開示するか、しないか</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・非開示で決まる例 (内定後に障害を告げることも)</li> <li>・開示して決まる例</li> <li>・開示して不合格、非開示で合格の例</li> <li>・どちらも不合格の例</li> </ul>
--	--

スライド11

事例A,B: 修学上の「合理的配慮」とキャリア支援

<p><b>事例A(当日発表)</b></p> <p>学部入学から博士前期まで6年間、当センターでサポートをしたASDの男子学生。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>☆ピアチューターによる支援の在り方</li> <li>☆キャリア支援の曲折</li> </ul>	<p><b>事例B(当日発表)</b></p> <p>学部留年中に、自ら「発達障害では？」と受診し、服薬を始めたASD/ADHDの男子学生。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>☆障害を乗り越えようとする自らの努力</li> <li>☆指導教員の理解と支援</li> </ul>
---	--

スライド12

10. まとめ: その能力を社会で生かすには!

- ① 本人たちの特性を(環境側が)理解する。
  - ・明示、図示されない相手の意図は汲み取れない  
⇒ 「このメールは、本日中に要返信です」の必要性
  - ・ 「失敗体験」「叱られ体験」が多いため、不安を抱きがち  
⇒ 否定の命令文を使わない  
「ダメ！」ではなく、「こうすればいい!」
  - ・ 自己肯定感を上げる対話を心がける  
⇒ 当たり前のことでも、できたらOKサインをこまめに出す
- ② 就職先(障害開示)とは、前もって情報を共有する。  
(本人の了解を得て) 特性とその背景、本人の価値観などを伝えておく。
- ③ 大学においても、就職先においても、チームでのサポートが有効

スライド1

OMRON

プロフォーラム  
**発達障がいのある理工系学生の  
 専門能力を活かすための企業としての取組み**

2023.2.24  
 オムロン京都太陽株式会社  
 人事総務課  
 佐野友宇子

confidential 8 ©OMRON KYOTO TAIYO Corporation 0

スライド2

**発達障がいのある理工系学生の  
 専門能力を活かすには？**

▼

【オムロン京都太陽の取組み】  
**葛藤を恐れず、相手に踏み込み、  
 信頼でつながる「究極のコミュニケーション」で  
 自己理解・相互理解・相互成長を促す**

confidential 8 ©OMRON KYOTO TAIYO Corporation 1

スライド3

目次

1. オムロンの企業理念とオムロン京都太陽会社概要
2. オムロン京都太陽が目指す姿
3. オムロン京都太陽の取組み（事例）
4. 学生をサポートされるみなさんをお願いしたいこと

confidential 8 ©OMRON KYOTO TAIYO Corporation 2

スライド4

オムロンの企業理念

**「社会的価値」と「事業価値」を創造し続ける**

オムロンの社憲  
Our Mission

**われわれの働きで  
 われわれの生活を向上し  
 よりよい社会をつくりましょう** （1997年 創業理念 立石一真社長が制定）

オムロン京都太陽の  
3つの使命

企業の社会的責任の発揮

- ① 職能的重度障がい者の雇用機会創出
- ② 事業を通じて顧客満足と収益を確保
- ③ 障がい者雇用ノウハウを広く社会に提供

事業価値の追求  
 社会的価値の創造 - 共生社会の実現に向けて

confidential 8 ©OMRON KYOTO TAIYO Corporation 3

スライド5

オムロン京都太陽の企業概要

設立：1985年 3月  
 株主構成：オムロン59%・太陽の家38%・その他3%  
 従業員：生産従事者合計 186名\*障がい者数116名で6割以上 ※2021年4月1日現在  
 事業概要：オムロン製品の製造 \*約1,500機種種の多品種少量

製品別売上比①  
(2022年実績)

- ソケット 44%
- タイマー 13%
- その他 26%
- 光電センサー 6%
- 電源 3%

confidential 8 ©OMRON KYOTO TAIYO Corporation 4

スライド6

オムロン京都太陽サイトの人員構成

**就労者の62%が障がい者で、その内の10%が精神・発達障がい者**

障がい者比①

弊社サイトで働く障がい者：116名  
 ※オムロン京都太陽の障がい者は37名

2021.4.1現在  
 ©OMRON KYOTO TAIYO Corporation 5

スライド7

**目次**

1. オムロンの企業理念とオムロン京都太陽の会社概要
2. オムロン京都太陽が目指す姿
3. オムロン京都太陽の取組み（事例）
4. 学生をサポートされるみなさんをお願いしたいこと

confidential 8 © OMRON KYOTO TAIYO Corporation 6

スライド8

**オムロン京都太陽が目指す姿**

**「誰もが“イキイキ”と働き続けられる現場を創る」**  
 ～就労が難しい障がい者の働く機会創出～

一般工場：業務視点  
要件を満たす人材を選んで雇用

オムロン京都太陽：人視点  
多様な人材を活かす現場

外国人  
高齢者  
(身体障がい者)

決めたことをやる作業する人  
違いを認め・活かすイキイキと働く人

**“未来・社会・多様な人財から選ばれる企業”**

confidential 8 © OMRON KYOTO TAIYO Corporation 7

スライド9

**“イキイキ”の具体化**

一人ひとりの“可能性”を信じ、成長を追求し続ける

**軸**

**チャレンジ**  
作業の難しさと量の掛け合わせで表現される客観的な指標

**スキル**  
人の技能、体調によって変動する指標

**領域**

“イキイキ”領域  
パフォーマンス最大  
例) 時間も忘れて作業に没頭  
生産ペースも自己最高記録

“不安”領域  
ミスの発生確率大  
例) はんだ付けで電子を焦がす

“退屈”領域  
ボカミスの発生確率大  
例) 一か所はんだ付けを忘れる

不安  
スキル  
退屈

チャレンジとスキルを個性に応じて、  
バランスさせ、成長し続けている  
**(太)京働き方改革**

confidential 8 © OMRON KYOTO TAIYO Corporation 8

スライド10

**目次**

1. オムロンの企業理念とオムロン京都太陽の会社概要
2. オムロン京都太陽が目指す姿
3. オムロン京都太陽の取組み（事例）
4. 学生をサポートされるみなさんをお願いしたいこと

confidential 8 © OMRON KYOTO TAIYO Corporation 9

スライド11

**オムロン京都太陽の取組み（事例）**

4月

10月

Aさんのマネージャ

「現場が疲弊して  
仕事にならない」

■Aさん（理工系学部卒）  
障がい：発達障がい

confidential 8 © OMRON KYOTO TAIYO Corporation 10

スライド12

**現状と問題認識、そして挑戦**

**現状**

リーダ・マネージャ  
見えないものを見ようとしていない  
業務視点偏重の指導

Aさん  
現実と向き合っていない  
相談できずに孤立

職場メンバ  
自分は自分、人は人  
距離を置いて関わらない

これは一体、  
何の問題  
なんだ!!

まさに「断絶」  
と、これは  
組織の問題だ

**挑戦**

人と人を  
コミュニケーション  
で“つなぐ”  
仕組み・風土へ

confidential 8 © OMRON KYOTO TAIYO Corporation 11

スライド13

### 究極のコミュニケーションの仕組みづくり

オムロン京都太陽ユニークな究極のコミュニケーションで、ちょっと丁寧なマネジメントを行い、誰もが活躍できる職場をつくる

Web活用したRealな対話で毎日対話課題に対応

部下の可能性を信じる、慮はするが遠慮はしない指導

ありのままを受け止める、違いを認め、補完し合う

自分を受け入れる、自己開示し、助けをもち求める

自分と相手の距離を近づける

合理的距離を近づける

confidential © OMRON KYOTO TAIYO Corporation 13

スライド14

### Aさん、リーダー、人総スタッフで毎日を対話を行った

Aさんの日々の状況だけでなく、職場全体が見えてきた

心身の状態、業務の様子を日々、日報に入力

自己評価の推移をグラフ化機能によって「見える化」

自由記載コメント欄で日々の出来事や感情を共有

confidential © OMRON KYOTO TAIYO Corporation 13

スライド15

### 組織全体で情報を共有し、問題解決に取り組んだ

定期的な振り返りを行うことで、認識のずれがなく、問題発見・解決スピードが速まった

支援者会議

3者面談

2者面談

支援者会議

社長・マネージャー・リーダー・人総で、日報の記録をベースに1ヵ月を振り返る

3者で主に業務面を中心に振り返る

2者で主に体調、生活面を中心に振り返る

3者、2者面談での情報を共有、困りごとの解決、職場環境向上等を検討する

日常のコミュニケーションも増え、必要なメンバーで都度話し合うことが組織文化になりつつある

confidential © OMRON KYOTO TAIYO Corporation 14

スライド16

### 事象見える化シート（行動特性と対応策）

行動特性を見る化し、指導すべきものと容認すべきものを整理。対応策を決め、実行

	S step <sup>1</sup> 職場では好ましくない行動を洗い出す	S step <sup>2</sup> 行動と場がい特性を整理する	S step <sup>3</sup> 好ましくない行動によって起こる問題を明確化	S step <sup>4</sup> 指導の必要性を評価	S step <sup>5</sup> ゴールメッセージ（ありがたい姿）を掲げる	S step <sup>6</sup> 行動実容を促す対策を考えるAさん&周囲
居眠り		疲れやすい 職務が求められない 集中が持続しない	自分の仕事の遅れ 周りにくいけない イライラ、不機嫌、リポートで特異点 外部からの批判	要 5	眠気に基づき、自分で居眠りを回避する行動を行う。周囲は行動を理解する	周囲はその場で起こし、注意する。 2週間までの改善を指導（実施） Aさんは遠慮・脱退、 リーダーは職場環境を整備、会議での役割付与

confidential © OMRON KYOTO TAIYO Corporation 15

スライド17

### 現れた変化

気づき	行動
<p>リーダー・マネージャ</p> <p>人視点のマネジメントとは何か分かった 見えないものに目を向け、心の圏を知った</p>	<p>配慮はするが、遠慮のない指導ができるようになり、部下一人ひとりの強みを活かすマネジメントができるようになった</p>
<p>Aさん</p> <p>受け入れてくれる人に出会ったことで、自分と向き合うことの必要性に気づいた</p>	<p>自分自身を受け入れ、自己開示し、助けを求められるようになった</p>
<p>職場メンバ</p> <p>自分たちが無意識に障がいを作り出していることに気づいた</p>	<p>ありのままを受け止め、適切に付き合えるようになった</p>

confidential © OMRON KYOTO TAIYO Corporation 16

スライド18

### 組織が個人の能力を活かすために必要なこと

- 自己理解の重要性**
  - ✓ 障がいのある社員だけでなく、周囲も自己理解することで、皆が自分ができることを考えられるようになる。
- 相互理解の重要性**
  - ✓ 対話を通して、職場の全員がお互いを知ること、相手の意見や行動の背景を見ようとする意識が生まれる。
- 相互成長の重要性**
  - ✓ 個人間で起こる問題の裏に、チーム課題が隠れている。上司が一人ひとりの個性・特性にしっかりと目を向けることで、個が活き、チームが成長する。
  - ✓ 安全に安心して仕事に向かえ、一人では解決できないことに職場全員で取り組む体制が生まれる。

confidential © OMRON KYOTO TAIYO Corporation 17

スライド19

**目次**

1. オムロンの企業理念とオムロン京都太陽の会社概要
2. オムロン京都太陽が目指す姿
3. オムロン京都太陽の取組み
4. 学生をサポートされるみなさんをお願いしたいこと

confidential 8 ©OMRON KYOTO TAIYO Corporation 18

スライド20

**学生をサポートされるみなさんをお願いしたいこと**

- 一人ひとりをしっかり見る**
  - ・ 違いは当たり前。個性・特性に目を向けて頂きたい
- 自己理解と自己発信の支援**
  - ・ 自らの得意、苦手を理解し、周りに発信/説明できる力を養って頂きたい
- 行動改善（成長）の支援**
  - ・ 変えるべき行動を学生と一緒に考え、変化を温かく見守って頂きたい

卒業後に就職先や外部支援機関に上記内容をつないで頂きたい

confidential 8 ©OMRON KYOTO TAIYO Corporation 19

スライド21

**ご清聴、ありがとうございました**

confidential 8 ©OMRON KYOTO TAIYO Corporation 20

スライド1

ハローワーク特別支援内容

～現場での支援と課題～

京都新卒応援ハローワーク  
乾 智子

スライド2

発達障害学生の支援の経緯

▶ 大学生と大学への支援の経緯

スライド3

**発達障害のある学生の増加**

● 大学・短期大学・高等専門学校では発達障害のある学生が増加している。…JASSO調査

**発達障害学生数の推移**

年度	診断あり	診断なし要支援
2012	4,000	5,000
2013	5,000	6,000
2014	6,000	7,000
2015	6,500	7,500
2016	7,500	8,500
2017	8,500	9,500
2018	9,000	10,000
2019	9,500	10,500
2020	10,000	11,000
2021	11,000	12,000

【出典】日本学生支援機構 (JASSO) 「大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査」

スライド4

年度	障害学生数 (人)	障害学生率 (%)
1989年度	4,937	0.16%
19年度	5,404	0.17%
20年度	7,103	0.23%
21年度	8,810	0.27%
22年度	10,236	0.32%
23年度	11,768	0.37%
24年度	13,449	0.42%
25年度	14,137	0.46%
平成	21,701	0.68%
平成	27,251	0.86%
平成	31,205	0.98%
平成	32,811	1.05%
令和	37,647	1.17%
令和	38,347	0.99%
令和	40,744	1.26%

【出典】日本学生支援機構 (JASSO) 「大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査」

スライド5

**発達障害のある学生の就職状況等**

● 大学等の発達障害学生の卒業生で就職する者は半数に満たない現状がある。…JASSO調査

**発達障害学生卒業生進路状況(2021年度調査)**

進路	割合 (%)
就職	44.6%
進学	25%
左記以外	30.4%
不詳等	0%

● 学外機関との連携による就労支援の取組拡大が報告

■ 大学等の学内支援体制だけでは十分な就労支援を実施することの困難さ

【出典】日本学生支援機構 (JASSO) 「大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査」

スライド6

**発達障害学生の就労支援機関の利用状況**

**新卒応援ハローワークの利用状況**

診断がある学生の利用あり	83.3%
指摘を受けたことがある学生の利用あり	80.6%
発達障害がうかがわれる学生の利用あり	86.1%

**地域障害者職業センターの利用状況**

診断がある学生の利用あり	85.4%
指摘を受けたことがある学生の利用あり	27.1%
発達障害がうかがわれる学生の利用あり	22.9%

【出典】障害者職業総合センター(2021)：「就労支援機関における発達障害学生の就労支援実態調査」

スライド7

### 令和3年7月特別支援チームの発足

「就職面接で自分のことを理解してもらおうが難しいと感じている」「コミュニケーション能力等に自信がない」などの悩みを抱える学生の方に対して、京都新卒応援ハローワークでは特別支援チームにより効果的・集中的な就職支援を行います。

京都新卒応援ハローワークの就職支援ナビゲーターと雇用トータルサポーター（精神保健福祉士の資格保持者）による一体的・総合的な就職支援サポートチームです。支援対象となる学生の方それぞれに最適な個別支援計画を立て、支援を行います。

スライド8

### 就職支援ナビゲーターの役割

- ▶ 特別支援チームのメイン担当者として、お一人おひとりに合わせた就職支援を行います。
- ▶ 応募書類作成の指導や、適職の選択、職業紹介、模擬面接など就職内定まで同一の担当者が一貫してサポートします。

スライド9

### トータルサポーターの役割

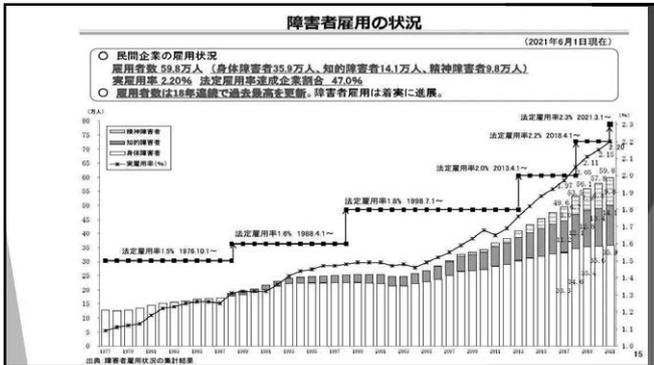
- ▶ 就職活動に伴う課題の解決や職業生活上の課題の整理、コミュニケーションスキルの向上等を目的とした就職準備プログラムの実施などを行います。

スライド10

### 企業に対する働きかけ

- ▶ 障害者に対する先入観の排除
- ▶ 障害学生に合わせた求人作成
- ▶ 障害学生を採用する企業に対し相談や助言
- ▶ 助成金
- ▶ 仕事サポーター養成講座の紹介
- ▶ 就労定着支援

スライド11



スライド12

### 就労定着支援

新たな職場環境への適応や人間関係の構築等で困難を抱えるものが多いことから定着支援を実施

サービス内容

就職直後や一定期間の経過後に、必要に応じて職場定着の支援を行う  
 職場での適応状況の把握、悩みや問題に対する相談  
 本人の希望や事業所の承諾を得て職場訪問の実施  
 職場環境の整備や調整等への助言 など

スライド13

### 特別支援の具体的な就職支援

面談・相談	<ul style="list-style-type: none"> <li>個別支援計画書の作成</li> </ul>
就職支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>就職に関する様々な支援</li> <li>就職に必要とする様々な訓練</li> </ul>
内定・就職・定着	<ul style="list-style-type: none"> <li>就職までカウンセリング・訓練</li> <li>定着のためのカウンセリング・企業への働きかけ</li> </ul>



スライド14

### 特別支援を通じて就職した学生①

- ▶ 理系大学 留年あり
- ▶ 精神保健福祉手帳 3級 自閉症スペクトラム
- ▶ 服薬がないためクローズでの就職希望  
→後にオープンに変更



スライド15

### 学生①の場合

面談・相談	<ul style="list-style-type: none"> <li>• X年・11月 カウンセリング開始</li> <li>• OPEN/CLOSE・配慮について・やりたい仕事</li> <li>• 仕事へのマインドセット</li> </ul>
就職支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>• X年・12月 履歴書の作成・配慮についてのシート・模擬面接</li> <li>• 就職活動の振り返り・カウンセリングは継続</li> <li>• X+1年・2月 訓練スタート 報告の仕方/電話応対/メモの取り方</li> </ul>
内定・就職・定着	<ul style="list-style-type: none"> <li>• X+1年・3月 ハローワーク障害者求人の内定・仕事についての具体的な注重点</li> <li>• X+1年・4月 定着支援開始 月2回電話でのカウンセリング</li> <li>• X+1年・6月 就職先近くのハローワーク専門相談に定着支援を引き継ぎ</li> </ul>

スライド16

### 特別支援を通じて就職した学生②

- ▶ 理系大学 休学あり
- ▶ 障害者手帳 なし 診断名双極性障害
- ▶ 服薬有りだがクローズでの就職希望  
(就活中は体調良く服薬なし・後に服薬)



スライド17

### 学生②の場合

面談・相談	<ul style="list-style-type: none"> <li>• X年・2月 カウンセリング開始</li> <li>• 就職活動の進め方・配慮すべきことについて聞き取り</li> </ul>
就職支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>• X年・2月 ESの添削・模擬面接実施・就活状況の聞き取り</li> <li>• 優先順位付け・内定辞退の仕方</li> </ul>
内定・就職・定着	<ul style="list-style-type: none"> <li>• X年・5月 内定取得</li> <li>• X年・11月 就職するまでの気持ちの整理・就職準備について</li> <li>• 定着支援について</li> </ul>

スライド18

### 支援の課題

- ▶ 学業と就職活動の両立
- ▶ 就職準備と就職活動のスタートの時期
- ▶ インターンシップの対応
- ▶ 定着支援

大切なこと

- ▶ 得意なこと・不得意なことを社会につなぐ
- ▶ 学生の就職だけと学生にすべて任せない（確認が大切）
- ▶ 自分は自分人は人の意識付け



## 第9分科会

### 学生が過ごしたコロナ禍の大学生活

#### 報告者

山田 剛史 関西大学 教育推進部 教授  
佐藤 万知 京都大学 教育学研究科 准教授  
江崎 洋子 京都文教大学・短期大学 社会連携部  
フィールドリサーチオフィス 職員  
学生 3名 京都文教大学 地域連携学生プロジェクト  
商店街活性化隊しあわせ工房 CanVas

#### コーディネーター

中西 勝彦 京都文教大学 総合社会学部 助教



## 学生が過ごしたコロナ禍の大学生活

コーディネーター

京都文教大学 総合社会学部 助教 中西 勝彦

---

---

### ○本分科会のねらい

2020年4月から新型コロナウイルス感染症予防対策として、各大学はキャンパスの閉鎖やオンライン授業の実施、課外活動の制限など、様々な対応を行ってきた。そのようなコロナ禍の大学において、大学生はどのような状況だったのだろうか？

本分科会では、入学当初からコロナ禍だった2020年度入学生に焦点をあて、彼らがどのような大学生活を経験してきたのかを様々な角度から想像、考察することを目的とした。「大学」や「教職員」を主語にするのではなく、「学生」を主語にした視点から、今まさにかげがえのない大学生活を過ごす学生に寄り添った議論を行うことを目指した。

なお、本分科会では学生を2つの側面を有する者、すなわち「大学での正課プログラムを通じて学ぶ、学習者としての学生」と「発達段階における青年期を過ごす、若者としての学生」としてとらえ、特に後者の側面を重視して議論を展開した。

### ○報告の概要

本分科会では、①全国の大学生を対象とした量的調査の結果（山田氏）、②2020年度入学生を対象としたインタビュー調査の結果（佐藤氏）、③コロナ禍の学生生活の実践報告（江崎氏と学生3名）という、異なる3つの視点からご発表頂き、コロナ禍の学生の様子を多角的に検討した。以下に各発表の概要を記す。

#### 講演1 山田 剛史 氏（関西大学 教育推進部 教授）

##### 「コロナ禍に実施された大規模学生調査の結果」

コロナ禍に実施された大規模学生調査（ベネッセ教育総合研究所「第4回大学生の学習・生活実態調査」）の結果を中心に、〈学習〉〈実感〉〈発達〉の3つの視点からコロナ禍の学生の特徴が説明された。

〈学習〉については、コロナ禍であってもアクティブラーニング型授業は進んでおり、学生の学習への行動的エンゲージメントは高まった一方で、授業外学習時間は増えておらず、学びに対する受動性は高まっていた。これらの結果について、山田氏は「大学が学生の〈主体性〉を引き出すことに成功していないことを示すものである。その背景には教員と学生の双方の要因が関連しているが、何より学生が『学ぶことが好き・楽しい』と感じられていないことが最大の問題ではないか」と指摘した。

〈実感〉については、2020年度入学生の「学びの充実感」と「成長実感」は他の学年と比べて低いことが示された。2022年になって、2020年度入学生の実感も増えてはいるものの、彼らが1年目に経験できなかったことを取り戻すことはできない。今まさに就職活動を迎えている彼らの様子を大学教育関係者はしっかりと見ないといけない、との指摘があった。

〈発達〉については、青年期の重要な発達課題であるアイデンティティやレジリエンスに関する指標が「オンラインの割合が高い」「2020年度入学生」で有意に低かったことが示された。2020年度入学生は入学当初に入学式などの行事、友人をつくる機会、キャンパスに通うという身体的経験がなかったことが、彼らの発達に影響を与えている可能性が示された。最後に「深い学生理解は大学改革の一丁目一番地である」という言葉で締めくくられた。

#### 講演2 佐藤 万知 氏（京都大学 教育学研究科 准教授）

##### 「2020年度入学生を対象としたインタビュー調査の結果」

2020年度入学生がどのようなプロセスで大学生になっていくのか、という問題意識のもと行われたインタビュー調査の分析結果が示された。抽出された5つの概念について、以下の通り説明がされた。

入学時点における大学や大学生のイメージがコロナ禍での学生生活の原動力になり、かつ、評価軸になっていたこと（原動力としてのイメージ）。2020年度入学生は、入学式やサークル等の新歓イベント、講義室

や食堂の利用などの身体的な経験が欠如しているため、大学生という実感を得られていない（身体的経験の欠如）。そのため、自己認識としては高校の延長線上にいる感覚であり、学習についてもそれまでの学習方略を誰にも崩されることなくそのまま用いていたこと（高校4年生的経験）。大学生活の経験を語る際、授業での経験が多く語られたことから、彼らの大学生活を構成するリアリティとして授業の割合が高かったこと（大学生活としての授業経験）。オンライン授業やキャンパス閉鎖に由来する困難さの語りはあるが、他者との関係における葛藤などの語りは欠如していた。オンライン中心の環境で関わる相手を自らコントロールしていたようだ（コントロールされた人間関係）。

最後に、これらのことが、彼らの今後の大学生活やその後の生活にどのような影響を及ぼすのかを継続的に検証する必要があるとまとめられた。

発表後の質疑応答では、先輩とのつながりによる影響は語られたか、ジェンダーによる大学イメージの差は見られたか、の質問があった。前者に対しては、学生によっては先輩との交流を経験していたが、通常の学生生活で経験される「先輩との交流って良いね」というものとは質的に異なる可能性があるとの回答があった。後者に対してはジェンダーを要素として分析していないため不明であるが、今回の語りで明確なジェンダー差を示すようなものはなかった、との回答があった。

### 講演3 江崎 洋子 氏（京都文教大学・短期大学 社会連携部 フィールドリサーチオフィス 職員）

#### 「コロナ禍での学生の課外活動」

最初に江崎氏から京都文教大学の地域連携学生プロジェクト「商店街活性化隊しあわせ工房 CanVas」に関する説明があった。その後、同団体に所属する学生3名に、コロナ禍で様々な活動が制限される中での取り組みの様子やその際の心境などについて、江崎氏との対話形式で語って頂いた。

2019年度入学生である三品さんからは、先輩としてオンラインでの新入生勧誘で苦労したことや工夫したこと、周りのメンバーのモチベーションが低下するなか「活動を止めない」ことを意識して活動を行ったこと、それでも企画の準備をする度に「本当にできるのか?」「コロナのせいでできなくなるのでは」と考えてしまっていたこと、卒業式で卒業する先輩にお礼を言えなかったことが悔しかったこと、などの経験が語られた。

2020年度入学生である山中さんと倉橋さんからは、ご自身の経験として以下の事柄が語られた。入学当初は寂しい日々を送っていたこと、CanVasには入学前から入ろうと思っておりメールなどの情報を欠かさずチェックしていたこと、加入後オンラインでしか先輩と関われなかったことでモチベーションが低下したこと、初めて対面で先輩と会った時に先輩は実在しているという実感が持てたこと、新たに企画した写真展の準備作業時に初めて夜の商店街を見て感動したこと、今年度コロナ以前と同様のイベント運営を初めて経験でき嬉しかったこと、学生で打上げをする時には職員の顔が浮かんでしまい「クラスターを出したらどうしよう」と思ったこと、コロナ以前は商店街の人や教職員と一緒に打上げをしていたことを先輩から聞いていたがそこまではまだ戻っていないこと、などが語られた。

### ○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

発表後のパネルディスカッションでは、Google Formsに寄せられた質問に登壇者が回答しながら議論を進めた。概略は以下の通り。

#### (1) オンライン授業が多くてもアイデンティティ指標への影響が小さかった人の傾向はあるか？

〔山田氏〕自分の居場所を持っている人、リアルでもバーチャルでも人とのつながりを切っていない人は影響を受けていない。オンライン授業の比率は偏差値が高い大学が多いため、高偏差値帯の学生のアイデンティティに影響が出ているとも言える。

#### (2) 2020年度入学生に対して卒業までの間に大学や教職員はどのような手助けや働きかけができるか？

〔山田氏〕学生の関心事は就職活動に向いている。彼らがこれまでの大学生活で経験した1つ1つの経験を意味づけるための伴走やメンタリングができれば良いのではないか。学生が3年間の意味を見出す手助けをする、ということ。

〔佐藤氏〕それに加えて、揺さぶりをかけることも大切になるかもしれない。それは卒業論文／研究とい

う経験になるだろう。卒論の執筆を丁寧に行うことを通じて揺さぶりをかけ、葛藤経験を提供する、というオーソドックスなことでも良いのではないか。

### (3) 学生調査に関する2つの発表を聞いて、学生の皆さんは実感を持つか？

〔学生〕実感するところはあった。例えば、量的調査の中にあつた「単位を楽に取れる授業が良い」を私も選ぶと思う。受け身になっている部分があるなど実感する。インタビュー調査の「身体的経験の欠如」は入学当初の自分自身のことだと実感する。

〔山田氏〕こんなにしっかりしている（登壇）学生でも、「楽単（楽に単位が取れる）志向」となると、じゃあ授業に興味がある人はどこにいるのか？とってしまう。ただ、コロナ禍になって通常の生活を送るだけでも大変なので、戦略的に楽単志向にならざるを得なかった面もあるかもしれない。いずれにしても、大学の授業がもっと魅力的にならないといけないだろう。

### (4) 大学が「ガクチカ（就職活動で聞かれる質問「学生時代に力を入れたことは何ですか？」の略称）」を提供する場になっていることについてどう考えるか？

〔山田氏〕正直、就職活動の早期化は勘弁して欲しいが、それを批判してもどうしようもない。学生が「ガクチカ」を得るために頑張る、あるいは就職活動に早めに備えるというのは、それだけ学生が将来に対して不安を抱いているのだろう。私たちはその事実を受けとめたうえで、学生が安心して学業に取り組める環境をどのようにつくれるかを考えないといけない。

〔中西〕そもそも「ガクチカ」とは、立派な活動をしたことを自慢するものではない。活動のプロセスを丁寧に説明するものである。そのことが誤解されているように思う。「ガクチカ」は結果であって、目的ではない。しかし、コロナ禍において「ガクチカ」の目的化がより強くなったかもしれない。

### (5) CanVasに入ろうと思ったのは、「ガクチカ」のためだったか？（中西→学生）

〔三品さん〕すでに就職活動は終わったが、就活の中でCanVasの経験をガクチカとして使った。ただ、ガクチカのために加入したわけではない。高校生ではできないことをしたい、他の大学生がしないことをしたいと思ってこの活動に参加した。就活をしていて、ガクチカは「この活動で何を学んだのか」「どのように活動してきたのか」が重要だと実感した。ガクチカを集めるためだけの人とは一味違う、そういう活動をしてきたと自負している。

〔山中さん〕就活ではCanVasの活動をガクチカとして話そうとは思っているが、そのために入ろうと思ったわけではない。イベントの企画や地域と関わりたいと思ってこの団体に入ったし、代表としてこの活動に命を捧げるくらい頑張った。

〔倉橋さん〕地方出身でキラキラした大学生生活に憧れていた。CanVasの活動紹介を見て、大人数で先輩後輩と一緒に活動する様子に魅力を感じて飛び込んだ。ガクチカなんて考えてなかった。

〔学生〕周りから「あなたはガクチカがあつて良いね」と言われることはあつた。でも、コロナになって環境も変わり、立場が違えば状況も違うので、そういう人のことをとやかく言うことはできないなど思っている。

### (6) 2020年度入学生の成長実感が低いのは理解できるが、それは遠隔「授業」が決定要因なのか？そもそも学生の授業への期待値は低いため、「対面」授業が学生の学びの態度にマッチしているだけでも受け取れるのではないか？

〔山田氏〕成長実感に関しては、授業が対面から遠隔になったことが直接影響しているわけではないかもしれない。間接的か他の要因（キャンパスに通えない、活動が行えない）の一つとして遠隔授業を捉えることができるかもしれない。

### (7) 2020年度入学生に対する指摘には同感した。2019年度入学生にも似たような傾向を感じるが、どう思われるか？

〔佐藤氏〕実際に検証していないのでわからないが、おそらく何かしらの影響はあるだろう。長期間コロナ禍の大学生活を送ったことの影響が。ただ、今回の調査は2020年度入学生しか対象としていないので、

2019年度生はどうかはわからない。似たような傾向があることを否定はできないし、質問者が似たような傾向を感じているのなら、そういうこともあるのかもしれない。

[江崎氏] 学生と接していて、学年による違いは感じない。CanVasの活動に参加する学生は比較的意欲が高い学生であることも関係していると思う。ただ、加入した人数の違いはある（例年20名以上が加入するが、2020年度生の加入は6名）ので、それはコロナの影響だと感じるが、参加しているメンバー間での違いは感じない。

**(8) 今回のような2020年度入学生の人生に影響するような問題を指摘する教員があまりにも少ないように感じている。もっと社会的に話題になっても良いと思うがどうか？**

[山田氏] これまでこの問題を発信してきた。今後も発信を続けるつもりだが、でも教員にはなかなか刺さらない。おそらく教員は授業でどれだけ知識を学生に渡せるかが重要だと考えているのではないかと。学生の発達とか成長といったことは、教員の日常の外側にあることなのかなと思わざるを得ない。そういう点では、職員の方がこういう問題意識を持っているかもしれない。今回のことをきっかけに学生が社会人になっていく最後の砦として、大学という機関がブリッジングを意識しないといけない。1年後、3年後、5年後、彼らが幸せに過ごしているかを見ていかないといけない。

[佐藤氏] コロナの制限がなくなって「もとに戻ったね」という表現があるが、それはおかしいのではないかと。コロナ禍での大学生活の経験は消えるものではない。彼らがこの経験をどのように解釈していくかはこれからだろう。いずれにしても、この経験がなかったことになるわけではない。コロナ禍の大学生活が彼らにとっての大学生活であったという事実は変わらない。それは学生に限らず、新任の教職員にも言えるし、もっと広げると誰だってコロナ禍の影響を受けていると言える。私たちは、この経験が今後どう解釈されていくのか、どう語られていくのかに注目する必要がある。

**(9) 学生が打上げをやったときに「職員の顔が浮かんだ」という話があったが、それは職員の管理者としての色合いが強くなったのではないかと思うが、そういう実感はあったか？（中西→江崎氏）**

[江崎氏] 管理していたと思う。昨年度、商店街で学生が活動するときにユニフォーム（法被）を「着ないで」と言ったことがある。活動の時はいつも着ていて、商店街の人の認知度も高いユニフォームだったにもかかわらず、商店街に学生がいると、商店街の人に迷惑と思われてしまうのかなという懸念から「着ないで」と言った。このことを事前打合せのときに思い出してハッとした。衝撃的だった。コロナ前は伴走者の色合いが強かった職員が、コロナ禍になってからは管理者の役割を背負うことになった、という変化は確実にあったと思う。

※会場参加者対象のワークショップの内容は、スライド資料をご参照ください。

以上

スライド1

大学コンソーシアム京都  
2022年度 第28回FDフォーラム

**第9分科会**  
**「学生が過ごしたコロナ禍の大学生活」**  
**趣旨説明**

コーディネーター：中西 勝彦（京都文教大学）  
2023年2月24日（金） ハイブリッド開催

スライド2

**本分科会の趣旨**

**もっと知りたい！コロナ禍の大学生**

コロナ禍において大学生はどのような状況だったのだろうか？  
本分科会では、主に2020年度入学生に焦点をあて、彼らがどのような大学生活を経験してきたのかを様々な角度から想像します。  
「大学は」「教職員は」ではなく、「学生は」の視点から今まさにかけがえのない大学生活を過ごす学生に寄り添った議論を進めます。

スライド3

**本分科会での学生のとらえ方**

**学生が有する2つの側面**

1. 大学での正課プログラムを通して学ぶ、学習者としての学生
2. 発達段階における青年期を過ごす、若者としての学生

スライド4

**なぜ2020年度入学生か**

- 入学直後からコロナ禍の大学生活を送っている
- 様々な調査から、他の学年とは異なる様子が窺える
- 今まさに私たちの目の前にいる学生である

結果に対するコメント（調査報告より）

- ほぼコロナ禍前の19年の水準に回復した。
- 現3年も、年々充実度が増し、他学年よりは低いものの差は小さくなっている。
- 勉学、友人関係、サークルについても同様の傾向。
- 学生たちは、現実を受け入れ、コロナに何とか対応したと言えそうだ。
- 自由記述欄の声も、あきらめたなどの悲観的な声はあるものの、昨年より大幅に減った。

スライド5

**本日の発表**

	ご所属	お名前	テーマ
1	関西大学	山田 剛史 氏	コロナ禍がもたらした学生生活の変化と成長・発達への影響～大規模学生調査の結果を踏まえて～
2	京都大学	佐藤 万知 氏	2020年度入学生を対象としたインタビュー調査の結果
3	京都文教大学	江崎 洋子 氏 学生（三品さん、山中さん、倉橋さん）	コロナ禍における学生の課外活動についての実践報告
パネルディスカッション			<ul style="list-style-type: none"> <li>・質疑応答</li> <li>・コロナ禍において大学生はどのような状況だったのだろうか</li> </ul>

質問はGoogleフォームからお寄せください。何度でも投稿できます。

スライド6

**会場参加者向け**  
**ワークショップの説明**

スライド7

<b>ワークショップの準備</b>  A4白紙を4つに折り、カラーペンで各枠内に右の点について書いてください。3つ目、4つ目は文章ではなく、キャッチコピー的に書いてください。	<b>所属</b>
	<b>お名前</b>
	<b>発表+パネルディスカッションで考えたこと、気になったこと</b>
<b>いま考える「フツーの大学生活」とは</b>	

スライド8

**ワークショップの目的と流れ**

- 本日の発表およびパネルディスカッションの気づきや学びについて、意見交換を通じて持ち帰れる形にする
- 「学生のことを知る」ために、これからの私たちにできることを、ワークショップを通じて考える。

1. 趣旨説明
2. アイスブレイク「発表の感想を話し合おう」
3. グループワーク「学生のことを知るための方法を考えよう」
4. 登壇者からのコメント、まとめ

スライド9

**ワークショップの心がまえ**

- 肩肘張らずリラックス&楽しみながらご参加ください。
- 立場は脇に置き、フラットな関係を意識しましょう。
- 限られた時間ですので、みんなで意見交換しましょう。
- 発表者はあちこち見て回ります。ご自由にお声掛けください

スライド10

**アイスブレイク**

**まずは、ワークメンバーを確定し、それから「アイスブレイク」をしていきましょう！**

**アイスブレイク** とは  
 …氷のような「かたい雰囲気」を和らげ、参加者の緊張をほぐすためのゲームやワークなど

スライド11

**アイスブレイク**

**メンバーと思いを分かち合おう**

- 所属と名前
- 発表とパネルディスカッションの感想
- わたしの考える「フツーの大学生活」

スライド12

**ワーク①**

**個人ワーク「ブレスト」**

緑色：学生のことをもっと知るためにできること  
 ピンク：知った情報を構成員とどのように共有できるかを個人で考え、付箋紙に書いてください。

1トピック1枚で書いてください！

**ワーク①**

**グループワーク「共有しよう」**

各意見の詳細を説明しながら、模造紙に貼り出していきます。  
似たような意見は近くに配置し、カテゴリごとにまとめます。

まとめることがゴールではなく、  
知恵を共有することがゴールです

スライド1

大学コンソーシアム杏林主催 2022年度第28回月内フォーラム  
(2023.02.24, 14:00-17:30@ハイフレックス)

第9分科会 「学生が過ごしたコロナ禍の大学生活」

**山田 剛史**  
Tsuyoshi YAMADA, Ph.D.  
関西大学教育推進部 教授  
t-yamada@kansai-u.ac.jp

**コロナ禍に実施された大規模学生調査の結果**

スライド2

**TIMETABLE**

- ① 調査の概要～時代的な背景
- ② コロナ禍とそれ以前で教育・学習はどう変わったのか
- ③ 学生はコロナ禍で学びと成長を実感出来ているのか
- ④ コロナ禍は学生の発達にどのような影響をもたらしたか

スライド3

**Tsuyoshi Yamada's Profile**

**EDUCATION**

- 鳥根大学 教育開発センター/講師・准教授・副センター長 (2006.8-2011.3)
- 愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室/准教授・副室長 (2011.4-2015.3)
- 京都大学 高等教育研究開発推進センター・教育学研究科/准教授 (2015.4-2020.9)
- 関西大学 教育推進部/教授 (2020.10-)

**RESEARCH**

- 教育開発 (高等教育開発) × 成長支援 (青年心理学), 神戸大学博士 (学術)
- 子どもが学校から社会へと円滑に移行し、健康で幸福に生きるための学校(教育・支援)はいかにあるべきか、どのように組織的に設計し、持続的に実践・運用するか

**SERVICE**

- 初年次教育学会理事, 大学教育学会代議員, 高等教育保障学会評議員, 日本アカデミック・アクトハイラング協会副会長, 日本青年心理学会常任理事など
- 文部科学省「大学教育再生加速プログラム」委員/ペーパーレビュー、文部科学省「先進的の大学改革推進委託事業」選定委員, 文部科学省「知識基的型社会を支える人材育成事業」プログラムオフィサー, 大学基準協会大学評部分科委員長, 立命館大学SSP外部アドバイザー, 名古屋大学専攻准教授など
- 東山中学・高等学校教員期間

スライド4

**パネッセ教育総合研究所**  
「大学生の学習・生活実態調査」

調査対象  
●全国の大学1～4年生

調査方法  
●インターネット調査

各回の調査時期・サンプル数

- 第1回 2008年10月 4,070名 (男子2,439名, 女子1,631名)
- 第2回 2012年11月 4,911名 (男子2,791名, 女子2,120名)
- 第3回 2016年11～12月 4,948名 (男子2,680名, 女子2,268名)
- 第4回 2021年12月 4,124名 (男子2,228名, 女子1,896名)

※インターネット調査会社の約20万人のモニター毎集団のうち、「大学生」として登録されている約15万人に対して予備調査を実施。このうち、大学1～4年生 (18～24歳, 日本在住) にアンケートの回答を依頼  
※各回、文部科学省の「学校基本調査」の男女比率に近いサンプル構成になるように回収している

調査内容  
●高校での学習状況/大学選択理由/大学の志望度/入学時の期待/大学生活で力を入れたこと/大学生生活の過ごし方/教職員との交流/保護者との関係/友だち関係/大学の機会/授業方法 (対面授業・オンライン授業) に対する評価/学びに対する姿勢/満足/大学生生活で身についたこと/海外留学の意向/進学の精神やポリシーの認知/大学生生活の満足度/学びの充実/成長実感/社会観・就労観/就職活動・インターンシップ など  
※調査内容は、経年比較が可能なように毎回ほぼ同一の内容にしているが、各回ごとの問題関心により異なる内容を含めている

調査メンバー  
●川嶋大津夫 (大阪大学), 杉谷祐美子 (青山学院大学), 山田剛史 (関西大学), 谷田川ルミ (芝浦工業大学), 樋口健 (新潟大学), 吉本真代 (大阪大学), 小林一木・木村治生・朝永昌孝 (パネッセ教育総合研究所)

スライド5

**第4回調査の対象者の属性**

※以下の数値は、構成比 (%) を示している

性別	男子	女子							
	54.0	46.0							
学年	1年生	2年生	3年生	4年生					
	25.0	25.0	25.0	25.0					
所属大学	4年制	6年制	通信制	昼夜間併用	専門職大学	海外の大学			
	93.5	4.6	1.3	0.4	0.9	0.1			
学部系統	人文系	社会科学系	外国語学系	法学系	経済学系	国際学系	教育学系	生活科学系	芸術学系
	13.0	6.5	3.6	7.6	16.5	2.4	5.5	2.6	2.7
	総合科学系	保健衛生系	医学系	歯学系	薬学系	理学系	工学系	農水産学系	その他
	1.2	6.8	2.3	0.5	2.6	5.4	14.7	3.4	2.5
設置主体	国立	公立	私立						
	23.2	8.2	68.6						
大学所在地	北海道・東北	関東	中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄			
	8.0	42.0	15.1	20.3	7.5	7.2			
住まい	自宅	一人暮らし	大学寮	大学以外の家	その他				
	63.4	31.7	2.9	0.5	1.5				

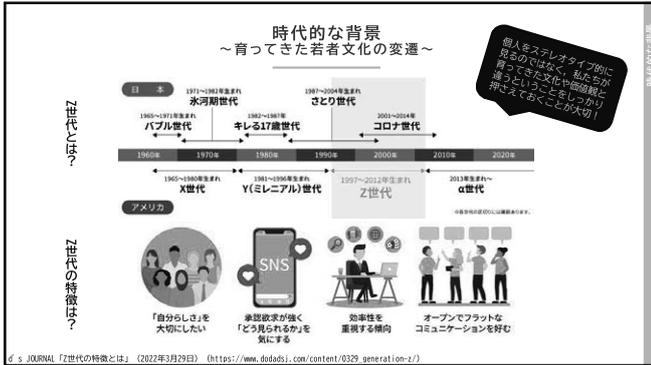
スライド6

**時代的な背景**  
～学生が受けてきた教育・学習環境の変遷～

(パネッセ木村氏作成)

対象者の生年	対象者が受けた初等中等教育	対象者が受けた高等教育	調査結果
第1回 2008年	1990年代 新しい学力観と個性と尊重	2004年 国立大学法人化, 認証評価制度	いまどきの大学生 先延に「たす」 努力にはあきらめず
第2回 2012年	1988～1994年 生きる力とゆとり確保	1999年告示 生きる力とゆとり確保 2012年 大学教育の質的転換 →アクティブ・ラーニング	授業の弊に不満しても、 自主的な取組をするのは少数
第3回 2016年	1992～1998年 生きる力 2002年学びのすすめ 2004年対談5ショック	2016年 高大接続システム改革会議 →入試制度改革	アクティブ・ラーニングが浸透、 学生の学びは異なり 一方で、大学に「面壁をみてほしい」 学生は増加
第4回 2021年	1997～2003年 2008～2009年告示 生きる力 2017年告示 主体的・対話的で深い学び	2020年 教育デジタル化 →学習成果・教育効果の可視化 2021年告示 主体的・対話的で深い学び 大学入学共通テスト開始	時代の変化(デジタル化) 学生の変化 ? コロナ禍 教育改革(初等中等/高等教育)

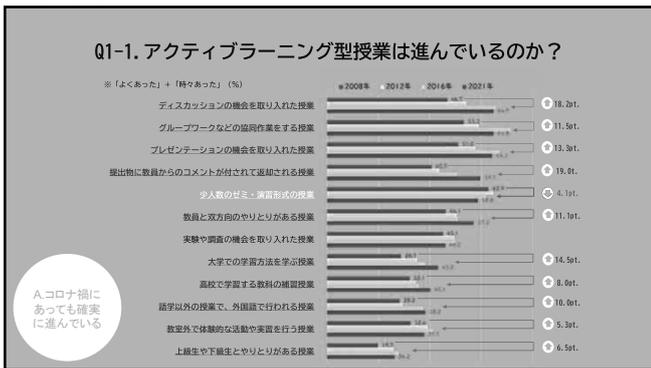
スライド7



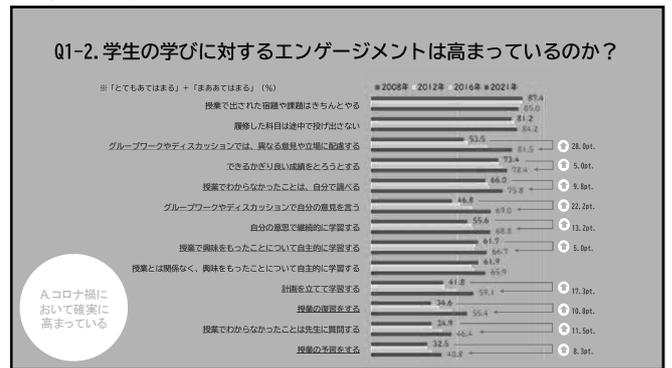
スライド8



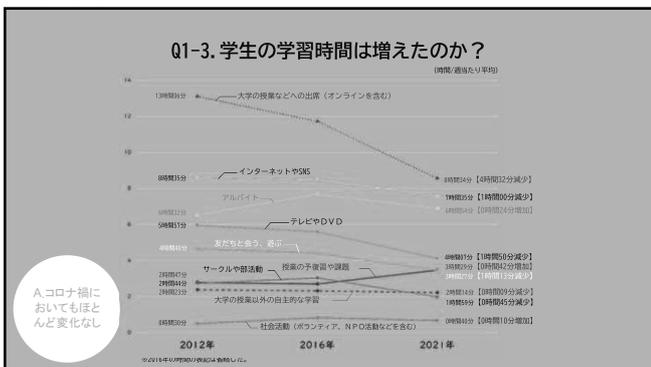
スライド9



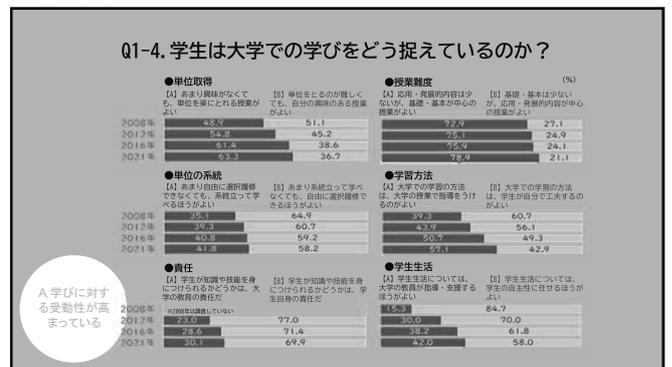
スライド10



スライド11



スライド12



スライド13

みなさんへの問いかけ①

この4つの調査結果(以下2点)を見て、どのように感じるでしょうか？

「AL型授業は増加し、学習への行動的エンゲージメントは高まっている」  
 「授業外学習時間は増えておらず、学びに対する受動性が高まっている」

スライド14

学生の「主体性」を  
いかに引き出し、育むか？

CAP制  
成績評価の厳格化  
アクティブラーニング  
遠隔授業  
FD

学びに「受け身」増える  
総学習時間は減 対面授業の転換必要  
内発性で学ぶ  
中高生の学習者

日本経済新聞 教育版 (2022年8月23日)

スライド15

WHY?

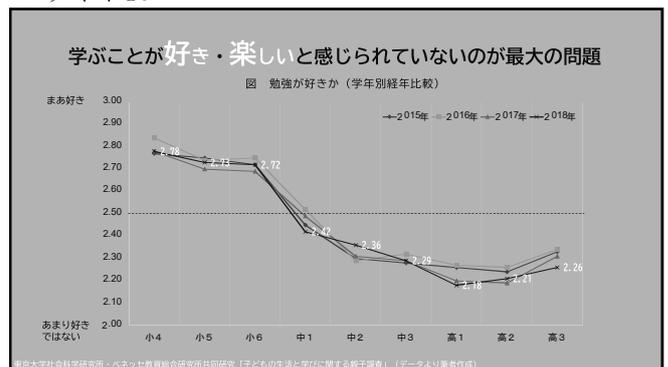


**教員側の要因**  
目的や問いが明確になっていない  
教員からのフィードバックが不十分等  
丸実施が目的化。実はそんなに進んでいない



**学生側の要因**  
高校までに主体的に学ぶ姿勢が身についていない  
学生の「生徒化」  
単位取得が目的化。就職準備>>>学び

スライド16

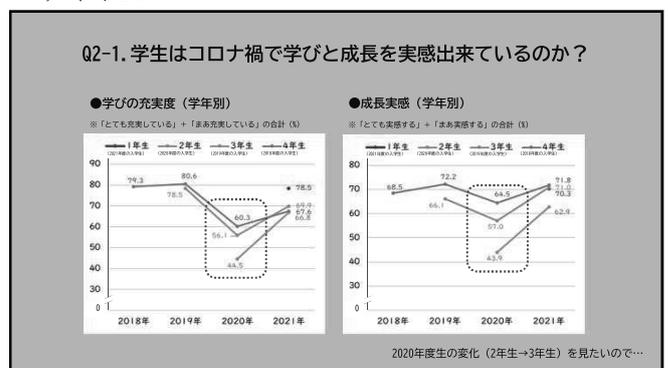


スライド17

STUDENT GROWTH FACTS

コロナ禍は学生の成長・発達にどのような影響をもたらしたのか。ここでは、対面と遠隔授業の割合という観点、コロナ禍の影響を最も受けた2020年度入学生(調査実施時点では2年生)とそれ以外の差異という観点に着目して調査結果を見ていく。

スライド18





スライド25

みなさんへの問いかけ③

---

- ▶ 青年期の重要な発達課題であるアイデンティティやレジリエンスの獲得が「オンライン割合が高い」「2020年度入学生」で有意に低かった。
- ▶ なぜ、この2点が重なることで学生の発達に重大なリスクを生じさせたのでしょうか？

スライド26

Q2-2. コロナ禍は学生の発達にどのような影響をもたらしたか？

日本の場合、学生の大半は18歳～20歳の年齢層であり、発達段階でいうと青年期後期に当たる。半数的に社会へ移行し、また、子どもから大人へと移行する重要な時期である。この時期は、移行を伴うための必要な「養育期」(モトメツリヤム)であり、様々な機会に練習(コモトメツル)する仮前実践の期間でもある。その期間に、他者との関係性構築や個人の発達課題を乗り越えること、自身に合った方法に必要能力を磨きつける(高専する)ことなどの成長機会が提供される。

教育に中央、学生支援に中央、情報教育(情報授業)も中央にあり、第一歩的な成長を促す。対面に対しては、伝達できる情報に限りがある。オンライン(関わりやつながり)を確保することが極めて重要である。他者との関わりやつながりによって、学習に学びが促されることのできる。

山田 康史 (2021)、「学生の学びと成長を止めないニューノーマル時代の学生支援」『JICレポート、カレッジデザインメソッド』第22号、1-6

スライド27



スライド1

**2020年度入学生を対象とした  
インタビュー調査の結果**

第28回FDフォーラム  
京都大学教育学研究科准教授 佐藤万知

スライド2

≫ 本研究の背景

- 2020年4月より、新型コロナウイルス感染症予防を目的に、多くの大学がキャンパスの閉鎖やオンライン授業への移行に踏み切った。
- オンライン授業の満足度は比較的高い。  
e.g. 文部科学省（2021）の調査では、約6割の学生がオンライン授業の満足度にポジティブな回答（「満足（13.8%）」「ある程度満足（43.1%）」）
- 一方で、当時2年生は、他学年と比べて、オンライン授業満足度や理解度が低い傾向（e.g.九州大学，2020；関西大学，2021）。
- 学生生活の充実度（2020年度）に関しては、特に当時2年生の充実度が著しく低下 [1年生の充実度：2019：89.4%→2020：56.5%]（全国大学生生活協同組合連合会，2021）。  
2021年度と同調査においては、当時1年生（80.6%）より当時2年生（70.8%）の方が充実度が低い（全国大学生生活協同組合連合会，2022）。

**2020年度入学生は他の学年とは違う状態にあることが推察される**

スライド3

≫ 本研究の目的

- 大学生は多様な生き残り戦略を用いて大学内外の生活を送っている主体的な存在であり、経験を通じて大学生として社会化している（武内，2008）
- 大学生は青年期の発達段階にあり、他者や大学との関係がアイデンティティ形成における重要な要素となっている（吉川・粟村，2014）

↓

当時学部2年生が他の学年と異なる回答傾向にあるのは、コロナ禍での大学生生活経験において、通常の学部1年生が経験するようなことを経験できていないからではないか。

↓

**本研究の目的**

- 2020年度入学者がコロナ禍の大学生活でどのような経験をしてきたのか
- その経験が大学観や大学生観にどのような影響を与えているのか（大学観：自分にとっての大学という場の意味づけ，大学生観：自らの大学生としての価値観の2点について明らかにする。

スライド4

≫ 本研究の概要

**認識論的立場**

- ・ 「経験」は客観的に存在するのではなく、語られることで構築されるという立場。すなわち、本研究で明らかにすることを旨とする「経験」は、現時点で振り返った時に意味づけされる「経験」

**インタビュー調査の実施**

対象：2020年度入学生、12名（異なる3つの大学）  
方法：zoomを使用したオンラインインタビュー（半構造化面接法）  
時期：2021年5月～10月

主な質問項目：

- ・ 受験時から入学に至るまでの流れ
- ・ 1年次の前期・後期授業の様子
- ・ 入学前に抱いていた大学や大学生活に対するイメージや期待
- ・ 大学生としての実感

**分析の手順**

- ・ 承諾を得てレコーディングした音声データを逐語録に変換
- ・ 逐語録を複数名の分析者が精読し、各調査協力者の大学生生活経験の要約を作成
- ・ 分析者同士での議論を通して、2020年度入学者特有の大学生生活経験に関する概念を抽出

スライド5

≫ インタビュー協力者一覧

NO	事例	性別	実施	大学	居住形態	学部の規模	担当
1	A	M	8月	X大学	実家	小（約60名）	I
2	B	F	8月	X大学	下宿	小（約60名）	II
3	C	F	9月	X大学	実家	小（約60名）	III
4	D	M	10月	X大学	下宿	小（約60名）	I
5	E	F	10月	X大学	実家	小（約60名）	II
6	F	M	10月	X大学	下宿	小（約60名）	I
7	G	F	10月	X大学	下宿	小（約60名）	I
8	H	M	8月	Y大学	下宿	中（約150名）	I
9	I	F	8月	Y大学	下宿	中（約150名）	I
10	J	F	5月	Z大学	下宿	大（約200名）	I
11	K	F	5月	Z大学	下宿	大（約200名）	I
12	L	F	5月	Z大学	実家	大（約200名）	I

スライド6

≫ インタビュー結果  
原動力としてのイメージ

- 入学前に抱いていた大学・大学生のイメージや期待  
e.g. 「人生の夏休み」「キラキラ」「ドラマのような」「先輩らといっぱい遊ぶ」「とにかく楽しむ」「授業外の自由」「同じような価値観を持った人と友達になりたい」「教員と仲良くなりしたい」「面白い人と出会いたい」
- これらのイメージを原動力として行動する（e.g. 議論するために人と人が出会う場をつくる，ツイッターのハッシュタグでxx大学というのを探しコミュニティに入る，アルバイトを始める，etc.）
- 一方で、大学のイメージとの比較で現状を評価（e.g. 先生とご飯食べたりすると思っていたのにできていない，遊び方が大学生っぽくない，授業の後に一緒にご飯を食べることができていない，etc.）

→ 大学生生活のイメージが原動力となり制限下での行動がおこされる一方で、現状を分析するための評価軸にもなっている

スライド7

インタビュー調査の結果

≫ 身体的経験の欠如

■ 入学式、新歓イベント、大学の講義室、図書館、食堂、部室など、セレモニーや実際のスペースを経験していないため、大学生になった実感を得られていない

「自分って今大学生なのかみたいな言っていて、(家族に) その割にはずっとおうちにいるよねとかって言われて、そらだよって言って。(略) なんか大学生って感じじゃなかったですね。」(Jさん)

「せっかく入学したのに、入学式ではないのは、入ってないやん、みたいな。別にまあ開催できんのはしょうがないけど、入学式なかったら入った気にならないから、やって欲しかったな」(Lさん)

「今(2年生夏)は全然大学生だと思ってます。(自分は大学生なのかと) 自問自答することもなく。2年の前期になって、大学に行けることが増えたからだと思います。私自身が結構環境とか目に入ってくる物理的なイメージに多分左右される感じで、高校とは違ういろんな建物があって、いろんな人が行き交っていて。授業を受ける所が広かったり、食堂があったりって、そういう大学っぽい環境とか設備を目にする機会が増えたから、あ、自分はちゃんと大学生になっているんだなあっていう風に思うことが増えた」(Iさん)

「本当に大学生してるなって感じて。学食とかも初めて行っし(略) お昼休みとかになったらすごい大学生がいっぱいいて(略) こんだけ人いたんだと思うし、すごいキラキラしているなーと。これが大学かと思いました」(Kさん)

→ 対面授業の再開、キャンパス閉鎖の解除をきっかけに身体的経験を経て、大学生という実感を持つ

スライド8

インタビュー調査結果

≫ 高校4年生の経験

■ 授業での学習活動においても、日常の過ごし方についても比較対象が不在で揺さぶりの経験がないため、それまでのやり方を継続。キャンパスでの活動や対面授業に参加し、他の学生の様子をみて、初めて多様な大学生にふれる

「その般を破られることがないというか、自分がずっと、高校の時までで持ってたものがそのまま、誰からも影響されることなく、ただただ底を深堀りしていくしかなかったというか、そういう感じですね」(Gさん)

「浪人のときって(略) 一人で勉強するっていうか、(略) ほんまに勉強メインで自分一人でずっとやってる感じがあったんですけど、去年一年、(略) 浪人の延長っていうのが一番合ってると思います。」(Aさん)

「大学の課題がそもそもどんぐりの量なのかの目安がわからなかった。多いも少ないも、これが基準なのかな? みたいな感じで。」(Iさん)

「高校からの連続だったので、別にそんなに違和感とか、しんどさとか慣れてたんですけど、本来がどういふのかわかんないからどうなんだろうなって思いつながら受けていました(略) 授業を休むっていう感覚がわからなくなっちゃって」(Gさん)

→ 高校までのやり方を揺さぶる経験がなく、結果的に、高校の延長のような行動をしているという認識。

スライド9

インタビュー調査結果

≫ 大学生活としての授業経験

■ 授業経験がオンライン、対面いずれの形態であっても自分にとっての大学を構成するリアリティとして語られた

「初めはすごい新鮮だったので、普通大学の授業自体が。あと興味があるものを取ったので、話を聞くのもすごく面白かったですね。面白くて楽しくて授業を聞いていましたね。(F)」

「パソコンで授業、オンデマンド型で授業っていうのは、ある意味新しいなあっていうか、大学生かもと思ったんですけど、出された課題を書いて提出して、したら気がついて1日終わって、みたいな。なんか高校生の時の夏休みがずっと続いてるなみたいな感じがして、大学生だよな? 私、みたいな。(I)」

「オンラインでなんかすごく遠いところに先生がいて、Zoomのあと、質問ある人は残ってねっていつくたさっても、質問あるときは残ったりしたんですけど、あの話が気になったのでちょっと続き聞きたいですとか、そういう気楽な感じで話しかけたいにはいけなから(略) 大学の先生っていうのが、やっぱりそれはもちろん中高の先生とちょっと違う、もうなんかちょっと偉いというか、凄いな感じが、自分の中でわからないまま、なんかちょっと憧れみたいな先生の先生をまだ見てるんですけどいいのかしらみたいな。(G)」

→ 授業に関連する活動が生活の大半を占めていることから自らの大学生としての意識や大学に対する理解を説明するものと語られている

スライド10

インタビュー調査結果

≫ 「コントロールされた人間関係」

■ オンラインコミュニティやツールの選択や関わり方において各自が取捨選択している状態。それが良くも悪くも人間関係構築をコントロールしている

「やっぱりSNSってとだけ盛り上がってても、その人と実際話が合っちゃっていったらそんなことなくて、結構ノリで言ってるところがあるんですね。(略) 別にSNSで友達作っても、どうせ話合わんのわかってるんで。」と語る一方で「めっちゃ好きな〇〇という芸人さんが(テレビ番組)に出るってなって(略) 専用のツイッターアカウント作って、新しい交流の場が広がって」(Lさん)

「本来だったら(人間関係を構築する)レベルの高い人たちと一緒にいきやいけなかったところを、コロナっていうインディキャップで、みんな一緒になっちゃった。だから、そういうところで、ゆっくり人間関係を作っていたから、ちょっと普通の大学生活が始まる時よりは上手くできたのかなっていう。」(Hさん)

→ 多様な他者との交流や偶然的な出会い、周りの人に流される、ノイズに晒される経験と、それによって引き起こされる葛藤についての語りは少なかつた

→ オンラインにおけるコントロールされた人間関係では、コミュニティの選択や関わり方を決めることが可能となるが、人間関係での葛藤は起こりにくかつたと考えられる

スライド11

≫ まとめ

■ これまでの学生調査でも明らかにされてきたように、学習の機会という意味でのオンライン授業は、概ね評価されている。しかし、経験という意味では、大学の授業を受けているという実感や授業前後の交流が欠如しているため、限定的である

■ 2020年度入学の学生は、入学式やサークル等の新歓イベント、講義室や食堂の利用など身体的な経験が欠如しているため、大学生という実感を得られていない。そのため、自己認識としては高校の延長線上にいる感覚であった

■ 大学や大学生のイメージがコロナ禍での学生生活における原動力になり、かつ、評価軸になっていた

■ オンライン授業やキャンパス閉鎖に由来する困難さの語りはあるが、他者との関係における葛藤や学習に関する困難さなどの語りは欠如していた。成長のための葛藤を経験していない可能性がある

身体的経験の欠如により大学生としての実感や葛藤の経験を限定的にしている。このことは、今後の大学生活に対して、どのような影響を及ぼすのか、継続的に検証する必要があるだろう。

スライド12

≫ 参考文献

■ 関西大学 教学IR プロジェクト (2021) 2020年度秋学期実施「対面授業に於ける学生アンケート」 ([https://www.kansai-u.ac.jp/ir/taimen\\_survey\\_2020au\\_digest.pdf](https://www.kansai-u.ac.jp/ir/taimen_survey_2020au_digest.pdf)), [2022/03/15]

■ 九州大学 (2020) 九州大学のオンライン授業に関する学生アンケート (春学期) 結果について ([https://www.kyushu-u.ac.jp/ir/40309/20\\_08\\_11\\_01.pdf](https://www.kyushu-u.ac.jp/ir/40309/20_08_11_01.pdf)), [2022/03/15]

■ 文部科学省 (2021) 新型コロナウイルス感染症に係る影響を受けた学生等の学生生活に関する調査等の結果について ([https://www.mext.go.jp/content/20210526-mxt\\_kouhou01-000004520\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210526-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf)), [2022/03/15]

■ 武内清 (2008) 学生文化の実態と大学教育. 高等教育研究, 11: 7-23

■ 吉川満典・栗村昭子 (2014) 心理的居場所の研究: 大学生のアイデンティティの確立と情動知能の見地から. 総合福祉科学研究, 5: 41-50

■ 全国大学生協同組合連合会 (2021) 第56回学生生活実態調査の概要報告 (<https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html>), [2022/03/15]

■ 全国大学生協同組合連合会 (2022) 第57回学生生活実態調査 概要報告 ([https://www.univcoop.or.jp/press/life/pdf/pdf\\_report57.pdf](https://www.univcoop.or.jp/press/life/pdf/pdf_report57.pdf)), [2022/03/15]

本研究は中西勝彦(京都文教大学)、勝間理沙(京都大学)、大野真理子(京都大学)、藤田風花(京都大学)との共同研究です。  
インタビューにご協力くださった学生のみなさんに謝意を表します。

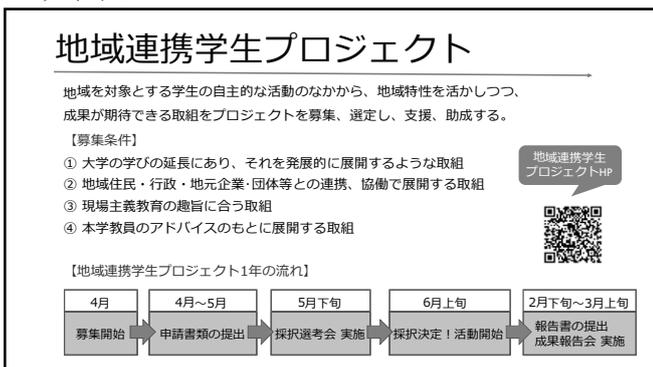
スライド1



スライド2



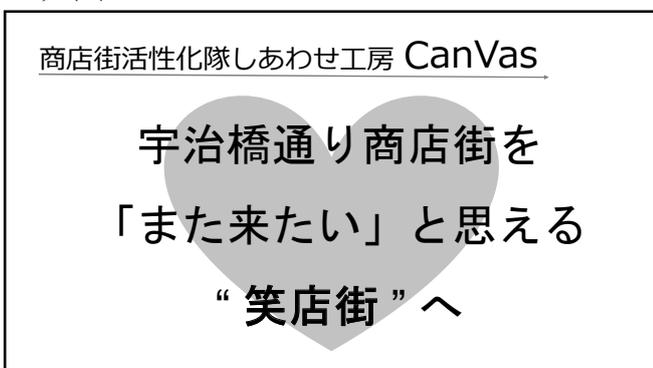
スライド3



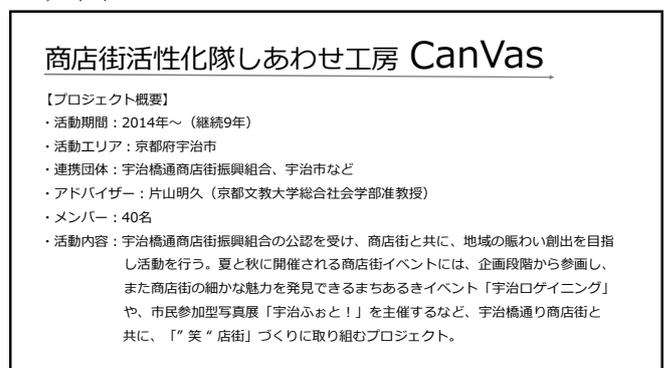
スライド4



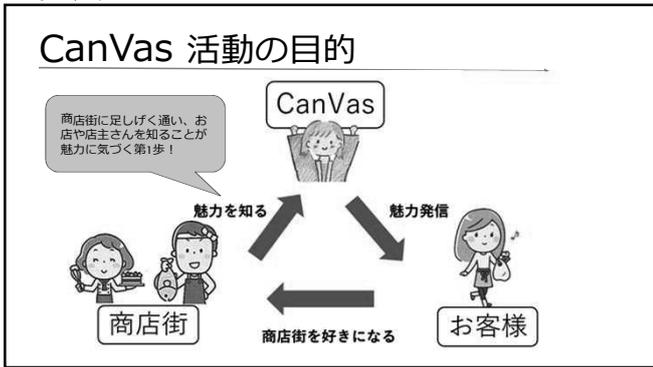
スライド5



スライド6



スライド7



スライド8

### CanVAS グループ構成

夏祭り班	わんさか班	ロゲイニング班
<ul style="list-style-type: none"> <li>●8月に宇治橋通り商店街で開催される夏祭り「スマイルサタデー」に参加。子どもを対象としたワークショップの企画・運営を行う。</li> <li>●宇治商工会議所NEWSやサテライトキャンパス情報紙へ、地元企業や商店街の店舗紹介の記事作成。</li> <li>●他地域のイベントへの参加。</li> <li>●本学「ともいきフェスティバル」の企画提案・実施。</li> <li>●「オンライン企業見学会」企画・運営（2020、2021年）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●10月に宇治橋通り商店街で開催される「わんさかフェスタ」で、会場全体で楽しめるイベントの企画・運営を行う。またフェスタの実行委員会にも加わり、全体の運営にも携わる。</li> <li>●市民参加型写真展「宇治ふおと！」企画・運営（2021年～）</li> <li>●コロナ禍で中止となった「わんさかフェスタ」の代替イベントとして提案。宇治市の魅力発信事業に位置付け、市と協働で企画を進めている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●フォトロゲイニングの手法を用いて、中宇治エリアのまちあるきを行う「宇治ロゲイニング」の企画・運営を行う。</li> <li>●近隣小学生や本学の新生、地域の高齢者など、ターゲットを絞って年に2度ほど開催</li> <li>●観光客やお買い物客を対象にした簡易版の実施</li> <li>●2024年度大河ドラマ「光る君へ」に合わせ、「源氏物語」をテーマにしたロゲイニングを考案中。</li> </ul>

スライド9

### CanVAS 夏祭り班

スマイルサタデー「クラフトビール夜市」

宇治商工会議所NEWS記事作成

オンライン企業見学会

スライド10

### CanVAS わんさか班

わんさかフェスティバル

宇治ふおと!

スライド11

### CanVAS ロゲイニング班

宇治ロゲイニング

色探しロゲイニング

スライド12

### コロナ前・コロナ禍・その後の変化

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
全体	通常通り実施	4～8月対面での活動自粛	ほぼ対面での活動実施	対面での活動実施
商店街での活動	通常通り実施	4～8月活動自粛 9月～少人数で申請書を提出して実施	少人数で、申請書を提出して実施感染状況によっては自粛	申請書を提出して実施
新生への勧誘	歓迎お花見会開催	オンラインで開催 大学に活動費を掲載	InstagramなどSNSを活用	大学にて対面実施
学生ミーティング	大学にて対面実施	前半はオンラインで実施 後半もオンライン推奨	基本的には対面を実施 感染状況により変更	大学にて対面実施
商店街とのミーティング	対面実施	オンラインで実施	オンラインで実施	オンラインで実施
スマイルサタデー	開催	中止	中止	開催
わんさかフェスタ	開催	中止 代替イベントとして「宇治ふおと！」を考案	中止 「宇治ふおと！」企画・実施	開催 「宇治ふおと！」も引き続き実施
宇治ロゲイニング	一般対象のもの2回 簡易版1回	本学新生対象1回	本学新生対象→中止 新規内容の企画の検討	一般対象1回 新規内容の企画の検討
全国まちづくりカレッジ	旭川大学にて開催	西南学院大学よりオンラインで開催	香川大学よりオンラインで開催	香川大学にて開催
新たな取り組み		宇治商工会議所NEWS記事作成 オンライン企業見学会	宇治ふおと!	

スライド13

### 学生の話聞いてみよう

- 三品 日向 (みしな ひゅうが) さん**  
2019年度入学 / 総合社会学部4年次生 / 2021年度副代表 / 夏祭り班所属
- 山中 怜奈 (やまなか れな) さん**  
2020年度入学 / 総合社会学部3年次生 / 2022年度代表 / わんさか班所属
- 倉橋 寧音 (くらはし ねね) さん**  
2020年度入学 / 総合社会学部3年次生 / わんさか班所属 / 一人暮らし

スライド14

### 学生の話聞いてみよう

憧れの大学生活！サークルやプロジェクトに入りたくて、積極的に情報を探した

2020年4月～

- ・キャンパスは閉鎖、大学に行けない
- ・新生に活動をPRする場もない
- ・地域のイベントや行事は中止
- ・昨年みたいな、プロジェクト活動はできない

オンラインで説明会を実施。でも、一方的に話をするだけになってしまう...

先輩たちからイベントを引継ぎ、自分たちの手でやり遂げたい、と思っていた

スライド15

### 学生の話聞いてみよう

話を聞いているだけのミーティング。やめようと思ったことも...

オンラインでもみんなが喋れるように工夫

2020年夏～冬

- ・オンラインでのプロジェクト活動
- ・モチベーションの低下をどう防ぐか？
- ・初めての対面でのミーティング！
- ・学外での活動は、少ない人数で、短時間で
- ・少しでもプロジェクトらしいことをしたい(させてあげたい)

コロナ禍でもできる学生たちの活躍の場を探した

月に1回でいいから、対面でミーティングをさせてほしい！

スライド16

### 学生の話聞いてみよう

学生ミーティングは対面で、商店街に出向いて行っていた商店街とのミーティングはオンライン。便利だけど...

2021年4月～

- ・対面での授業も増え、キャンパスも賑わいを取り戻しつつある
- ・ミーティングも対面で行えるようになった
- ・一方で、オンラインミーティングにも慣れてきた
- ・今年も地域のイベントや行事は中止が多い

代替イベントの考案。2020年度から検討していた新企画「宇治ふおと！」を実施！

スライド17

### 学生の話聞いてみよう

夏と秋に行われる宇治橋通りのイベントが復活！

2022年4月～

- ・ほとんどの授業が対面に
- ・ある程度の制限は残るが、地域での活動も自由にできるようになってきた
- ・地域のイベントや行事も復活！
- ・一見、コロナ前に戻ったような...

コロナ前を知っている学生がいる間に再開できてよかった

元に戻った訳ではない。今でもできないことはたくさんある...

地域の人には、以前を知っているが、学生はコロナ前を知らない。大規模なイベントに馴染んでいない。

スライド18

### お知らせ CanVasイベント紹介

#### 宇治ふおと！～子どもと笑顔の写真展

概要

2月4日(土)～25日(土)  
宇治橋通り商店街協力店舗 (全13店舗)  
詳細は、下記のQRコードからご覧いただけます。

**作品展示場所**  
宇治橋通り商店街協力店舗

**開催期間**  
2022年(土)4月～25日(土)  
宇治橋通り商店街協力店舗にて実施します

**宇治ふおと！**  
～子どもと笑顔のものがたり～

スライド19

## お知らせ

### 宇治飯 うまいもんチャンネル

宇治商工会議所では、宇治市内の飲食店の応援とまちの活性化を図るため、店主イチオシの料理を調理の様子から完成まで撮影し、YouTube「宇治飯うまいもんチャンネル」で発信しています。今回、登壇した三品くんが、この動画製作に携わっています。

宇治飯 うまいもんチャンネル →



スライド20

ご清聴ありがとうございました。

この後の、パネルディスカッションや  
ワークショップもよろしくお願いします。

## 第10分科会

### 社会と融合する大学教育のかたちを考える

#### 報告者

- 南 博史 京都外国語大学 国際貢献学部 教授、  
NPO 法人フィールドミュージアム文化研究所 代表理事
- 佐藤 哲 東北電子産業株式会社 東京支店 支店長
- 渡邊 俊祐 株式会社相互技研 京都事務所 所長、  
同志社大学 文化遺産情報科学調査研究センター 副センター長

#### コーディネーター

- 津村 宏臣 同志社大学 文化情報学部 准教授



## 社会と融合する大学教育のかたちを考える

コーディネーター

同志社大学 文化情報学部 准教授 津村 宏臣

---

---

### ○本分科会のねらい

第 10 分科会「社会と融合する大学教育のかたちを考える」開催の目的は、日本が直面する現代の社会課題（少子高齢化に伴う生産人口の縮小、それに伴う国際競争力の低下や産業・就業構造の総体的な劣化、地方と都市、社会・経済格差の拡大など）を考え実践する社会人を育成する大学の役割を、教育の機能から考えることである。

日本の地域再生と生涯学習の基盤となるべく、大学教育に寄せられる期待は大きい中で、「社会に開かれた」「社会と併走する大学」の具体的なイメージは像を結んでいない現状がある。具体的な産学連携だけでなく、産官学民連携でこれらの課題に挑戦するためには、従来型の企業内研究者（ハイ・タレント・マンパワー）の育成だけでなく、人材離散型の研究・教育システムの運用が必要となる。本分科会ではそれらの未来について、実践事例を通じた検討を深めることにあった。

### ○報告の概要

南博史氏（京都外国語大学国際貢献学部・NPO 法人フィールドミュージアム文化研究所）が、「社会に融合できる総合力をもった人材育成にむけた提案～福井県越前町フィールドミュージアム活動を通して」において、福井県越前町での博物館学芸員資格過程と地域活動の連携事業の実践事例を報告した。カリキュラム化されるフィールドミュージアムの事例の少なさや、その具体課題を報告、共有した。

佐藤哲氏（東北電子産業株式会社）が、「企業と大学のつながり」において、企業から見た大学や研究機関の位置づけ、学会活動を大学と企業とで連携実践する事例を報告した。社会に求められる人材は大学では“育ちにくい”現状と、企業として大学教育や学術界に参画する重要性を指摘した。

渡邊俊祐氏（株式会社相互技研・同志社大学文化遺産情報科学調査研究センター）が、「授業を通じた大学と会社での重要視度の違い」において、測量士資格と測量業務を前提に、実際の社会における業務内容と、大学での測量学実習など課題設定型の教育とのギャップについて報告した。実習で身につけられる技量と社会現場で必要となる実地経験、一般性の高い教育と専門性の高い業務との埋まらない溝について報告した。

### ○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

Q. フィールドにおける活動の継続性と大学教育（学年や入学・卒業）の断続のギャップはどのように埋めることが可能か？（>南先生）

A. 博物館学芸員資格過程のような、“正課のカリキュラム化”が可能になるかどうか、大きな要件となる。地域社会課題は連続的であり、可変的でもある。それに対して、大学生がコミットメントを継続する為には、“正課のカリキュラム”そのものも、地域社会課題と連動して連続的で柔軟性を保持しなくてはならない。多くの大学でそれがうまくいかない（例えば、熱心な学生や教員の属人的努力以上の成果に結びついていない現状）のは、大学教育が社会の可変性、課題の即時性に対応出来るカリキュラム改変の柔軟性や視座を持たなくてはならないだろう。

Q. 企業に求められる人材は本当に大学教育で育成可能なのか？（>佐藤先生）

A. 現在は、インターン制を積極的に利用して開発現場や工場、展示会などに大学生に参画してもらい、特定の企業と特定の人材とのマッチングは“企業と学生の個別的な努力”で担保されている側面が強い。欧米を中心としたような長期インターン制度などが理系だけでなく文系も含めた総合的な学生の実践も必要。また、そうした制度が企業側の「求める姿」だけでなく、大学側の「求める姿」のイメージを実現する制度となるためには、学術界に積極的に学者だけでなく企業も参画していくことが必要。また、

人材離散型の研究・教育システムは現実的には存在していないため、その実践事例の積み上げが不可欠だろう。実務家教員を重視する現在の大学の姿は、一方で、その「求める姿」をやはり社会に附託しているだけで、実際には大学研究者や教員が実務家化する努力も必要だろう。

Q. 実務家として大学で講義をする場合に重視している点は何か？（>渡邊先生）

A. 測量士に限定になるが、いわゆる資格試験で必要となる普遍的知識・経験の部分と、実際の測量計画や実施計画などの立案や実施に関する実地経験は全く異なるフェーズの課題。そのため、測量実習などで従来型のカリキュラムでは測量の基礎から応用、それに資格試験の内容を少し触れる、という程度だったが、現在は講義期間の1/3は応用・課題型の測量計画・実施計画の立案に必要な実地経験に関する内容に改変している。実際に測量士になる場合は重要な実習内容となるが、受講生全員がそうではないため、効果的であるとは言い切れない、むしろ、少数の実務家教員に求められている実務家としての側面の意義づけが、大学の正課カリキュラムの中で位置づけられていない現状ではあまり効果は感じられない。

#### 全体討議まとめ（<コーディネーター）

大学教員が実務家化している事例（南：NPO代表、津村：株式会社代表取締役）や、実務家教員として大学で講義をする事例（渡邊）、また学会活動を大学と連携しておこなう企業（佐藤）が通有して見ている現在の課題は、大学の正課カリキュラムの内容の普遍性と制度の非可塑性が、学生の画一・齊一的人格に比例している部分と言える。個人格の多様性を包摂するダイバーシティーを大学が目指すのであれば、その教育、運営方針も、社会の変化に応じた多様性を保持する努力と制度改革が不可欠だろう。

スライド1

第10分科会 社会と融合する大学教育のかたちを考える  
2023年 2月25日 FDフォーラム

### 趣旨説明 社会と融合する大学教育のかたちを考える

日本が直面する現代の社会課題に、少子高齢化に伴う生産人口の縮小、それに伴う国際競争力の低下や産業・就業構造の総体的な劣化、地方と都市、社会・経済格差の拡大などがある。地域再生と生涯学習の基盤となるべく、大学教育に寄せられる期待は大きい中で、「社会に開かれた」「社会と併走する大学」の具体イメージは像を結んでいない。

具体的な産学連携だけでなく、産官学民連携でこれらの課題に挑戦するためには、従来型の企業内研究者（ハイ・タレント・マンパワー）の育成だけでなく、人材離散型の研究・教育システムの運用が必要となるだろう。本分科会ではそれらの未来について、実践事例を通じて検討してみたい。

スライド2

### 登壇者のご紹介



京都外国語大学国際貢献学部教授  
NPO法人「ホト」プロジェクト研究代表



東北電子産業株式会社東京支店長  
同志社大学CKSCH研究員



株式会社相互技研京都所長  
同志社大学CKSCH研究員

講師の先生方には、大学教育の今のかたちから、今社会で求められる「人材」とその「教育」の位置づけについて、それぞれのお立場からご経験を踏まえてご議論いただけます。

スライド3

### 株式会社SOCRAH (ソクラ)

2022年2月21日設立 代表取締役 津村 宏臣

#### Service Organization for CReating Advanced Humanities

先端的人文社会科学を創造、提供を目指す会社です。

- 2009年 同志社大学文化遺産情報科学調査研究センター 設置
- 2022年 同センター3期目 ⇒ 研究・教育資源を“社会資源”へ 拡張
- 2022年 株式会社SOCRAH 設立
- 岡山県真庭市にサテライト 設置 (地域創生拠点施設)



スライド4

### 文化資源⇒社会資源課題の視点：

「文化財」・・・行政/法定義  
「文化遺産」・・・地域が創造/共有  
→ “身体化”されない文化・歴史



地域文化知の“脆弱さトリクルダウン”状態

スライド5

### 現状課題の背景：

地域・歴史への国家の過干渉 ← 中央集権制  
それまでは？ 「地域知」は「地域史」とともに



文化財保護文化行政の目指す地域と現状

- 背景
  - 第二次世界大戦で敗戦・・・日本/日本人の世界を説明する「コア」が喪失 「文化財保護法（1949）」
  - 前身である「史跡名勝天然記念物保護法（1919）」「国法保存法（1929）」← “国史”を認める存在を守る
- 地域（都道府県）で文化財を指定し、その保護と活用をもって、国民の文化的向上をはかる
- 目的
  - 原図者負担の原則（地域の文化財は地域で、個人の文化財は個人で）
  - 保存や指定のための調査は実施される → 調査・保護にかかる「経費」「人的」負担の増大
- 現状
  - 権力が“移しいモノ”が=「文化財」となり、地域生活、日常生活と密接に関わる身体化した文化は指定から外れる

スライド6

### 課題からニーズへ：我々は必要なのか？

- 文化財保存活用地域計画（大綱）の推進（文化庁）
  - 文化庁長官の認定により保護・活用に関する「学術的措置」を国家的に調整
  - 現状は1718市町村中47市町村（2.7%）、過疎地域では11市町村（0.6%）のみ
- 初等中等教育における学習指導でのICT活用（文科省）
  - 「学習指導要領解説総則」 ← 情報手段にくわえ、視聴覚教材や教育機器として活用
  - 「指導内容」ではなく「方法」として → 授業および教師が工夫改善していくもの
- 世界博物館会議2019（京都）+ 博物館法改正（2021：文化庁）
  - 社会とその発展に貢献するため、有形・無形の人類の遺産とその環境を、教育や研究、楽しみを目的として収集、保存、調査研究、普及、展示する公衆に開かれた非営利の施設機関
  - 博物館の役割 → まもり、うけつ、わかちあ、はくくむ、むあ、いとなむ
- 第6期科学技術・イノベーション基本計画（内閣府）
  - 社会のデジタル化 レジリエント、社会実装による課題解決（イノベーションの強化）
  - STEAM、GIGAスクール、リカレント教育を推進する 地域環境・文化醸成（教育・人材育成）

第10分科会

スライド7

**ニーズに答える：我々は何をしてきたのか？**

			
文化・社会の調査/計測/情報化 エジプト・アンコールワット・アジヤンター... 等々etc	情報化された文化・社会の公開 中央アジア世界遺産化・小豆島日本遺産認定	情報化のための教育・普及活動 真珠市まにわ大塚設置演習・市民調査実施	x R技術による仮想博物館展示 JCOM2019仮想ミュージアム・高松等50周年展示
			
地域社会との連携/遺産創造活動 松江城VR・田和山史跡整備・まるごと明日香VR	地域連携による博物館等の再生 ふるさとセンター市民展示・民泊文化再生展示	学校教育へのx R技術の応用実験 北原小学校総合科目・正木小学校277年11組学習旅行	地域活動拠点とその設置準備 北原古代村構想・R199-古代館場連携・郷土料理保存

スライド8



社会と融合する大学教育のかたちを考える  
「社会に融合できる総合力をもった人材育成にむけた提案  
～福井県越前町フィールドミュージアム活動を通して」

京都外国語大学国際貢献学部  
NPO 法人フィールドミュージアム文化研究所  
南 博史

### 発表要旨と結論

福井県越前町での博物館学芸員資格課程学生と一緒に取り組んだ10年にわたるフィールドミュージアム活動を振り返り、現状と課題を分析する。その上で、大学における人材離散型の教育システムとは、それぞれの専門分野の学習はもとより、それをもとに社会のさまざまなコミュニティ、フィールドで交流し、刻々と変化する課題の解決にむけて多様な分野と人材を動的、持続的に総合していける力を養う場と機会を提供する仕組みとした。

#### 1. 活動のはじまり

2011年福井県越前焼復興プロジェクトの関連から、越前町にある越前陶芸村(での京都外国語大学博物館学芸員資格課程の外部連携活動を開始。

越前焼だけをとりあげるのではなく、周辺に広がる越前古窯跡や歴史遺産、越前焼窯元、それをとりまく自然環境、そこで営まれてきた人々の生活などを地域の資産と位置付け、地域全体を博物館とみだてた活動を通して、越前焼の復興を目指す。

#### 2. 福井県越前町フィールドミュージアム活動開始

初期の越前焼古窯が分布する越前町熊谷区。人口減少と高齢化が進む熊谷区が継続することが、奥中山間地で若手農業者が無農薬の米作りを持続していくことにつながることを目標にフィールドミュージアム構想を提案。

熊谷区の空家を「地域住民交流センター くまカフェ」として、学芸員資格課程外部連携活動学生が中心となって活用を開始した。

#### 3. 住民によるくまカフェ運営とフィールドミュージアム活動の新たな展開

福井県ふるさと茶屋事業によって、くまカフェの整備が行われたことがきっかけとなって、くまカフェの運営が学生から地域住民に移った。

ここに至る約5年間の活動をベースに、「ものづくり」によって、熊谷での交流人口、関係人口を増やすことを目的とした新たなフィールドミュージアム構想を提案。

#### 4. 中山間地での農業をとりまく新たな課題と高齢化が進む熊谷区

新型コロナウイルス禍の中で、ここまでの「住民の傍にいる」という活動のありかたに加えて、大学の新しい教育プログラム(コミュニティ・エンゲージメント・プログラム)によって、定期的な学生主体の活動を行えた。

こうした中、古熊谷での米作りには、シカ・イノシシによる獣害拡がりが無農薬米作りの持続性に黄色信号が灯っている。さらに熊谷区の高齢化が進むことによって熊谷区の自治活動においても課題が出ている。

#### 5. 環境保全型生業をもとにしたフィールドミュージアム活動と「くまだん大学」活動

2021年、古熊谷での米作りを学生が主体的に行う「京都外大ライスフィールドプロジェクト」を開始。「コミュニティ・エンゲージメント・プログラム」と「京都外大ライスフィールドプロジェクト」を1年のサイクルにつなげ学生が主体的にとりくむ年間をとおした継続的な活動が可能になった。

2022年は古熊谷での無農薬の米づくり、周辺に広がる雑木林の活用と整備が、古熊谷の自然環境を保全していることを学ぶ外部を対象とした連続講座「くまだん大学」を開始した。

#### 6. まとめ

越前フィールドミュージアム活動を通して、大学が社会と融合できる人材を育てるためには、2つの方向があるように思う。

一つは、学芸員資格課程のような総合力・応用力育成型の教育活動を地域社会の中でコミュニティと一体となっていく方向と

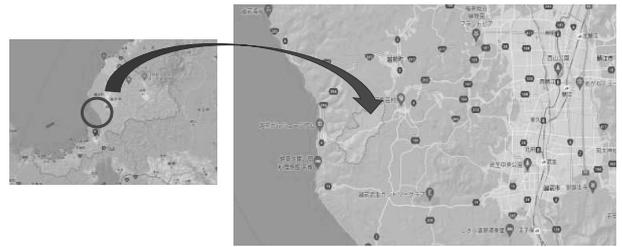
もう一つは、大学で学ぶさまざまな専門分野を基礎として、地域社会の中で行われているさまざまな課題解決型活動に参加し、専門力と実践活動を通して総合力を学ぶ方向である。

人材をさまざまなコミュニティに分散させ、専門力と総合力を獲得し社会の課題解決に向けた相互関係を結んでいくプロセスが、大学が社会融合していけることに繋がると結論づけた。

大学における人材分散型の教育システムとは、それぞれの専門分野の学習はもとより、それをもとに社会のさまざまなコミュニティ、フィールドで交流し、刻々と変化する課題の解決にむけて多様な分野と人材を動的、持続的に総合していける力を養う場と機会を提供する仕組みとしたい。



福井県越前町熊谷区



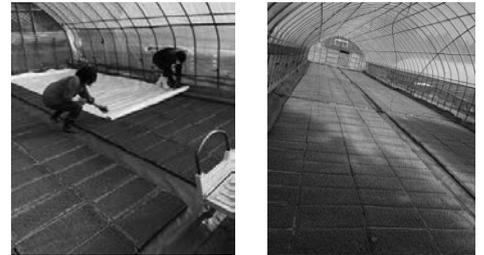
Rice Field Projectとは？

- 福井県越前町熊谷区古熊谷
- 一南先生のフィールド活動の場
- 外大生だけで一年をかけてお米を作ってみよう！

京都外大のブランド米



たねもみまき (3月)



電気柵 (5月)



田植え (6月)



除草作業 (7月)



稲刈り・稲架に掛ける (9月)



(外大祭り (11月))



ご静聴ありがとうございました

スライド1

公益財団法人 大学コンソーシアム京都  
2022年度 第28回 FDコンソーシアム  
第10分科会 社会と融合する大学教育のかたちを考える

## 企業と大学のつながり

東北電子産業株式会社  
Tohoku Electronic Industrial Co.,Ltd  
東京支店 佐藤 哲

Tohoku Electronic Industrial Co.,Ltd. 1

スライド2

### 内容

- 1.会社概要
- 2.大学とのつながり
- 3.学会活動
- 4.知財活動

Tohoku Electronic Industrial Co.,Ltd. 2

スライド3

”優れた技術を売る誇り高き商人”を創業の精神に、  
”光と電子の未来を拓く”をスローガンとして、  
「光」を中心としたさまざまなモノづくりに挑んでいます。





Tohoku Electronic Industrial Co.,Ltd. 3

スライド4

### 会社概要

**TEHOKU 東北電子産業株式会社**

- 1968年4月1日(昭和43年)設立
- 資本金 6,000万円
- 事業内容 産業用機器、レーザー制御機器、理化学機器等の開発・製造・販売
- 代表取締役会長 佐伯 昭雄(工学博士)
- 代表取締役社長 山田 理恵(農学博士)

■ 拠点

**本社** 仙台市太白区向山2-14-1

**利府事業所** 宮城県宮城郡利府町しらかし台6-6-6

**東京支店** 川崎市中原区新丸子東二丁目897

**京都ラボ** 京都市下京区河原町通松原下る植松町717

**本社**



**利府事業所**



Tohoku Electronic Industrial Co.,Ltd. 4

スライド5

### 会社沿革

1968年(昭和43年) 4月1日創立

- 2006年 経済産業省「元気なモノ作り中小企業300社」選定
- 2008年 「みやぎ優れモノ」に認定
- 2012年 「ものづくり日本大賞」東北経済産業局長賞 受賞
- 2014年 プラスチック成形加工学会 第1回技術進歩賞受賞
- 2017年 経済産業省 「地域未来牽引企業」に選定
- 2018年 自社製品CL測定手法が JIS規格 K7351「プラスチックに含まれる過酸化物の微弱発光の高感度測定方法」公示
- 2019年 第15回川崎ものづくりブランド認定
- 2020年 東北工業大学と「包括連携に関する協定」を締結
- 2021年 ISO13485認証登録
- 2022年 自社製品CL測定手法が ISO規格 ISO4765:2022 採択
- 2022年 「第10回富県宮城グランプリ」受賞

Tohoku Electronic Industrial Co.,Ltd.

スライド6

### 会社概要

**事業紹介**

- CL事業**  
世界最高感度の光検出装置の開発・製造・販売
- ものづくり**  
光・マイクロ波など制御装置の開発・製造・販売
- 技術商社**  
研究用機器の販売

サービスライン

- 光検出装置 製造・販売
- 研究・外部発注(学会・論文)
- 依頼サンプル測定
- 特注対応
- 産業用電子機器
- 光(LD、レーザー)制御機器
- 超音波、振動子、温度、マイクロ波等制御機器
- 医療・分析機器
- 選定機器
- 分析・計測機器
- 研究用装置
- 研究用消耗品

**分野**

- レーザー光
- 高分子
- 材料
- 医療・生化学
- 食品
- 産業
- 化粧品
- 半導体
- 電子部品
- 選定
- 分析

**クライアント**

- 民間企業
- 研究機関
- 新事業
- 品質管理
- 技術・製造
- 学術研究機関
- 公的研究機関
- 海外
- 民間企業
- 研究機関

Tohoku Electronic Industrial Co.,Ltd. 6

# 大学とのつながり

Tohoku Electronic Industrial Co., Ltd. 7

## 大学とのつながり(1)

**東北大学と極微弱発光検出装置(ケミルミネッセンスアナライザー)の開発**

約40年ほど前に東北大学工学部通信研究所の稲場教授と弊社社長佐伯との共同研究で開発。

フォトン(光子)レベルの発光を捉える世界最高レベルの光検出装置

約40年前  
インスタントラーメン、  
酸化油が光る

**「酸化物は光る」**

従来法では見えない、材料の  
種初期の微量な酸化劣化を捉える

樹脂、プラスチック、  
生体試料(血液、臓器、皮膚)、  
薬剤、食品、油、医療用材料など)

その後、東北大学工学部、農学部、医学部、薬学部など他分野の研究に活用され、多数の学会、論文発表された。  
その他多くの大学の研究室へも導入された(東京大学、北海道大学、群馬大学、山形大学、北陸先端科学技術大学、京都工繊大学、早稲田大学、星薬科大学、同志社大学、九州産業大学、琉球大学、など)

Tohoku Electronic Industrial Co., Ltd. 8

## 微弱発光検出の大学との研究応用例

- 物質の変化(酸化劣化、化学反応)を高感度に捉える(プラスチック、油、食品、薬、化成産品、生体試料、植物など)(従来法よりも10~100倍)
  - \*酸化劣化度評価、\*抗酸化剤、薬の効果判定 \*製品の品質管理
  - \*リサイクル材の評価 \*開発期間短縮 \*疾病研究
- 活性酸素、ラジカル等の検出
- 発光試験を用いた高感度分析(amol(アトモル)レベル): ATP測定、抗酸化力評価
- GL-HPLC(高速液体クロマトグラフィー)による高感度分析(fmol(フェモトモル)、ppbレベル): 過酸化脂質、ポリフェノール、過酸化水素等の検出
- 高感度蛍光検出(fmolレベル): 微量測定
- 微弱発光画像検出: 発光部位、酸化過程の確認、多検体同時モニター、拡大測定
- 微弱発光スペクトル測定: 反応メカニズム推定
- 活性化エネルギー測定: 反応メカニズム推定、寿命予測
- その他: 電子線照射履歴検出、表面処理モニター、キャビテーション、物理刺激による発光等

Tohoku Electronic Industrial Co., Ltd.

## 微弱発光計測装置(ケミルミネッセンスアナライザー)とは?

フォトン(光子)レベルの発光を捉える世界最高レベルの光検出装置 ケミルミネッセンスアナライザー

従来の方法(化学的、物理的方法)では検出限界以下だった材料も実際には酸化反応が進行しています。ケミルミネッセンスアナライザーは今まで見えなかった種微量の酸化劣化を捉えることができます。

### ケミルミネッセンスアナライザー 装置ラインナップ

高感度フォトンカウンティング用光電子増倍管を用いた約50フォトン/cm<sup>2</sup>レベルまで検出可能な最高感度の発光測定装置

高感度フォトンカウンティング用CCDカメラを用いた最高感度の発光画像測定装置

高感度フォトンカウンティング用CCDカメラと明るい分光器を組み合わせた最高感度の発光スペクトル測定装置

Tohoku Electronic Industrial Co., Ltd.

## 微弱発光計測装置(ケミルミネッセンスアナライザー)

### 有機物の自動酸化由来の発光

β切断

発光メカニズム

- Alcohol: ROO• → ROH
- Ether: R-O-R → R-O•
- Carbonyl: R-C(=O) → R-C(=O)•
- Singlet Oxygen: O<sub>2</sub>
- Oxygen: O<sub>2</sub>

安定化合物生成

眼では見えない弱い発光→極微弱光

高分子材料の初期の酸化劣化測定

Tohoku Electronic Industrial Co., Ltd. 11

## 微弱発光計測装置(ケミルミネッセンスアナライザー)

### 最近のトピック: プラスチック材料の劣化評価、リサイクル材活用など 民間企業の研究所や現場への活用

初期酸化検出

促進試験の短縮

原料の受け入れ検査

製造過程の最適化と各段階でのチェック

製品開発の短縮

高品質製品

リサイクル材の品質評価

Tohoku Electronic Industrial Co., Ltd. 12

スライド13

**微弱発光計測装置(ケルミネッセンスアナライザー)**

**PA(ポリアミド)ペレット新品とリサイクル材の発光画像(加熱)**

CL meas. condition    System: CL Micro Imaging system  
 200C air Meas. Time: 1min gain=5, ATTN=255  
 Sample: PA 2 pellet (Virgin, 300C x 5 extrusions)

Tohoku Electronic Industrial Co., Ltd.

スライド14

応用例

Tohoku Electronic Industrial Co., Ltd.

スライド15

**微弱発光計測装置(ケルミネッセンスアナライザー)の応用範囲**

**医療用材料**

- 新素材の酸化安定性評価、
- 添加剤、抗酸化剤の効果判定
- 材料の受入・出荷検査
- 加工条件の換算
- リサイクル材の評価
- 発光期間短縮

医療用プラスチック、薬、細胞、マウス、血液

**自動車用材料**

プラスチック工業連盟HPより

**食品・化粧品材料**

- 活性酸素、抗酸化力評価
- 発光効果、炎病研究
- 過酸化脂質測定
- ポリフェノール、過酸化水素等の検出
- 薬剤酸化安定性評価

油、包装材、ボトル、食品

●その他：電子線照射履歴検出、表面処理モニター、キャピテーション、物理刺激による発光等

Tohoku Electronic Industrial Co., Ltd. 15

スライド16

**微弱発光計測装置(ケルミネッセンスアナライザー)と大学とのかわり**

**酸化劣化反応は複雑で、発光現象を理解するには学術的なバックグラウンドも重要となる**

↓

**社内技術では対応できない領域**

↓

**材料系の学会に参加し研究者との人脈を形成**

Tohoku Electronic Industrial Co., Ltd. 16

スライド17

学会活動

Tohoku Electronic Industrial Co., Ltd. 17

スライド18

学会活動

**学会発表・講演**

日時	学会	詳細
2021.7.2	マテリアルライフ学会	第32回研究発表会 特別講演
2021.11.26	日本分析化学会	若手交流会
2021.12.2	日本学術振興会	
2021.12.15	FAMCO先端機能材料特別講演会	
2022.2.18	日本油化学会	試験法企画小委員会
2022.3.17	第14回 CL研究会	
2022.5.13	日本接着学会	「高分子劣化における最近の技術動向」講演
2022.6.15-16	プラスチック成形加工学会	
2022.7.23	日本分析化学会	東北支部大会
2022.8.6	日本臨床検査医学会	東北支部大会
2022.8.25	PO研究会	
2022.10	レオロジー学会	
2022.11	成形加工シンポジウム	

年間10-15件ほどの外部発表  
展示会、論文発表、雑誌投稿

Tohoku Electronic Industrial Co., Ltd. 18

### 学会活動

## マテリアルライフ学会

1987年設立  
個人会員180名、法人会員22社  
材料の寿命について以下を中心に検討する学会  
劣化・寿命（メカニズム、因子、寿命予測、寿命制御） 耐久性（評価法、評価技術、評価装置、向上技術）  
対象マテリアルは工業材料、塗料、新材料、包装材料、複合材料、生体材料、生分解材料、エコマテリアル、安定剤、難燃材料、文化財など多岐にわたる材料が対象

研究会  
・表面界面物性研究会  
・耐久性研究会  
・ケミルミネッセンス研究会  
・マイクロプラスチック研究会

会長	黒田 真一	学会賞・表彰委員長	群馬大学
副会長	徳満 勝久	関西支部長	滋賀県立大学
	佐藤 哲	総務委員長/財務委員長	東北電子産業(株)

弊社は賛助会員として参加  
佐藤が副会長も務め、会の運営にも携わることで研究者との人脈も広がる。

Tohoku Electronic Industrial Co., Ltd. 19

### 学会活動

## ケミルミネッセンス研究会

日本でも唯一の材料の劣化・寿命についてを専攻する  
マテリアルライフ学会  
Materials Life Society, Japan

マテリアルライフ学会の分会として1回/1年 研究会開催

第12回 開催風景  
(東京工業大学 レクチャーシアター)

Tohoku Electronic Industrial Co., Ltd. 20

### 学会活動

## プラスチック成型加工学会

1988年12月 創立  
個人会員1400名、法人会員170社  
プラスチック材料・成形条件・ベストな製品に至る全工程にわたって科学と技術のメスを入れ、プラスチックの新しい可能性を切り開く。

第1回技術進歩賞 受賞 (2014年)  
高感度微弱発光計測を用いたプラスチックの酸化劣化評価装置の開発

**技術進歩賞**  
中小企業が開発された進歩的な技術を対象とし、プラスチック成型加工分野の技術の進歩を促すことを狙いとし、本分野の進歩に貢献するきらりと光る独創性の高い技術を将来性に対する期待とともに表彰

その後、年次大会およびシンポジウムでの発表、企業展示を実施  
社長の山田は次回シンポジウム(山形県開催)の運営委員

Tohoku Electronic Industrial Co., Ltd. 21

### 大学とのつながり(2)

## 東北工業大学と「包括連携に関する協定」を締結 (2020年10月)

この協定は、相互に協力し、情報共有と意見交換を行い、産学の連携を推進することにより、研究開発、教育・人材育成および地域の活性化を推進し、持続可能な社会の発展に資することを目的としています。  
その目的を達成するため、次の4項について連携・協力してまいります。

- 共同研究・受託研究等の実施とこれに伴う技術者・研究者の交流
- キャリア教育・社会人教育等、双方の人材交流・育成の促進
- 地域連携活動・教育活動等への協力、地域活性化の推進
- その他前条の目的を達成するために必要な事項への協力

東北工業大学ホームページより

Tohoku Electronic Industrial Co., Ltd. 22

### 大学とのつながり

## 東北工業大学 ライフデザイン学部 産業デザイン学科

#### ①ブランディング研究(リブランディング) 大矢研究室

社員と学生さんとでコーポレートスローガンとステートメントを検討し、社名ロゴやシンボルマーク、映像などデザインでの視覚的表現を検討いただく。  
成果は卒業制作展会場にて発表された。  
その後、会社紹介ビデオの作成も実施されている。

- ・ コーポレートスローガン&ステートメント
- ・ 会社ロゴ&ブランドシンボル
- ・ ビジュアルスタイルのルール (トーン&マナー、使用フォント、色使いなどを統一)
- ・ 名刺、ポスター、Webサイト用ヘッダーデザインなど
- ・ ブランドイメージ動画

東北工業大学ホームページより

Tohoku Electronic Industrial Co., Ltd. 23

### 大学とのつながり

## 東北工業大学 ライフデザイン学部 産業デザイン学科

#### ②自社製品のカタログおよびチラシのデザイン 篠原研究室

カタログのイントロページは表紙のイメージに合わせたシャープなデザインに変更され、ケミルミネッセンスアナライザーという微弱発光測定装置の特徴をわかりやすくまとめ、より洗練されたカタログとなりました。  
また、広告デザインは大判ポスターとして会社道路沿いに掲示されています。

東北工業大学ホームページより

Tohoku Electronic Industrial Co., Ltd. 24

スライド25

**大学とのつながり**

東北工業大学 ライフデザイン学部 産業デザイン学科

**③OEM用ポスターのデザイン 大矢研究室**

OEM製品用のポスターデザインをしました。  
展示会のブースに設置するため、広い会場内のブースでも自立つように必要最小限の文言と、それを引き立てるように背景や文字加工に工夫をしました。  
ポスターは4月に東京ビッグサイトで開催される展示会 (Medtec) で掲示されました。



東北工業大学ホームページより



Tohoku Electronic Industrial Co., Ltd. 25

スライド26

**大学とのつながり**

東北工業大学 工学部 情報通信工学科 佐藤 篤 教授

KCみやぎ推進ネットワークの令和3年度委託研究会テーマに採択

研究会テーマ：高出力固体レーザーの赤色発振技術に関する研究  
 運営者：東北工業大学 工学部 情報通信工学科 佐藤 篤 教授  
 参加者：東北電子産業株式会社  
 開催日：2021年12月20日 (月) 15:00~16:30  
 開催方法：Teamsによるオンライン会議 ※接続情報は、別途メールで連絡。

参加者  
 東北工業大学 佐藤 篤 教授 (運営者) 及び佐藤研究室学生・大学院生  
 東北工業大学 地域連携センター職員  
 東北電子産業 橋本 (参加者)、技術職員  
 KCみやぎ事務局 (宮城県庁：2名、産業技術総合センター：3名)

宮城県 Miyagi Prefectural Government

KCみやぎ推進ネットワークは、平成17年度に活動を開始した身近な大学・高専等が企業の皆様からの技術相談にワンストップで対応するネットワークです。

Tohoku Electronic Industrial Co., Ltd. 26

スライド27

**大学とのつながり**

公益財団法人 **みやぎ産業振興機構**  
Miyagi Organization For Industry Promotion

ステージアップ支援事業採択

〈概要〉  
2022年10月から2年間の販路開拓支援事業 補助金MAX500万 (1/2補助)

〈目的〉  
医療分野における自社製品及びOEM/ODMの販路開拓『モノ作り企業としての認知度UP』

展示会出展

OPIE23	光総合展示会	パシフィック横浜
N+	材料	ビックサイト
Photonix	レーザー加工	幕張メッセ
IPF	プラスチック	幕張メッセ

カタログWeb更新



Tohoku Electronic Industrial Co., Ltd. 27

スライド28

**知財活動**

Tohoku Electronic Industrial Co., Ltd. 28

スライド29

**規格**

経済産業省「新市場創造型標準化制度」

**JIS K 7351** 2018年1月22日

**プラスチックに含まれる過酸化物の微弱発光の高感度測定方法**



「新市場創造型標準化制度」について (経産省資料参照)  
 (概要) 標準化は、市場での信頼性向上や差別化を通じて、新しい技術を用いた市場創出に大きな効果があります。特に中堅・中小企業にとっては、戦略的な標準化が重要です。経済産業省では、新市場の創造や産業競争力の強化につながる戦略的な標準化の推進のため、平成26年5月に「標準化官民戦略」を策定し、本戦略に基づき、同年7月に、中堅・中小企業を含む企業又は企業グループが保有する優れた技術や製品について、従来の業界団体でのコンセンサス形成を経ずに、迅速な国内標準化 (JIS化) や国際標準 (ISO/IEC) 提案を可能にする「新市場創造型標準化制度」を創設しました。日本工業標準調査会 (JISC) 標準第一歩会において、本制度活用の対象を決定し、(一財)日本規格協会が提案企業を含めた原案作成委員会を構成し、標準化の原案作成が行われます。原案作成後、JISCにおいて審議され、国内標準 (JIS) となります。(経済産業省資料より抜粋)

Tohoku Electronic Industrial Co., Ltd. 29

スライド30

**規格**

**ISO 4765:2022**

ISO 4765:2022  
Chemically-induced ultra-weak photon emission (UPE) — Measurement as an analysis method of degradation of polymeric material

Abstract

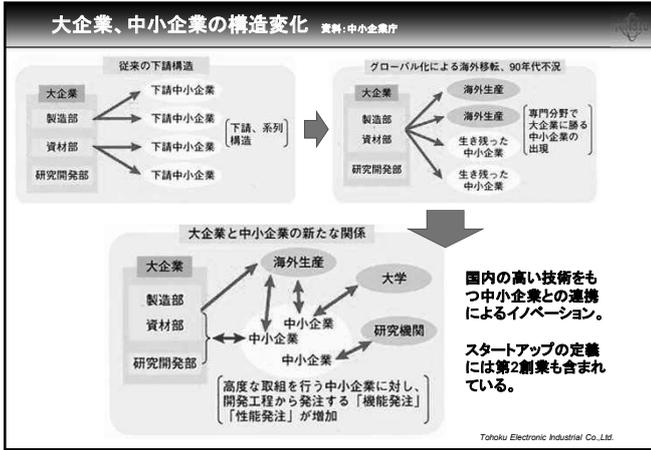
Buy this standard

General information

Status: Published Publication date: 2022-01  
 Edition: 1 Number of pages: 26  
 Technical Committee: ISO/TC 61/SC 6 Aging, chemical and environmental resistance  
 ICS: 83.080.01 Plastics in general

Tohoku Electronic Industrial Co., Ltd. 30

スライド31



スライド32

### 社会と融合する大学教育について

- ・ 技術を売りにする中小企業にとって、大学や国との協力は必須  
最先端の技術を知る  
自社技術を評価してもらおう  
社内技術では対応が難しい領域の補助
- ・ 国や県の補助金は最大限活用  
自己負担もあるので狙いを定めることが重要
- ・ インターンシップ制度  
中小企業にとっても人材確保、即職力の観点からwelcome

<大学教育へ求めるもの>

- \* 高い技術力、新しいものを自分で考え生み出す力
- \* 経営知識 ← 理系学生にも経営知識教育が必要

Tohoku Electronic Industrial Co., Ltd. 32

スライド1

**社会と融合する  
大学教育のかたちを考える**  
  
 第28回FDフォーラム 第10分科会  
  
 株式会社相互技研 渡邊俊祐

スライド2

**会社紹介**


株式会社相互技研  
 ・測量会社  
 ・今回は測量を中心の内容  
 ▶ 設計時の現況測量が中心  
 ▶ 技術サービス業で、特殊な内容？  
 ▶ 多くの企業の方々とズレているかも？

▶ 公園、庭園など植生絡みの仕事が多い  
 ▶ その関連で文化財の3次元計測も  
 石垣や石積み の計測→立面、断面図など  
 仏像、遺物、建物なども計測もしている

スライド3

**測量の資格**  
 ・測量法の定める測量（基本測量・公共測量）を行うには  
 国家資格の「測量士・測量士補」の資格が必要  
 測量士資格の取得  
 ●大学で測量に関する科目を修め、1年以上の実務経験  
 ●短大・高等専門学校で測量に関する科目を修め、3年以上の実務経験  
 ●測量専門学校で1年以上学び、卒業後2年以上の実務経験  
 ■国土地理院の長が行う測量士試験に合格した者

日本測量協会 「測量士・測量士補の資格のページ」  
<https://jsurvey.jp/shikaku.htm>

3

スライド4

**測量関連の法令**  
 ・測量法 昭和24年（1947）に6月3日制定

・「国若しくは公共団体が費用の全部若しくは一部を負担し、若しくは補助して実施する土地の測量又はこれらの測量の結果を利用する土地の測量について、その実施の基準及び実施に必要な権能を定め、測量の重複を除き、並びに測量の正確さを確保するとともに、測量業を営む者の登録の実施、業務の規制等により、測量業の適正な運営とその健全な発達を図り、もって各種測量の調整及び測量制度の改善発達に資することを目的（法第1条）

・民間資金の測量には必ずしも必要ではないが、精度など準拠される

4

スライド5

**資格**  
 測量士補資格の取得  
 ① 大学や短大で測量に関する科目を修めて卒業すると取得可能  
 ② 測量専門学校で1年以上測量士補相当の知識と技能を修めたもの  
 ③ 国土地理院の長が行う測量士補試験に合格した者

①で入社時に取得している学生もいる  
 数年の実務により測量士資格を得る測量士も多い？  
  
 →土他家屋調査士試験の午前中の試験が免除される

5

スライド6

**資格**  
 試験の場合  
 ・測量士の合格率は10%前後  
 ・測量士 測量の計画を立案できる  
 ・測量業を営む営業所に1人以上在籍することが必要  
 ■測量士補の合格率は30-40%  
 ■測量士補 測量士の立案した計画に従って作業を行う  
 ・過去五年の合格率と問題  
 ・ <https://www.gsi.go.jp/LAW/SHIKEN/past.html>

6

## スライド7

### 測量士の現状

- 測量専門の仕事をする人
- 測量もするが他の仕事が主な人  
→土地家屋調査士、設計者など 工事現場の現場監督  
自身で測量業務もできるが、他の業務の都合上外注  
→測量結果のチェックは行う = 測量の業務知識は必要

株式会社相互扶研

7

## スライド8

### 測量とは

- 地表面あるいはその近傍の地点の相互関係及び位置を確立する科学技術
- ▶ 数値あるいは図によって表された相対的位置を地上その他に再現させる技術である。
- ▶ このうち、わが国の国土開発、利用、保全等に重要な役割りを担うのが土地に関する法律であり、この土地に関する法律について定められた法律が「測量法」

国土交通省公共測量作業規定 解説と運用 (世界測地系対応版) 社団法人日本測量協会 2004 東京 P.3引用

株式会社相互扶研

8

## スライド9

### 測量の目的

- 土地の測量と建設の測量
  - 土地の測量
- 測量法や作業規定によって定められた測量  
作業の計画や従事には国家資格が必要  
その他の法律で、観測方法・観測結果の取り扱い  
機械の性能を細かく規定

株式会社相互扶研

9

## スライド10

### 授業を通した大学と会社での重要視点の違い

測量学実習 対象の学生は…

- 測量についての基礎を学び、実習を行う
- 対象は3年生
- 住居の様々な課題について学ぶ学生
- 就職先 設計事務所など (院生)

- ▶ 測量を専門に学ぶことが授業を受ける主目的ではない。
- ▶ 資格を取得することが目的ではない。
- ▶ 測量を発注する側になる可能性

株式会社相互扶研

10



## 第11分科会

### 学外の実践活動を生かした大学教育

#### 報告者

吉川 昌孝 京都精華大学 メディア表現学部 教授  
大下 大介 京都精華大学 メディア表現学部 教授  
福原 習作 北近畿鉄道ビジネス株式会社 代表取締役

#### コーディネーター

小松 正史 京都精華大学 メディア表現学部 教授



# 学外の実践活動を生かした大学教育

コーディネーター

京都精華大学 メディア表現学部 教授 小松 正史

---

---

### ○本分科会のねらい

急速な社会環境の変化とともに、さまざまな規模の社会課題が生まれている。従来からの「文系」「理系」「芸術系」という枠を超えた新しい発想が求められる今、暮らしやすい社会を生み出すための教育実践例を紹介する。具体的には、京都精華大学メディア表現学部で実践している全員必修の2年次の学外実習（インターンシップ）の実態についての報告を行った。大学と連携企業の関わり方と学生の実践状況を紹介し、学外を意識した大学の実践教育のあり方についての議論を深める場となった。

### ○報告の概要

冒頭に、小松から全体の主旨説明を行った。高度専門職に必要な「課題発見・解決力」と「未来社会の構想・設計力」が問われていることを述べた。

講演1では「京都精華大学メディア表現学部における学外実習の実態」と題して、本学教授の吉川昌孝氏が報告を行った。本学部の特徴や社会実践の位置づけの説明がなされた。本実践プログラムによって社会への役立て方が体感され、学内の学びとは異なった学生の経験が蓄積され、企業と大学双方へのフィードバックの可能性のあることが述べられた。

講演2では「京都精華大学メディア表現学部における学外実習の実態」と題して、本学教授の天下大介氏の報告を、小松が代役としてプレゼンテーションした。インターンシップの具体的な体制・特徴・学生の体験内容・学生の手応え・今後のミッションを総括した。連携先企業からの感謝や気づきの多かったことが特筆する点であった。

講演では3「社会実践する大学生を企業で受け入れる試み」と題して、北近畿鉄道ビジネス株式会社代表取締役の福原習作氏が報告を行った。当該企業は本学部の受け入れ連携先である。受け入れまでの経緯・学生が運営に関わった鉄道イベントの詳細・動画の制作過程・学生からのお礼の内容などが紹介された。今回の取り組みによって企業側と大学側との連携体制が深まったことが説明された。

### ○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

登壇者3名が終始和気藹々とした雰囲気のもと、杓子定規ではない本音トークが織り成され、登壇者自身のブレインストーミング効果や発想の深化（進化）をつかみ取ることができた。同時に、参加者からのチャット意見も活発に書き込まれた。「報告内容が非常に実践的であり、共感できる内容で分科会の中で一番の満足度だった」「科目運営に是非取り入れたい要素がたくさんあった。企業からの率直な意見が参考になった」との反応があった。既存のインターンシップの枠組みでは収まり切れない可能性が、本実習に含まれていることが認識された。学外での社会実習やフィールドワークといった学生の経験値の幅を広げる位置づけが、こうした実習では必要であるとの見解に至った。

スライド1

**第11分科会**  
**学外の実践活動を生かした大学教育**

コーディネーター  
 小松正史(京都精華大学 メディア表現学部)

第28回FDフォーラム  
 挑選～多様な学びの支援に求められる挑選と選択  
 オンライン開催  
 大学コンソーシアム京都

スライド2

**学外で大学教育を実践する意味は？**  
 ～Society 5.0 で求められる能力と資質～

出典：採用と大学教育の未来に関する産学協議会「中間とりまとめ共同提言」(2019年4月22日)、経団連「Society 5.0 ～ともに創造する未来～」https://www.keidanren.or.jp/policy/2022/003\_honbun.pdf

スライド3

**大学教育における学外での実践活動**  
 ☞単位として認められているもの

- ・インターンシップ(就業体験) ☞今回の対象
- ・フィールドワーク(野外調査・現場観察)
- ・教育実習
- ・博物館実習
- ・病院実習(医療系)
- ・農場実習(農学系)

スライド4

**本分科会開催の狙い**

なぜ、京都精華大学の学外実践活動をテーマとするのか？

- ・急速な社会環境の変化により多様な社会課題が生まれている
- ・学内のみならず、学外との接続を有効に活用した教育実践
- ・京都精華大学は文系・理系・芸術系の枠を超えた教学内容
- ・メディア表現学部では2050年の未来から今を見つめる活動
- ・プロジェクト型の実習授業を多様
- ・技術・表現・コミュニケーションを複合的に学ぶ必要性

スライド5

**本分科会の最終的な着地点**

大学と連携企業の関わり方と  
 学生の実践状況を紹介し、  
 学外を意識した大学の実践教育の  
 あり方についての議論を深めたい

スライド6

<プログラム>

- 9:32 趣旨説明 京都精華大学メディア表現学部 教授 小松正史
- 9:35 講演1「大学で社会実践することの意義と可能性について」  
 京都精華大学メディア表現学部 教授 吉川昌孝
- 10:00 講演2「京都精華大学メディア表現学部における学外実習の実態」  
 京都精華大学メディア表現学部 教授 大下大介  
 (聞き手:小松正史)
- 10:25 講演3「社会実践する大学生を企業で受け入れる試み」  
 北近畿鉄道ビジネス株式会社 代表取締役 福原習作
- 10:50 休憩(みなさまからのご質問や取り上げてほしいテーマを募集!)
- 11:00 ディスカッション(終了は12:00を予定)

スライド1

大学で社会実践することの  
意義と可能性について

京都精華大学  
メディア表現学部  
吉川昌孝

スライド2

1. メディア表現学部の紹介

- 2021年4月開講  
定員168名 まだ2期生までで毎年180名以上
- 3つの専攻 音楽表現、イメージ表現、メディア情報  
2年から専攻に分かれるがどの専攻の授業も受講可能  
精華大の中では私立文系の学生を対象にした学部  
グループワークなど多め
- 2つの特徴的な必修科目  
プログラミングと**社会実践**

スライド3

2. メディア表現学部における「社会実践」の位置づけ

- メディア表現学部で育む2つの力  
～「メディア設計力」と「**社会接続力**」  
プログラミングは「メディア設計力」育成の一環  
**社会実践は「社会接続力」育成の一環**

メディア・コンテンツは  
常に社会との相互作用で制作・運営されるもの  
≡ **社会と接続しているもの**

- 社会実践  
**2年時インターンシップ、3年時社会実践実習**

スライド4

3. 「社会実践」の流れ

- 2年生の**インターンシップ**は社会（企業など組織）を「**参与観察**」
  - ・早期からの社会（企業など組織）との接点を体験
  - ・インターンシップ先は**70社以上**
    - 大手広告代理店、飲料メーカーから、地元の商店街や神社仏閣まで
  - ・想定以上の「インターン」への抵抗感の高さ
    - 企業と学生のマッチングに腐心 対等な立場で
  - ・ゼミ選別に好影響
    - インターン経験を通じて自分の方向性がより明らかに
- 3年生の社会実践実習は参与から「**企画・運営**」へ
  - ・各ゼミなどで企業などと協働してプロジェクトを運営
  - ・教員のゼミと連動したもの17、外部の非常勤講師にお願いするもの10、あわせて、**全27プロジェクト** 1プロジェクト平均5~6人

スライド5

4. 大学で「社会実践」する意義と可能性

- ・学修・研究内容の**社会への役立て方を体感**
- ・ファスト教養や安易なスキル獲得からの回避
- ・座学、演習・実習とは**異なる経験の蓄積**
- ・企業、大学**双方へのフィードバックの可能性**

スライド1

第28回FDフォーラム  
第11分科会 学外の実践活動を活かした大学教育

**京都精華大学メディア表現学部における学外実習の実態**

京都精華大学メディア表現学部  
大下大介

スライド2

項目

- ・授業「インターンシップ1」 1Q～4Qの流れ
- ・インターンシップの具体的な体制
- ・インターンシップの具体的な特徴
- ・インターンシップ研修を体験した学生の具体的な内容
- ・インターンシップ報告会からみる学生の手応え
- ・学生アンケートの振り返りと今後のミッション
- ・総括

スライド3

**授業「インターンシップ1」**  
1Q～4Qの流れ

事前説明会 (2022年の1月26日)

↓

2022年度 1Q：事前授業

↓

2Q：連携先の決定と日程調整&顔合わせ

↓

2Q・3Q：インターンシップ研修 (主に夏期休暇中)

↓

研修終了後、連携先へお礼状の提出  
連携先からのコメントシートの提出

↓

3Q or 4Qインターンシップ報告会

※ プログラムの出席、研修、課題提出、報告会の発表などで全て履修することで単位が認められる。  
※ 2年生の必修授業で、2022年度は164名の学生が履修した。

スライド4

1・インターンシップの具体的な体制

- 連携先と教員の配置・教員の紹介 -

大下と3名の教員、計4名で授業を担当している。

教員4名と、連携先・学生の配置と役割

連携先 ← 連携先の開拓・情報共有 → 3名の教員 ← 情報共有・問題解決 → 大下

↑ 学生のアテンド ↓

↑ 学生個別対応 ↓

教員3名のキャリア

教員A：アパレルブランドの取締役・区役所職員・介護福祉  
教員B：編集者・イベント運営・音楽レーベル運営・展覧会のキュレーション  
教員C：飲食店経営・自治体振興組合理事・公園管理・会計士

以上の様に、パレレルキャリアの実践者が教員としてこの授業を担当している。

スライド5

1・インターンシップの具体的な特徴①

- 学生が社会参与するための仕組みづくりについて -

テーマ① 専門性以外も含めた多様な仕事のあり方、役割、チームワークを体験する。  
テーマ② ミスマッチの無い、実のある研修を約束する。  
テーマ③ 「インターンシップ」のイメージと内容を改善する。

- ・ミスマッチや無駄な時間を過ごさず、実のある体験にするために、3教員の仕事などの繋がりの中で信頼があり、この取り組みに賛同してくれた企業・団体・個人の方に協力頂いた。
- ・連携先は、学生を対等に接して、アイデアや能力、存在に関心が必要としている。
- ・実例を交えながら、学生とコミュニケーションを繰り返し、＜インターンシップ＝怖い、辛い、堅苦しい＞というイメージを軽減する。

連携先の例) 劇場、飲料メーカー、リサイクルショップ、結婚式場、雑誌出版社、工務店、観光業、介護医療事業業者、銭湯、福祉センター、ラジオ制作会社、化粧品メーカー、酒造会社、鉄道会社、WEB制作会社、書店、不動産会社、ゲーム制作会社、商店街振興組合など

スライド6

1・インターンシップの具体的な特徴②

- 学生への連携先情報の周知方法について -

- ・連携先の情報を閲覧できるWebを用意。
- ・雑感感覚で、親御さん、友達と観ながらカタログで商品を選ぶ様な形式。
- ・気軽にWebから教員に質問することができる。

① Webの画面画像



② Webの画面画像



## スライド7

### 1・インターンシップの具体的な特徴②

- 学生への連携先情報の周知方法について -

1Qの事前授業で、連携先から事業内容・業務内容・学生へのメッセージなどを伝えていただく  
 <連携先のプレゼンおよび交流会>をおこなった。  
 交流会では学生が連携先とコミュニケーションが出来、理解を深める時間になった。



## スライド8

### 1・インターンシップの具体的な特徴②

- 学生への連携先情報の周知方法について -

1Qの事前授業で、連携先から事業内容・業務内容・学生へのメッセージなどを伝えていただく  
 <連携先のプレゼンおよび交流会>をおこなった。  
 交流会では学生が連携先とコミュニケーションが出来、理解を深める時間になった。



## スライド9

### 1・インターンシップの具体的な特徴③

- コロナ罹患や個人的な事情で研修に行けない学生の対応について -

担当教員が飲食を提供できるレンタルスペースで飲食店を開店。その飲食店でスタッフとして研修。  
 お客様、地域住民、地域で高いをされている方、教員とコミュニケーションが生まれ、サービスの  
 楽しさ、難しさを体験する。様々な職種の情報を得る。



## スライド10

### 1・インターンシップの具体的な特徴③

- コロナ罹患や個人的な事情で研修に行けない学生の対応について -

担当教員が飲食を提供できるレンタルスペースで飲食店を開店。その飲食店でスタッフとして研修。  
 お客様、地域住民、地域で高いをされている方、教員とコミュニケーションが生まれ、サービスの  
 楽しさ、難しさを体験する。様々な職種の情報を得る。



## スライド11

### 2・インターンシップ研修を体験した学生の具体的な内容

- 業種別・現場の仕事内容や特徴 -

#### デザイン、アート関連企画イベント施設

子供向けのアートイベントの企画・実施のためのスタッフとして研修をおこなう。



## スライド12

### 2・インターンシップ研修を体験した学生の具体的な内容

- 業種別・現場の仕事内容や特徴 -

#### 酒造会社

作業工程の見学、体験。マーケティング部で実際の商品販売戦略のディスカッションやイベント企画をおこなう。

### スライド13

- 2・インターンシップ研修を体験した学生の具体的な内容
- 業種別・現場の仕事内容や特徴 -

#### 神社

神社で行われた祭の準備、受付、来場者の案内をおこなう。地域の方々とお話しする中で、未来の「神社と地域の関係性」を考える。



### スライド14

- 2・インターンシップ研修を体験した学生の具体的な内容
- 業種別・現場の仕事内容や特徴 -

#### 雑誌編集社

雑誌の特集記事の取材に同行。取材を客観的に「取材」することで、雑誌制作の一部の流れを知り、それ以外の情報で構成される雑誌づくりを学ぶ。



### スライド15

- 2・インターンシップ研修を体験した学生の具体的な内容
- 業種別・現場の仕事内容や特徴 -

#### 商店街振興組合

商店街の夏祭りイベントの企画実践。小学生から幼稚園・保育園児、その親御さん方も含めた幅広い年齢層の方々とのコミュニケーションを取り、商店街特有のあらゆる仕事の内容と地域住民の関係性を学ぶ。



### スライド16

- 2・インターンシップ研修を体験した学生の具体的な内容
- 業種別・現場の仕事内容や特徴 -

#### 宿泊施設

ホテルの管理や人との関わりの多いカフェやイベントなどの運営を体験。人の心地の良い居場所づくりのための空間演出を学ぶ。

### スライド17

- 2・インターンシップ研修を体験した学生の具体的な内容
- 業種別・現場の仕事内容や特徴 -

#### ラジオ番組制作会社

収録見学、収録のタイムテーブルや時間の設定、CDの引き出し等を行う。プロデューサーとDJ、アシスタントと打ち合わせもを行い、スタッフと円滑に連携することの大切さを学ぶ。



### スライド18

- 3・インターンシップ報告会からみる学生の手応え
- 本学独自のインターンシップのプログラムの方向性 -

#### インターンシップ報告会

「インターンシップ報告会」をおこない、それぞれの研修での体験を他の学生へ共有した。個々の体験の報告から得た事をコメントシートにまとめ、自分ごととして今後の学びに生かす。



## スライド19

- 3・インターンシップ報告会からみる学生の手応え  
- 本学独自のインターンシップのプログラムの方向性 -

### インターンシップ報告会

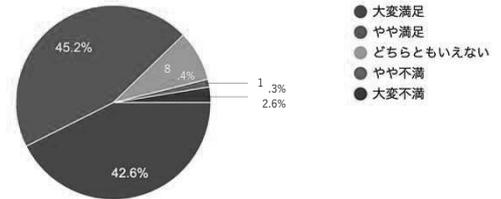
「インターンシップ報告会」をおこない、それぞれの研修での体験を他の学生へ共有した。個々の体験の報告から得た事をコメントシートにまとめ、自分ごととして今後の学びに生かす。



## スライド20

- 4・学生アンケートの振り返りと今後のミッション  
- 満足度/不満足について -

### 満足度グラフ



## スライド21

- 4・学生アンケートの振り返りと今後のミッション  
- 満足度/不満足について -

### 満足度の高い学生のコメント

- ・今後の進路に大きな影響を与えるほど、貴重な体験ができたから
- ・もしインターンシップの授業がなければ、おそらく自分で行動することはなかったと思うからです。すごく良いきっかけを与えていただきありがとうございました。
- ・普段はなかなか知ることができない様々な業界の仕事内容など実際に話を聞きながら学ぶことができた。自分が進みたいと思っている道以外でも興味を惹かれるものも多く、自分のやりたいことは何なのか向き合うきっかけにもなった。
- ・自分の専門分野から外れた内容の作業をインターンシップ先で体験させていただきましたが、体験中に見せていただいた表現方法には得られたものが確かにあったからです。
- ・自分の世界を広げるきっかけがとて多く、また、障害を持つ方々との触れ合いを通じて自分の考えなどをしっかり持つことができたから。

## スライド22

- 4・学生アンケートの振り返りと今後のミッション  
- 満足度/不満足について -

### 満足度の高い学生のコメント

- ・インターンシップを2回生の年に、普通より一年早く体験しておくことができ、次に自分で探した企業のインターンに行くときに生かせることができると実感したから。また2回生の段階では、自分からはインターンに参加しなかっただろうし、それを必修科目で受講することでこのように経験することができたから。
- ・当初想像していたものは、自分がやりたいと考えている専門分野を社会に出て経験しスキルや肌感を掴むものだったが、実際受講した後は専門分野外のものに触れ視野を広げるという考え方に変わった。
- ・社会に対する価値観や不安感、偏見などと向き合い、どのように社会に貢献していくのかを考察する場でもあるのだと感じた。
- ・お客様により良い体験をしていただきたいという心構えは、ものを作ることにしても通じることだと気づいた。ものづくりや表現に関する仕事では、誰に届けるのかを意識することが大切だと考えた。

## スライド23

- 4・学生アンケートの振り返りと今後のミッション  
- 満足度/不満足について -

### 満足度の低い学生のコメント

- ・研修期間が思ったより伸びてしまい、大学の勉強とインターンシップの両立が大変だと感じたことがあります。
- ・当初伝えられていた時間に解散しなかったことだけ少し困りました。
- ・興味で選ぶのもいいが、今後の職に合ったインターン先を選んでいただきたい。
- ・インターンシップの現場や実際の状況などによって体験するのがそれぞれ異なると思うが、具体的にどのような研修を受けるかについて説明が詳しくなかった時もあったと思う。
- ・もちろん授業の中で、そのための質疑時間はあったが、質問したくても自分のような留学生には言語の問題や、授業の時に教室の前に行くのが簡単にできない内省的な性格の人には難しく感じたことがあるかと思う。

## スライド24

- 4・学生アンケートの振り返りと今後のミッション  
- 満足度/不満足について -

### 満足度の低い学生のコメント

- ・私の友達で、「派遣先でただ雑用をしただけで終わった」と言っている人がいたので、もっと学生が良い学びを得られるようにしてほしい。
- ・インターン内容を聴き比べていると満足度に大きく違いがあると思われるので、インターン内容の詳細をより明確にしたほうがいいでしょう
- ・インターンの不安が少しでもなくなるように、先輩の話をもっと聞きたい。
- ・宿泊費などの援助があれば、私も含め東京などに行きたかった人のハードルが下がるのかなと思いました。
- ・47都道府県とは言いませんが、北海道から沖縄までインターンで行けるようになればと思います。また、メディア情報・イメージ・音楽の分野で活躍できる場をお願いします。

## スライド25

### 4・学生アンケートの振り返りと今後のミッション -満足度の低いコメント・学生からの要望から見えてくる改善点-

業務内容の正確な情報の充実とその周知  
連携先とのマッチングのサポート  
学生へのヒアリングの充実  
交通費のサポートのリクエスト  
先輩からの声

→ 教員との距離感の改善 ⇒ 風通しの良いクラス制

## スライド26

### 5・総括

- ・学生、連携先からの要望・意見などから、一つ一つ改善していきたい。
- ・連携先から、感謝・気づきの声をいただくことが多くあったので、受け身ではなく、提案し続ける姿勢を持ち続けたい。
- ・研修終了後、連携先から仕事を頂いたり、アルバイトで継続する学生がいた。インターンシップで終わらず、その後の関係性も視野に入れた内容やアテンドの方法改善をおこないたい。
- ・満足度を増やしながら、より良いインターンシップの方法を探る。その方法を他の大学、高校などへ広げ、盛働し、より良い社会への一歩を踏み出し、自ら社会を変革する若者が増えることを希望としている。

スライド1

第28回FDフォーラム  
第11分科会 学外の実践活動を活かした大学教育

---

社会実践する大学生を企業で受け入れる試み

北近畿鉄道ビジネス株式会社 代表取締役 福原習作

スライド2

北近畿鉄道ビジネス株式会社について

- 企業コンセプト  
鉄道と地域を繋いで人が元気になるお手伝いを致します。

【主な事業】  
 鉄道イベントの開催（鉄道事業者・地方自治体・企業様など）  
 鉄道関連グッズの販売  
 地方活性化にかかわる事業

会社ロゴ

- 弊社所在地 京都府舞鶴市を走るJR西日本・WILLER TRAINS（株）のコーポレートカラーを採用
- イメージは専任鉄道会社を走るKTR8000型特急車両（丹後の海号）をイメージ
- 3本の波は【鉄道】【地域】【人】を表す。
- 3本の波を組み合わせることによりピックアップを起こし地域発展を担う企業になりたいとの思い
- 3つの点は創業時の3名の役員を表す。



スライド3

【自己紹介】  
 昭和42年（1967年）京都府舞鶴市生まれ 舞鶴市在住  
 北近畿鉄道ビジネス代表取締役・株式会社福原表具店代表取締役

【経歴】  
 京都府立西舞鶴高校卒業  
 大阪トラベルジャーナル旅行専門学校（現 ホスピタリティー・ツーリズム専門学校大阪）卒業  
 旅行会社・量販店・表具店勤務のち 平成18年1月 福原表具店 創業（令和2年10月法人化）  
 平成29年3月 北近畿鉄道ビジネス株式会社 設立

【各種団体役職経歴】  
 現職 舞鶴市社会教育委員会 会長（中丹地区社会教育委員連絡協議会理事）  
 平野屋商店街振興組合 専務理事  
 舞鶴商工振興会 理事兼青年部長・城北校区地域支援協議会 副会長  
 過去 舞鶴市立明徳小学校 PTA会長・舞鶴市立城北中学校 PTA会長  
 舞鶴商工会議所 青年部 理事  
 ほくと購信会 副会長

スライド4

受け入れまでの経緯

- 令和4年3月 担当講師からの学生受け入れの依頼

前向きに受け入れを検討する中、本業である株式会社福原表具店とイベント事業が主となり業務量が少ない北近畿鉄道ビジネス株式会社のいずれで受け入れるかを検討。

令和4年（2022年）は鉄道開通150周年、舞鶴と福井県敦賀市を結ぶJR（国鉄）小浜線開通100年、そして舞鶴赤煉瓦倉庫群前を走っていた国鉄中舞鶴線が廃線から50年の節目で鉄道ビジネスでイベントを計画。

何だかの形で学生にこのイベントに関わっていただきたいとの思い

↓

北近畿鉄道ビジネスにて受け入れを決定

スライド5

受け入れにあたって学生向けにプレゼンを実施 多くの学生を前に緊張いたしました

京都精華大学メディア表現学部  
 インターンシッププロジェクト 説明資料



北近畿鉄道ビジネス株式会社

スライド6

鉄道イベント概要（案）

日時 令和4年11月6日 日曜日  
 会場 京都舞鶴港「うみとびら」 令和3年4月開設  
 鉄道会社PRコーナーや鉄道部品の販売、子ども向けアトラクションやステージイベント開催



ターミナル利用イメージ

本イベントを通じてイベントの運営、チラシ作成等一緒に進めたいと考えています。

後日学校からご連絡を頂き1名の学生の派遣を決定いただき取り組みをスタートさせました。

第11分科会

スライド7

インターシップを進めるにあたり、受け入れ学生と面談。学生の意向を伺いつつ、中興線に関する動画を作成し、その成果をイベントにて発表することを最終目標として、研修時間を考慮しながらタイムスケジュールを作成。学生と共有しスタートしました。

インターンシップタイムスケジュール

日付	時間	内容	会場
11月10日	10:00	内閣府研修 国鉄舞鶴線-研修	国鉄舞鶴線
11月10日	11:00-11:45	1 オリエンテーション インターンシップ進め方の確認	国鉄舞鶴線
11月10日	12:00-13:00	2 研修イベント準備開始	国鉄舞鶴線
11月10日	13:00-15:00	3 (前夜) 舞鶴と鶴岡の鉄道歴史について	Convent School Village MASHIGATA
11月10日	17:00	4 エイブルワークショップ 中興線開通100周年記念	Convent School Village MASHIGATA
11月11日	8:00	5 ホテルへ 前夜によりな夜更け研修	ホテルシーサイド111
11月11日	8:00-10:30	6 (朝学) 中興線開通100周年からの中興線開通100周年	ホテルシーサイド111
11月11日	10:45-12:00	7 研修生によるプレゼンテーション	ホテルシーサイド111
11月11日	12:00-13:00	8 研修生によるプレゼンテーション	ホテルシーサイド111
11月11日	13:00-15:00	9 研修生によるプレゼンテーション	ホテルシーサイド111
11月11日	15:00	10 研修生によるプレゼンテーション	Convent School Village MASHIGATA
11月11日	18:00	11 夕食 研修生研修 研修生へ	Convent School Village MASHIGATA

※1 KON 国鉄舞鶴線センター3階 ワーキングスペース 地下鉄舞鶴線駅すぐ上

スライド8

実地研修の様子



フィールドワークにて実際の廃線跡を辿る



実際の勤務者から当時の様子を聞き取り

スライド9

・今和4年11月6日開催  
**舞鶴鉄道まつり**  
 ・入場者数 約1000人 多くのご来場者で賑わったイベントとなった

スライド10

スライド11

後日(11月11日)京都新聞北部面に掲載  
 事前に記者の方より今回の取り組みを記事にする旨を伺っており、楽しみにしておりましたが、当日掲載された開催時記事より大きく正画びつくりしました。

当日ステージ場で学生制作動画をエンドレスで上映。新聞記事にして頂いた記者以外にも、多くご来場者が足止めその動画を良い入るよう見ていただくことが出来ました。

国鉄中興線の歴史 後世に

京都精華大生が動画制作

職員インタビューや写真も

スライド12

学生のお礼状から今回の成果となる文言として  
**動画制作のモチベーションが上がった**

1泊2日の現地視察と実務者からの聞き取りの後、これからどう進めるか学生と相談。こちらはありとあらゆる素材を渡したので、吸収できたのか?何をターゲットにするか? どう作りたいか学生の考えを聞いた



学生から実務者の体験談についてまとめ上げたいとの意見

私たちもその意見を尊重し学生に制作一任させて頂いた

### スライド13

#### イベント運営の裏側について知ることができました

社会（現場）へ出た時、多様な価値観を持った方々と接することが多くなる。今回動画作成をしながら、イベントについての弊社の考え方をレクチャーさせて頂きました。

当日だけでなく前日準備並びに前泊者懇親会にも加わっていたき、私たちのイベントに対する思いや、出展者及び外部スタッフの関係する方々との調整も肌で感じて頂くことが出来、良きグループコミュニティーによって、イベントがスムーズに運営できることを実感して頂けたと思う

### スライド14

実際に評価する目的以外で自分の制作物をみている人を目にして、ネガティブに考えながら制作するのは見る人に対して失礼だと感じたので、制作するもの全てに自信を持っていこうと考えました



今後社会人として様々な事業・職種に携わる事になるが、自信と誇りをもってクオリティーの高い仕事に取り組み、その評価が上がることを体験出来たのではないかと感じる

**今回の取り組みは当該学生にとって非常に良い経験になったのではないかと感じる**

### スライド15

#### • 受け入れ企業側としての成果

- ・メディア表現学部との取組で、弊社の強点であり課題でもあった動画にて資料を後世に残す取り組みを、動画編集を授業の一環としている学生とのコラボで実施することが出来た
- ・地方都市、零細企業において大学生とのかわりを持つことが少なく、特にイベント開催時に関係者からの注目度も高く、受け入れ企業価値として非常にメリットがあった。

#### • 受け入れについて気になった点

- ・インターンシップ=就職につながる この点では全く希望にこたえられない企業 学生にとって弊社が受け入れ企業となって良いのかとの自問
- ・受け入れ学生との相性 今回は学生の性格・スキルと弊社の考え、研修内容を合わせる事が出来たが、このような成果がどの学生を受け入れてもできるのか？
- ・学生への負担 今回学校側から研修時間が明示され、研修スケジュールは時間を割ったが、編集はいわゆる音題（課題）扱いとなり、負担を強いたところもある

### スライド16

#### • 次年度以降について

- ・担当講師との調整にもなりますが、希望する学生がいれば受け入れていきたい
- ・本年度の結果を踏まえ、学校・学生・企業3者が満足できるカリキュラムを構築しながら、企業として学生が社会で活躍できる第一歩を踏み出せるように応援したい。

ご清聴ありがとうございました

## ポスター発表題目一覧

1. GRIT（やり抜く力）と GPS Academic の各スコアに関連  
京都外国語大学
2. Collaborative Online International Learning Projects  
Kyoto University of Foreign Studies
3. 学部学科の特性に適した授業形態とは？  
—同志社女子大学における 2021 年度秋学期遠隔・対面授業についての学生の意識調査をもとに—  
同志社女子大学
4. 実験実習教育における動画教材の開発と今後の展望  
京都薬科大学
5. 学生ファシリテータが初年次生向けキャリア教育プログラム受講生にもたらず  
ものと理想的な受講生支援のあり方  
京都産業大学
6. グローバルコモンズ学生ボランティアスタッフ LINK の活動報告  
～ LINK によるイベントの紹介～  
京都産業大学
7. 企業・地域と連携した PBL 型授業「キャリア形成ゼミ」の実践報告  
—草創期から現在に至るまで—  
京都ノートルダム女子大学
8. ワークショップの企画と運営を通じた大学間交流の取組み  
—京都文教大学と京都産業大学の学生交流プログラム—  
京都文教大学

## 第 28 回 F D フォーラム企画検討委員会

- |   |        |   |
|---|--------|---|
| ★ | 白鳥 秀卓  | 京都産業大学 生命科学部 教授/<br>教育支援研究開発センター 副センター長 |
| ☆ | 山口 洋典  | 立命館大学 共通教育推進機構 教授                       |
|   | 上野 嘉夫  | 京都薬科大学 基礎科学系 教授                         |
|   | 川田 隆雄  | 同志社女子大学 学芸学部 教授                         |
|   | 小松 正史  | 京都精華大学 メディア表現学部 教授                      |
|   | 孔 栄鍾   | 佛教大学 社会福祉学部 講師                          |
|   | 多田 泰紘  | 京都橘大学 経営学部 専任講師                         |
|   | 築地 達郎  | 龍谷大学 社会学部 准教授                           |
|   | 津村 宏臣  | 同志社大学 文化情報学部 准教授                        |
|   | 中西 勝彦  | 京都文教大学 総合社会学部 助教                        |
|   | 中野 加奈子 | 大谷大学 社会学部 准教授                           |
|   | 畑田 彩   | 京都外国語大学 外国語学部 教授                        |
|   | 船附 秀行  | 京都先端科学大学 バイオ環境学部 教授                     |
|   | 三好 智子  | 京都ノートルダム女子大学 現代人間学部 教授                  |

★…委員長      ☆…副委員長

※氏名五十音順。所属・職位はいずれもフォーラム開催時のものです。

# 第28回FDフォーラム 報告集

2023年5月

発行 公益財団法人大学コンソーシアム京都  
〒600-8216  
京都市下京区西洞院通塩小路下る キャンパスプラザ京都  
TEL 075-353-9100 FAX 075-353-9101  
URL <https://www.consortium.or.jp/>